連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol.2 No.4

第八号

March 2012

対人援助学会

目次		002
執筆者＠短信	執筆者全員	003-010
知的障害者の労働現場　008	千葉　晃央	011-014
社会臨床の視界　（8）　-家族をシステムとしてエコロジカルにみること-	中村　正	015-024
ケアマネの出会った家族たち　（8）	木村　晃子	025-028
街場の就活論　vol.8　-新卒採用とキャリア教育に関するハナシ-	団　遊	029-032
心理療法が始まるまで（8）	藤　信子	033-035
第8回　誌上ひとりワークショップ　―家族援助は街のアパレルその4―	岡田　隆介	036-040
映画の中の子どもたち　8　「サラの鍵」	川崎　二三彦	041-042
子どもと家族と学校と　⑧	中島　弘美	043-046
蟷螂の斧　社会システム変化への介入　第8回	団　士郎	047-053
学校臨床の新展開　⑧	浦田　雅夫	054-056
学びの森の住人達（3）	北村　真也	057-082
幼稚園の現場から　Ⅷ　-どうする保護者会？-	鶴谷　主一	083-089
福祉系対人援助職養成の現場から　⑧	西川　友理	090-100
我流子育て支援論　（8）	河岸　由里子	101-107
不妊治療現場の過去・現在・未来　8	荒木　晃子	108-114
対人援助学＆心理学の縦横無尽　（5）	サトウ　タツヤ	115-123
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー　（7）	尾上　明代	124-129
家族造形法の深度　（8）	早樫　一男	130-133
旅は道連れ、世は情け　8　（女性 LC 研究所 20 年）	村本　邦子	134-138
きもちは言葉をさがしている　「紅茶の時間」とその周辺　第7話	水野　スウ	139-143
やくしまに暮らして　第七章	大野　睦	144-146
お寺の社会性（六）　―生臭坊主のつぶやき―	竹中　尚文	147-150
こころ日記　ぽちぽち（4）　（中学生日記）	脇野　千恵	151-154
これからの男性援助を考える　第六回	坊　隆史	155-162
ノーサイド　第四回　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	163-167
それでも「遍照金剛言う」ことにします（3）　（精神障害者福祉）	三野　宏治	168-178
「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い（3）	山本　菜穂子	179-187
男は痛い！（2）「象の背中」	國友　万裕	188-195
新連載　援助職のリカバリー　（1）	袴田　洋子	196-198
新連載　周旋屋日記　（1）	乾　明紀	199-201
編集後記	編集長＆編集員	202-203

目次

執筆者
三十一名
@
短信

三十一人分もあるからだけど、とても短信とはいえない長さになってきた。ここを読んで、「あっ、この人の文章を読もう！」と思っていただけると良いが。

◆袴田　洋子◆　新連載

昭和42年生まれです。埼玉県朝霞市というところで、介護保険のケアマネジャーをしています。元は看護師でした。

子どもの頃から、コミュニケーションがヘタクソで、「言い方がキツイ！」「冷たい！」と言われていました。最もコミュニケーションがヘタクソで、人間関係の失敗を繰り返していた頃に診断受けたら、「境界性パーソナリティ障害」なんて言われたかもなぁと思っています。

ラベルがあってもなくてもどうでもいいのですが、手っ取り早く自分を説明するのに、使用したりしています。なので、自分は「当事者」の面を持っている、と自分で意味付けをしています。

そんな自分が何を血迷ったか、看護師になりました。人間関係うまくやれない人間が、人間を援助する援助職になれば、当然、恐ろしいほどの失敗が待っています。でも、多くの方からの応援をもらって、少しずつ回復の道を歩めている…ような気がして、今は、自分のことが嫌いではなくなりました。

そんな落ちこぼれナース誕生の話から始まる、「援助職のリカバリー」です。どうぞ、お読みいただければ、嬉しいです。

◆乾　明紀◆　新連載

マガジンへの初めての投稿を終えて、岩手県の花巻へ向かおうとしている。花巻の高校生に就職支援ガイダンスで講師をするためだ。厚生省主催のこの事業に昨年から協力することになった。就職先を周旋することはないが、就職支援という少々“お節介”なことをしている。

『周旋家日記』は、お節介好きによるお節介実践日記になるだろう。今回は自己紹介的な内容で書かせていただいたが、次回からは、私の周旋したことを(お節介にも)書かせてもらうことをご容赦いただきたい。

◆國友　万裕◆

この頃、FACEBOOK に凝っています。以前はブログをやっていたのですが、ブログの場合だと匿名なので、見ず知らずの人からとんでもない政治的なコメントを入れて来られたり、ぼくのほうも調子にのって激しいことを書いてしまったりで、トラブルになることが多々ありました。

しかし、FACEBOOK は実名ですし、ぼくのほうが承諾した人でなかったら見ることはできません。しかもブログのように長々書くものでもないので、その日に起きたことをスケッチ風にさらりと綴って、写真を入れて、親しい友人たちとのコミュニケーションの場となっています。書く内容と言えば、今日は美味しいレストランで食べました、こういう映画を見ました、スポーツクラブのプールに行きました……ととりとめのない話ばかりなので、ブログのように喧嘩になることもありません。

友人登録してくれているのは、今のところ１０人。男性８人、女性２人です。東京周辺在住が６人、関西在住が３人、北陸在住が１人です。FACEBOOK のおかげでしばらく疎遠になっていて、もう会えないと思っていた人にも再会できて、友情が復活しました。

これから徐々に友達の輪を広げていこうかなあと思っています。友達の友達はまた友達だ……と広げていくのがFACEBOOK の目的でもあるのでしょうから……。ただ、ブログで嫌な思いをしているので、躊躇しているところです。

援助マガジンがらみの人たちだったら、そんな失礼なことは書かないだろうから、執筆者の人、及び読者の人で、ぼくと友達になってもかまわないという人がいたら、是非、友達リクエストをください。友達が増えれば、思わぬ知恵も貸し借りできますからね。援助のためのバーチャル・コミュニティーを一緒につくりましょう！

◆中村周平◆

昨年１２月に、母校である京都成章高等学校のラグビー部 OB 会に参加させていただきました。全国大会に見事出場を決めてくれた後輩たちの壮行会を兼ねた OB 会です。現役の頃は「選手」として行かせていただいたことはありましたが、怪我をしてからは初めての参加でした。「自分が参加しても大丈夫だろうか」、正直なところ、緊張や不安がなかったといえばウソになると思います。でも、同期や先輩方と会った瞬間、その緊張や不安は一瞬にして吹き飛びました。９年前と何も変わらない光景がそこにはありました(みんな体型がだいぶ変化してはいましたが)。OB の方々も、暖かく迎え入れくださいました。「なんだ、壁を作っていたのは自分じゃないか」。自分に重たくのしかかっていたものがスゥっと無くなっていくのを感じました。いち OB として「ここ」に戻って来れたことに心の底から感謝しました。

◆ 坊　隆史 ◆

未曾有の大震災から一年が経った。その災害が起こった時、私はカウンセリングの最中だった。近くで揺れを感じている人もいたそうだが、私とクライアント

氏は全く揺れに気づかなかった。多くの人命と生活を奪った津波の被害も後ほど知った。「3･11」。この日私は福島県へ行く予定をしていた。事情があって取り止めになったのだが、もし行っていたら福島に知人もツテもない私はどうなっていたか想像もつかない。私のようにその日東北に行ったことで被災された方もあれば、現地の方がたまたま遠地に出ていたことで直接的な被災を免れた方もおられよう。「もし･･･」などないが、どうしても「もし･･･ならば」と考えてしまう。

あれから一年。仕事で関西から関東に行くことが多いが、震災直後は街が閑散としていた。東と西の温度差に違和感があったが、東にもずいぶん旅行者が戻ってきた。５月には東京スカイツリーが開業する。近くのホテルに泊まると地域はずいぶん盛り上がっているように見受けられる。私たちは先へ進んでいかないといけない。日常を取り戻していかねばならない。しかしまだまだ不自由な生活をされている方々、まだ渦中の対応をしている方々がおられることを忘れてはならない。改めて犠牲者の方々のご冥福、被災者の方々が少しでもより良い生活を取り戻されることを心よりお祈り申し上げます。

◆ 団　遊◆

先日、新卒大学生の最終面接に立ち会いました。何か質問をとのことだったので「橋下市長についてどう思うか」と聞きました（ほかに「原発について」などみっつを質問）。すると彼は「よく知りません」と答えました。そんなに難しいことを聞きたいわけでも、政治的スタンスを問いたいわけでもなかったので、「なんでもいいよ」的な問いを重ねましたが、本当に知らないのでした。ちょっとびっくりしました。

www.danasobu.com　／
twitter.com/danasobu

◆ 藤　信子◆

久しぶりに 50 分程歩いて、堀川御池を下がったところにあるデイサービスセンターに行った。月 1 回の訪問時に、以前はお天気の良い時はよく歩いたけれど、この 2 年近く何だか忙しくて時間が取れなかった。30 分余裕があると歩けるのだけれど、その余裕がなかった。堀川の川沿いの遊歩道を歩きながら、春めいてきた中をぼんやり歩いた。東日本大震災から 1 年になる。今年は 2 月の盛岡から始まり 2 ヶ月に 1 度、東京、仙台、京都、神戸、東京で日本集団精神療法学会の「相互支援グループ」を開催することにしている。相互支援グループを長く継続するため、また技法を伝えるためには、まだまだ体力が必要だと思うので、ウォーキングの機会をできるだけ作ろうと思った。

◆水野スウ◆

週いちオープンハウス「紅茶の時間」の家主。石川県在住。

「紅茶の時間」　ＵＲＬ
http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm

金沢の隣の津幡町に移り住んで、この春で 20 年。向かいの雑木林から、名も知らず根っこごと抜いてきた幼い苗たちは、庭にしっかり根づいて、コナラ、合歓、ウワミズザクラ、藤、クロモジ、とそれぞれ一丁前の木に育ちました。やがて来る夏、わが家の緑のエアコンに一役かってくれます。

今年は北陸も、２月半ば過ぎまで大雪でした。去年から、雪を甘く見るまいぞ、と自分に言い聞かせてたので、真冬の出前はできるだけ控え、その分、家にこもって、新しい本の原稿を書きはじめていました。

マガジン連載のタイトルでもある「きもちは、言葉をさがしている」は、あいもかわらず、私の大切なテーマです。きもちと言葉、伝えると伝わる、コミュニケーション、そして家族、といった本になりそう。マガジンでこれまで書き続けてきたことが、はからずもその重要な下地になってることに気づいて、あらためて感謝！です。

◆　尾上明代　◆

２月中旬、ドラマセラピー教育・研究センターで、アメリカのトップドラマセラピストの一人、David R. Johnson と、トラウマ療法専門の精神科医 Hadar Lubin 両氏（ご夫妻）を東京に招き、セミナーとトレーニングを行いました。David は、ドラマセラピーの中でも特殊な、しかしその本質がふんだんに現れる「発展的変容」という手法を創始した人です。Hadar は、Counting Method という暴露療法（EMDR や PE と同じ効果があるのに、大変シンプルなもの）を、日本で初めて紹介してくれました。これは今後、きっと世界中で広まっていくことでしょう！参加者の方々に楽しく濃い時間を提供できて、主催者として非常に嬉しく思いました。

◆ 団 士郎 ◆

面接継続中の二つの家族に、大きなドラマや事件が起きている。中心にあるものを私が何とかできるわけではないので、周囲の様々な事象に働きかけることで、全体システムの変化を摸索してきた。そして今、ほのかな希望の灯りと、新たな嵐が見えている。

私生活では妻の手術後の回復プロセス再形成に、二カ所の医療機関で医師と会った。そこでは私は患者の家族だ。信頼できる会い方をしてくれる医師、具体的方法を提案してくれる医師。両方ともよき援助職者だと付添人としてありがたく思う。子ども達がみな自立し、両親役割引退後の夫婦としての暮らしは、小津安二郎の映画「東京物語」を、時に連想させるような日々だ。

映画館で「ものすごくうるさくて、ありえないほど近い」を観る。あらすじを語る作品ではない。映画としては好き、嫌いがあるのかも知れない。私は人が何をもって回復を果たすのかを、息を詰めて見つめていた。そして最近、どこで読んだのだったか忘れたが、「今度、生まれる時も、又、君の親に生まれたいと思う」と言って亡くなった父親のことを思い出した。

家族の中で親として生きるのは、凡人にはなかなかドラマチックで大したことだ。

◆西川友里 ◆

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成に関わっています。

…今回の原稿の締め切り翌日、小林賢太郎の舞台『うるう』を見にいくのです。それから数日後には、伝説のダンサー、ピナ・バウシュのドキュメント映画『Pina　踊り続けるいのち』を見に行けるかもしれないのです。舞台を見るのは半年振り、映画館は実に 10 年ぶり。

両方とも、大好きな大好きなパフォーマーの作品。「舞台も贅沢、映画も贅沢。DVD 出てから見たらいいんだ、そうしたら何度でも見れるんだし！」と普段なら無理矢理我慢するのですが、今回ばかりは、ダメだ、我慢できん、見たい！最高の物はやっぱり生で見るに限る！アート断食状態からの、なんと贅沢なアートグルメ。チケットを入手してから、毎日眺めてはニヤニヤしています。いよいよ明日。ああ嬉しい！

◆山本　菜穂子◆

私、手相をみてあげることができたらいいなと思うんです。興味を持ったのは小学生の頃。私の右手は「ますかけ」という、手のひらに横線が一本通っている相で、右手を開くとひらがなの「て」の文字のようなしわがあり、「ほら、私の手には『て』って書いてあるんだよ。」と人に見せて驚かれるのが好きでした。父は左手がこの相で、なんとなく繋がりを感じて嬉しかったこともあります。

手相を見てあげて人が笑顔になったらちょっと素敵だなって思います。一時保護所の子どもたちとか。。でも、これが実に難しくて。この夢はまだまだ実現しそうにありません。

皆さん、手相は変化するって知ってました？私の場合、「ほほえみ」の事業を始めてからどんどん変わってきて。今、左手も「ますかけ」になりそうです。無かった運命線も出てきて、５０歳以降の運命の筋がくっきりとどんどん太く。今、私の両手は「て」から「で」になっています。つまり、生命線が二重三重に強化され。

昨年、横浜中華街に行った時、初めて本業の方に手相を見てもらったんです。そうしたら、「９０歳まで生きるから、そのつもりで人生設計を考えたらいい」と言われました。まだあと、４０年もある。ナガッ！・・・よ～し♪♪

◆岡田隆介◆

家族療法をベースにした家族援助の研修会をやろうと団編集長と意気投合したのは、いまから２１年前のことでした。児童相談所職員を中心に５０名前後が集まり、予算化せずルール化せず、手をあげるところがあれば実施するという緩いつながりでやってきました。いまでは対人援助に関わる人が幅広く参加し、２００名弱の会になっています。

昨年は滋賀で２０回大会があったのですが、そのとき、うちの若い連中が次回を引き受けたいと手をあげました。過去に４回も引き受けていた私は、「えっ、また？」という気持ちでした。そして、予想通り簡単にのせられてその気になりました。ところが、いざ準備が始まると手伝い加減がさっぱりわかりません。ちょこっと口をはさみ、見かねて手を出してるうちに、もろ肌脱いで頑張ってしまいました。思えば、いつもこうやって若い芽を摘んできた気がします。終わった後、まじめにへこみました。

でも、やっと気付きました。わたしは追い越されることを潔しとせず、世代交代なんかに関心がなく、それでいて嫌われたくないという実にめんどくさい中高年なんだと。若者たちよ、まもなく日本はこんなジジィで溢れかえるのだ！

◆竹中尚文 ◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職

今年のスーパーボールはすばらしかった。録画観戦だったので、先に結果を知っての上で見たのだが、予想もしない展開だった。ラスト 2 分まではペイトリオッツの勝利を予想した。ジャイアンツの逆転は驚いた。もし、最後 0 秒のパスをキャッチしていればペイトリオッツの再逆転だった。ちなみに私は 49ers のジョー･モンタナと同い年。彼のようにきらびやかな 55 年間ではないが、自分では充分にドラマチックな人生を楽しんでいる。

◆北村　真也◆）

私塾「アウラ学びの森」代表

（http://auranomori.com）

つい最近、50 歳になりました。48 から 49 になるのと、49 から 50 になるのは、やっぱり違います。「こんな子どもみたいな者が、本当に 50 になっていいのか？」というのが、50 歳の誕生日に正直に思った私の感想です。私のこれまでの人生は、実に単純明快。「学ぶ」ということの意味が分からなくなった 16 歳の時から、「学ぶ」ということだけをずっと考え続けていたら、いつの間にか 50 歳になってしまっただけのことのように思います。でも「学ぶ」ということは、決してひとりでできるものではありません。必ずそこには、自分以外の他者の存在が必要になってきます。自分とは違う視点が、学びを深化させるからです。

学びの世界にはまってしまった私の周りには、いつも誰かがいてくれました。そして、それがいつしか「学びの森」というカタチを誕生させることにつながっていったように思うのです。

◆村本邦子◆

去年はさんざんな１年だったような気がする。「これからは不良娘になって遊びまくる！」と宣言して今年を始めたが、成果はまずまず（どんなふうに遊ぶかって!?それは想像にお任せします）。お蔭で今のところとっても元気です。

冬休みは、家族とともにスペインで楽しく過ごし、例によって、photobackのアルバムを作った。いつも登場人物の数だけ作ってプレゼントするが、今回は、スペインにいる娘に送料500円の「国際メール便」で直送してもらうことにした。ところが2週間経っても届かないという。クレイムをつけると、すぐに詫びの返信があり、「出国までは確認できたが、それ以降を辿れない。これ以上お待たせするわけにいかないので、再発行してEMS(国際スピード郵便)で送ります」という。娘に知らせると、「日本の会社の対応の良さに感動して泣きそうになった！すごいな！」と返ってきた。いつもは過剰で煩わしく感じる日本のサービスも、一歩国外に出ると、その有難みを痛感することは少なくない（ちなみに、つい最近も、イベリア空港のeチケットをうっかり削除してしまって再発行のお願いをしたが、スルーされた・・・）。

そして、つい今しがた、photobackから「本日発送しました」というメールが来たのだが、「国名がSPAINでなくSAIPANになっていたので、そこだけ修正しました」とさり気なく書かれてあった。なんと、なんと、私のミスだったのだ。送付先を再確認した時にも気づかなかったが、リストから国名をクリックする時に見間違えたか、ずれてしまったのだろう。今頃、サイパンのアンダルシアを目指して、どこかで迷子になっているはず。

それにしても、なんて寛容で大人な対応であることか。すっかり感心して唸ってしまった。早速、お礼メールを書いた。私は長年のphotoback愛用者で、周囲に多くのphotoback愛用者を増やしていること、今回の親切な対応に感動して、さらに良い評判を広めますと（そして、こうして広めている!?）。今回は2冊本なので、向こうは5千円ほどの損失になったと思うが、顧客に親切にすれば、めぐりめぐって良いことが起こるのだ。

一人で興奮していると、「日本の会社だからって、ふつうそこまでせんやろ。450円でアルバム作れるところがあるで」（photobackが高いと言いたいのか？）と息子がクールに言い放った。なんの、なんの。うちの研究所でも、届いたの届かないののクレイムに対しては、同じ対応をしています。そして、感謝の返信がきたら皆で「嬉しいね～」と大喜びします。こうやってネットワークはできていくんだから！（今号参照のこと）

◆ 川崎二三彦 ◆

この原稿、締め切りには遅く、梅が咲くにはまだ早い水戸駅の構内で書いている。

＊

それはさておき、横浜の地に設立された「子どもの虹情報研修センター」は、3月末でちょうど 10 年の節目を迎えるのだが、気がつくと私は、いつの間にかその半分をこのセンターで過ごしているのである。ではその間に、私はいったい何をなし得ただろうかと思うと反省しきりの日々だけれど、全国各地に出かけていったことは間違いない。用向きは、センターの業務や厚労省の仕事であったり、「そだちと臨床」誌のインタビューや各地から頼まれた研修講師であったりとさまざまである。ちなみに 5 年間でまだ足を踏み入れていない都道府県を数えてみると、5 本の指が余ってしまった。

あちこち出かけただけに、失敗もそれに比例して無数にあり、呆け日誌は満載となっているのだが、忙中閑、今日は慰みにその一つを披露してみようと思う。たぶん最大のピンチに見舞われたのは、大阪での某研究会だろう。さる年の土曜日のことだ。講師を引き受けて当日は準備万端整え、日時もきっちり確認して新幹線に乗ったところまではよかったのだが、はっと気づいて鞄の中を調べると、果たして開催案内を忘れている。午後 1 時半からということだけは記憶していたのだけれど、肝心の会場がわからない。新幹線の中から主催団体の事務所に電話しても、土曜は休業で連絡が取れない。

「ウウム、もしかしてあの人はこの研究会に参加しないかしらん」

などと考えて心当たりの人を携帯電話で呼び出してみたが、そんなに都合よくいくはずもない。このときばかりはさすがに焦った。このままでは新大阪で立ち往生するしかないではないか。

「あのう、〇〇事務所の部屋の前に、今日の研究会の案内が貼り出されてないか、見てきてもらえません？」

窮鼠猫をかむ。最後は、主催団体が入っている建物の管理室に電話して、強引に頼み込んでみた。と、どうであろう、世の中、捨てる神あれば拾う神あり。親切な管理人が、わざわざ部屋まで出向いてくれたところで、主催者の一人がたまたま資料を取りに来ていて、なんとか事なきを得たのであった。

＊

おっと、こんなことを書いているうちに、約束の時間に遅刻しそうになっている。梅の開花も間近、仕事に取りかからねば……。　　（2012/02/27 水戸にて）

◆ 中島 弘美 ◆

CON カウンセリングオフィス中島

昨年から今年にかけて、これまでとは異なる地域で、社会福祉関係の現任職員対象の研修を担当する機会がありました。

研修テーマは、家族理解や家族支援に関することや事例検討などです。すると、受講者の反応がよく、続編を希望する声もあって、お引き受けしてよかったと思いました。

私としては、これまでやってきたことをコンパクトにまとめたので、もうちょっと時間があれば、さらにできることあるのだけれど、と思うのだが、受ける立場からすると、ちょうどよかったのかもしれません。

しっかりと受け止める力をもった人と学ぶことは、とてもたのしいです。いや、もしかしたら、大学で学生さんに話しているので、伝える技術アップ？それはあんまりあたっていないような気がします。

きっと、受講者が学びたいと考えているテーマと、研修内容が一致したからかな、セッティングしてくださった、企画が良かったのかな？

効果的な研修はどのようなものなのかについて、磨きをかけたいと思っています。

◆ 千葉 晃央 ◆

■ジーン・シャープ■「How to Start a Revolution 非暴力革命のすすめ ジーン・シャープの提言」（イギリス 2011 Big Indy／ Lion Televison ）を観た。SNS 革命といわれていたりもする昨今の独裁体制の崩壊のニュース…。実は SNS だけでなく、非暴力闘争のやり方を発信している政治学者ジーン・シャープの教えが教科書になっている。「非暴力闘争」の手段として、シンボルマーク、シンボルカラーの作成、戦略を立てる（集会時間、集会時の振る舞い等）、細分化に負けない、暴力に抵抗（女性、高齢者等が笑顔で花等も持ちながらデモの先頭へ、暴力的衝突を回避）、諦めないなど 198 の方法を提示。

これが載っているのが「From DICTATORSHIP to DEMOCRACY」（独裁から民主主義へ）世界 30 か国語に翻訳されている。…ってアマゾン検索では、日本語版が出てこない。。ないのかい？やっぱり？「脱原発」など集会多数開かれているけれど、日本語版がないのはなんでだろう？「非暴力闘争」のコツって、脱原発の今こそ必要では？

◆ 三野 宏治 ◆

様々なところで学生がアルバイトをしています。小さな町なので彼らのバイト先である牛丼店やファストフード店、本屋などでよく目撃されます。学生たちは堂々としていて恥ずかしがらず挨拶をしてくれます。彼らは「あっ！」と言ったあと、必ず「どうしたんですか？」と聞きます。この問いかけは変だといつも思ってしまいます。何故なら、「どうした」もこうしたも、牛丼店には牛丼を食べに来たのだろうしファストフード店にはハンバーガーを買いに来たのだろうし、本屋には『小学館　学習百科事典 5　動物図鑑』を買いに来たに決っています。私は彼らの質問の不適当さを心の中で正しながら「仕事頑張ってください」などと答えています。

講義の最後 15 分くらいの時間で、私は学生に対して授業に対する質問や感想を書き提出することを課しています。それぞれの店で彼らと出会った週の講義のペーパーには「牛丼はおいしかったですか？またのご来店をお待ちしています」や「クリスマスにモスチキンはいかがですか？」あるいは「『小学館　学習百科事典 49　クワガタムシ』　入荷しました」などという記述が散見されます。「仕事頑張ってください」という言葉通り営業活動に励む勤労学生たちです。

◆荒木晃子◆

生殖医療施設心理士。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。

昨年終盤、この歳でバーンアウトを初体験した。その後は順調に回復し、絶好調で迎えた 2012 年のお正月。万にひとつの希望を捨て切れず、母用に手作りした今年のおせち料理は「見かけより内容重視」。流動食しか口にできない母の為、「微塩・微糖、しかも、ミキサーで即スープ状になる」というすぐれもの。ご満悦で迎えた元旦は、母を病院のベッドから車いすへ移し、入院先の正面玄関で母が溺愛する愛犬アンリと一緒に恒例の元旦記念撮影会。おりしもその日は好天に恵まれ、リードを握る母を車いすごと引っ張るその様は、まるで南極犬アンリ状態。今年のスタートは、終日笑いに包まれた家族の風景で始まった。

一夜明けた翌 2 日。「ハハ、キトク」の連絡で、駆け付けたベッドに横たわり、小さく息する母を眺め数日を過ごす。「人工呼吸器と胃ろうの手術」。主治医が提示する「残された手段」は限られていた。私は、5 年前天国に旅立った父を想った。生前希望していた「延命拒否という父の意思」を、その時悲嘆に暮れていた母と娘は実行することができなかった。夫を・父を失うことを恐れ、家族の死の準備もできぬまま、呼吸器をつけ苦しそうに息を続ける父を見守ることは、家族として、その生をよろこぶと同時に、また辛くもあった。しかし、父はそれ以上に苦しそうだった。最期に父は、自ら呼吸器を引き抜き、そして天国へと旅立って行った。その人生を通して強い意志を貫き、家族を深く愛した父らしい最期であった。

現在、母は自発呼吸で息している。皆が元気だったとき、家族で話し合い、確認し合ったそれぞれの意志を・希望を、愛娘の私が、いま継いでいる。「晃子の手をわずらわせたくない」。賑やかな家族の団欒に交わされた、父と母のいつもの会話を思い出す。点滴で命をつなぐ現在の母は、穏やかに過ぎゆくときに身をゆだね、日がな一日夢の中。何も食べないことで、母の命は続いている。時折かける娘や看護師さんの声に目覚め、声にはならないクチパク（口をわずかに動か

す動作）で返事する。「お母さん、仕事に行ってくるからね！帰ってくるまで待っててね！」すると、かすかに母の口が動く。「いってらっしゃい」と。これって、きっと、誰にもわからない、家族の会話なんだな。

父とは違い、母は時間をかけ、ゆっくりとその時を迎えようとしている。ひとり残される娘をおもい、その準備ができるのを待つかのように。

「でも、お母さん、もう少し、私が帰るのを待っててね」

◆ 浦田 雅夫 ◆

いよいよ京都で、子どもシェルターが開所します。孤立無援でホームレスの子どもたち、家はあっても居場所がない子どもたち。そんな子どもたちが、安心できると思えるような場を提供できるよう、支援者のみなさんと取り組んでいます。ぜひご協力ください。
http://www.nonosan.org/

◆ 中村 正 ◆

「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助研修会第 21回大会」に招かれ、トークシンポジウムに参加した。なんと登壇者は本マガジン執筆者ばかりだった。岡田隆介さんが企画したのだが、団士郎さんと川崎二三彦さんと私だった。テーマはあってないようで家族についてのよもやま話のてんこ盛り。2 月 4-5 日、安芸の宮島の目の前にあるホテルで、カキのシーズンだったのでおいしさも堪能しつつ、ライトアップされて海に浮かぶ厳島神社の鳥居の真下までのナイトクルーズも圧巻で、ゆったりとした時間を過ごすことができた。トークの時間は3時間もあったが短いなという印象でもっと話をしたかったが腹八分でよしとしよう。翌日の家族支援のワークショップにも楽しく参加できた。午前中は、衣斐哲臣さん（和歌山県子ども・女性・障害者相談センター）と宮井研治さん（大阪市こども相談センター）の「あなたは家族援助において何をどんなふうに介在させていますか？～“介在”視点の提唱～」のワークショップ、午後は紺田礼子さん（広島市児童相談所）と岡田隆介さん（広島市児童相談所、広島市こども療育センター）の「家族を知る、見立てる、手立てする」というワークショップに参加した。両方とも「きつい事例にやわい支援」という大会のテーマにぴったりの内容で、脱力系でありつつも、不思議な元気をもらいながら参加できた。「やわい支援」というのは当該家族のもつ力に依拠するということであると思った。いいテーマだと感心した。このテーマを考えた岡田さんをはじめとした広島の方々の熟練を感じた。京都への途中での乗り換えの不便はあったが帰りは九州新幹線の「さくら」の初体験もできた。普通車の二列シートを無邪気に喜んだ。とても貴重な時間を広島のみなさんありがとう。

◆鶴谷圭一◆

マガジン４号で「障がいを持つ子どもの入園」について書かせて頂きましたが、その子どもたちもクラスを進級して１年が経ちました。今は３学期なのでもうすぐ一人は卒園、もう一人は年長になります。

年長の一人は自閉症という診断がされていますが、彼にわかる方法で言葉を伝えることでほとんどの活動を、クラスの友だちと出来るようになり、小学校も普通クラスでいけるだろうというところまで発達しました。

年中組に進級した一人は、遅れは見られるものの、ことばによる意思の伝達が出来るようになり、我慢も出来るようになりました。

そして、４月に新しく入園した年少児にも一人、言葉が通じず目も合わせずに毎日毎日、暑い日も雨の日も外に出ていた子どもがいました。今は、まだハッキリしない発音ながらクラスの友だちと一緒に遊び、部屋に入りクラス活動にも参加しています。

１学期にはずっと彼らと行動を共にしてきた担任や加配の教員にとってはもちろんのこと、園の職員みんながその発達に目を見張り、あの１年前の苦労が信じられないという嬉しい思いを共有しています。もちろん、親御さんも、クラスメイトのお母さん方も同じ気持ちでしょう。子どもの発達ってすごい。

４月からは新しい園児と一緒に障がいを持った子どもたちも入園してきます。また気を引き締めて迎え入れたいと思います。

◆河岸由里子◆（臨床心理士）

かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

一人漫才

「この間、はじめて裁判所の法廷で証言したんよ。」

『ついに、捕まったんかあ？何したん？』

「ちやうわ、人聞きの悪いこと言わんといて。ただの証人やて。」

『何売りに行ったん？』

「その商人やないって、証人、法廷で物売るわけないやろ！」

『あー、証人ね。｛私は見た、家政婦のミタって｝』

「あほか、目撃証人やなくて、意見陳述」

『イケンチンジュツ？なんか難しそうやなあ。何の意見？』

「うん、対人援助職、家庭児童相談員のストレスについて」

『これまた面倒な話やなあ、なんであんたが？』

「元家庭児童相談員やったし、臨床心理士＝心の専門家やと言う事で」

『へえ～、あんた家庭児童相談員やったの、知らんかったわ、で？』

「ほんでな、宣誓ってあるやん」

『あ～森昌子の』

「それはせんせ～いーって何歌わせんの！」

『誰も歌えとは言ってない・・』
「先生やなくって宣誓や」
『あ～そっちか。高校野球とかでするやつ』
「まあ、そんなもんや。嘘偽りは申しませんって宣言する」
『ハハハハ、それそのもんが嘘やろ』
「それが嘘じゃ話にならんやろ。嘘言うたら偽証罪になるんや」
『なんか恐ろしいなあ』
「そうなんや。別に嘘つく必要もないんやけどなあ、言葉に気い使うやろ？」
『うんうん、前と後ろで違うこと言うたらあかんしなあ。そやかて、あんたやったら、面の皮３０ｃｍ、心臓に鉄釘生えてるさかい・・・』
「あたしゃ化けもんかい！化粧は厚いが３０ｃｍもないわ。って何の話や！まあ、心臓強い方やけど、そのあたしが、エライ気いはってな。」
『うんうん、で？』
「**ちょうきんちょう**したって・・・」
『くだらん　　！』
お粗末さまでした。

◆ 木村晃子◆

北海道当別町ケアマネジャー

もう一つの連載　～梅漬け～

９０歳を過ぎた、ヤエさんのお宅へ訪問です。

テーブルの上に「これ」と置いた小皿には、色鮮やかな梅漬けがある。「私が漬けた梅だよ。あんたも食べてごらん。」そう言って勧められて梅漬けを一つ、口の中へ入れた。それは、ちょっと酸っぱい、でも口の中にとろけるように広がった。酸っぱさに照れ笑いをしていると、ヤエさんが話し出した。

「私ね、子供を川へ流してしまってね。」ヤエさんから思わぬ言葉が飛び出た。「川へ？流して？と、言いますと？」ケアマネジャーは理解できぬまま質問した。

それは、田植えの時期でした。一家総出の田植え作業でした。当時まだ学校に上がる前の長男が、たんぼの横で大人たちの仕事を見ながら遊んでいました。夕方作業を終えて家に戻ったヤエさんは、長男の姿が見えない事に気が付きました。その夜、大人たちは必死で探しましたが、結局長男はみつかりません。それから、２日後、たんぼにつながる用水路が川に合流した先のところで長男の悲しい姿が見つかったそうです。長い間ヤエさんは、何度も何度も自分を責め、この出来事は家族の中で語られることはなかったそうです。この梅干しは、赤紫蘇できれいに色づけされたものでした。梅漬けを作る頃に、長男が赤紫蘇の葉を楽しそうに採り集めたそうです。そして、酸っぱい梅漬けが出来上がると、はしゃぎながら、ごはんのおかわりを催促していたそうです。「毎年息子のことを思い浮かべながら梅を漬けていたよ。そろそろ梅漬けもやめて、息子のところに行く日が近いね。」そう言ってヤエさんは遠い昔の苦しい思い出を話してくれた。

◆松本　健輔　◆

『何を選ぶか』それはその人らしさがでるように思う。毎日のように沢山の夫婦をカウンセリングしていると、配偶者選択には特にそれが顕著だと感じる。偶然出会って恋に落ちて結婚するわけであるが、そこにはある種の必然がある。そう思わせてくれるほど、配偶者の選択にはその人のパーソナリティーが反映されている気がする。

そう思いながら自分を振り返るとどうなのだろう。自分の配偶者の選択は自分でも自分らしい選択だと思う。ただ、それは外から見ているとまた違って見えるかもしれない。さらに難しいことにその選択が自分の何を映し出しているのかが見えるのはきっとこれから先のような気がする。自分達夫婦が今後どうなっていくのか、今からとても楽しみでしかたない。

◆ 脇野千恵 ◆

先月、奈良の若草山焼きを見に行きました。帰り道、駅前で若者らしき男性２人が小さな椅子に座り、女性と向かい合い真剣な表情で話を聞いています。ふと見ると、そのそばには「無料でぐち聞きます！」という看板が。へえーと、何とおもしろい商売？と思わず笑ってしまいました。私たちも聞いてもらおうかと、家族で談笑しながら通り過ぎました。帰りの電車の中で、「無料」という言葉が気にかかっていました。人の愚痴を聞く人ってどんな人？目的は？家族と色々話すうちに、あれってひょっとして出会い？婚活？という結論になりました。ためしに私のような中高年のおばさんなどの愚痴聞いてくれるのか、ちょっとチャレンジしてみればよかったと。そういえば熱心に話し込んでいた女性は若かったなあ。うまくいけばもっと詳しく聞かせてと、ぐち聞きの場所は第2ステージへと向かうのでしょうか。私たちはそんなことしか想像できませんでしたが、他の人はどう思ったのでしょうか。

◆ 早樫一男 ◆

あっという間に23年度が終わりました。創刊号から、「家族造形法の深度」として連載してきましたが、家族造形法を使った機会がこの一年はたくさんありました。

振り返ってみると、家族心理学会主催の現任者向け研修（ワークショップ形式：数回）、児童福祉施設職員の定例研修（来年度も継続方向）、児童相談所とその近接領域における家族援助研修会（単発）等です。いずれにおいても、家族造形法を使った事例検討を実施しました。その都度、対人援助マガジンの連載を紹介しており、うまく連動していることをひしひしと感じています。

もちろん、従来の家族援助を目指す人のための研修会（ふるかわ家族研究所主催）や不定期の研修会（女性ライフサイクル研究所）も継続しています。

24年度、「家族造形法の深度」を極めていけるようチャレンジです。

◆ 大野　睦 ◆

春の兆しが見られる日々ですが、この冬は格別寒く感じます。屋久島の森も冬は積雪。ハイビスカス越しに雪の積もる山が見えるのです。少しずつ暖かくなってくるといよいよ今年も始まるんだなあと新年のごとく感じる日々です。

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ（自然や人が持つ本来の）ビジョン（視点や考え方）を共有したいとエコツアー会社、有限会社・ネイティブビジョン設立。
BLOG　やくしまに暮らして
http://mutsumi-ohno.seesaa.net

◆ サトウタツヤ ◆

近況報告とエッセイの内容が逆という誹りを免れませんが、光市の母子殺害事件における死刑が事実上確定しました（2012 年2月 20 日）。ここに至るプロセスは学問から見れば大変興味深いものであり、死刑確定後における実名報道を巡る面白い事例でもあります。とはいえ、死刑廃止論の立場をとる私にとっては個人的に無力感にさいなまされた事例でもありました。筆を進めるにあたってまず、光市事件の被害者の方々のご冥福を改めて祈りたいと思います。暴力的に命を絶たれることは、当然、あってはならないことです。またご遺族が犯罪被害者の権利があまりに守られていないと感じたことから犯罪被害者の会（現、全国犯罪被害者の会）を設立し、こうした活動が犯罪被害者等基本法の成立の原動力になったことは非常に大きな出来事でした。

被害者（母子）の遺族は、必ずしも応報感情に基づく死刑を求めていたわけではないし、死刑確定後も喜びを口にすることはありませんでした。憎いという気持ちはもちろんありました。そういうことも述べています。一方で、いつだったか彼が語っていたのですが、「現時点のこの国におけるこの犯罪に対する最高の刑罰を与えることができるようにするのが遺族の務め」そうでなければ「妻子に申し訳ない」ということだそうです。逆説的でありますが、現時点のこの国に死刑がなければ、無期懲役が最高刑ですから、それを得ることが重要で遺族の役割を果たしたと彼は考えたのかもしれません。あるいは他国に存在する死刑を導入せよと言ったのかもしれません。それはわからないことですが、（応報刑を求める人へのロジックや言葉を持っている私であっても）いずれにせよ、生きているご遺族自身が「殺された遺族のために力を尽くす」と言うことを止める言葉はないわけで、「娘を殺したあいつが憎いから殺したい、死刑にしたい」などという応報感情とは全く別の次元の願いであるわけです。個人的には非常に重い課題が突きつけられたように思います（まあ、楽観的な私としては面白い理論的課題ができた、と思っている面もありますが）。

この裁判を巡っては高裁に差し戻された後の裁判において被告人がそれまで認めていた殺意を否認したこと、そして、結果的に殺人にいたった経過の説明内容が荒唐無稽に見えたこと、もまた大きな話題になりました。虚偽自白研究をしている立場からすれば、最初は無期懲役を確実にするためにすべてを認める方がいいという戦略をとっていたのだと思われます。量刑相場という語があるように、事件の内容によってだいたい刑罰は決まっています。どんな犯罪であっても、裁判ごとにあまりにも異なる刑罰が与えられるなら、不公平だという声がでるでしょう。量刑相場が存在するという前提のもとでは、光市事件の刑罰は基本的には無期懲役になるべきであり、罪を認めて反省する姿勢を示す必要があったのだと思われます。それを差し戻し裁判になったらいきなり否認では、誰も納得しないはずです。弁護団のやり方は、誰のために誰のもとにどのような声を届けようとしたのか、ということを見誤っていたように思います。

そして、最後に実名報道を巡る問題ですが、死刑確定後に実名報道を行うことのロジックはどのようなものがあるのでしょうか。これを考えることは非常に重要なことだと思います。新聞に関して言えば、実名報道に切り替えた新聞社と匿名を維持した新聞社がありました。実名報道を行う理由は何でしょうか。「死刑が確定したことによって、更正可能性は無くなったので、実名報道は何も妨げない」という雑な説明をしていたメディアもありました。もう少し丁寧だと、「更正可能性は無いと判断されたものであるから」実名報道もやむなしという感じのメディアもありました。しかし、こういう説明もありました。「死刑は国家が命を奪う最高の権力行使であることを考えれば、その対象者は実名で報道する必要があると考えます」。このロジック、きわめて重要です。国家が秘密裏に匿名の者の命を絶つことは近代においては禁じられなければいけないのです。そして、彼は死刑に処せられるときに、殺人者ではなく国家に殺害される者に昇華されるのであり、たとえ実行時は少年で匿名報道であったとしても、多くの人が実名を知っていたとしても、死刑に処せられる者として実名をもって歴史に刻まれなければいけないと考えるのです。保護や更正という観点からだけではなく、国家の民衆に対する権力行使としての死刑という側面を私たちは忘れてはならないのです。光市事件について「悪いことした奴は少年でも死刑になる」「悪いことした奴は実名で報道され顔も晒される」などという矮小化した理解は、きわめて皮相的なものであり何も教訓を残さないでしょう。改姓した被告人（死刑囚）の旧姓を報道する必要があったのか、については疑問なしとはしませんが。

2012/03/03　ブラジル・サンパウロにてイタリア・ブラジルで複線径路等至性モデル流行中

所得を決める福祉職？

1工程@1円～知的障害者の労働現場　008

千葉 晃央

職員：
「はい、おつかれさまでした！今月は休みも少なかったし、多いね～！…そうや！おごってもらおっ！」
利用者：
「なんでやねん！絶対いやや～！」
帰りの連絡会を進行する日直の職員：
「今日は実習費の日です。寄り道をせずに、しっかりカバンの中に入れて帰りましょう！はい、おつかれさまでしたぁ～！」

「実習費」は施設を利用している方がひと月の稼ぎとして持ってかえるいわゆる「お給料」にあたるものです。つまりお給料日によくかわされる会話です。

ある利用者さん：
「今日は一杯飲むから、ビール買って帰ろ～！」
もう一人の利用者さん：
「お母さんと回転ずし！お兄ちゃんにもおごってあげよ！」

…そんな話もきこえてきます。
日直職員からの「しっかりカバンに入れて」というくだりは、紛失？とられた？というようなことが疑われることがあったからです。時には、通勤途上（通所途上）で出会う人と交友があって、その人が実習費の支給日には特にたくさんお金を持っているのを知っていて、近づいてきたことが疑われることもありました。

■『愚行権』

また、実習費のほとんどをその日にパチンコのようなギャンブル、風俗店系等で使ってしまうというような類のことも起こることがあります。それを本人以外の人がすぐに非難し、責めることも簡単にはできません。「愚行権」といって、人間は誰でも「あんなことにお金をつぎ込んでしまったなぁ」ということがあったりするものです。障害者とされている人たちだけが、それをしてはいけないということを誰が単純にいえるのかというところです。

ただ、援助者側は、心情的には、毎日一緒に汗を流して働いてきて、獲得できたお金ということを知っています。「大事に使ってね！」とは言いたくなります。ひとまず、そこまでは言えますが、そこから先は慎重

な領域に入っていきます。

そんな実習費の額に関しては、これまでの連載でも触れてきました。では、働く利用者がみんな同じ実習費なのか？というところはいかがでしょうか。

まず、社会福祉制度に基づいた施設・事業所の場合は、働く職員のお給料は制度から税金で出ます。ですので、施設での障害を持った方が働いて得た売り上げは、利用者である障害を持った方々に支給されます。

その実習費の算定方法は施設によって様々です。私が関わってきたところでは、かなり公平に近い形で分配されます。経験年数だけは考慮しています。具体的にいいますと利用開始すぐは作業に慣れていないので少しだけ低くしてとか、長年頑張ってきたので少し上乗せというのもありました。これらは工賃規定というのを施設が定め、それに基づいて支給されています。

公平がいいのか？公平とは何か？というのも、もちろん持つべき視点です。

■能力給と能力主義

また、「能力給」として何段階かに分けて、本人の作業を個別に評価して、支給をしているところもあります。むしろこちらの方が多いです。「私も頑張って、たくさんもらえるようになろう！」と利用者さんが自分自身の目標ができるのがいいところです。一方で、「私がこのお給料で、何であの人があれだけもらっているの？私より働いてないじゃない！」ということも起こることが

あります。

こう考えますと知的障害者の労働現場では、労働に関する能力を評価、つまり実習費算定のためのアセスメントを古くからやってきていました。

・職員の指示が伝わる
・作業の手が止まらない
・危険なところに近づかない

…などの項目に関して評価をしていきます。能力給の制度では、いくつかの項目をあるレベルでクリアしたら、上のランクの実習費になる、というような具合です。

障害者がその人の能力を評価されるのを疑問視する意見もあります。一般社会で、「１人前ではない！」というような評価をされてきて、その上、福祉の施設でもされるのか？！という意見です。一方では「障害者だろうと健常者だろうと、同じ一人の人間で、誰でも仕事を評価されて、人それぞれ収入に差があるのは当たり前ではないのか？」という意見。「それはわかるけど、それを福祉施設、福祉的就労の場ですることなのか？」「実習費というぐらいだから、あくまで実習という側面があって、一般企業と同じに簡単に比較するのはどうなのだろう？」…そういった意見を戦わせ、喧々諤々して、どこかに、その時の着地点をみつけて各施設は歩んできています。

ちょっと待って！！「そもそも、ある人がある作業についてできないのは、援助職が伝えていないことが原因ではないか？！」という突っ込みもあります。

…そう思うと評価をして差を設けるということ自体に疑念も生まれてきます。

就労支援に関する研修に行った時、ある施設にいくと作業場の壁に表がありました。表をざっと見て、これまでの私の経験から、各利用者の人の仕事の様子を評価している表かと思いました。職員の方にきくと、そうではありません。各利用者の方に、種々の作業の手順を伝えたか？いつ、誰が伝えたのか？ということを職員が確認するためのチェック表でした。「職員ができるだけのことをしているのか？」こういう側面を施設職員がわかっていることが大切です。実際伝えてみたら、意外とすぐできた！という経験は山のようにありますから。

■きかなくなった有給休暇的しくみ

一般で働いている人には、有給休暇を設けることが規定されています。ですので、常勤であれば、休んだからといってすぐには給料は引かれません。知的障害者の労働現場はどうでしょう。以前、有給休暇のような制度を作っているところもきいたことがありますが、もう 10 数年前…。多くの施設では、出席日数分だけ実習費をわたしています。つまり、休んだ分は引かれます。実労働時間分に基づいています。それは、病気、ケガでいきなり、経済的に大きくに影響を受けることを意味しています。

■今月はボーナスだ～！

ボーナスを設けているところもあります。ですので、月ごとの実習費だけでは、それが収入全てではないこともあります。毎月の実習費をある程度抑えて、ボーナスという形で支給をしている施設、そうではなく月収として毎月に押しなべて、支給している施設と両方あるのです。ボーナスという響きで得られる付加価値も意識して、ボーナス制度を採用しているところもあります。

こうしてみてきますと、支援者と利用者で給料の仕組みが異なる、作業能力も本人の努力の結果だけではなく、支援者が支援できていなかった可能性もある、労働場面では、誰でも評価をされ、その評価に基づいて給料が発生する、障害者を評価しないということが、逆に障害者を特別視していないか、福祉職が利用者の収入を決め、その結果その人の経済的な生活を左右していることが福祉職の仕事なのか…などなど、考え始めると明確なことが出てこないものばかりです。

■自己責任なのか？

私は、その人がその人のできるだけの力で働いていたら、作業量の多い少ないがあっても、実習費は同じでいいのではないかと働き始めていたころは思っていました。それを実際、会議で職員間で話し合ったこともありました。今思うと就職１年目の職員が発議し、それに付き合ってくださった先輩の職員の方々には感謝の念で一杯です。

現在は、そう単純には言えないと思っています。ある施設では皆勤賞を作って、無欠席を評価し、上乗せをしています。「労働の場」ととらえると自然のことのようでもあります。一方、身体的ハンディ等で、それは絶対できないという方も同じ空間を共有しています。そういう福祉の場であると考えると、また言い切ることが難しくなります。

これまでみてきたように単純に「私の考えはこうです」とはいえないというのが今の正直な思いです。利用者、場、経過…などの環境によっても自分が思う「落としどころ」が二転三転するような気がしています。

（撮影：橋本 総子）

社会臨床の視界

（8）

－家族をシステムとしてエコロジカルにみること－

中村　正（立命館大学大学院応用人間科学研究科）

１．システムとしての家族

関係性の束としての家族はひとつの生き物のようである。不定形だがまとまりのあるシステムとして存在し、外部とは境界のあるユニットを成して生き抜く。家族の生態学とでも形容したくなるようなつがい方をし、子どもをつくり、離婚や再婚という形態変化もしつつ、その子どもたちが出立のために分離し、時には暴力と虐待を含むこともあり、愛憎共に宿し、喜怒哀楽の感情が生成する共同性をもつ。貧病争苦のなかに置かれることもある。なかでも虐待がある家族は暴力をとおして奇妙な関係性を結ぶ。暴力だけではないが家族構成員が示す何らかの逸脱行動はシステムを変化させようとすることの無意識の示唆であり、暴力と虐待があればそのシステムは変化へと動くこととなる。関係性の歪みのシグナルとして暴力と虐待があるとみることができる。虐待へといたる家族の波風をみるたびに「家族は小説より奇なり」だなと思う。それほどこうした家族は個性的である。こんな風に問題解決しようとするのかとか、子連れ再婚の仕方とか、そんな理由で暴力を振るうのか等、考えさせられることが多いからである。

この背景には少子高齢社会化が進展するなかで孤立する家族が自力で問題解決せざるを得ないという家族変動がある。貧困の拡大もあるがそれはあくまでも「関係性の貧困化」だと思う事例が多い。そして何よりも各人の関係性へのミクロな対人関係欲望が家族システムには反映されている。社会の変化に対応して生きるために、そして個人の快楽と期待の実現のための対人関係欲求をもつ人間同士の接着のための場として家族という中間地帯（メゾ領域やメゾシステム）がある。家族という相互作用は触媒のように作用し、互いに相補的な関係を営む場となる。また、現在の家族の姿にそれぞれの生育史が反映される。暴力の臨床として関与する家族にはこうした見方がよく似合う。

家族をシステムとしてみるアプローチは家族療法の基礎になるものの見方である。システムは環境との相関で戦略をもつ意味づけの共同性をもつととらえる。何が重要であるのかどうかを家族のシステムが決める。こうした見方は生態を扱う生物学の議論に重なるものがある。たとえばヤーコブ・フォン・ユクスキュルが『生物が見た世界』（岩波文庫、2005 年）、『生命の劇場』（講談社学術文庫、2012 年）で展開している環世界論である。環世界とは環境一般があるのではなく、生きる主体は自らの適応のために環境を構成し、独自な意味の場をつくることを把握したものである。家族も生物体のようにして関係性の束をなし、環

境を主体的に意味づけて生きていると考えることができる。これが家族システム論や家族療法論である。家族はシステムを成して外部環境のなかを生き抜いていると考えるのである。その過程で家族のまとまりができ、結束力や凝集性、きずな、秘密保持、境界線、近寄りがたさ、開放性等としてその家族らしさを表現する。そうした意味共同体としての家族が何らかの問題行動や問題事象を抱えた際、その相互作用の関係図が透視できる。それはまるで生物の環世界のようにみえる。

暴力・虐待を含んだ家族もひとつのシステムをつくる。暴力をとおしてつながる統制というその意味づけを変更する取り組みはいかにして可能なのか。問題を示す何らかの偏向がある家族はどんな環世界をもっているのか、児童相談所と関わりながらどんなシステム変更が可能となるのか、事例運びが首尾よくいく際にはどんな環世界が再構築されるのか、そしてどんな働きかけがシステムの機能を高めていくのか等という関心が家族をシステムとしてみるアプローチから生起する。

２．個人と家族

だから、「勝利を収めたのは個人主義なのではなく、家族なのである」といったフランスの社会史家、フィリップ・アリエスの指摘にはリアリティがある（『「子供」の誕生：アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房、381 頁）。近代社会は個人を創出したとよくいわれるが、社会と個人が剥き出しに対位されるのではなく、その「あいだ」に家族が大きな存在感をもつことを指摘しているからだ。個人の誕生に家族は不可欠だ。個人に先立って、家族が、地域、国家、民族等その他の共同性を表現する関係とは異なる独自な領域として形成される。個人の内面、プライバシーの内奥にあるのは、性愛や情愛、親密性にかかわることだからである。これらを形成するのは家族である。夫婦と親子という組み合わせからなる家族の形態は、社会のなかの「私的な共同性」としての独自性をもつと観念される。この「私的な共同性」を成立させるものとして、性愛、情愛がある。家族は独自に個人を生みだす母体として存在感を増す。

人間の多様な集団のなかでも家族という共同性はどんなものか。生殖、家事、育児、食事、共住、介護、情緒安定などの家族の機能を列挙すればわかるだろうか。確かにそれらのことは、家族の営みであることはまちがいない。しかしこれらの機能は大きく変化している。家族の諸機能は外部化され、社会化されていくばかりである。残る機能は少なくなっている。家族に期待されているのは情緒的安定化機能と福祉的養育機能である。しかしそれさえ危うくなりつつある。あるいはこのようにもいえる。家族が情緒的安定化という機能に純化すればするほど、それぞれの感情が刃になり、かえって人間関係が悪化するという逆説をかかえる。暴力と虐待を含む家族システムにはこの面が顕著である。

３．ライフスタイルと家族のかたちの変化–関係への欲望の多様化–

また家族のかたちも変化しつつある。現在は、家族の多様化が進展している。25 年前、私は意識的に選択的夫婦別氏制度を広げていこうと思い事実婚での暮らしをはじめた。若気の至りもあり気負いながら意志

の力で変化させようとしていた面もあった。もちろんいまだに民法の夫婦同姓主義は制度上変化していないが、現代では自然に人々の関係性への欲望は家族の自明性を崩しつつある。これまでの見方を再考すべき事態が浮かび上がる。晩婚化、未婚化、少子化、子ども無し家族、母子家庭、シングル化等である。「できちゃった婚」もある。特に単身者世帯の増加、働く女性の増加等は家族のあり方や社会への影響が大きい変化となっている。さらに専業主婦が少数派になり、子連れ再婚も増加し、介護問題も深刻となる。男性問題も語られる時代となった。さらに中高年未婚・非婚男性と老親の組み合わせの家族も増える。若者の生活保護も指摘され貧困問題が大きくなる。生涯未婚率も男性の側で高くなる。

2011 年時点での平均寿命は男性 80 歳、女性 86 歳である。長寿社会である。人生 60 年時代ではなくなった。すでに四十代になる教え子たちのなかにも離婚と再婚を経験するケースがある。生涯未婚でいきそうな同世代男性もいる。パラサイトシングル親子もそのまま高齢化して老いた親と同居する中高年独身男性の行く先が心配となる。不幸な重なりにならなければよいが老人介護殺人の加害者に息子や夫が多いことが思い出される。

こうしたライフスタイルをめぐる諸問題の議論が旺盛になっている段階ではある特定の類型の家族を予定調和とすることはできない。家族の変化は人々の欲望に根ざしているので変化は早い。それに応じて家族をささえる社会（制度）も変化しなければならない。宮本みち子は『人口減少社会のライフスタイル』(財団法人放送大学教育振興会、2011 年）で日本人のライフコースの変化を「遷延」「多様化」「非定型化」と特徴づけた。

「遷延」は青年期から成人期への移行が伸びていることである。これは脱青年期とも呼ばれる中間的ライフステージの登場でもある。さらに中高年期から老年期のあいだも長くなり、また老年期が伸び、死亡までの時期も長くなっている。

「多様化」は生涯未婚である者が顕著に増加しつつあることであり、その結果として、子どものない人が多くなる。男性の 2006 年時点での未婚者割合は 50 歳が 15.96%、40 歳は 20%、35～39 歳は 30.0%、30～34 歳は 47.1%、25～29 歳は 71.4%となっている。

「非定型化」とは単線的に人生の行く末がみえた時代ではないことを物語る。学校卒業時の一斉就職から終身雇用を経る過程で結婚し、モデルとしては一姫二太郎を育てるという標準的ライフスタイルが崩れだしている。女性の自立も進行し、終身雇用と終身結婚が予定調和ではなくなったということである。こうして家族のライフスタイルの変化がすすむ。

確かに私の両親世代（昭和一桁世代）のきょうだいの数は多かった。私の父は 9 人きょうだいの末っ子だったのでおじとおばはたくさんいた。ポスト団塊世代の私は二人きょうだい。さらに私の子どもは一人っ子なので、三世代かけて少子社会化がすすんでいく。

また、これまでの常識を疑うべき論点もある。たとえば人類学者のマーガレット・ロックは『更年期−日本女性が語るローカル・バイオロジー』(みすず書房、2005 年）において更年期は医学的な問題ではなくライフスタイルの問題であるとし、中年期の女性に負荷がかかる日本の家族の有り様を鋭く指摘した。更年期障害の典型としての

不定愁訴の脱医療的モデル、つまり家族的背景の指摘である。それと対比的に男性の老いはどうなるのか。男性にも更年期があり、働き過ぎに警鐘が鳴らされている（『男もつらいよ！男性更年期』、石蔵文信、ソシム、2007 年。同じ著者は男性の生き方が女性の更年期の原因なのだと端的に主張した『夫源病－こんなアタシに誰がした』、大阪大学出版会、2011 年）。コミュニケーションを豊かにしなければ男の老いの未来は暗いと思う（三好春樹『なぜ、男は老いに弱いのか？』（講談社文庫、2005 年）。私も男性問題という定式化について提案してきた。暮らし方にかかわる常識を見直し、発想の転換が求められる。こうしたマクロな環境変化に敏感になって家族システムの未来を描いていく必要がありそうだ。環境が変われば家族システムが構築する環世界も変わる。

４．家族が示す「問題」の背後にあるシステムや関係性とかかわる

暴力と虐待のある家族の関係、あるいは問題が表面化している家族の関係性には濃淡があり、それを偏りとしてみるとそうした家族には特性がある。暴力の臨床の典型的対象としての虐待家族に向き合いながら家族の独特な動き方（＝生態）を思う。「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどれもその不幸のおもむきが異なっているものである。」といったのはトルストイの『アンナ・カレーニナ』（新潮文庫）の冒頭。虐待する家族に接しているとなるほどと思う。その虐待事例の背後には間違った問題解決行動がみてとれる。たとえば子どもの問題行動を修正しようとして暴力でしつける行動はその典型である。子連れ再婚してなつかないと思える子どもへの過剰なあるいは疎遠な関係づけもよくある問題解決行動である。よかれと思って、社会の荒波に流されないような防波堤として家族の役割を発揮しようとし、過剰な指示、指導、関与が増えれば増えるほど、非合理的な絆が形成されていく。

表面的には虐待として問題化する家族は児童相談所の介入となる。その保護者は養育困難者として存在し、動機づけられていないクライアントだとされる。抵抗し、非自発的なクライアントともいわれる。そこでこうした家族へのアプローチには工夫が要る。家族をシステムとして把握するアプローチからすると、父親の暴力・虐待を除去することでその家族システムの健康度が高まることを想定する。児童相談所が関与するので親指導は「育児力」にかかわるテーマが多くなる。ペアレンティングやコミュニケーションのスキルは子育て力に焦点化されていく。確かに、以前の号でも指摘したが「イクメン」と称して頑張るパパや「オヤジの会」で学校を舞台に活躍する父親たちへのアプローチとしてこれは有効だと思う。しかし虐待する父親たちには子育て力育成とは異なるアプローチが重要ではないかと経験上考える。虐待する男性は元々子育てしていないことが多いからである。家族システムのなかで男親の用いる暴力・虐待は育児に随伴している内在的なものではない。パワーゲームのような独特な規則があることも多い。家父長的な態度や意識そのものが体現されている。男性的な生活の仕方 masculine way of life に内在している行動としての暴力行使である。

また、男親の子どもへの意識は「煩わしさ」という感情を伴うことがある。自由にしたい（これはわがままに暮らしたいとい

う意味であることが多い)、家事や育児は女性の役割なので何とかしないお前が悪いという DV 的な意識も色濃く保持している。「わが家は子どものしつけを軍隊のように行うのだ」ということを男親塾で語った親がいる。こうした男親には子育て力育成をメインにしたアプローチは敷居が高い。虐待家族を対象にした男親への支援に向かうための初発の動機はもっと別の次元で構成されるべきだと思う。ましてやジェンダー問題という意識は挿入しにくい。そこで考えた。「真の男性は女性や子どもや高齢者に暴力を用いない」といういい方が入りやすいので、この「男らしいコミュニケーション」を重視しようと。家族再統合といっても母子関係の再構成とは異なる課題をもつということだ。

もちろん自分の家族システムに暴力で影響を与えた責任を問うべきだ。家族関係にひびを入れ、傷を負わせ、子どもを保護せざるを得ない事態を招いたことの責任がある。責任をとることと反応性の高い支援とのバランスのとれたアプローチは精緻であるべきで、関係が持続するような接し方をデザインしたい。虐待問題が社会の意識のなかに浸透していくことはもちろん介入の根拠となる。しかし、介入後に関係を持ち続けるためにはその人たちのコミュニケーションモードにあわせていく必要もある。決して虐待を肯定するわけではない。人を見て法を説くという点では男らしさのコミュニケーションモードの上で心理的格闘をすることになる。「男らしく責任をとるべきだ」といういい方で関係を持ち続けるというアプローチとなる。

５．暴力と虐待のある家族に関わる際の理論的な整理

かつて『情況』という硬派の雑誌で東北大学の沼崎さん（暴力への厳罰化を論じている）と論争したことがある。DV が論題だがこの工夫に関連して次のように発言した（「中村正・沼崎一郎／脱暴力の統治―DV 問題をめぐる国家／社会／男性性の権力作用」『情況』2005 年 5 月号)。

やむを得ず、加害者対策プログラムを実施しているのです。保護命令を出さざるを得ない現実自体は日本でも確かにあるわけです。しかし、加害者を被害者から分離させることだけを強調し、保護命令が発令される原因については何もアプローチされないままです。加害者たちは「自分で考えろ」とばかりに放置されたまま、社会のなかに存在しているというわけです。社会病理学の言葉でいえば「ドリフト（漂流)」している。たくさんいる漂流者たちをどうするのかは、まさに「明白かつ現在の危機」として対処が必要ですよね。自分の行動の問題点など勉強などをして、いったん頭を冷やしつつ脱暴力していくことが必要なわけですけれど、ひとりでやろうとしてもできない人たちなので、グループワークをしたらどうかということで始めたわけです。

私たちは国家や警察の代理ではありません。ジェンダーの視点から男性問題に取り組んできた経緯をもとに、男性たち自らのジェンダー問題の中心にある暴力の問題に立ち向かうという、あくまでも民間の自主的な取り組みです。ＤＶに刑事罰はいらないとか、そんなことを主張しているつもりではなくて、むしろ加害者に対しての、何らかの行動修正のためのプログラムへの誘導を制度化した方がいいと思い、提案してきました。それに、男性問題的な関心からこのプログラムに関わってきた関西のメンズリブにはリブと同世代の中

高年メンバーが多いですから、フェミニズムへの応答というのを強く大事に思っています。しかし、「今そこにある危機」としての加害者たちをどうするのか、という現実的な必要があったので、加害者プログラムなんていう体系的なものというよりも、一種のコミュニケーション教室みたいにしてやり始めたのが実際の経過なんです。ＤＶの加害者は妻に一体感を過度に要求するとか、あるいは親密な関係での対人関係が苦手で言葉によるコミュニケーションが下手であるとか、怒り以外の感情が乏しかったり表現できなかったりします。そういう彼らをただ社会にドリフトさせるのではなく、社会と刑務所とのあいだの中間的な空間＝居場所みたいなものをつくって、ソーシャルスキルズ・トレーニングをしようということです。

もちろんジェンダー・ジャスティスに対する認識を加害者に持たせる、ということが最終的には理想でしょうけれど、現状のプログラムではそこまで至り難い。アメリカでも必ずしも成功していないことが、司法省自身の調査結果に出ています。それは、加害者の意識をかなり強く介入的に改革することを意図してグループアプローチを行なうという、プログラム自体の問題だと思います。加害者の男性性の否定につながるような内容、あるいはジェンダーの正義の高水準な実現を、行動問題をかかえる当事者に一方的に注入するような内容では成功しません。あくまでもセラピーや行動修正としてプログラム体系を組もうとするならば、運動的なジェンダーの視点をあからさまに前景に出さないのは臨床的実践としては当然のことですが、その点を強調したことがひとり歩きしてしまって、加害者対策プログラムは近代家族を再強化してしまう可能性があるとか単なる修復だとか、男性に甘いプログラムとかという風に見られているのかもしれません。しかし現実にプログラムに参加する人は、ジェンダー・ジャスティスに対する認識以前の基本的な対人関係能力みたいなところに、既に大きく問題があるので、そこに対する働きかけをまずしていかないといけないんです。「親密な関係を、暴力的でないかたちで築ける」というものすごくプリミティブな水準なんですが、それがまず必要な現実対応なんです。

親密な関係性や私的領域は無法地帯なのではなく、そこにこそ／そこからこそ、公共的な価値が立ち上がることを意味づけたいと思う。難問として自発性と強制性が家族システムにおける脱暴力のへ仕掛けをめぐって相克する。また別の発言である。

これまで個別事例にも対応しつつグループワークをしてきた経験では、「行動問題をかかえた人」として加害者を再定義し、彼らに選択肢を用意することが重要だと思っています。強制的に暴力的性格を変えたり、行動を変容させることは不可能です。しかし暴力を親密圏においても許容せず介入するならば、そのことが課題にならざるを得ません。したがって「行動修正へ自らを導く〈自発性〉を、〈強制的に〉加害者の内面に開発する」ことが必要になってくる。これは一種の矛盾ではありますが、自己決定を保障し続けつつ〈正義〉もまた実現する工夫は、自由な社会が編み出さねばならないものです。ところで、「学習」とは主体的行為ですが、同時に主体の変革が必然化されてもいます。ですから、学習モードの変換を通じて脱暴力が個々人に結果的に強制されていくことが、この矛盾を止揚する最適な方法でしょう。

その場合重要なのは、更生援助的なプログラムを選択肢として様々に開発しつつ、それ

らに参加しないという、否定選択肢も必ず置くということです。「たくさん用意したから、この中のどれかを選べ」というのでは、これはやっぱり完全な自己決定ではないですよね。ですから、今用意されている選択肢すべてに「NO」と言う、という選択肢を入れることが重要なのです。もちろん DV の場合、「NO」と言う選択肢をとる加害者は、刑事罰を受けることになります。加害者の類型別処遇や、保護観察でのプログラム参加命令、ダイヴァージョン政策などによって、選択肢の質を高めつつ、自己決定を保障する以上は、「NO」と言う選択肢に対して常に開かれているようにする。それが「選択肢を用意する」ということで、選択肢の量の問題ではないんですよ。野菜炒め定食はいらないと言う人に、焼き肉定食もありますよ（笑）、というだけではだめで、何も食べたくないという選択肢も存在して、そういう選択をする人とせめぎあう。だからと言って自暴自棄になったり餓死する人が出ないように、メニュー自体は用意し改良を重ねていくということです。細かいことだけど、その積み重ねがソーシャル・ガバナビリティを高める。臨床的援助はこのようなマクロなコミュニケーションモードを前提にしたものであるべきだと思うし、そこにおける循環の積み重ねによる、社会の再学習能力の高度化があるということが、私なりのソーシャル・ガバナビリティの表現です。

このようにコミュニケーションモードを通じて選択肢を増やすには、非営利の民間がベースとなってサービスを開発するのがいいと思っています。否定する選択の方向性を用意するのは権力によっても可能ですが、行動修正への機会提供は、よりよき生（この場合は暴力のない生活）を営む方策にかかわるわけですから、人々の生＝戦略の中からこそもたらされます。・・・インセンティブとパニッシュメント、ということで言えば、懲罰は国家が、報酬は民間が担うということです。

もちろん究極的には、国家も含め権力の懲罰行使がない方がいい。ではどうすれば良いのか。選択肢の保障、しかも、DV の場合のような、行動問題を修正する更生的ケアというものも含めての、ケアニーズの高い人への便益、というものを特に中心に考えると、ソーシャルなものの仕組みとしては「後見制度」を充実させていくということになると思うんですね。保護司や保護観察官の機能強化や役割再編も含みます。DV のみならず家庭内暴力の場合でも応用可能です。国家による行動管理ではなく、民間非営利による行動修正への契約型サポートです。今でも成年後見制度があって、障害者や認知症（痴呆）のお年寄りの、選択肢の保障も含めてケアにあたっていますよね。未成年の場合は、親が後見していることにはなっているんだけど、後見人として後見しているわけではないから、児童虐待における親権の濫用問題などがおこる。だから後見制度を多様な家族問題へと応用可能なように契約的に切り替えられるような、子どもからお年寄りまで一貫したシステムにしていくことが必要でしょう。人々にとってわかりやすい話でもあるんですね。

自発的な変化へと導くため、その意志と行動を形成するための制度デザインとしてこうした隘路を開発すべきだと提案してきた。そうした制度構築、援助技法と理念は、狭い意味では加害者臨床論の、広い意味では内発的変化に向けたジェンダー臨床と家族システム変化への支援論を構築するために必須の事項である。また、親密な関係性・親密圏や私的領域における公正さとか正義の実現や公共的領域における親密さやケアの立場という交差する主題だともいえる。

子どもは自分のものだという所有感がある虐待する親たちである。「子育てなんて知ったことではない。それは妻の仕事で、俺は稼いでいる。」という。しかしそう思う意識それ自体が虐待するリスクとなる認知であることには気づいて欲しい。こうした男性たちにとっても腑に落ちるアプローチでなければならないということである。より適合的で受け入れられるやり方でなおかつ効果があるという難度の高い取り組みが脱暴力支援となる。

６．家族のシステム全体を偏向させる男性の暴力の問題

親への支援にはジェンダーの視点も要る。子どもへの暴力だけではなく、DV との重なりがあるからだ。妻と母の役割を夫や父としての役割から操作し、統制している様子もみえてくる。妻への配慮の欠如もなんとかしたい。子育ては妻の仕事である、しつけがなっていないのは妻の問題であるという具合の都合のよいジェンダー的な認知の枠があり、それは一種のネグレクト型の関係とみることができる。これらはすべて偏りであるがジェンダー秩序のある社会なので男性には一般的にみられる意識だ。そこから暴力と虐待へと至る回路があるので暴力の臨床はジェンダー問題でもある。暴力が必然となるような父親の認知の仕方やそれにもとづく行動的な特性を糺す際にこのジェンダー意識は無視できない。

男性のジェンダー問題を論じるには工夫が要る。女性嫌悪や蔑視の背後には男性同士の関係性があるからだ。そして男性性と暴力の関係も直線的ではない。すべての男性が暴力的ではないからだ。錯綜したつながり方をする。女性嫌悪の背景にある母性の抑圧性、男性同盟（ホモソシアル）の形成、暴力の肯定という男性文化による社会化過程、男性同士の親密さの困難等は一続きなので、この回路を丁寧に辿ることは改めて記述したいと思う。

本来はこうした理論的な背景となるテーマにまで到達させていきたい男親塾である。以前の号でも言及した加害者臨床論にジェンダー的視点は不可欠だ。その点も視野に入れつつではあるが、さしあたり目指す家族再統合の計画にはジェンダー秩序の再考までは入れていない。初期段階としての暴力の除去と男性の責任の確立をめざす。それを当事者の両親とともに作っていくことにしている。子どもを保護された事態は受け入れつつも、その後がどうなるのか、親にはなにができるのかについて共に今後の家族計画を作成する。その際に男親はこのグループワークに参加してもらいつつ、まずは妻との関係をよくしていくことを求める。妻にも暴力的であることが多いからである。DV 加害者への対応と同じような脱暴力を指南する。なかには妻にも子どもを虐待することを命じたりしている父親もいる。この場合、妻は子どもを保護できなかったという罪責感にもさいなまれる。

こうして家族の関係性全体に暴力が入り込んでいたことのもつ問題点の理解から始まる。暴力をもちいて家族を操作しないという明白な目標を掲げる。妻にのみ子育ての責任があるわけではないこと、子どもの目線に立つとはどういうことなのか、無理に子育てをするのではなくできることを広げていくこと等を学習する。

先に指摘した男性性と暴力がつながる回路（暴力へのグラデーションともいえる）を念頭において脱暴力へと男性を向かわせる初発の動機づけを大切にする。そのグラ

デーションのなかでも重視しているのは「他罰性の低減」である。家庭内暴力を振るう男性たちには他罰性が共通しているという私たちのデータに基づいている。親密な関係性においてままならない事態に直面したときに相手を責め、問題を暴力等の強制力で解決しようとし、他者への配慮が足りず、自分の感情の処理のようにして怒りの感情を解消するために暴力を振るう。こうしたことの理解と解決方法を学ぶための男親塾なので、まずは男性同士の親密な関係性をつくり、グループとして機能させ、そこへと自己呈示を繰り返し、コミュニケーションの練習をし、暴力と虐待を用いて対人関係を構成しないことを反復する。並行して児童相談所がすすめる家族再統合のためのケースワークがあり、母親も別のグループワークに参加してエンパワーする（大塚峰子・田村毅・広岡智子著『児童虐待－父・母・子へのケアマニュアル～東京方式』、弘文堂、2009 年のなかで田村毅さんが「父親グループ－理論と実践」と題して記している。いずれは大阪方式としてまとめておきたい)。

７．他罰性からの脱却が意味すること

男らしい生活の流儀に暴力や虐待があり、家族システムとしてのまとまりを構成する際にそれが資源として用いられることが多々ある。認知の歪みを認知行動療法では重視するが、家族システムが暴力により維持されているとそれは関係性の歪みになっていく。その際にある解釈が施されていく。「これは虐待ではなくしつけである、自分も厳しい暴力をともなうしつけを受けてきたが問題はないどころか奮起してがんばれたと思う、男性の攻撃性は当たり前だ」等という意識である。さらにそれが転調されていき、「子どもをしつけざるを得ないようになった母親のしつけがなっていない。だから俺が厳しくしつけざるを得ない。その責任は母親にもある。」という具合に認知の歪みは輻輳していく。妻への暴力も同じで「暴力をふるわせるような態度をとる妻が悪い」という。介護虐待も同じような意識へと転倒していく。

これらは他罰的な意識である。自分のやったことの中和化や弁解ではなくさらに転倒した意識となっている。暴力の認識の初発がずれている。暴力の加害者どころか自分こそが被害者だといわんばかりである。したがって家族システム全体も偏向したものとなる。こうした行動パターンをもつ男性に家族再統合支援をおこなう場合は暴力が必然的に生成するようなこの意識と態度を改めることが重要となり、その中核にまずは他罰性を除去することがあるべきだと考えている。これだけでもずいぶんと家族システムの健康度は高まる。子育て力は後でもよい。家族を見て法を説くというためにはこうしたものの見方が役立つ。また次回以降で記すこととしたいが、家族システムにおける暴力と虐待を含んだ相互作用を念頭において述べてきたが、①愛されたい欲望による操作性や愛着問題のある相互作用、②救済願望やケア役割による巻き込みの相互作用、③トラウマ的な絆形成と寄生性を示す相互作用等というその他の家族システム上の特性もあるので、それぞれのタイプにあわせた介入と支援が求められる。これらの特徴づけは暴力のある家族的相互作用の４類型論を展開し、それぞれに詳細な介入技法を紹介しているクロエ・マダネスの『変化への戦略－暴力から愛へ』（齋藤学監訳、誠信書房、1996 年）をもとにして

私なりにアレンジしたいい方である。対人暴力にはグラデーションがある。この他罰性はさらに中和化、責任の回避と転嫁、それを支える認知の偏り、言語的暴力、感情処理過程、アクトアウトとしての暴力行動化、事後処理過程等のシークエンスがある。家族システムに内在する虐待と暴力にもその相互作用のかたちがあり、そこの関係性への変容を促すための家族理解と支援のためにシステムとエコロジカルなものの見方がある。

おわりに

家族という関係は相互依存の体系であり、愛情という感情作用によって保持されつづける関係である。相互依存は立場の強い者と弱い者の関係を含む。もちろん強い者であっても弱い者が存在してはじめて成り立つ関係だから自立と依存の関係は複雑である。強者は弱者がいないと成り立たないという矛盾を抱えている。赤ちゃんは絶対的に弱い存在だが大人を親にする力をもっている。弱いけど強い。そうした関係性の転轍は家族だからこその強みである。本当に力の差がでてしまう虐待はこうした家族の関係性のあり方が歪んでいる。他にも、父親不在と過剰な母性、男の子への過剰な教育的期待、多様な形態での児童虐待、期待される女の子像の押しつけ等も関係性の偏りの表現である。また、家族のなかの無垢な子どもと母性愛の強調をとおしてつくられるロマンティックな愛情あふれる家族の規範は母を強迫的に子育てや愛情表出に追いつめる。かくして張り巡らされた相互依存の網の目が家族システムを強化したり、弱めたりする。

現代の家族、個人そして社会の相互関係は複雑である。虐待をはじめとした問題をとおして現出する当該の家族システムは社会のなかを生きる環世界として周囲からは独自な境界をもつ意味の束をつくる。とはいえそれは暴力を肯定する意味づけであることが多く、制度や規範を無視する。またそれは防衛的な境界でもあるので、何らかの介入をもってシステム変容がはじまる。家族をシステムとしてみるというアプローチがここから有効に作動する。うまい事例運びは決して外部の力だけでは行えない。そのシステムの内側にある内破する力を刺激することではじめて動きが呼応する。卵の殻を内側からつつくひな鳥と外側からつつく親鳥のくちばしがぴたりとあうようにうまくケースが動くと元気づけられる。

なかむらただし（臨床社会学・社会病理学・社会臨床学）

ケアマネの出会った家族たち

8

～家族理解と家族支援～

木村晃子

居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

～自分でデザインする～

私たちは、日々の暮らしの中で、小さなことから大きなことまで、選択と決定の繰り返しです。そして、自分で決めたことに、ある時は後悔をすることもあるでしょう。そんな悔しい思いも含めて人生という長い道のりを歩いていくことで「自分らしさ」というものが出来上がるのかもしれません。そして、人はどんな状態になっても、できる限り、自分のことは自分で考え、迷ったとしても自分で選択し決定していく力も備わっているのでしょう。そこには、できることなら、誰かに頼り遠慮しながらの生活ではなく、少しぐらい不便や不自由があっても、自分の力で生きていきたいという思いも当然ながらあるのだと思います。

自分の生き方を自分でデザインする。そこに生きている意味や価値が生まれるのでしょう。そうやって、自分で選び決定した生き方をほかの誰かに何か言われる必要もないのだろうなと思います。

～福ちゃんと一緒に～

茂さんは８７歳です。末期癌で予後は３か月程度。春までその命は続くかどうか、と医師から説明を受けたのは、雪が降り積もり始めた１２月でした。そうであれば、残り時間は住み慣れた自宅に戻りたい、という強い気持ちで奥さんの待つ自宅へ退院しました。高齢夫婦の二人暮らし。今後の病状経過はどうなることか、心配なこともあろうかと、退院前に病院の医療ソーシャルワーカーから、茂さんの地域のケアマネジャーへ連絡が入っていました。

連絡を受けたケアマネジャーは、「退院前の調整など不要」と早急に自宅へ戻ってしまった茂さん

の自宅へ訪問しました。

茂さんの病状は落ち着いています。体の痛みもなく穏やかに過ごせているようです。けれども、また症状が悪化することは十分予測できることでした。ケアマネジャーは、茂さんと奥さんのチヨさんに現在の生活で不安なことや困りごと、解消したいことなどを確認します。茂さんからは「特に困ることはない。強いて言えば、布団を敷いて寝ているけれど、起き上がるのも立ち上がるのもとても辛いから、病院のベッドのようなものがあるといいな。」と話されました。介護保険では、特殊寝台の利用が可能です。その説明をするとすぐに利用の希望がありました。そして、退院時に勧められていた、訪問看護の利用についても説明をしましたが、こちらについては「看護師さんに来てもらっても、特にしてもらうこともないから必要ないな。家のことも、ばあさん（チヨさん）がいるから困らないし。ベッドだけ貸してもらえればそれでいいよ。」と話されました。ケアマネジャーは、いずれサービスの利用は増えるだろうけれど、現時点では、茂さんが考えイメージしている生活を送っていただこうと、サービス利用はベッドレンタルのみで支援計画をたてました。けれども、家事全般をこなしながら、茂さんの入浴の介助や通院の介助をチヨさんが一人で行うことには、チヨさんの負担も大きいのではないかということも、今後の要検討事項としていました。

さて、茂さんの生活は年越しを迎える前に急激な悪化を見せました。夜中に状態の悪化があって救急搬送されては病院で一時的な治療をして自宅に戻る、ということが短期間に何度か繰り返されました。その度に、自宅での療養には訪問看護が望ましいことを医師から説明されても茂さんはそれを望みませんでした。「あのね、あんた達は、すぐにあのサービスを使え、このサービスを使えっていうけどね、人の世話になることがどれだけ辛いことかわかるかい？人の世話になるということは、ある面で自分を抑えなくちゃいけないんだ。もうこの年だからね、死んでもいいんだよ。どうせ死ぬなら、家で死にたいし、よそ様の世話になって、自分の家にいても窮屈な思いで死んでいくのはごめんだよ。心配してくれるのはわかるけど、こんな風に調子悪くなることを繰り返しながら、死んでいくことにも覚悟はできているよ。」茂さんは静かに話しました。チヨさんは黙って聴いています。特に茂さんの発言に反論することもありませんが、その表情は疲れが滲んでいます。

ケアマネジャーが、時々時間を変えて夫婦の元へ訪問を続けていたある日のことでした。珍しく夕方遅い時間に訪問してみたのです。丁度、チヨさんが夕飯の支度を終える午後６時ころです。一日の疲れが出るころだろうと思って訪問しました。すると、既に食卓に座って食事をするところでした。そして、そこには夫婦の他に、初老と言ってもいいような男性が座って一緒に食事をしようとしていました。

「こんばんは。お食事時にすみません。お客様もいらしたのですね。タイミングが悪いようですので、また改めて伺いますね。」と言って玄関先で失礼しようとしましたが、いつになく機嫌も体調も良い茂さんが言いました。「ろくなものはないが、ばあさんの漬物があるから、ちょっと食べていきなさい。旨いから。」と手招きしてくれました。ケアマネジャーは、この夕食時に親しげに食卓を囲む初老の男性のことや、食卓にどのようなものが並んでいるのかも気になって、勧められるまま同じテーブルにつきました。それは、野菜が中心の懐かしい和食が並んだ食卓です。

「お客様がいらしているのに、お邪魔してすみません。でも、野菜がたくさん並んでいるお食事ですね。とても美味しそうです。」と言うと、茂さんは言いました。

「これは、夏にうちの畑で作った野菜だよ。それからね、これは、福ちゃん。お客じゃなくて、

家にいるんだよ、一緒に。」と言った。ケアマネジャーは不思議でした。茂さんは夫婦二人暮らしと聞いていたし、今までこの福ちゃんという人には会ったこともありません。福ちゃんというその人は、食事を終えると、「ごちそうさま」と言ってその場を離れ二階へと階段を上っていった。チヨさんは、福ちゃんが二階へ上がったことを確認するとおもむろに話し出しました。

「あの子はね、まぁ、あの子って言ってももう６５になるんですけどね。１５の時から家で預かっているんですよ。あの子の家が子沢山でね。昔で言うと‘口減らし’に家へ預けたんです。だけど、あの子は学校へ行っても読み書きはできないし、言葉も話さないから友達もできないし、小学校は３年生くらいまでしか通っていなかったようですよ。それでも、家は農家だから、なんだかんだと、父さんが一緒に動きながら働きましたよ。そしたらね、福ちゃんは自分で考えて仕事をすることはできないけれど、言われたことは実にきちんとできる子でね。教え方さえきちんとしていれば、見よう見まねで畑の仕事はすぐに覚えたのですよ。だから、あの１５歳の時に家に来てから、そう１０年くらい前かな？農家を辞める時まで、父さんと福ちゃんは一緒に仕事をしていましたよ。」と教えてくれました。

「では、今はどうなさっているのですか？」ケアマネジャーが尋ねました。今度は、茂さんが答えます。

「今はね、近所の私の知り合いの工場で、日中は雑用をさせてもらっているよ。夕方仕事を終えて帰ってくる。体が丈夫だから、何か仕事をさせておいた方がいいみたいだからね。」

ケアマネジャーは、夫婦が長年の時を、福ちゃんと過ごしてきたことを、今、初めて知りました。そして、なぜこれまで福ちゃんの存在は知らされなかったのだろうと考えてみました。もしかすると、福ちゃんの個性は、当時の世の中に受け入れられるのは難しく、そんな世の中から福ちゃんを守るかのようにあまり知られないように過ごしてきたのかもしれません。

茂さんの状態は少しずつ良からぬ方へ変化していきました。ベッドから起き上がることも少なくなりました。入浴や、トイレへ移動することが随分と体の負担となり、また付き添う奥さんの負担にもなってきました。

ケアマネジャーは、サービスの提案をしますが、やはり最初の頃と同じように茂さんはサービス利用を受け入れませんでした。「このままでは、奥さんも体を壊してしまうかもしれません。茂さん、どなたに力を貸してもらうことが、茂さんにとって気持ちの負担が少ないでしょうか？」と確認しました。すると、茂さんは「福ちゃんだ。福ちゃんなら、力もあるし、気心が知れている。自分の子供のようだからね。」と言った。

ケアマネジャーは、福ちゃんにも茂さんの介護を担ってもらうことを提案しました。チヨさんとケアマネジャーとで、福ちゃんに入浴介助の方法や、移動介助の方法を伝えました。福ちゃんは、言われた通り手順を覚え、体の丈夫な男性としてすぐにチヨさんのしていた介護を担えるようになったのです。チヨさんは、そんな福ちゃんを心強く感じていました。茂さんも、ベッドサイドへ福ちゃんをよく呼び寄せるようになりました。

気がつけば春も過ぎ６月、初夏です。茂さんは、今では、歩くときには福ちゃんに片側をしっかりと支えられなければ歩けないほどに足も弱ってしまいました。けれども、部屋の窓から見える畑を眺めるのが楽しみです。日中は、窓から畑仕事をしている福ちゃんの姿を目で追いながら、自分が傍にいなくても、畑仕事だけは福ちゃんが一人でできるようになったことを、自慢していました。

ある日のことでした。天気の良いその日、チヨさんは近所まで用事を足しに出かけました。茂さんは、福ちゃんを呼び寄せ、自分を畑に連れてい

くように言いました。福ちゃんは、茂さんをしっかりと支え畑に出ました。茂さんは、イチゴの植わっているところまで、福ちゃんとゆっくり歩きました。そして、地べたに腰を下ろすと、きれいに実のついたイチゴを一つぶ一つぶ丁寧にもぎ取りました。

「福ちゃん、この、かごいっぱいにイチゴをとるから、ばあさんに食べさせてやってくれな。ばあさんは、イチゴが好きだから。」そう言ってすぐに、かごはイチゴでいっぱいになりました。茂さんは、福ちゃんにイチゴの入ったかごを家の中に持っていくように言いつけました。それを家に置いてから自分の元へ戻ってきてくれるように頼むと、福ちゃんの姿が見えなくなりました。そして、ゆっくりと自分で立ちあがろうとしました。茂さんが、ようやく立ち上がると、２，３歩足を踏み出したところで、倒れてしまいました。

福ちゃんが、畑に戻ってくると、倒れている茂さんを見つけ「おいちゃん、おいちゃん！」と大声で叫びます。けれども、茂さんは返事をしません。そこへ、帰宅したチヨさんが慌てて駆け寄りますが、応答のない茂さん。救急車が来ると、病院へ運ばれた茂さんは、もう戻らない人となってしまいました。茂さんは、転んだ際に頭を強く打ったことが原因だったようです。

余命は春まで、と言われた茂さんが、夏を迎えることができました。そして、その最期は、奥さんが大好きなイチゴを摘んで終わりました。奥さんは、「父さんは幸せでした。私も、父さんが摘んでくれたイチゴを食べることができましたし。あのね、福ちゃんは、家に来てからずっと、食卓と自分の二階の部屋の往復でね、私たちの居間や父さんの部屋に出入りすることはなかったんですよ。なんとなく、福ちゃんをよそ様に見られることを避けていたのかもしれません。今になっては、福ちゃんには申し訳ない思いもありますよ。それがね、最後はこうやって、本当の親子みたいに、一緒にお風呂に入り、朝も晩も、父さんが歩くときには、福ちゃんが傍にいてくれた。本当の子供の世話になっているみたいで、気が楽だ、と何度も父さんは言っていました。福ちゃんを預かってよかったとも言っていました。ケアマネジャーさんは、心配してくれてよく相談に乗ってくれましたけどね、やっぱり、自分たちの生活は自分たちでできるって案外大事だと思うんですよ。よそ様のお世話になるのも、ゆるくない。周りの人はどう思ったかわかりませんが、私は、父さんは幸せに天国へ行ったと思っています。」チヨさんは、涙をこぼしながら満足げに語ってくれました。

茂さんの亡くなったあとの福ちゃんは、あの頃と同じように、茂さんの知人の工場を手伝いに毎朝でかけて夕方帰ってきます。そして、玄関から自分の二階の部屋へ直行する習慣はなくなり、帰宅すると、必ず茂さんの遺影に「ただいま」と声をかけて食卓に座るのでした。

茂さんが自宅で最期の時を迎えるまでの数カ月は、病状が不安定な日々でした。それでも、病院でもなくサービスを利用するのでもなく、長く時間を共にした家族と一緒に生活することを望んで、その願いが叶ったように思います。ケアマネジャーが介護保険サービスを使ってできることなど、高が知れている。長く続いている、共有する時間の持つ大きな力を感じた、茂さん家族の物語でした。

＊プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

街場の就活論 vol.8

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

幼稚園も小学校も大学も「生きる力」のテーマは同じ

先日、とあるワークショップに一緒に参加した愛知県の小学校の若手養護教員（女性）が、「生きる力」を育むために、仲間づくりの取り組みを校内で推進している、という話をしていた。

本誌に連載もしている友人の幼稚園園長・鶴谷主一さんは、自園で開催する「お話し会」という行事について、発表会までの担任を含めたクラス全員での試行錯誤や、その過程自体に意味があり、それらが「生きる力」になると信じていると言っていた。

私が大学で取り組むキャリア教育という分野も、いわば「生きる力」の養成だと思う。狭義の意味で「就職活動支援講座」をキャリア教育と呼ぶ人もいるが、もちろんあんなものに大した意味はない。二本足で立てない若者を量産するかのような現行の教育プログラム破綻の先送りでしかない。

その先送り先である企業は、もはや日本人の若者に興味はなく、二本足で立とうとする外国人に興味を向けている、というのが偽らざる実態だと思う。

大学で行う「生きる力」の養成は、大きく分けてふたつにわけられる。一つ目が入学初期に受講する「初年次教育」と名のついたそれであり、二つ目が主に３年次後期から受講する「就職支援や仕事観育成支援」である。そして、興味深いことに、前者は養護教員が小学校で取り組むそれの相似であり、後者は園長が幼稚園で行う取り組みの相似である。

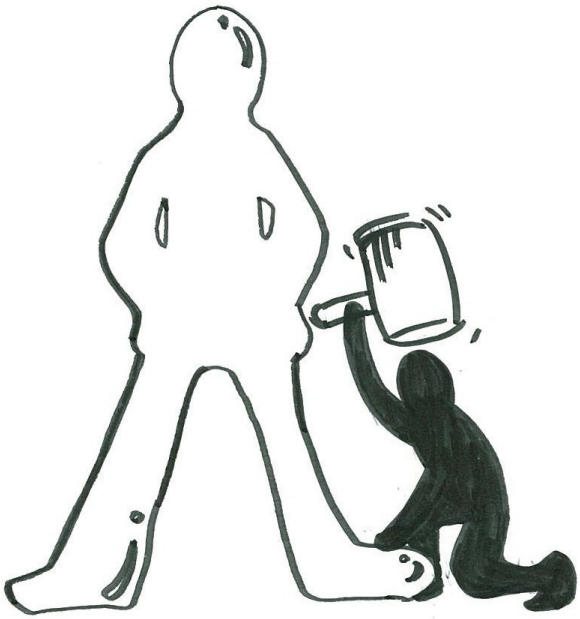
つまり「初年次教育」とは、ようは「友達づく

り」である。全入時代を迎えときが経った大学には、入学しても登校しない大学生が数多くいる。それを通学させるのが初年次教育の狙いであり、効果的な施策は友達を作ってあげることである。大学も、いろんな意味で辞められては困るのだ。

「初年次教育」などというと何か特別なプログラムが走っていそうな雰囲気を醸し出しているが、大半の大学は「来させること」に必死である。

一方の「就職支援や仕事観育成支援」とは、「就職できなくてもグラつかない人間としての土台づくり」であると私は思うのだが、多くは「就職活動」の過程でその力を育成しようとしている。

もっとも実際は、就職をゴールと置いた偏差値教育の延長線的な講義も多く、学生にはそちらの方が驚くほど人気がある。



ただ、いくら支援をしても、卒業後進路が決まらない学生は、一定数輩出されるものである。そしてそこから「どうするか」もまた人生の醍醐味だと思うのだが、実際は悲嘆にくれ動けなくなってしまう「元大学生」も少なくないため、その後のフォローアップも欠かせない。そんな状況を、多くの大学関係者は、口に出せない思いとして「こんなことを大学でやらんといかんのか」と嘆いている。

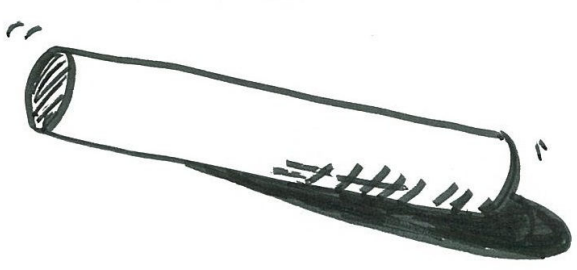
これだけを見て「大学までの教育課程で行われるべき取り組みが不十分だ」などと言うつもりはないが、幼稚園や小学校、中学校の義務教育機関で取り組んでいる教育が、本当に教育的なのかどうか、省みる眼も必要ではないかと思う。

冒頭の、養護教員や園長は、感覚的にその危惧を持っているのだと思う。

幼稚園や中学校は３年間で終わりなのではなく、小学校は６年間で終わりなのではない。

ある時期の教育機関で表面化している問題を解決するためには、その当事者機関の頑張りだけでは不十分であることも多い。教育はバトンパスだだと思うからだ。

僕は教育畑の出身でもないし、大学の非常勤講師に過ぎないが、だからこそ思えることもある。「潰れかけのお店を救ったのは、常連の何気ない一言だった」。そんな例は数限りなくあるだろう。ただ一方で、果たして常連になる価値がある店なのかどうか？　を思案している人も多いと思う。



「ハロー！」で始まる大使館でのインターンシップ

大学で学生と取り組んでいる「キャリア教育」プログラムの中核には、インターンシップが据えられている。ここで最近おもしろいと感じているのが、大使館でのインターンシップだ。理由はいくつかある。

ひとつ目は今後、望む・望まないに限らず、多くがグローバル人材としてビジネスをしていかなければならないであろう現役学生の、視野を広げることだ。当然国によって就職やインターンシップの価値観も違う。その出会いも貴重なものとなる。

最近の大学生は「海外旅行に行かない」と言われるが、就職に有利だと信じインターンシップにはよく行く。そこで、それを利用して海外旅行させているようなものだ。そしてこれが効果がある。

例えば懇意にしている大使館は、残業がない。また、毎日定時になると神に祈りを捧げるため業務が中断する（インターン生が参加を強制させられることはない）。コミュニケーションは当然英語、また、他国からの長期でインターンとして日本に来て業務に従事している学生もいる。このような環境で１ヵ月でも暮らせば、価値観に多少なりとも変化が起こらない方がおかしい。それは、自らを客観視する際の、非常に重要な糧になると思う。

ふたつ目は比較的協力先の開拓が容易であることだ。インターンシップに学生を送り込む大学として一番骨を折るのが「協力企業の開拓」である。自社の営業活動にメリットを見出しにくく、また、私がインターンシップ先の企業に「会議への参加」や「キャリアインタビューへの協力」など様々なことをお願いするので、受け入れ先からすると、「面倒」なことも少なくない。

ところが大使館は受け入れてもらいやすい。その理由はこうだ。

大使館は「日本にいる母国民の生活を助け守る」ことが大きな役割である。一方で「日本人にその国のことを好きになってもらう」ことも大きな果たすべき役割と認識している。そこに、伝播力の高い大学生が、わざわざ自腹で一か月研修に来ると言うのだ。これは使いようで、かなりの宣伝媒体になる。

つまり、インターン生に広報の仕事をさせ、その国の魅力をどう日本人に伝えていくのかを課題にすればいいのだ。やがてその国の色々を知った

学生は、まず学生自身がその国のファンになる。実際に大使館でのインターンを終えた学生は「卒業旅行にその国をたずねてみたい」と言う子が多い。大使館からしても、このように地道にファンを開拓していくことは、長期的な財産づくりといえる。つまり、かなり明確な win-win 関係が築けると思うのだ。

実際、インターンシップ期間中に訪問すると、双方の満足度は非常に高い。一般企業の場合は「戦力になっているかどうか？」「現社員に刺激を与えているかどうか？」「面倒事を引き起こしていないか？」がジャッジのファクターになるのに対し、大使館は「楽しんでくれているかどうか」でジャッジしてくれる。実際のところ学生にかかるプレッシャーも軽いのだ（学生自身は派遣先がどこであり日々必死であるが）。

上記のような理由から、僕はこの大使館インターンが、すべての大学のスタンダードになればいいのにと思っている。「海外旅行は、長期の大使館インターンも含めると 7 か国行きました」。そんな受け答えも、なかなか今風でいいのではないかと思っている。

文／だん・あそぶ
アソブロック株式会社、有限会社 ea 代表、ホンブロック発行人、立命館アジア太平洋大学非常勤講師
絵／たかおか・みなみ
いつかの夢はイラストレーター。現在は編集者。
アソブロック株式会社所属

心理療法が始まるまで

(8)

―コミュニティと病院で―

藤　信子

この連載を始める時に、心理療法における「モチベーション」のことを考えたいと思っていた。連載（３）に、子どもへの abuse（虐待という用語は、意図を含むように聞こえるのでここでは使用しない）のニュースを聞く度に、この親が「子育てがつらい、難しい、不安だ」と相談しなかったことについて「弱音を吐けない」文化があるのではないかと触れている。自分が不安で辛いことについて相談したい、ということは、私たちはどんな時に思いつくのだろうか。これは、子どものこと家族のこと、職場での人間関係など、誰かによく話している人は、案外思いつかないかもしれない。では、何故この人たちは周りの人に相談するのだろう？聞いてもらえるかもしれない、と思って話すのは、そんな悩みは自分だけではなくて、他の人にもあるので、わかってもらえるかもしれない、という気持があるかもしれない。問題の普遍性を何となく分かっている時。では、話さない人は、自分の不安や、辛さなどについて自分だけがしんどいと思っている人もいるのかもしれない。他の

人が目に入っていない、というしんどさもあるかもしれない。

これまで児童館や心理･教育相談センターで実施した「子育て相談」に積極的に申し込んでこられるのは、情報をキャッチでき、家族や友人･知人との日ごろの交流がある人が多い、という印象を持っている。こういう人たちは、心理学的志向があるということで心理療法の適用ができると言えるだろう。精神分析の先生からスーパーヴィジョンを受けた時、その患者（クライエント）が、心理療法に適用か否かを十分に考える必要があると言われ、単科精神病院で殆ど（現在の）統合失調圏の人への心理療法を行なっていた私にとって、極めて新鮮な、私自身の経験と訓練の乏しさを自覚したものだった。ただ良く考えてみると米国での精神分析的精神療法において、効果の見えにくい統合失調症圏の治療は、やはり精神科医にとってメリットが少ないという

事情が、その心理療法の適用を考えるところに大いに影響していたのだということはわかった。行動主義の人たちが精神分析を批判して、彼らが対象とするのは YAVIS（Young, Attractive, Verbalization, Intelligent, Smart－若くて魅力的で言語表現ができて、知的で洗練されている）だけだと言ったのも無理はないだろう。ただこの「心理学的志向」について、私の経験によると「知的」「教育がある」ということと少しは違うようだと思う。それはセラピストとクライエントの関係性の中から生じてくるのかもしれないとも思っているが、このことはいつか他の機会に考えることにしたい。

コミュニティ心理学が起こってきた時には、その対象は、自ら心理的な問題を相談しようということ人たちというわけにはいかなかった。コミュニティモデルにおける心理的援助者は、来談者がサービスを求めてくるのを受動的に待つ－waiting-mode から、自分のほうから相手の生活の場に入れてもらい、そこで一緒に考え、そのなかで援助する－seeking-mode へと転換を図る必要（日本コミュニティ心理学会編 2007）があった。米国で精神病院などの収容施設が、施設症や人権の問題などから、脱施設化の施策へとなる中で、それまでは病院に入院していた人たちが、コミュニティで暮らすようになった時、その生活をサポートすることも、メンタル･ヘルスの専門家の仕事となった。精神保健センターが設立され、そこでの業務は従来トレーニングされた心理療法の範囲を超えるものだった。

その中でコミュニティ心理学が誕生したのだった。waiting-mode から seeking-mode への転換、オフィスを出て必要とされる人たちのところへ、というフレーズはとてもアクティヴでいいけれど、考えようではおせっかいな感じがする。そうならないのは、このようなことの背景には、公民権運動やマイノリティの教育水準向上のためのヘッドスタートプログラム（「セサミストリート」で有名だけれど、今は「セサミストリート」は放送していない？）など、米国のある転換期と重なっていたことがあるだろう。おせっかいにならないためには、科学的な背景が必要なのかもしれない。

日本におけるコミュニティ心理学の具体的な事例の一つは、エイズ･カウンセリングだろう。10 数年前、精神科領域に勤務する心理職の研究会で、エイズ･カウンセリングの研修会を実施した時、その時の講師だったカウンセラーから、今まで心理職に研修をしてきたが、この会が一番抵抗なく受け入れてもらえた、というようなことを言われた。エイズ･カウンセリングは、その頃はエイズと告知された人に医師からすぐに紹介され、まず必要なサポート･情報は何か、そこに繋ぐことも役割としてあった。従来の心理療法家から見ると、そんなセラピストがアクティヴに動くなんて・・・、とか方法論的によく論争になったと聞いた。でもエイズ･カウンセラーの人たちは「火事で燃え盛っている時に、火事についての検討するのではなく、私は水をかける」と言うことだった。日本において、心理療法の対象とはあまりしていなかった精神病圏の人たちとの関わりの多い、精神科領域の心理職は、コミュイニティ心理学的だったのだろうと思う。

文献：日本コミュニティ心理学会編（2007）コミュニティ心理学ハンドブック.東京大学出版会

誌上ひとりワークショップ（その４）

～家族援助は街のアパレル～

岡田　隆介
広島市子ども療育センター精神科

「前回（後編）の最後は、家族が抱えている問題理解をコミュニケーション・スキル説で置き換えるという話でした。今回（その4，後編の続き）はその続きで、「たとえばこんな感じ」という一例から始めます」。

・・・・・・・・・・・・・・・

本児：うちの母親みたいなのって、世の中にいないでしょ？

援助者：キミの友達のお母さんはぜんぜん違ってた？

本児：あたりまえよ、あんなのいるわけがない。

援助者：それを、実際にお母さんに言ったことがあるの？

本児：そんなの無駄！言って通じるんだったら、とうの昔にそうしてる。聞く耳持たないっていうか、そんな会話自体が無理。

援助者：お母さんのことを話題にするのは無理だとして、あなたたちのことはどう？

本児：Aとのこと？どうでもいいのと違う？あの人は自分以外に関心がないから。

援助者：でもAさんのところに行って、一緒に住むんだったら仕事に就くように言いに行ったんじゃなかった？

本児：ああ、あれは自分が面倒なことにまきこまれたくなかったから、たぶん。

援助者：たぶん？もともとどんなやりとりがあって、お母さんが行ったの？

本児：Aが働いてないとわかっていきなり怒り出して、その勢いで乗り込んでいった。わたし頼んだわけじゃないのに。

援助者：怒ったんだ。それ、余計なことだった？

本児：いや、そんなことはないけど。私だってAに働いてほしかったし。

援助者：お母さんが言いに行ったと知って、どんな気持ちになった？

本児：驚いた。自分以外にも関心があったんだ、みたいな・・。

援助者：けっこううれしかった？

本児：うん、まあ。

援助者：ありがとう、って言った？

本児：え？言うわけがない。頼んだわけでもないのに。

援助者：そうかな。たとえばだけど、ありがとうと言ったとするよ、そしたらお母さんはどうするだろう？

本児：ぽか～んとする、きっと。だって、そんなのお互いに言ったことないから。

援助者：そうよね。さっきの話もそうだけど、言葉にしないで「きっとそうだ」って思い込んで、それを10年以上続けたてきたんだものね。その結果、いまの家族ができたわけで、いまみたいな思っているけど口にしなかったことをきちん

と言うやりとりをしたら、ぜんぜん違う家族になるんじゃないだろうか。人と人の関係って、相性とかじゃなくてコミュニケーションの仕方で決まっていくんだから。

本児:コミュニケーション？なに、それ。

援助者:たとえば、キミがお母さんだったとして、「お母さん、行ってくれてありがとう」と言われたらどう？

本児:びっくりする、行ってよかったと思ってうれしい気持ちになる。もう一回、言いに行くかも。

援助者:そうだよね。そしたら、Aもお母さんの迫力から本気を感じるだろ？それでシンナーをやめることにはならなくても、でも圧力というかしがらみ、わかる？(うん)、キミの後ろ盾を感じることにはなるよ。家族って、そういうことじゃないかな。特別な何かをしなくても、いつも後ろにいてくれる存在。

本児:後ろにいるだけでいいの？

援助者:そうそう。誰かを好きになるということは、その人の考え方や家族など全部ぶっ込みで好きになるってことだから。Aがキミの後ろに家族を感じたら、キミには家族があるってことになると思う。

本児:家族は後ろにいる、そういうこと？

援助者:いい表現だね。そう、その通り。後ろにいると、それほどうっとうしく感じないよね。別に特別なことをするんじゃなくて、<ありがとう>みたいに思ってることを口にすることで、背景に収まっていくのと違うかなぁ。ほかにも、そんなコミュニケーションのツボがあるけど、習ってないんだろうね？

本児:そういうのって、習うもの？

援助者:そうだよ、大人をまねて身につけるもの。どう？先生からコツを盗んでみる気はない？

・・・・・・・・・

「もちろん、実際はこんなふうにスムーズにはいかないけど、『家族＝人間関係』を『家族＝コミュニケーションの仕方』に置き換えました。彼女は、家族は血と愛と信頼でつながっていると思い込んでいるけど、これだと家族なんて現実味のない夢になってしまいます。コミュニケーション次第で家族は変わると腑に落ちたら、『それならなんとかなるかも』と思えるでしょう？

会場に、それって本当？と思った人がいるでしょう？私はその人に、じゃあ何が本当なのか、あなたはどうやって決めるの？って聞き返します。なんとかなりそう、そう思えたらどうにでもなるんです。どうにもならないと思ったら、何も起きません。それが、対人援助のキモでしょ。

変化の入り口は好奇心です。『どういうこと？もっと説明して』と質問が飛んでくること。どうしてこのワークショップがジェノグラムからはじまったか？もう気付いたでしょ？あれによってかき立てられた家族への好奇心が、後に続く対人援助へ好奇心の原動力だったわけです。

実際的にも、コミュニケーションのスキルアップというテーマは愛と信頼の回復というテーマに比べるとずっとハードルが低いです。こっちは目に見えるものだし、一人でもできますから。人と人とのつながり方を練習しながら緩く試行するという設定自体が、想像を超えた世界ではないでしょうか。

本児にとっては過去よりも未来の方が圧倒的に長いわけで、この援助指針はそこに重きを置きます。心理教育的なサポートで、新しいコミュニケーション・スキルを身につけて新しい関係を築き、新しい生き方をできるように援助するわけです」。

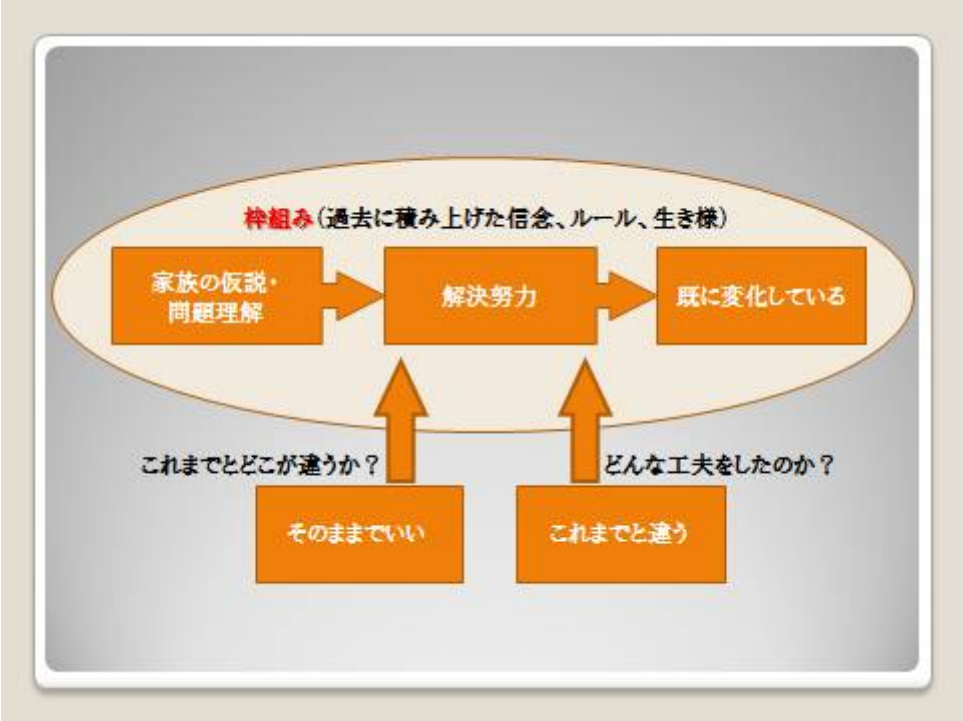
１０．もう一つの手順：既にある変化から問題理解・仮説を再構成する（図３）

「次は、シャツのリフォームの手順です。仮説を用意し自信を持って家族に提示しても受け入れてもらえない、そういう状況に出くわすことは珍しくありません。というより、その方が多いでしょう。ある意味、家族は自分の問題理解・仮説を拠り所にしていますから。そこをおろそかにしては、忽ち家族援助は立ちゆかなくなります。

置き換えが難しかったら仮説“全体”をどうこうするのではなく、仮説の“部分”に目を向けます。いまのシャツでコー

ディネートを考える感じでしょうか。そのまま生かせるところをとりあげます。既にある変化を見つけ、『これまでと違う』『すでに変わりつつある』という脈絡が生まれるような質問を発します。このあたりは、心理教育とは好対照です。これまでのワークで脆弱性の陰に隠れた強みを見つけましたが、あの視点があれば“たまたまのマシ”が“既にできている証し”として生きてくるでしょう。

図3　問題の解決志向的再構成



先の置き換えでは用意した仮説の「思いがけない目新しさ」がカギを握っていましたが、解決志向的な支援では「思いもしなかった驚き」がポイントになります。自分ではうまくできていないとスルーしていた部分が、既に起きている変化だったりいつもと違っているところだったりするわけですから、新鮮な予想外・想定外でなければなりません。

ただし、あまりにも予想とかけ離れていたら意味不明となってしまいます。枠の外ギリギリ、サッカーでいえばゴールポストやクロスバーの外スレスレくらいがちょうどいいでしょう。面接の手順をまとめると、次のようになります」。

① 援助対象者の問題理解・仮説や解決努力の中に既に起きている変化（マシ、これまでとの違い）を見つける。
② それらの間に脈絡が生まれるような質問をする。
③ 「なんとか対処できている自分」への肯定感を育む。
④ 新しい自分の問題理解・仮説、新しい家族間の相互作用が生まれる。
⑤ 結果として、家族の枠組みも変わることを期待する。

「枠の内外と言ってもピンと来ないと思いますので、自分たちの枠をちょっと体験してみましょう。手がかりは、本児の問題理解のストーリーです。これを起承転結と見ます。まず、「そもそも、問題はここから始まった」とする“起”ですね。それをうけて、“承”は「それに関連して、さらに～」とたたみかけます。そこから少し話を広げて、「その一方で～」的な“転”が入ります。そして最後は、「結局～」とまとめる“結”です。

このようなストーリーを聞いて、わたしたちは援助者としてどのように応えるでしょう。それをいまから経験しましょう。まずグループで、本児の役を決めます。その人は、見本のストーリーの4パートをおおまかに頭に入れておいてください。グループの他の人は、みんな援助者であり観察者です。

本児役の人は、最初の援助者に向けて“起”を語ってください。自分なりの味付けで、話を膨らませてけっこうです。全体として2，3分くらいのところで止めて、それぞれの役の人がグループ内でフィードバックします。本児役の人から「そう言ってもらえることを期待していた」「予想通りの反応に安心した」みたいな感想がでたら、それはゴールの内側ということになります。

援助者が交代して、次々“起”の部分で短いやりとりをしてください。もしも「思いがけないことを言われて驚いた」「予想外のやりとりになて戸惑ったけど、なるほどと思った」といったフィードバックがあったら、ゴールポストのギリギリ外側ということになります。外側を狙うのじゃなくて、いろんなひとが思うことを自然に口にしてください。それを、本児役がどう感じたかに耳を傾けましょう。誰かがフィードバックを記録しておくといいでしょう。後で、やってもらうときに役立つかもしれません。

この後、同じように“承”の部分、“転”の部分、“結”の部分と続けていきます。自然でいいです、無理してひねることはありません。本児役の枠を知り、自分の枠を意識し、他の援助者役の枠を感じられたらいいですね。本児の役の人も、意外・想定外・予想外に驚かされながら、自分自身の枠を知ることができるでしょう。そのあたりに注意しながら、じっくり体験してみてください。

今回は、“起”の部分だけをやりましょう。“承”以降は、次回以降にまわします。

（ア） 仮説“起”の部分から

「どうですか？難しい？そうでしょうね。普通、援助面接ではゴールポストの外側なんて意識しませんものね。じゃあAグループから、本児役と援助者役、前に出てもらえますか？本児役から、“起”の部分をそのまま言ってもいいし、流れで少々膨らませてもいいから口火を切ってください。どうぞ。

本児役：母親って、いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしてでも子どもを守るものでしょ？違いますか？でもうちの母親は、ずっと好き放題をして生きてきたんです。あの人の目には子どもなんて映ってません。
援助者役：そうか、ずっと寂しかったんだね。
本児役：いいえ、母が恋しかったらそうかもしれませんが、恋しくないから寂しくなんかありません。
援助者役：そうか、なるほど。でも、悔しかったりはしない？
本児役：そりゃ、悔しいし腹が立ちますよ。
援助者役：それでも、長女として弱音を吐くこともできず、苦しかったでしょうね。よくここまで耐えてきたね。
（拍手）
私：ありがとうございました。まず、本児役の方にうかがいます、どんな感じでしたか？
本児役：寂しかったんだねって言われたとき、なんかムッとしました。そんなふうに簡単に言って欲しくないと思って。自分の気持ちがわかるはずがない！って。でも、苦しかったでしょうと言われたときはなぜかうれしかったです。正直、ほっとしました
私：寂しさと悔しさ、悔しさなら認められる！
本児役：そうか、そういうことだったんだ。
私：どっちも抱えていそうだものね。援助者役の方、どうでした？
援助者役：できるだけ自然な面接をしようと思いました。自分的には、普段と変わらない気持ちでできたと思います。
私：本児役と話をして何か？

援助者役：寂しかったんだね、は真ん中過ぎたんですね。

私：全体的にデッドゼロっつうか、ど真ん中でしたね。本児役が言われたように、真ん中だからこその反発もあったけど、期待通りの共感にほっとしたようです。しんどさだけでなく、耐えてきた頑張りまで分かってもらえたのですから、味方になってくれるかもしれないとの期待を持ったかもしれません。

この流れで突き進むと、自分の問題理解・仮説も肯定してくれると確信しても不思議じゃないですね。でも家出・同棲という行動選択の話になると、受容や共感だけではどうにもなりません。その辺りの距離感はいつも意識しておかないといけないでしょう。

もしも援助者との間で「ひどい母親対可愛そうな子ども」で合意ができてしまうと、今後もずっとこの対比でストーリーに肉付けされていきます。結果として依存対象がAから援助者に移っただけ、となるとしんどいです。

あまりにど真ん中が続くと、やがては『ほんとうに話を聞くだけで、自分の辛さがわかてるのだろうか』、『調子のいい言葉を口にするだけで、どうしたらいいかは全然言ってくれない』との不満も出かねません。難しいところです。

さて、Aグループの本児役の方にお伺いしますが、予想外で驚いた、意外な言葉が新鮮だった、想定外で戸惑った、そんなやりとりはありませんでしたか？全然なし？それじゃあ、本児役をやってもらえますか？こんなのはどうでしょうか？

本児役：いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしてでも子どもを守るのが母親じゃないですか。そうでしょ？でも、私の母は全然違うんです。あの人はしたい放題、好き勝手をして生きてきたんです。あの人の心には、わたしなんか、いや子どもは誰も住んでません。

私：そうか、そんなふうに感じながら大きくなったんだ。哀しい話だなぁ。聞いてるだけでも辛い。

本児役：でしょ？

私：それにしても、キミのお母さんって不思議な人だよね。そうやって好き勝手してたけど、自分の産んだ子どもは絶対に手放さなかったでしょ？好きだった男性であっても決して子どもは任せなかった。自分が育てる自信はなくても、投げ出さずにおばあちゃんに頭を下げて委ねたわけでしょ。おばちゃんに対しては複雑な思いもあっただろうにね。

本児役：えっ？？先生は、そういうのも母性だって言いたいんですか？

私：それが母性かどうかはわからない。ただ、この緩い繋がり方がお母さんの特徴なのかなって気はするけど。

（拍手）

私：どう？どんな感じだった？

本児役：思いもしないことだったのでピンとこなくて、えっ、どういう意味？って感じです。もっと詳しく聞いてみたかったです。

私：ゴールのギリギリ外をねらったつもりだったので、あなたに驚いたり戸惑ったりしてほしかったんです。そこから興味とか好奇心が湧いて、もっと聞いてみたいとなるとうれしい限りです。ほんとに、打ち合わせたような感想をどうもありがとう。

本児だって、すぐにはピンと来ないでしょう。でも嘘は入っていないから、「なるほど、言われてみれば」となるんじゃないでしょうか。「確かに、兄弟は誰も施設に預けられなかった。自分も一時保護されたけど、施設入所の話はなかった気がする。自分で育てることはなかったにしても、施設や父親に預けることは考えなかった人なんだ」と思い至れば、少しくらいは仮説が揺れるかもしれない。

これは、家族の“そのままでもいい”ところ、強みです。「うちの母親も家族も最低！」という仮説のベースになっている「どうせ、いまさら」の枠組に、小さなクラックがはいるかもしれません。もちろん、入らないかもしれませんが。

「さて、予定通りです。きりもいいし、ここで今回は終わります。またお会いしましょう」。

映画の中の子どもたち

第8回

「サラの鍵」

ー苦い真実の味わいー

川﨑　二三彦

ノルウェーの謝罪

ノルウェーのストルルテンベルグ首相は、国際ホロコースト記念日の本年（2012 年）1 月 27 日、「ユダヤ人の逮捕と強制移送に、警察やその他のノルウェー市民がかかわったことを認めなければならない」「虐殺したのは間違いなくナチスだ。だが、ユダヤ人を逮捕したのはノルウェー人だ。それはノルウェーで行われた」と述べ、ナチス・ドイツのホロコーストに関与したことを公式に謝罪した。

＊

というようなニュースが、つい最近も報じられたけれど、今回取り上げる映画「サラの鍵」は、フランスにおけるユダヤ人の一斉逮捕、強制移送という歴史的事実を取り上げている。

「1942 年 7 月 16 日から 17 日にかけて、13,152 人のユダヤ人がパリとその近郊で検挙され、アウシュヴィッツに送られて殺害された。かつてこの地点に建っていたヴェロドローム・ディヴェールには、ドイツ占領軍の命令により、ヴィシー政府の警察の手で、1,129 名の男性、2,916 名の女性、及び 4,115 名の子供たちが非人道的な条件の下で収容された。彼らを救助しようとした人々に感謝を。ここを通り過ぎる人々よ、決して忘れるなかれ！」

現場となったヴェルディヴ（屋内競輪場）跡には、こんな碑銘がひっそりと据えられているというのだが、映画の主人公となった 10 歳の少女サラは、まさにこの中の一人だったのである。

巧みな設定

それにしても……。

「過去を見つめ、新たな人生を始める主人公に、あなた自身も揺さぶられるだろう」「シンプルでありながら力強く、深く心に残る作品」「映画館から出てきたとき、心打たれ、この作品の力に気がつくだろう。幸福な気持ちにさえなるだろう」

映画のパンフレットに謳われているこんな惹句が、まだ物足りないとさえ思えるほどの出来栄えだ、と感じたのは私だけだったろうか。それほどにこの感動を伝えるのは難しい。

映画を見終わって、「なるほど」と思ったことが一つある。それは、フランスにおけるユダヤ人一斉検挙を調べる記者ジュリアが、フランス人の夫を持つアメリカ人女性だという点だ。彼女は夫をこよなく愛し、愛されている。その彼女が、「ヴェルディヴ 60 周年」を特集する雑誌の仕事とはいえ、フランス人の多くが忘れ去った、あるいは忘れ去りたい事件、フランスの歴史の暗い過去を無我夢中で明るみに出そうとするのである。ならばいったいどんなことが起こるのか。アメリカ人が余計なことをすると皮肉りながら、夫が

言い放つ言葉がそれを象徴していよう。

「真実を知って誰がしあわせになるのか、世界が今よりよくなるのか」

この時、2005 年のシラク大統領による謝罪演説はまだ行われていない。夫をはじめ、身近な人の心に何某(なにがし)かざらついた感情が生まれるのは致し方ないだろう。しかも物語の進展にしたがい、それはフランス一般の歴史にとどまらず、夫の両親や祖父母の決して触れてはならない過去にまで、ひたひたと迫っていくのである。歴史を辿るプロセスそのものが、ただならぬ緊張感をもって描き出される秀逸。

少女サラの日々

一方、一斉検挙の日、弟を納戸に隠して鍵をかけたまま捕らえられたサラは……。

ナチによる大量虐殺を描いた映画は無数にあり、私自身が観たものだけでも、すでに数えることができないほどだが、フランス警察によるフランス人に対するこうした無慈悲な扱いには、やはり心が痛む。暴行、絶叫の渦巻く中、子を思って絶望の淵に沈む父と母、冷水を浴びせられて親から引き裂かれるサラ。

映画は、1942 年のサラと 2002 年のジュリアを交互に映し出し、二つの時代が次第に交錯していく趣向となっている。そして、ことの真実が明らかになるにつれ、少女サラが経験した 60 年前の日々が、ジュリアやその夫、夫の家族の“今”を激しく揺さぶるのである。

「僕は知りたくない」

「真実を知って満足か」

夫婦の間には亀裂が生まれ、深まり、二人は苦悩する。

過去と現在の融合

だが、これはまだ物語の前半。実は後半で思いがけないクライマックスが待ち受けているのだが、筋書きを紹介するのは本意でないので、ここでは映画の最後の場面をとりあげる。

3 年後、故国アメリカで生活を始めたジュリアが、3 歳となった我が子を伴い、ある男性と喫茶店で語り合うシーンだ。幕切れ間際、彼女がさり気なく本作品の主人公サラの名前を口にした瞬間、60 年前の過去は現在とみごとに融け合い、物語は深い味わいとともに完結する。

＊

パンフレットに、角田光代が感想を寄せている。彼女は原作小説を読んだ

後で映画を見、「本当に願ったとおり、映像が、小説を読んだときとまったく同じように心にしみいり、揺さぶる」と書いていたが、私は逆コースで小説を読んだ。まさにそのとおり。ストーリーはもう分かっているはずなのに、読み終えてなぜか目頭が熱くなった。映画を見る機会を逸した方、是非とも小説を手にしてください。

鑑賞データ
2012/01/24 横浜ブルク 13
＊公式 HP　http://www.sara.gaga.ne.jp/
＊ Twitter への投稿 http://coco.to/movie/16064

＜これまでの連載＞
第 1 回「プレシャス」　http://bit.ly/9qGWXm
第 2 回「クロッシング」　http://bit.ly/rYwUnO
第 3 回「冬の小鳥」　http://bit.ly/eGJ1d9
第 4 回「その街のこども」http://bit.ly/hzhB9t
第 5 回「八日目の蝉」　http://bit.ly/keXFwL
第 6 回「いのちの子ども」http://bit.ly/pm8V0p
第 7 回「ラビット・ホール」http://bit.ly/wF8G4a

子どもと家族と学校と

⑧

『 学生さん、初めてこころの病を学ぶ！ 』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

◇

『耳にしなかったら、知らないですんだ』のに、知ってしまったからこそ、かえって意識してしまう。
と、思うこともあれば、
『聞いて、知っていたからこそ、良かった、役に立った、助かった』
と、思うこともある。

とくに、こころの病と呼ばれている状態は、ひとびとの関心は高いものの、正確に理解されているわけじゃないと感じる。どのような領域でも同じことはあるだろう。

今回は、初めて対人支援や心理カウンセリングを学んだときの学生さんの様子から。

◇

カウンセリングの授業

ある大学で、心理カウンセリング関係の講義を担当している。

共通教育科目のなかに位置づけられて、受講したい科目を選べるシステムになっている。以前の言い方では教養科目のひとつ。つまり、専門科目ではないので、理系の人も文系の人も、受けてみたいと思った人が、受けている。

受講のきっかけをたずねると、将来の仕事に役立てたいとか、あるいは友人から相談されたときに活かしたいなど、明確な目的を持って受講する人がいる。とても熱心に受講していて喜ばしい。

なかには、評価項目に試験がレポートと書かれていたと率直な意見もある。てっとりばやく単位取得をめざす気持ちもわからなくはない。

それぞれ学生さんは、カウンセリングということばにひきつけられて受講しているようだ。

講義は、大学一年生から四年生までを対象に、生活や仕事に活かすことができるよう、わかりやすく、かつ身近なテーマをとりあげている。

◇

わたし、病気かも

「いま、話しかけてもいいですか？」

講義が終わって、あと片付けをしていると、ひとりの学生さんが控えめにやってきた。

大学生の女子はひとりで教員のところに来ることは少なく、教室に学生さんの姿がすくなくなってから、神妙な表情で話し始めた。

その時間の講義は、いわゆるこころの病と呼ばれる症状をいくつか解説した内容だった。いまの自分とそっくりの症状があり、確かめたかったようだ。

「わたしって、さっき習った強迫性障害でしょうか。はじめて聞いた病名だけれど、ぴったりなので」

とても切ない表情をしている。

つり革が触れない、洋式トイレの便座に腰かけられない、新聞をさわると汚れる気がして苦痛だという。

強迫性障害とは、それを気にするのはおかしいと理屈ではわかっていても、自分の意思でなかなかとめられない行動のことで、長い時間の手洗いや戸締りの確認を繰り返す。潔癖症や確認癖ということばの方がわかりやすいかもしれない。

彼女の場合は、新聞をさわったあとに何度も手を洗うので、新聞を読まなくなっているという。

「洗うときは、どのぐらい洗うの？」

「洗うのは1回だけど、5分ぐらいか、もう少し、、、」

「5分、、、気になるんだね。一番長くてどれぐらい洗うの？」

「15分以上洗うことはないと思う、多分」

「そう。恐らく、あなたの場合は、強迫性障害ではなく、非常に清潔好きの範囲だと思うよ。生活に支障が出てなければの話だけれど、最近、講義は休まずに来られるの？」

「はい。休まず学校に来ています」

「他には？」

「他は特に困っていることは今のところないと思うけど、、、」

不安そうな表情は残るものの、あらためて説明をきいて少しは納得したようだ。

その後も休まずに受講している。

手洗いが長時間続くために登校できず、生活に支障がでる場合は、治療を受ける必要はあるけれど、多くの場合は問題ないと考えられる。

◇

登校できていれば大丈夫

短時間の会話で学生さんを理解することに限界があるが、こころの病の症状の説明をすると、必ず「私は○○ではないでしょうか」と個人的な確認の質問がある。不安で仕方がないようだ。症状名をさらに調べて、そのことをレポートにしてくる学生もいる。ちょっとした告白のようになっている。

少なくない数の学生が、自分はその症状がぴったりなので、そうじゃないのかと思うために、講義中にいろいろな補足説明をする。

まず、順調に毎日登校できている状態だと問題はない。だから、こうやって授業を受けることができるみなさんのいまの状態だと大丈夫。けれども、気になる症状があったら、大学内の心理相談室に行ってみること。また、友人の様子をみて気になる症状などがあったら、いっしょにいってみるのも良いと、提案する。

クライエントさんの気持ちを体験できるきもしれないから、それも勉強になるよと、つけたして話す。

◇

カウンセリングを受けたいのか、
それとも学びたいのか？

「カウンセリングって特別なひとのものだとおもっていたけれど、大学内の相談室を利用してもいいのですね」

素直な感想も出ている。

カウンセリングと精神科受診と同じ意味に取っている学生もいなくはないが、いずれにしても、思い込みもあるようだ。

カウンセリングに関心のある学生さんの特徴は、カウンセリングとはなにかを追求してしっかりと対人支援のために学びたいと思っている人と、自分自身がカウンセリングを受けてみたい気持ちがきっかけで、自分の深層心理に関心をもっているひとがいる。

学生さんそれぞれは、どちらもあわせもっているようだ。

そのため、カウンセリングが必要な人の症状名をきくと、敏感に反応している。

心のケアとか、ストレスとか、こころ関係の言葉が世の中には飛び交っていて、こころの病気への妙な関心熱は続いている。

◇

ママはヒステリー

日常生活のなかに専門用語が浸透していて、本来の意味とは異なる形で使われているものもあるように思う。

ヒステリーもその典型的な例だ。

一般には、女性が感情的になって喜怒哀楽をおもてに出す(=ヒスを起こす)ということになっている。

「ヒステリーは、うちのママみたいに、キーキーわめく人のことだとおもっていました。本来は、体にマヒがおこることでそんな意味なんて知りませんでした。しかも男女関係ないのですね」

受講後、まとめを書いて提出するふりかえりシートには、授業の感想が記されている。

正しく伝えることそして、理解することの大切さを改めて痛感する。

◇

おじいちゃんに優しくします

また、症状の説明を聞いて、気づくこともあるようだ。

「うちのおじいちゃんは、いつも体調が悪いと言っています。あっちが痛い、体がしんどい、癌じゃないかとか病気の話ばっかりです。親戚のおじさんも勝手に病気をつくったらあかんっていわれています。いっしょに住んでいる家族は、おじいちゃんのその愚痴みたいなものを聞くのがいやなので、かかわらないようにしています。ぐずぐず言って私はわがままだとおもっていたけれど、今日の講義を聞いて、もしかしたら、心気症かもしれない。と思うようになりました。さびしいとおもっているかもしれないので、もうすこし優しくすることにします」

この学生さんのおじいさんが本当に心気症であるかどうかは確かめられないけれど、受講して、発見があることは大切で、身近にいるひとの理解につながれば、それは、喜ばしいことだ。

◇

不安神経症って心配ばかりしている人？

私が学生のころのことを正直に話すと大学の講義内容にあまり関心はもてなか

った。よくわからない内容をとりあげているような気がして、授業よりも社会福祉関係の施設でのアルバイトを優先することが多かったし、それがとても充実していた。

バイト学生だった頃、唯一心理学の講義が最も楽しかった。授業で心因性の症状を学び、わくわくしたのを覚えている。こういう内容を学びたかったのだと発見した気もした。

人が心理的に影響をうけることで、さまざまな症状があることに驚いた。

具体的に症状の描写を説明してもらったことは、今でも記憶に残っている。

そのエピソードは、不安のために、電車に長時間乗っていられない男の人のことで、ひと駅ごとに電車を降りないと、目的地にたどり着けないという話だった。こんなことが人にはあるんだと知り、不安神経症という症状を初めて耳にした。

文学の世界だけでない、臨床での話に引き寄せられ、人のこころの不思議に触れた気がする。

◇

うしトラ？

カウンセリングに来られている、ある年配のクライエントさんが、面接のときに、「う〜し〜と〜ら〜」を繰り返してお話されるので、何を伝えようとしているのかわからなかった。

聴いていると、どうも、トラウマのことだと理解できた。

近年のこころのケア関連でのはやり言葉があるとしたら、それはトラウマかもしれない。

なんでもかんでもトラウマだという。

友だちと待ち合わせをしたのに、土壇場でキャンセルになったので、それがトラウマになってしまっているとか、そんな感じで使われている。

いやな思いをした、悲しい体験、こころの傷などと同じ意味でつかっているようだ。

新しい言葉を耳にすると、何かの機会に使いたいと思うのが常だが、もともとの意味とはことなる。

躍起になって訂正する気はないが、もしも、対人支援をする立場になったときに、より正確に知っておくことが必要だと、そんなふうに前置きをして、トラウマのことを学生さんに説明する。

日常生活と、対人支援の現場での出来事の重要性も伝えたいとおもっているが、時間をかけて理解をすすめてもらいたいと考えている。

ふーんそうなんだと、新しい知識を吸収して、満足の表情を見せる学生。少し離れたところで、それほど、関心のない表情をしている学生さんもいる。

こころの話はうさんくさいというような感じの学生さんほど、心の健康度がたかかったりする。

健康的で対人支援のベースをしっかりもっている学生になれば良いなと期待をしている。

蟷螂の斧 とうろうのおの

社会システム変化への介入　part　1

1990年 京都児童相談所 内外事情　第八回

団　士郎

仕事場D･A･N／立命館大学大学院

誰かのたてた命題に添って、精緻化するばかりの専門家集団。様々な議論がなされるが、そもそもの前提は不問に伏される。そこは手に負えないから議論の対象にしない。こんな科学が信頼できるものだろうか。素人目には「おかしいなぁ･･･」と見えていたはずだ。

人通りもまばらな僻地に、誰が利用するのかも分からないようなりっぱな建造物が次々に建つ。年金のずさんな管理が明らかになる頃、あちこちにリゾート法とやらで、立派な施設をぼんぼん建てて、とても採算のとれない浮ついたブームに踊っている頃、そこに従事する人は感じていたはずだ。その家族もまた、おかしいなぁと思っていた人はあったはずだ。それまでだって、たくさんの事業や、世の中の動きに、「我々のやっていることはどうもおかしい・・・」と渦中に従事する人たちは思っていたにちがいない。

今、児童虐待対策に従事する人はそう思っていないのだろうか？二十四時間繋がった呼び出し電話を持たされた配偶者を、家族はおかしいと思わないのだろうか？救急隊ではない、消防隊員でもない、児童相談機関職員なのである。

「店は２４時間あいている方が便利だ」、なんていうちょっとした欲望に応えるために、働く者の負担はどうなっていったか。それによって崩された人の暮らしはどのようなものか。想像力を働かせなければいけない。過剰な便利には警告を発しなければならない。そして負担を背負うつもりのない、他者責任の追及には眉唾を持って対応しなければならない。

時々、そもそもの前提が間違ったところで、屋上屋を重ねてきているのではないかと思うことがある。個々人の人柄や才能の問題ではなく、前提に誤謬があったのだから、そこから始まる営みはどう創意工夫を重ねても、基本的誤りをカバーは出来ない。「所詮人間とは愚かしい、そういう生き物なのさ！」などと、斜に構えたくないのでそこを問題にしたい。

それは、「児童虐待」通報件数５万件超えとその後の、次々の事件報道が目に余るからである。対策は、必ず結果の出るときが来て、それを踏まえた総括が行われなければならない。例えば、交通事故死が１万人を超えた時代と比較すると、５０００人余りになった時代は、最悪の時期からすると半減したと語られるべきモノだ。しかし「戦争では３万人が死んだが、平和になって戦死者はゼロになった」、この話と交通事故は同じにはならない。ゼロを目指せと言うなら、車を一切やめようという提案しかない。

事故死などあってはならないし、戦争もしてはならない。児童だろうと高齢者だろうと、虐待など許されることではない。それはそうだろう。だからなんだ？そこからではないか。責任のある語りが開始されなければならないのは。

児童相談所の見え方が、時代と共にこんなに変わってしまうとは思わなかった。児童虐待問題にちゃんと対応することを、国民の多くが、こんなに期待しているフリをするなんて信じられなかった。

私は今、渦中にいるわけではないので、それ以外の業務の現状を詳しく承知しているわけではない。でも児相ＯＢとして、他の仕事もいろいろしていることは知っている。しかし、多くの国民はそこしか知らされないし、他の子育て相談など持ち込むところだとは思っていない。専門性の高い課題対応をするということで、市町村の児童相談機関のとの棲み分けを提言してきたのだったと思うが、実態は、児相職

員のキャリアの方が浅いなんて事態があちこちに見られる。

国は該当者が多いことのアピールのために通報数の発表をするが、５万件の通報があって仮に死亡事例が５０件なら、０．１%の発生率だ。これが人間社会の現象として更に、どれくらいのエネルギーとコストをかけてゼロ%になるよう、努力されなければならない課題だというのか？考えてみよう。一つの死について、よってたかって非難したり、嘆いたりする理由は何なのか？

私にはこう見えている。児童虐待は特にそうだが、加害者は自動的に明らかになる。迷宮入りの凶悪犯罪ということにはならない。警察の捜査能力の劣化が言われて久しい凶悪犯罪。そんな中で虐待問題は、因果が早期に誰の目にも明らかになる。こういう出来事に人は弱い。関心を持ったとたん、その当事者と因果が提示される。水戸黄門の事件解決並みの早さで、関心持続時間内に白黒がつく。こういう事件が傍観者は好きなのだ。

そんなメカニズムを煽って書き散らすマスコミも、それで売り出す学者も、あおられて対策を講じる役所（児童相談所を含む行政）も、やらせメール問題で批判されて臆面もないアンフェアな始末書を書いてあきれられた九州電力と変わらない。何かあったとたんに、「いじめはなかった」と記者会見してしまう学校長ともかわりないのではないか。

ふざけていてはいけない。真面目そうな顔をしているからと言って、誠実だなんて、ちっとも言えない。臆面もなく、よくそんなことが言っていられるなぁと思うようなことの連発する世の中で、児童福祉の理念に基づいて、子どもの権利を考えるなら、遠く長い道のりでも、子ども虐待の「予防と防止」に取り組まなければ、結局マッチポンプだろう。

酷い親が居るのは酷い世の中だからだ。そんな世の中でも、ちゃんとした親もいるなんて気休めにもならない。当たり前だ。同じ放射能を浴びても、発症は同じ時期ではない。弱い人、事情を抱えた人、体力のない人の所から被害は始まる。

それを個々人の問題だと語る鈍感が作り上げた、緊急援助デザインである。児童虐待の現状への対策などもうこれで良い。それより、今後の児童虐待の発生予防のために、今しておかなければならないことを実行する。そこしかないのは当然ではないか。

それをいったい誰が担当しているのか？私にはよく見えない。

１９９０年８月

8/1　WED　高校野球の開会式のため一週操り上げて ABC パノラマ大放送に大阪へ。その後、篠原が友人と二十年近く続けている現代画廊での三人展に。中西、吉田両君と四方山話。肝心の篠原は PL の花火大会に行っていたそうだ。

そうか、この頃、月に一度大阪ＡＢＣ朝日放送ラジオに出かけて、桂南光さんの番組に出演していたのだった。私のような仕事をしている立場も含めて、世の中のいろんな事について、求められた時にコメントしていた。あまり大した話が出来たと思わなかったが、夕陽のみえるタワー上のスタジオはなかなか気分が良かった。いろんなゲストにお目にかかれたのも楽しいことだった。

8/4-6　SAT・SUN・MON　トレーナーを引き受けている「家族療法ワークショップ゛STEP Ⅱ」。STEP Ⅰの経験者を中心に、全国から24人の方達が集まってこられた。例によって、かなり盛り沢山のプログラム。しかし最近時々疲れたなぁと思うようになった。これは僕には良いことだろう。

延々と今も続いている家族療法訓練 step 1, 2, 3。受講生の変動が時代が合わせ鏡のように見える。２０１２年、受講生に児童相談所勤務の人の公費出張受講が激増した。国からおりてくる予算で研修が認められる

とか聞いた。でも、予算に連動してしまう学びの動機付けって、金の切れ目が縁の切れ目になりがちだと、受講生は分かっているだろうか？こういう時代の流れそのものに批判的でないと、いつでも時代に流されているだけの職員になる。

8/7　TUE　小さな用件ながら気分のえらいことばかりのコンタクトを一日中つづけた。そんな中で後からほっとできるのは、やはり子どもと直接のやり取りである。夜は今日 FAX で受けて、明朝速達で返送する「住友金属社内誌・すみとぴあ」の原稿を 6 枚描いた。

こういう書き方では、まったく思い出せない。課長業務で、トラブルのやりとりだったのだろう。さてどんな話だったのやら、気になるなぁ。

住友金属の社内誌連載は、この時点でもう１０年以上になっていたと思う。この後、鉄鋼の大不況で、合理化の中、社内誌の発行は中止となり、連載もなくなった。

その後、中国の鉄鋼需要拡大で業界は、息を吹き返したと聞くが、ホント、景気は水物だ。大企業の社内誌と二十年以上の付き合いだったが、この間、世界の景気動向に揺れる日本のトップ企業内部を見聞できた。国内の各工場や高炉の火入れ式にも出かけた。公務員をしながら、漫画家の立場で面白い体験を重ねていた。

8/9　THU　北海道の体験実習。結局は行かないことに決めたというので、フェリーのチケット・キャンセルを自分でさせるために生協旅行部へ連れていった。チャンスは掴むも選択、見送るも選択。回ってこなかったのではないことを本人が知ったことも財産のうちだ。体験実習の断わりと詫びを、芽室のH田さんに伝えた。まことに残念。

今思い返しても、残念至極だった。代わりに私が一週間の北海道の牧場体験なんか、行ってみたいくらいだった。

8/11･12　SAT･SUN　今日から 15 日まで夏休み。とは言うものの、一気に片付けたい雑用数件と D.A.N.通信 10 号の制作を二日間で済まさなければならない

DAN 通信は長年出し続けた個人ミニコミ誌。ファンも多く、これについて書いてくださいと言われて、「メイキング／ＤＡＮ通信」を産経新聞の夕刊に連載したこともある。近年はみんながやっているブログを、手間を厭わず、郵送版で数年間も続けていたことになる。

コピーして折り曲げて、シールを貼って、切手と住所を張って投函する。ものすごい手間を月刊ペースでやっていた。毎月、年賀状を出す感覚だったといえば、分かってもらえるかな。

8/13-14　MON･TUE　一家揃って琵琶湖の北、余呉湖野外活動センターのバンガローに出かけた。我家は車を持たないので、JR を乗り継いで木之本駅からはタクシー。

最近こんな動き方をする家族はほとんどいない。みんなオート・キャンプの道具をどっさり積み込んだ4WD で乗り込んできている。我家もすき焼きを作ったり花火をしたり、泳いだりいろいろだが、僕は木陰で原稿を読んでいた。

夜は息子達と花札賭博をやった。賭率 1 対 10 のハンデを付けて本気でやった。賭事をすると性格が出るというが、息子達が劣勢の時に自分の陥ってしまう人前での態度を知っておくのはとても良いことだと思っている。ただ問題は、むしりとってや

るつもりが、2500円ばかりとられたことだ。なぁに親父はこうして小遣いをばらまいているのさ。

頑なに我家に車は導入しなかった。現在、息子達の世代は、大学時代に免許も取って、それぞれ運転している。妻もそのうち教習所に通って運転するようになった。私だけが相変わらず無免許だ。

車社会に反対とかいうのもでは全くない。移動手段に関心がないのと、運転している時間が無駄に思えて仕方ないだけだ。

過去に一年だけＨＯＮＤＡ　ＣＢ５０という原付に乗ったが、走っている間中ずっと、到着時間のことばかり考えていた。道中が面倒なのである。運転は誰かに任せて読書したり、車窓を眺めたり、お茶を飲んだりが向いている。

8/17　FRI　児童相談所業務検討会議。福知山児相のキャンプ事業の実態について、かなり厳しいことを言う結果になった。正しく伝わることを願うしかない。

終了後、本庁から担当者が来て、①「精神薄弱児・者福祉対策基礎調査」②重症心身障害者通所援護事業実施要綱(案)③家庭養育支援事業実施要綱(案)の説明を聞いた。

（1）など 10 年以上前、各種団体からの反対があって潰れた経過のある実態調査と同じようなものだが、今回、話はついているという。何が変わったのだろう。

今もそうだが、こういう文言に拒否感がある。思いつきの臭いは大きく、漢字が多い。そして多分、数年ですっかり様変わりしている。そんなものに付き合いたくない。

「継続は力なり」、を強く信じて何十年、先ずこれ自体が相当な継続だ。友人関係も、業務も、自分の行為も、続くものしか信用しない。そこに留まって踏ん張っていれば誰でも、相当な成果は手にすることが出来る。

しかしそれにしても、役所仕事って、今も漢字いっぱいの新規事業を繰り返しているのだが、その割に成果は見えていない。せいぜい、自殺対策をＧＫＢ４７と称したことを、寄ってたかって批判する程度のことである。なぜ、続きもしないことを提案した者や、予算執行した者を批判しないのかな。金と時間の無駄遣い。
家庭内だったら夫婦紛争ものだ。

8/18　SAT　家裁からのケースの月一度の家族面接（三回目）をした後、原稿を書いていた。夜は里帰りしている妹と子供たち(甥と姪)、うちの家族と祖父母の計10人で食事にいった。孫五人がワイワイとやかましい祖父母の幸せ。

夜中、VTR「セックスと嘘とビデオテープ」をみた。繋がりによるドラマの通俗性ではなく、繋がれないことによるドラマの喪失をドラマにしている、と書いていて何を書いているのか自分でもわからん。

なんだか、全般に夏休み期間中の感じが漂う日誌だ。この時代から二十年経つと、私に孫が二人いて、祖父母とは我々のことになっている。世代交代が順調に出来ていることを嬉しく思う。

8/19　SUN　日曜日だが相談所に出た。他に日がなかったので児童相談所問題研ミナーの現地実行委員会をひらいたのだ。９人集まってくれてプログラムは大方まとまった。夜中、ヒッチコックの「めまい」をみた。タイトルを覚えていなかっただけ

で、見たことのある作品だった。僕はヒッチコックをあまりいいと思って観たことがない。

児相研セミナーは当時、「児童相談所問題研究セミナー」と称した。今は「児童相談研究セミナー」。時代の流れから言えば、今こそ、児童相談所問題を語らなければならないのではないか。この時代、さんざん、あれこれの開催や主催をやったので、今はもう絶対に引き受けない。

この「めまい」をテーマの文章に描いたイラスト（中日新聞）が今号の表紙である。

8/20　MON　丹後・野田川町教育研究会へ話に行った。講演が二本立で、一部が僕、二部は「父よ母よ」「妻たちの思秋期」の斎藤茂男さんだった。著作のほとんど全部を読んでいるジャーナリストである。終了後、京都までの帰路同行した。いろいろなことが話せて楽しかった。

この夏、最大の思い出である。愛読書が多い斉藤茂男さんと、グリーン車に二人で京都駅までご一緒することになった。

講演はどうでもよかったが、帰路の京都までの車中、たっぷり時間があった。いろいろ聞きたいと思っていた。しかし実際は、新聞記者である氏に質問されるまま、私があれこれ喋ってしまった。その結果、誠に残念な結果に終わった。私の話すことなど、私は既に知っていることだったのに。

8/21　TUE　琵琶湖一周サイクリング隊の出発を見送った。今回の隊長は川畑君。登校拒否の男の子3人とスタッフ5人、小編成である。我々はこの取組を「必要な子供に、必要な事を」の精神でずっと大切にしてきた。一人だけを連れて一周したこともある。JTB や赤い風船ではない。何人揃わなければなどというものではない。一人一人を大切にすることの積み重ねがこの種の療育事業である。

そして夜は労演「風が吹くとき」。アニメが有名で、そちらを見たことがあるが、芝居の方がダンゼン良かった。夫婦のいたわりあいや愛情、そこに浸みだしてくる核の恐怖が本当に恐ろしかった。

このマガジン四，五号でマンガを掲載した琵琶湖一周サイクリングを春と夏に、繰り返し実施していた。当然そこに成果を感じていたからで、ここにも継続の力を見つけていた。

「風が吹くとき」、まさかこんな現実が我々の世界に登場することになるとは思わなかった。想像力の世界を上書きする現実とは・・・と恐ろしい思いがする。想像では恐怖を描けるのに、現実となると、恐ろしすぎて、何でもないことのように言いたくなる人の心情を悲しく思う。自分たちはどうなってしまうのだろう・・・と不安な気持ちが、大したことではないと合唱したがっている。この心情は女性より男性に強い？「現実問題として原発が止まってしまったら、我が町はやってゆけない！」と発言する原発城下町の人々に、フクシマはどのように見えているのだろう。

8/22　WED　京都府青少年課の開催する「青少年地域育成フォーラム」なるものが開かれて、出席した。有識者の専門委員会でまとめたプランが冊子になっていて、その説明を聞かされた。しかし後半は参加者である、各市町村の人達の府行政への要望や、独断的な意見の垂れ流しだった。こういう会議は内容よりも形式が間違っている感じがしてならない。

誰が本気なのかまったく分からない会議

やフォーラムを延々と続けてきた結果、大阪市の橋下徹市長の誕生を引き出したのではないのか？

分かっているはずの人が、鈍感を装い、自分が責任を取らないで、先送りを選択する。その順送りで今に至った結果がこれだ。

8/23　THU　府が市町村の福祉担当職員を集めて行う説明会のプログラムのにぎやかしで、90分程話した。ずっと高齢者対策事業の説明で埋まっている間に、全く毛色の違うシステム論の話は、出席者にどう聞こえただろう。一日目の最後のプログラムだったが、寝ている人はなかった。

組織内では希なことだった記憶があるが、私の考える本論に近い趣旨で話す時間を用意された。たしか二条城そばの会議場だった。京都府の中にも私のファンは居てくれたが、同輩か後輩がほとんどだった。これは私の弱点だったのだろうか？

8/24　FRI　隣接する府関係庁舎との積年の問題を解決すべく、会議がもたれている。手順が誤っていたり、経過の理解がいい加減だったり、困ったことは多いのだが、要はやれるときにやれる者が被ることだ。

経過を振り返ると、具体的な問題を、理解しがたい決着で矛をおさめてきたことが一番の問題なのだ。二度と同じ議論に引っ張り出されないためにも、最後まで見届けねば。

この庁舎問題はここで決着を見たのだったと思う。わが方の組織内には、経過を考えるとその決着は不当だ！という声もあった。しかし、誰も経過を引き継げないような変則的な約束は、問題再燃の種になる。

分かりやすい決着にしておくことが紛争再発予防策にもなる。

そして二十年、今、ここに児童相談所はない。京都市内の観光名所・清水寺のそばに移動してしまった。またしても担当地域外（京都市内は、京都市児相の管轄）に設置された児童相談所だが、どうしてこういう事になるのかなぁと思った。

宇治児相新築の時、設置場所から、庁舎設計まで、みんなで侃々諤々できた時代は懐かしいだけになったのか。

8/25　SAT　岡山大学教育学部で開催された第7回日本アドラー心理学会に野田俊作さんに招かれて、「夫婦関係におけるユーモア」なる演題で話をした。メインテーマが「夫婦」ということで、こんなタイトルにしたのだが、普段話すのとはちょっと違った準備をして、やるほうとしては楽しかった。誰かに「お題」を頂戴してというのは、大喜利みたいで面白い。

アドラー心理学は強力な野田俊作シンパによって支えられている感じがする。最近、目にする機会が減ったようにも思うが。

私はなにかにつけて、余り心動くことが少ない方だが、初めて野田氏の講演を聴いた時はたまげた。川畑君が事例を用意していたのだが、最初の数フレーズを述べただけで、あとは講師の独演会になった。

学会誌のリレーインタビューをお願いして、新大阪のオフィスにもおじゃましたことがあった。当日そこにいた人たちも同席しての、公開インタビューになったのに驚いた。オープンカウンセリングをやっている人たちには馴染みの形式だったのだろう。

8/27　MON　午前中いっぱいM判定員のケースにいろいろコメントをしていた。体の問題と心の問題、どちらか一方というものではない事実。着手できるところはいつも限られるし、手段も限られる現実の中で、心理診断とは何かというテーマが続く。「何であるか」と「何ができるか」、担当者の関心の在り方によってデータはいろいろな顔を見せる。

午後は半休をとって、ミネルヴァ本の編集会議(第五回)に宇治児相へいった。21時ごろまで、ディスカッションの録音をしたり企画を詰めたりしていた。

児相、そしてその後の知更相と、このころの新人や、力量に問題を感じている心理職のために、家庭教師のようなミーティングをよくしていた。

一緒に学べた世代や後輩はいいのだが、そこに遅れてきた部下、後輩世代には、組織的に学習機会が貧弱になってきていたのだと思う。自分で学べというのは間違っていないが、独学の成果と共同関係の中の学習は結果が違う。一緒に学ぶ場を確保するのは、学習内容のためだけではない。それがチームワークや、次世代育成の組織のレパートリーに繋がる。難しいことではあるが、ここは肝だ。

学び損ねた先輩女性心理職にも多大な応援をしたが、余り受け止めてもらえてはいなかった。その点後輩は、多かれ少なかれ、おこなったことを受けとめて成長していってくれた。分かってもらうのに随分時間のかかった人もあったが、それでもそのことを忘れず、ずっと後になってフィードバックをくれている事実に報われた気はする。

結局、北風ではなく太陽になることなのだろう。

8/28　TUE　朝、大山崎中学校の校内研修会に出かけた。夏休み中、多くの学校がこういう企画を実施している。会場を校外の公民館などに設定して、クーラーのきいた会場でというわけだ。川畑君と二人でこの夏はいくつか出向いた。担当地域の学校にはできるだけ、こういう形でも出ていきたいと思っている。

午後は家族療法のSVの来る日で、夫婦面接のライヴを見てもらった。夕方からは観察室で、家庭内暴力ケースをみた。耐えかねて家を出たという話が悲愴感なく語られる不可思議さにしっかり見定めなければならないものを感じる。

地域、学校との連携、教育分野の人たちへの支援、そんなことを殊更ネーミングせずに、心理職スタッフを中心に実行していた。そして家族を理解し支えることが児童相談所の中核的業務にあると確信していた。「家族療法」を特定症状のための治療技法だと認識したことはなく、児童相談全ての分野に応用できる援助だと考えていた。そして年度レポートにも、そのスタンスで量的な報告も続けていた。

8/31　Hと面接。相互なぐりがき法で物語を少し長めに実施し始めた。製作過程で考えておくようにと指示してあるので、すこしアイデアルなものができた。面白かった。

さぁ、これは誰のことだったのだろう。多くはないがやはり、記憶の棚から完全に抜け落ちてしまっているものがある。残念だが、自覚しているより、もっと多くの欠落が生まれているに違いない。仕方あるまい。みんな覚えていたいなんて欲張りか。

学校臨床の新展開

—⑧今、この時代に教員であることの辛さ—

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

３０年数年前のこと

今から 30 年数年前、小学生の私は、学校でいろいろといたずらや問題を起こして、あるいは忘れ物をしては、担任の先生から罰として棒でたたかれたり、げんこつで殴られたり、長時間正座をさせられたり、グランドを走らされたりしていました。あのころは、それが「ふつう」だったような気がします。悪いことをしたらたたかれる。親もまた、先生に「悪いことしたら、この子、殴ってやってください。」と言っていました。（当時の私は教員にとって「とても気になる子ども」であったのは間違いないだろうと思います。）さすがに、悪いことをしていないのに殴られたということはないのですが、とにかく、よく殴られた記憶があります。いまの学校ならば、これは「ふつう」では考えられないことです。「新聞沙汰」になります。

もうひとつ、体育の時間は「半ソデ、半パン、ブルマー」ということになっていました。体育の時間、先生は真剣な表情で「シャツは必ず半パン、ブルマ—のなかに入れなさい！」と激しく注意していたのを覚えています。どうして学校や先生がそこまで「半ソデ、半パン、ブルマ—」にこだわっていたのか、いまだによくわからないのですが・・・。「半ソデ、半パン、ブルマ—」は私が高校生になっても続いていました。しかし、1980 年代の終わりころからでしょうか、「こんな校則はおかしい！」というような話をテレビのバラエティ番組で面白おかしくやっていたのを覚えています。1989 年に国連で「子どもの権利条約」（日本は 1994 年に批准）が採択された後は、いままで以上に各地で子どもたちや保護者が「管理教育」に異論を投げかけ始めていました。一方、学校の先生たちはその圧力にまだまだ負けていませんでした。

高校生の私は、というと、いつも遅刻ギリギリに登校していたのですが、校門の前

には生徒指導担当の先生方が、毎朝、ずらーっとならび服装、頭髪、遅刻チェックをしていました。チャイムとともに門が閉められるので、みな駆け込んでいました。同じころ、同じ状況が各地の学校でもあったなか、兵庫県のある高校で、遅刻チェックの先生が勢いよく閉めた校門扉によって女子生徒が挟まれ死亡する事件（1990 年 7 月 6 日　いわゆる「校門圧死事件」）が起きています。同じころ高校生だった私にはとても衝撃的だったことを覚えています。学校とはいったい何なのかと深く考え出したのはこのころからかもしれません。

前置きがずいぶん長くなりましたが、学校や教員が社会的な信頼を徐々に失いはじめていったのは、このあたりからではないでしょうか。セクハラや体罰の児童間暴力やいじめの放置などの問題も盛んに報じられるようになりました。何もこの時期、急にセクハラ教員や体罰教員が増えたのではなく、泣き寝入りをしていた生徒や保護者、何らかの状況のなかで声をあげられなかった生徒や保護者が訴えだし、それをマスコミが大きく取り上げたのです。各地で学校の校則が徐々に見直され、また、ふと気がつくと、いつのまにか学校は週５日になっていました。一方で、皮肉なことに、教員はゆとりを失くし、あらゆる場面で説明責任のための書類作成や多様な保護者からの訴えに翻弄されるようになりました。また、これまで以上に、いじめ、非行、学級崩壊、発達障害や児童虐待などさまざまな事象が多く生じてくるようになりました。このようななか 1995 年から臨床心理士を中心としたスクールカウンセラーが、そして 2008 年からは福祉専門職を中心としたスクールソーシャルワーカーが学校現場に参入しています。（といっても、全ての学校に配属されているわけではありません。特に、スクールソーシャルワーカーについては、さまざまな採用形態があり、必ずしも福祉専門職ではないケースなどもあり、今なお、各地域で実情の大きく異なる状況が続いています。）

時代とともに親の子育てのありよう、子どもの育ちのありよう、学校教育のありよう、子ども観は確実に変化してきています。

今、この時代に親であること、今、この時代に子どもであることは、総合的に考えて結構しんどいことなのではないでしょうか。

さて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとして学校で教員の傍らにいますと、教員の業務量の多さと長時間労働、生徒、保護者対応などストレッサーの多さに愕然とします。今、この時代に教員であることは相当しんどいのではないでしょうか。

朝日新聞　2012 年 02 月 14 日付　夕刊は、「精神的な病気により休職する学校の先生が毎年増加し続けているので、ついに文部科学省も実態調査に乗り出し、予防策を考える。」と報じています。出勤できない教員、登校できない生徒、同じ学校という場をめぐってともに葛藤しています。教員が安心して働ける場、生徒が安心して学べる場を整えていくこと（環境調整）は、福祉専門

職の仕事のひとつです。

子ども期の大切さ

さて、学校というある意味閉じられた社会のなかに、外部から来た心理専門職、福祉専門職は「黒船来航」に例えられたと以前、述べましたが、近年もっとも閉鎖的な場である、刑務所や少年刑務所にも福祉専門職である社会福祉士が配置されるようになりました。出所しても行き場のない人たち、特にそのなかでも、高齢者や障害者、あるいは障害の可能性が疑われる人など、支援がないと再び犯罪にかかわらざるを得ない状況の人たちなどを支え、関係機関につなぐ役割が期待されています。また 2009 年からは刑務所出所者で特に福祉的な支援が必要な人を地域で支える「地域生活定着支援センター」の設置も進められました。そういった新たな展開のなか、福祉専門職が包括的なアセスメントを行うことによって、しばしば浮き彫りになるのは、犯罪者のあまりにも脆弱、かつ不運な子ども期です。多くの犯罪者が子ども期に、いじめられた経験や、被虐待体験を持っています。また多くの場合、学校に通っていても、十分な学力がついておらず、あるいは知的障害の疑いがあるのに、何らかの事情によって、療育手帳を取得せず、適切な支援を受けてこなかったということが共通してあります。

誤解のないように言えば、いじめられた経験のあるものや被虐待児、知的障害者が犯罪を起こすと言っているわけではありません。育ちのなかで重要な時期に、いじめられた経験のある人や被虐待体験を持つ人は、あるいは何らかの障害が疑われる人はさまざまな生活上の支障が生じやすいのです。このような状況でも適切な教育や福祉的支援、心理的支援を受けていれば、犯罪に結びつく可能性がぐっと減ったであろうと思われる事例は、少なくありません。再犯者の生育歴などを文献や新聞で、見聞きするたびに、子ども期の大切さを感じます。学校では、さまざまな専門職が、多角的に生徒を観察し、気づきの感度を高め、家庭を含め包括的に捉え、子ども期の間に丁寧にアセスメントし、環境調整を行い、適切な教育を保障すること、安心して安全な場で学び、生活することを保障することが求められます。

学びの森の住人たち（３）

学校でもない学習塾でもない、＜森＞という学びの世界が投げかけるもの

北村真也

（アウラ　学びの森）

１　森の風景

1999 年、いよいよ学びの森のプロジェクトの始動です。私は、90 年代以降の学習者主体の学びの理論（Learners-oriented Approach)を検証し、それを今の日本の子どもたちの現状にあわせる形でアレンジしてその実現化をめざしました。

私がまずこだわったのは、学びの空間です。今までの教室は、先生が子どもたちに正解とされる情報を上意下達的に効率よく伝えるためにデザインされてきました。だから教室は、先生が使う黒板がその中心に位置づけられていたのです。でもこれまでの教室は、学習者主体の学びを実現させたいと考えていた私たちの思いに適したものではありませんでした。

ではそれに代わる学びの空間とは、いったいどういったものなのでしょうか？そのヒントは、私が以前訪れたことのある学校の中にありました。

92、3 年頃のことだったと思いますが、私は福島県郡山市の隣にある三春町という小さな町で、学校建築を専門とされておられた長澤悟先生とお話させていただいたことがありました。当時の三春町は、教育長だった武藤義男先生が中心となって町を上げての教育改革をおこない全国的にも注目を集めていました。武藤先生は、「教育改革は市民運動だ」というスローガンを掲げ、町民の同意を得ながら、10 年の任期の中で 7 校の学校をリニューアルさせたのです。そしてそのときの学校改修の総指揮をとられたのが日大工学部の長澤教授でした。

長澤先生の作り出される学校の空間は、どれも従来の学校建築と大きく違っていました。そこには、いつも人の気配が感じられる空間がありました。勉強に疲れた子どもたちに遊び心を提供するワークスペース。図書室に隣接して様々な情報を発信できる情報スペース。用をたすのが楽しくなりそうなトイレスペース。登校した子どもたちの顔がいつも見届けられる職員室･･･、そのどこのスペースにも、その場所を作ろうとした人、あるいはその場所を使おうとしている人たちの思いが埋め込まれているように私は感じられたのです。

私はこの長澤先生の作り出す世界に実際に触れることができて、学校建築へのそれまでの思いが一掃されたように感じました。それまでの学校は、私にとってもっとも生活感のない場所でした。そこは決して住みたくない環境、人の温もりが感じられない場所でした。

みなさんの中で学校に寝泊りしたい人がおられますか？「学校の怪談」じゃないけれど、学校は何となく生活するには薄気味の悪い場所なのです。そこは生活の場ではなく、どちらかというと職場に近い、いわゆる機能空間なのです。そんな学校のあり方を、長澤先生は根本から問い直そうとされていたのです。

「機能空間から生活空間へ」
「無機的な空間から人の温もりが感じられる空間へ」

長澤先生の仕事は、その空間にかかわりを持つ子どもたち、そして先生たち、さらにはその土地の周辺の地縁関係者たちへのインタビューから始められます。そしてその膨大なデータをもとに、先生は空間をデザインされていくのです。それは、まるで住居の設計過程のようであり、そこにはその場を利用しようとする人たちの生活世界が描かれていったのです。

このような経験をもとに、私は学習者主体の学びの空間を一からデザインしていくことにしました。また同時にそれは「環境」とは何かということを自分自身に問いかけることでもありました。そしてちょうどそんな時に出会ったのが、Ｊ.ユクスキュルやＪ.ギブソンたちです。彼らの知は、私に「環境」というものが決してそれ単体で存在しているのではなく、そこにかかわるものたちとの関係性の上に存在していることを教えてくれました。

大切なことは、場にかかわるものたちが、そこにどう参加していくかということ。そしてその参加を通して、環境そのものがかかわるものたちと一体となっていくのです。だから私たちは、環境とかかわるものたちとが出合うインターフェイスにその意識を向けなければなりません。そこにどのような仕掛けを用意するのか、どのようなモノを配置し、どのような雰囲気を醸し出し、どのような思いを込めていくのか、まさにここが勝負どころのように考えていきました。

新しい学びの空間を、私は 10 年以上生活してきた新興住宅地の中で始めることにしました。この住宅地は、造成から 20 年以上たつのですが、その中心部分に小学校とショッピングセンター、銀行と郵便局があり、それに隣接した店舗の誘致用の土地が眠っていたのです。私はその場所に一定の広さ

の土地を手に入れることができました。そこは、ちょうど小学校のグランドを見下ろす形の少し高台の土地でした。その場所に、新しい学びの空間を持った建物を建てることにしたのです。

それから私の関心は、学びの空間に絞られていきました。区切りのない広い空間、陽の光が差し込む吹き抜けの空間、緑がいたるところに配置された空間。そんな空間を私は漠然とイメージしていました。そしてそのイメージを設計士に伝え、具体的な形を描いていったのです。何度もラフを描き、イメージを再構成する中で、アウラ学びの森の空間が次第にその姿を現し始めたのです。それはちょうど新しい 21 世紀の幕開けと同じ年のことでした。

森の木々

2000 年 4 月、アウラ学びの森は開校されました。教師主導の教育の空間ではなく、学習者主体の学びの空間として、それは新しい学びのスタイルを模索するための空間としてスタートしたのです。

今、私の前には、30 名ほどの中高生たちが、それぞれ自分の学習課題に向きあっています。教室には、ゆったりしたクラシック音楽が流れ、その中心にはアウラのシンボルツリーである 3mほどの高さのヘゴシダの木が大きな葉を広げています。教室には、このヘゴシダのほかにも大小さまざまな観葉植物が置かれており、生徒たちは、この木々に囲まれながら学んでいます。壁一面のライブラリーには、生徒たちが学習に使う問題集や参考書や教育学、社会学、心理学、哲学、歴史学、文学･･･の入門書から専門書に至るまでの本が並べられています。そして塾長である私の机は、教室の隅にあって全体が見渡せるようになっています。L 字型の大きな机の周りは、ほとんど本で埋め尽くされ、本に囲まれて座るような格好になっています。今、教室には、3 名のスタッフが生徒たちの学習のフォローに当たっています。ここでは、学習者が常に主人公であり、スタッフたちがそれをサポートしていくという構造になっています。

強制された集中ではない、自然と集中に向う雰囲気が教室中に満たされています。私は、時々自分の席を立って、生徒たちに声をかけます。

「どうですか、最近？」
「まあまあ、やってます」
「まあまあって、どういうこと？」
「英語は、自信あるんですけど、数学がちょっと･･･」
「数学の何がわからないの？」
「二次関数の応用が･･･」
「もう少し、具体的にどんな応用？」
「このタイプと、このタイプかな」
「わかった、じゃあ、考え方を説明するね」

私は、生徒にこんな風に関わっていきます。生徒の表情や雰囲気を自分の席から観察しては、気になる生徒の傍にやってきては、こんな風に話しかけにいきます。

ここには、生徒たちの数だけ木があります。大きい木もあれば、まだ幼い木もあります。木は、それぞれに葉を大きく広げて大地に根を張りながら生きていきます。雨の日も晴れの日も毎日を淡々と生きています。そんな木がたくさん集まって、ひとつの森が生まれます。アウラは、そんなイメージを象徴とした学び場なのです。

ここアウラでは、学年も能力も違う子どもたちが、それぞれのカリキュラムで学んでいます。学校は一つのカリキュラムで全員が学びますが、ここでは学習者である子どもたちの数だけカリキュラムがあるわけです。それぞれがそれぞれのペースで学んでいくのですが、決してバラバラに学ぶのではなく互いに影響を及ぼしあいながら共同的に学ぶ、そんな風景がここにはあるのです。

新参者

「新参者」というコトバをＪ.レイブたちは〈正統的周辺参加論〉 の中でよく使用します。実践共同体への参加の過程を「学び」と位置づけたこの理論においては、まだ何もわからず技術も持ち得ない新前の見習い＝新参者が、この共同体の周辺部から少しずつ参加し次第にその中心的な存在へとなっていく様子が見事に描かれていきます。

アウラ学びの森は、受動的な学びの習慣を持つ学習者を、能動的な学びを実践する自律的学習者へと次第に導いていく実践共同体ということができるかもしれません。ここでは、子どもたちの学びのモードが変わっていくことが、その目的となります。そしてそのために私たちは、様々な教科的な学習課題をその媒体として活用していくのです。何も特別なものをその媒体に利用するのではなく、子どもたちの日常の学校世界と共有されるべきものを利用することで、今度は彼らの日常の世界そのものも、自律的なものへと変容していく可能性を見出すことができるわけです。

中学２年のＡ子は、学習に対してすっかり自信を失っていました。「どうせやっても、できっこない」と、学習に取り組む前から〈できない〉ことをイメージしていました。A 子の学校での成績は、5 段階評定でほとんどが「2」のいわゆる低学力の生徒でした。

そんなＡ子でしたが、彼女はアウラで学び始めて、めきめきと力をつけていきました。入学して３ヶ月でほとんどの教科の成績が平均以上になっていきます。しかも、アウラで学習している教科は英語と数学だけであったのですが、それ以外の教科の成績も軒並み平均以上となっていきました。

A 子がこのような変容を遂げた最大の要因は、彼女自身が、地道にコツコツと学んだからです。誰かに教えられるのではなく、自分で自律的に学習をし続けたからです。ここで重要なことは、〈自律的〉であるということです。自律的に学ぶということは、自分で調べるということであり、自分で考えるということであり、自分であれこれと検討を重ねるということです。そしてこの検討を重ねるという過程が、自分でコンテクストを構築することにつながり、〈本格的な学びの世界〉への入り口に繋がっていくのです。

初回の面談で「勉強は苦手、やってもできないし嫌いや」というＡ子に、私は一旦スラスラとできるところまで戻って、もう一度学び直しをすることを提案しました。

「A 子ちゃんは、勉強が嫌いやから、やりたくないって思っているでしょう。でも、やらないから、ますます嫌いになるわけで、嫌いになったらもっとやらない。これって全くの悪循環でしょう。大切なことは、まずこの悪循環を断ち切ること。まず自分で学習をやって“私も、やればできる”って感覚を手に入れないと。そしてこの感覚さえ手に入れられれば、“私って賢いかも”って思えるようにな

ってくる。そしたら、ますます“やろうって”気持ちになってきて、どんどんプラスの循環に変っていく」

私の説明にA子は、少しは納得してくれた様子でした。しかしそれでもまだ不安そうにしているA子に向って、さらにこう付け加えました。

「心配しなくても大丈夫、まずはA子ちゃんがスラスラ分かることからはじめよう。学年を戻ったっていい。アウラでは、みんなこんな風に勉強するんだ。だから同じ学年でも、人によってやっているところが違う。みんな自分自身の課題に自分で向きあっている。大切なことは、自分の力で自分の課題を乗り越えること。それしかないんや。」

A子は、少し安心したように私に向って、微笑んでくれました。

自律的な学習を成立させるためには、学習者である彼らの学習モードを受動的なものから能動的なものへと変換しなければなりません。この変換のダイナミズムにとって、アウラに存在する〈学習磁場〉は、大変有効な役割を担います。〈学習磁場〉とは、空間に漂う〈意味〉のことです。そしてこの〈意味〉は、アウラの教室のたたずまいとしての〈物理的環境〉とアウラに学ぶ学習者（住人たち）から発信される精神的環境から構成されています。アウラにおいては、自律的学習に向う学習磁場が、その空間に〈意味〉として埋め込まれていると表現することができます。

A子は初日から、大変集中して学習に向きあいました。アウラの教室には、常にクラシック音楽が流れており、様々な学年の学習者たちは、集中して各々の学習課題に向き合っています。そんな環境に巻き込まれるように、彼女も1日3時間、休憩もなく学び続けました。自分で解説を読み、自分で考え、自分で答え合わせをします。分からないことは、いつでも先生に質問をしていいことになっています。そして1つの単元を学び終えると、フィードバック用のテストに取り組み、その結果を先生と共有して、次の学習計画を立案していくのです。

A子の学習終了後､私はA子に尋ねました。

「どうやった、しんどかった？」

「ううん、時間が早かった。みんなもやってるし、勉強しやすかった」

A子は、実にすっきりした顔で答えました。

「集中して取り組みと時間は、早く過ぎていく。学校で授業を受けている時、何回時計を見ても時間がなかなか進まない。これを〈主観的時間〉って言うんだ。A子ちゃんが、“今日の時間は早かった”って言ったけれど、それはA子ちゃんがそれだけ集中していたという証なんだ。これを続けることが大切なんだ。」

私は、そんな言葉をA子に返しました。

それから、A子は、メキメキと力をつけていきました。中学1年の内容の再学習から始めて、約1ヶ月で中学2年の内容に入ることができました。「やれば、私もできる」という自信を彼女は獲得したようです。そしてその自信と共に自律的な学習の基本的姿勢〈学習リテラシー〉を手に入れました。さらに毎日毎日、淡々と学び続けること（学びの生活）は、この〈学習リテラシー〉そのものを〈技化〉し、特定の教科で身につけた学びの〈技〉を他の教科においても活用できるように普遍化できるのです。

自律的な学びには、2種類の異なる対話が常にパラレルに成立しているように思い

ます。その一つは、自分の外側の世界にある未知の知識に向けられ、もう一つは、自分自身の内側にある既有知識へと向けられます。つまり自律的な学びが成立する過程においては、絶えず未知の知識と既有知識との間にインタラクションが生じ、結果的に既有知識が何らかの形で変容していくのです。ところが受動的な学びの世界では、なかなかこの既有知識が書き換えられていきません。一旦、未知の知識は、記憶として蓄えられるのですが、テストなどの機能的な目的が過ぎ去ってしまえば、すっかり忘れられてしまうことが多くなります。実はここのところに、自律的な学びと受動的な学びの本質的な違いがあるのかもしれません。

アウラの森では、初めてその門をたたいた子どもには、A子のよう、一旦スラスラとできる単元まで戻って、その自律的な学び方を練習してもらうようにしています。この学びの型は、学習リテラシー（Learning Literacy）と呼ばれ、教科を超えて活用できるものです。特に現代のように消費生活が蔓延した世界の中で生まれ育った子どもたちにとっては、地道に何かを読んだり、調べたり、考えたり、確かめたりするといった基本的な学びの技法が、とてもないがしろにされているように思います。だから、自律的な学びを手に入れるためには一旦それらを取り戻すための過程が必要となっていくわけです。

ところが、そう簡単には学習リテラシーが手に入るわけではありません。一旦は面倒なことを引き受けないと、それを手に入れることができないからです。そこにはいくらかのハードルがあるのです。だからこのハードルを越えさせるための仕掛けが必要になってきます。それがこの空間に埋め込まれた〈学習磁場〉ということになるのです。

私は、アウラの学びの空間のイメージとして、日本のお茶室を思い浮かべていました。茶の席に招かれると、私たちは、まず露地と呼ばれる通り庭を通って茶室へと歩いていきます。水打ちされた踏み石を歩きながら、私たちの生活する世界とどこか趣の違う世界へと導かれていく感覚を味わいます。そして小さなにじり口と呼ばれる茶室への入り口を通って、部屋に入るとそこはもう別世界が広がります。少しばかりの緊張感を伴いながら、素人同然の私は先客たちの作法を横目で見ながら、あとはそれを見おう見真似で繰り返すことになるわけです。独特の環境が、新たな技を手に入れるための条件を提供してくれる瞬間です。

私がアウラ学びの森を作る際に、環境ということにどこまでもこだわりを持ち続けたのは、そんなところにそのきっかけがあったように思います。受動的な消費生活の世界を生きる新参者たちが、能動的で自律的な学びの世界を手に入れていく、そのモードを切り替えていくための仕掛けを、私は環境の中に求めていたのです。

汽水領域の中で

異なる二つの世界のインターフェイスをどう構成するのか？

その境界面に、どんな仕掛けを設定するかで、その面がぶつかり合いの場になるのか、あるいは変容が生じる場となるのかが決まってくると私は考えていました。

モノと情報にあふれた現代社会を生きる私たちは、どうしてもその主体性を脅かされます。私たちは自分の主体的な意志で商品を購入していると信じてはいるものの、実際には買わずにはいれない状況に追い込まれているのかもしれないというわけです。フランス人の社会学者、Ｊ.ボードリヤールは、このことを「消費主体の喪失」と名付け、イギリス人の社会学者Ａ.ギデンズは、このような社会を「ポストモダニティ」と呼びました。そしてそんな社会に生きる子どもたちが、いつしか受動的な学習者となってしまうのはある意味で当然の流れなのかもしれないわけです。

だから私たちは、一方でその必然性を前提としながらも、一方で受動から能動へと学習者である子どもたちに変容を求めなければならないのです。私が「異なる二つの世界のインターフェイス」と表現するのは、まさにこの二つの流れのことなのです。そしてこのことは、私にとってアウラの森を立ち上げる時の大きなテーマでもあったのです。そのインターフェイスにどのような仕掛けを用意するのか、ここがとても大切なことだと考えていたのです。

アウラの教室では、小学校２年生から、高校３年生までが共に学んでいます。数学を学習している生徒もいれば、英語や国語を学習している生徒もいます。生徒の理解度にも大きな差があります。勉強が得意な生徒もいれば、勉強が嫌いな生徒もいるのです。そんな様々な状況の生徒たちが、一同に会して深い集中に向かう学びを展開していく場、それがアウラなのです。

今年、小学校４年生になるＳ子。この子は私が最も手を焼いた生徒の一人でした。一人っ子でかなり親から甘やかされて育ったＳ子は、わがままそのものでした。嫌なものは、絶対やらない。好きなことも最初のうちだけ、少しでも難しくなるともうやらない。本当にじゃじゃ馬のような子どもでした。彼女がアウラにやってきた初日、私は落書きでいっぱいになった彼女の筆箱を見つめていました。

「Ｓちゃん、この筆箱どうしたん？」

「学校の授業中に書いたん」

高級そうな真っ赤な筆箱の内側は、黒のマジックで落書きというより、殴り書きされたような状態でした。色とりどりのキャラクターの鉛筆と、その殴り書きは実に不釣り合いなものでした。そして、そのアンバランスさは、そのまま彼女の心を表現しているようでした。

「もう、わからん。やりたくない」

最初、彼女はよく学習しながらそう言っていました。そして自分の学習をほっぽり出しては、他の生徒のところに行っておしゃべりを始めます。

「Ｓちゃん、やりたくないんやったら、もうやらなくてもいい。先生は無理にＳちゃんに勉強させようなんて、これっぽっちも思ってない。やりたくなかったら、やらなかったらどうですか？」

私が、そういうと彼女は怒られていると思うのか、しばらくは自分の学習に向き合います。でもそれも長続きすることはありません。またすぐに投げやりな態度に出るのです。

私が生徒に、「やりたくなかったら、もうやらなくてもいい」というのは、特段、怒っているわけではありません。何かの脅しでもありません。本当にそう思っているのです。「学習は、やりたくないのにやる必要がない」と心からそう思っているのです。

ある時、Ｓ子が私のところに自分の学習したプリントを持ってきました。自分のやりたいところだけ、やったプリント、しかも殴り書きのような字。決して他人に見てもらおうという思いのあるようなものではありません。

「Ｓちゃん、先生これ見ないよ。あまりにも適当なプリントですから…。これじゃ、Ｓちゃんの見てほしいという気持ちが伝わってこない」

そう言うと、私はＳ子にプリントを突き返します。

「なあなあ塾長、知ってる？あんな、今日な…」

すると今度は、Ｓ子がしきりに私の関心を引こうとします。

「まずやるべきことをやったらどうですか？ それから、Ｓちゃんの話を聞きます」

私は、Ｓ子の話を取りあいません。

「ここは、学校じゃないから、ここで勉強しようと思う人だけが来ればいい。Ｓちゃんが本当にしたくないんだったら、お母さんに話して、やめられるように言ってあげるから…」

「やりたくないわけじゃない…」

「だったら、もう少ししっかりやればどうですか？やってるような、やってないような、いつもそんな感じがします」

私は、Ｓ子に何度もこんな話をしました。実は、私が生徒に対してここまでの話をすることはほとんどないのですが、彼女のあまりのわがままさに、私はある種の危機感を感じていたのかもしれません。学習以前の〈しつけ〉をしないといけないと思っていたのです。私の中に、〈親〉としての感覚が芽生えてきたのかもしれません。でも人懐っこいＳ子は、私に何を言われても、その度に私にすり寄ってきました。

そんなＳ子とのやり取りは、1 年近く続きました。しかし、彼女が 4 年生になる直前から、その様子が一変します。彼女の書く字が丁寧になり、プリントをきちっと整理するようになり、学習に集中する時間が長くなっていきました。

「Ｓちゃん、いい子になってきたね。Ｋ先生も、Ｓ先生もそう言ってたよ」

私がそう言うと、Ｓ子は嬉しそうに笑っていました。そしてそれから、2ヶ月、Ｓ子は、今でもいい子のまま、日々アウラで学習を続けています。

Ｓ子の変化は大変大きなものでした。きっと、外部の人から見ると、それは別人のように映るかもしれません。どうしてＳ子は、こんな風に変わったのでしょう？ その変わるきっかけは何だったのでしょう？ その問いに対して私は明確な答えを持っていません。ただ、Ｓ子が変わり始めたのと時を同じくして、これまた一人っ子で、わからない問題に出会うとすぐに拗ねてしまう上級生のＴ君、いつも落ち着いて学習に取り組めなかったＵ君も、変わり始めたのです。ここにアウラのおもしろさがあると私は思っています。変容が、ここではひとりでに伝染していくのです。

アウラの環境は、〈汽水領域〉にたとえられます。海水と真水が混じりあう自然界の汽水領域、そこは、常に変化が生じていく領域です。異質なものが混じりあうことで、様々状況が生まれ、新しい環境がどんどん構成されていく領域。アウラはきっとそんな要素を備えているんだと思います。直接的な意図で、子どもたちが変わっていくのではなく、日々の変化がある一定量に達した時、そこに変化が生じます。そしてその変化は、場そのもの

をも変えていき、そこに生きているすべてのものに何らかの影響を与えていくのかもしれません。

A.ギデンズは、ポストモダニティの特徴として、不確実性、あるいは不確定性ということをあげています。つまりポストモダニティは、何が答えなのかそれが固定的にとらえられない社会だというのです。「答えがひとつに決められない」ということは言い方を変えれば、答えが絶えず更新され続けてしまうということです。

このことは様々な領域に課題を投げかけます。決して学校教育の世界もその例外ではありません。本来学校教育というものは、ある答えを前提としてデザインされたシステムです。古くは富国強兵政策の一環として、さらには高度経済成長の担い手として、教育は理想の国民を育てるシステムとして長い間機能してきました。つまり学校教育の世界における「ある答え」とは、理想の子ども像であったわけです。ところが、現代では、その理想の子ども像が本当に理想を表現しているのかどうかがわからなくなってしまったのです。さらには、学校の示すように学んでいけば、本当にそんな理想の生き方が手に入るのだろうかという問いさえもが生じてきたのです。子どもも親も、そして教師さえも、その答えがわからない。そんな状況に現代の学校教育は直面しているように思うのです。

答えが更新され続けるような状況においては、そのシステムそのものをも更新するようなメタ・システムを想定する必要がでてきます。システムを固定化するのではなく、システムそのものに柔軟性と可動性を持たせるような〈汽水領域〉が必要となるのです。私たちは、この汽水領域を、アウラの森の中に設定することで、子どもたちの変容を促し、時には森のシステムそのものをも検証しながら更新を続ける仕掛けを作ってきたわけです。

一つのシステムを固守しながら多様な学習者の状況をその中に集約させようとする教育と多様な学習者の状況を一旦受け入れることで、システムそのものをも更新し続けようとする学びの世界の違いがそこにあるように思いました。

先生ってケチやなあ

小学４年生のＹ君は、わからない問題や間違えた問題に出くわすと、すぐにすねてしまいます。ほとんど声にもならないような、奇声を上げるのです。一人っ子で、かなり甘やかされて育ったＹ君は、自分が困った状況に陥ると、〈すねる〉という方法を使って、周りの人を動かそうとします。Ｙ 君の行動パターンは極めてシンプルで、そのパターンをより適切なものに変換していくことが、アウラにおける彼への指導目標となりました。

「もう、わからへんし、もう、できひん、アーアー･･･」

今日もＹ君は算数の授業ですねています。しかしＹ君の奇声に、私は全く動じません。私の指示は、一貫していて、自分のやった問題をもう一回見直して、それを参考にわからない問題を考えるというものです。

「そんなん、いうても、できひんし、アーアー･･･」

Ｙ 君は、さらに〈すねる〉レベルを上げてきます。

すると、私とY君とのやりとりがおもしろいのか、同級生のU君がそばにやってきました。

「Y君な、できないとすぐに”わからへんし、できひんし、アーアー‥‥”といってすねるんや」

私はU君に向ってY君のマネをしました。

「先生、似てる！そっくりや」

U君は、笑いながらそういいました。Y君も横で苦笑いをしています。

それから、私はY君がすねそうになると、先回りして彼の真似をするようにしました。いちいちあの奇声のような声をあげていったのです。もちろん、手取り足取り教えるようなことはしません。あくまでY君の自律的な学びを促していきます。そして、こんなやりとりを数回続けると、Y君は次第にすねることがなくなっていきました。すねることをしなくても、自分で問題解決できるようになっていったのです。

ある日、私はY君に家や学校でも〈すねる〉ことをしているのかということを尋ねたことがあります。すると家では宿題がわからない時によくすねているらしく、学校でも時々はすねていることがわかりました。

「先生は、ケチや。なかなか教えてくれへん」

「そやなあ、確かにケチかも知れへん。でもな、そやからY君は自分で問題が解けるようになったやろ。かしこくなってきたやろ」

「そうやなあ。知らん間にできるようになってきたわ」

「そのことが大事や。すねんでも、できるようになることがわかったことが大事なんや」

今ではY君とそんな会話ができるようになっています。

甘やかされて育った子どもの中には、Y君のように幼稚な行動を使いながら周囲の人間を無意識に操っていく子どもが結構います。たぶん家庭内では、まだまだ頼りないY君の行動に対してついつい口を出してしまうお母さんと、そのお母さんに依存しながら自分の思うように操ろうとするY君の間にある種のシステムが形成され、同じような行動が繰り返されてきたのでしょう。Y君は〈すねる〉という行動が、有効に機能することを学習してきたのです。だから、もうそれが通用しないということをあらためて学習してもらう必要があったのです。また、甘やかされた子どもは、自信が持てません。周囲の人間を操ることで結局は問題解決してもらうことが多いですから、自分で問題解決できるという確信が持てないのです。だから同時に、自分でできるんだという自信をいかに育てるかということも大切な課題となっていくのです。私は、そのような彼自身の抱えた課題を理解しながら、算数という教科を通してこのシステムそのものを変換していったのです。

子どもたちの学習上の理解の課題は、〈認知レベル〉の課題として理解できます。しかしこの〈認知レベル〉の課題は、同時に彼の生活における〈行動レベル〉の課題の上に成り立っています。そしてこの二つのレベルの課題は、決して独立して存在しているのではなく、密接に関係しているのです。だから、私は教科の指導を通して、Y君の生活の中に介入することができるのです。

Y君の〈すねる〉という行動に対して、私

はミラーリングを使って制約を加えました。この時、彼にとって慣れ親しんだ行動に制約がかかったので、当然不安が生じます。私は、そこでＵ君を巻き込む形で、まるでゲームのように制約をかけ続けたのです。そして私の方針に一貫性があることを示しながら、その中で彼が自分で問題解決できた事実に大きな評価を与えたのです。もちろん自信を得てもらうことが目的です。こうして、新たなシステムを強化していったのです。

学びというのは、学習者自身のシステムが更新されることと表現できるのかもしれません。それはＹ君のエピソードにあるように、理解という認知のレベルにおける変容を促すと同時に生活場面における行動のレベルにおける変容をも促します。ここで大事なことは、アウラの森の汽水領域でそれぞれの学習者の変容が互いに影響しあい、それが学習者自身の内部の変容にまでつながっていこうとする事実です。つまり、森のシステム、そこにかかわる学習者たち、そしてそれぞれの学習者個人の内部というそれぞれの階層において、同時に多層的な変容が生じていくというわけです。アウラが提供する仕掛けの中では、いつも多層的で立体的な変容が生じているのです。

塾長がこわい？

塾長である私は、アウラの森の番人としていつもそこにかかわっているように思います。常に動きがあり、常に更新され続ける森の磁場を、誰かがじっと見届けないといけないと私は考えているからです。気を許すと子どもたちが運んでくる日常世界によって、すぐにその磁場が消費世界の一部となっていくように感じています。

子どもたちだけではありません。親たちもそして私たち自身も与えられるものを、ただ無自覚に消費していくだけの消費世界のモードをすでに持ってしまっているのですから、気を許すと平気でアウラの磁場をかき乱してしまう張本人になってしまうのですから、そこには磁場の管理者としての番人がいるのです。番人は、そこにかかわる人たちと向き合いながら、いつもその場に横たわる磁場を見つめているのです。

私のことを「こわい」という生徒は、案外たくさんいるのかもしれません。別に普段から叱りつけているわけでもなく、威圧的な態度で接しているのではないのですが、私には彼らに「こわい」と感じさせてしまう瞬間があるようです。

私は、中１のＫちゃんと向き合っていました。その日は、一度学習した単元をしっかり習得できているかのチェックをスタッフにしてもらい。その直しをしているＫちゃんのそばに私は座って、彼女と話をしていました。

「どうやった？できたの？」

「全然…」

「これみんな、ゼミでも学習してきた内容やろ。ゼミの時は、みんなできていたやん」

「時間がたつと、忘れてしまう」

「それは、困ったなあ。やってもやっても、次から次へと忘れていく、それじゃ、結局何にも残らないやん。結果的に何にもやってないのと同じになってしまう。このことをＫちゃんは、何とかしないとあかんのと違う？」

「そうだけど、忘れるもんは、忘れるんやもん…」

「栓をしてないお風呂に、お湯をはってい

る時のように、このままじゃ、いつまでたってもお湯がたまらん。やりっぱなしの状態や。始末が悪い。どうすればいいと思う？」

「さあ…、わからん」

ここまで話して、私はKちゃんが自分の置かれている現状に、しっかり向き合おうとしていないこと。嫌なことには向き合いたくない、できれば見ないでおきたいという思いを持っていることを感じていました。学習以前の、彼女の行動パターンがそこに見えてきます。この部分について、私はさらに突っ込んで話をします。

「ひょっとすると始末が悪いのは、勉強だけじゃないかもしれない。私はKちゃんのプライベートを知らないけど、私生活でも始末が悪い、いい加減なのかもしれないと思う。例えば、出したものをしまわないとか、自分の部屋を片づけられないとか、人間関係でも最初は調子がいいが一旦トラブルになるといい加減な対応をしてしまうとか…」

Kちゃんは、少し涙目になっていました。

「塾長、こわいわ」

「だって見えてしまうもん。Kちゃんが勉強しているところから、いろんなものまで見えてしまう…」

私はよくこんな風に、タイミングを見計らって私の見えている世界を生徒たちに直接伝えるということをします。私の中では、学習という活動を通して、彼らが自分自身に向き合っていくことを期待するからです。そしてそれは、私自身が当事者として彼らに直接かかわっているからできることかもしれません。

「Kちゃんは、まず、今の状態に自覚的になるべきや。このままであと 1 年過ごして 3 年生になれば、かなり大変になる。“何とかしないとやばい”という気持ちを持ってほしい。それと一旦理解したものを忘れないようにするためには、復習しかない。説明を聞いても、わかったような気になってしまうだけで、本当はわかってないかもしれない。それを確実にするためには、自分でもう一度考えてみるか、あるいはもう一度やって見るしかない。Kちゃん、アウラにもう１日来たらどう？」

「えーっ…」

「それがいややったら、自分でやるしかない。家でやるしかない。別にアウラで学ばなくてもいい。ただ、このまま放置したら、Kちゃんは、同じパターンを繰り返すだけ。とにかくきちっと始末できるように、何か新しい行動が必要なんだ。そこのところをKちゃん自身が考えないといかん」

「はい…」

アウラでの私の大きな役割は、このように生徒一人一人と向き合うことかもしれません。生徒と向き合うためには、その生徒がよく見えていないといけません。そう言った意味では、アウラは生徒がよく見える環境なのかもしれません。学校と違って、アウラは一斉授業をそのベースにおいていません。自律的に自学自習をおこなうことがアウラ流なのです。このような環境の中においては、その生徒本来の学習スタイルが表現されていきます。そして、この学習スタイルの中に、その生徒の行動の癖（パターン）が見え隠れするのです。私は、まずこの癖を見つめます。そしてこの癖が、その生徒が抱えている学習上の課題に反映されているのです。さらにこの癖は、生徒の家族関係や友達関係などの関係性の中から形成されてきたものですから、そこからその関係性そのものを見つめていくこともできるわけです。このように私は、生徒の学習を

入り口にして、生徒の関わる世界全体を見ているのかもしれません。

1. 森の仲間たち

アウラ学びの森には、塾長である私以外に３人の常勤講師、そして７人の学生の教務補助が子どもたちとかかわっています。しかし「講師」や「教務補助」という役割を一方で持ちながら、その一方で「学習者」としてもかかわっているところに、その特徴があるのかもしれません。先にも述べたように、アウラは自律的な学びを展開するという共通した意図でつながりあった共同的な世界なのです。だから私たち自身も教師である前に自律的な学習者であることが要求されるのです。

ここに取り上げるいくつかのエピソードには、アウラの教師たちが子どもたちを指導しながらも、同時に自らを省察的に振り返り学習者へとなっていく様子が表現されています。

場を見ることについて

アウラのスタッフにどう学んでもらうのか。これもまた私にとっては大事な仕事の一つです。アウラ自体が〈学びの実践共同体〉としての意味を持つ限り、このことは外せないことなのです。つまり、スタッフの学びが生徒たちの学びを誘発し、生徒たちの学びがスタッフの学びを刺激して初めて、〈学びの実践共同体〉は、成立するからです。今日は、そんな学びのきっかけとなるスタッフとのやりとりを紹介することにしましょう。

私の眼は、いつも教室の隅っこに座っているＫちゃんを捉えていました。自分のやっている学習の内容を両手で覆い隠すようにその日の彼女は取り組んでいました。私は彼女の様子を、Ｋ先生に尋ねました。

「最近、Ｋちゃんはどう？」

「あの子は、無理です」

私は、そう淡々と答えたK先生のコトバに憤りを感じていました。彼はＫちゃんを自分から切り離してしまっている。簡単に自分の範疇の外側に置き、自分とは関係のない存在にしてしまっていることに強い憤りを感じていたのです。私はその日の夜に、Ｋ先生と話をする機会を持ちました。

「キミは、さっきＫちゃんについて、“あの子は無理です”と言ったでしょ。それってどういうことですか？」

「いや…、コミュニケーションがうまくとれなくて…」

「そのことは、最初から説明しておいたはずです。彼女は、アスペルガーであり、コミュニケーションに対してもいろんな特性があるということを…。もし、キミがどうしても難しいのであれば、そのことを伝える必要があるんじゃないか。それを“無理です”って勝手に判断を下すキミはいったい何様なんですか？」

「はい…、すいませんでした」

「謝るかどうかの問題じゃなくて、キミがそのことを理解できるかどうかの問題なんです。キミは日報の中で何度か“もっと全体の場をしっかり見れるように”という意味のようなことを書いてきたよね」

「はい」

「でも、今年２年目なのに、いつまでたっても見れない。全体を見れるということは、

キミのこれからにおいても、とても大事な意味を持つ。全体を見ることができないと、部下を管理できないからだ。この能力が育たないと、いつまでたってもキミは組織の中のコマの一つとして働かないといけない。だって、場を任せることができないので、管理職に昇進させられない。だから、ここで全体の場を見るということを経験し、その能力を磨いていってもらいたい。ただ、キミがやっているように、平気で自分の苦手な人間を切ってしまうようでは、いつまでたっても自分の得意な人間としか関われない。つまりキミは、自分にとって都合のいい相手とは仲良くやれるが、そうでない人間とはうまくやれない。ということは、キミの好みによって場を勝手に切り取ってしまってるんだ。そんな人間には、いつまでたっても場を見ることができない」

K先生は、神妙な表情で私の話を聞いていました。

「全体を見る、場を見るということは、そこにいるいろんな人間をありのまま一旦受け入れるということです。この子は、どういう動き方をし、この子はどういう感じ方をするのか。あるいは、この子とこの子の関係はどうなっているとか、自分との関係はどうなのかとか…、いろんな情報をまずありのまま受け止めないと、場が見えてこない。キミは、そこができない。自分勝手に状況を切り取ってしまう。だから、まず教師であることをもっと自覚してほしい。いつまでも生徒じゃない。好き勝手に行動するんでは、教師として大変情けない」

K先生は、2年前までアウラの生徒でした。つまり私の教え子だったわけです。だからこその甘えもあるのかもしれませんし。ひとりっ子として甘やかされて育てられた彼の生育環境もあるのかもしれません。まだまだ、視野が自己中心的なのです。

「さっき、英語科のT先生がずいぶん場を見れるようになってきたって言ったでしょ。場を見れるようになれば、存在感が出てくる。そして存在感が出てくれば、なお一層、場に対する影響力がでてくる。これが循環するんです。でも、場を見れるようになるためには、自己中心的ではいけない。自己中心的であれば、場を自分勝手に切り取ってしまう。そうじゃなくて、相手に自分を合わせていく必要がある。そのためには、自分を制する自制心や自己管理能力が問われてくる。そしてそれらを育てるためには、自分自身に対する厳しさが要求される。例えば日報、T先生は必ず毎回欠かさず書いてくる。キミは毎回書けない。書かないといけないにもかかわらず、書いてこない。ここにも大きな差がある。自分自身を管理できない教師は場も見れないし、生徒個人に対してもいったい何を語れるというんだろう…」

私の話は、そこで終わりました。最終的には、自分の行動をもう一度振り返ってほしいという自省的な態度を私は要求しました。教師は、場に対して自分自身を開くことによって、自分自身を鍛えることができるのです。私は、今まで出会った多くの子どもたちによって鍛えられたんだと思います。K先生には、せめてその感覚を掴んでほしいのです。

約束の時間

アウラの森では、毎日さまざまなことが起こります。もちろん問題も次々と生じるわけです。問題は、いつも何かを振り返れる機会だと私は考えています。問題が生じないと、ただ日常が通り過ぎるだけのよう

にも思います。今回は、あるスタッフとの間に起った問題を取り上げてみたいと思います。

Y先生が、M子の数学指導の初日に遅刻をしてきました。急に決まった授業なのですが、私は彼にしっかり話しておかないと、という気持ちで接していました。

「どうして遅くなったの？」
「いつもと時間帯が違うんで、バスの本数が少なくて…」
「そんなの、世間じゃ通用するわけないでしょう？」
「はい、すみません…」

その日私は、約束の時間に15分遅刻してきたY先生にそんなことを話していました。

「昨日電話で伝えたでしょ、M子ちゃんは大学入試の数学について、勝負をかけたいって思ってることを…。その話を理解した？」
「はい…」
「私が、言いたいのは、Y君がM子ちゃんの気持ちを理解したかということなんだ。彼女の思い、彼女の決意、そんなものをしっかり受け止めたかということなんだ」
「……」
「それができていれば、今日遅れることはなかった。初日に遅れるってことは、彼女の思いを受け取れなかったということなんだ。いきなり遅刻してやってきた自分をM子ちゃんがどう思うのか、どんな風に感じ取るのか、そんな相手の思いをもっと考えられるようにならないと、いつまでも目の前のことしか処理できない」
「はい…」
「これ、今日届いた直筆のハガキ、この人、関電の取締役なんや。4月末にある会合であって、名刺交換しただけなんやけど、ちゃんとこうしてハガキを送ってくる。私より歳も社会地位もずっと上の人だけど、すごいなあと思う。本当は私の方から出さないといけないのに…。世間で、本当にすごい人はふんぞり返って生きてはいない。そういう人は、ちゃんとまわりの人のことを考えて生きている。それが懐の深さや。自分がこうしたい、ああしたいって考えるばかりじゃダメなんや。そのことが、相手の視野の中でどんな風に映っているのか、どんな風に感じられているのか、いつもそれを考えないと…」
「わかりました」

Y先生に何かが伝わったかもしれないと感じました。大変知的な能力が高いだけに、私はそれに見合うだけの彼の人間的な能力を引き出したいと考えているのです。どうして目の前のことしか見えないのか、どうしてある瞬間に周りをシャットアウトしてしまうのか、どうして数学や物理の世界を他の世界と切り離して考えてしまうのか、私は彼のそんな課題を、〈他者性〉というコトバをとおして考えるようになっていきました。

Y先生は、彼の父親を反面教師にしながら育ってきました。いや自分の育った家庭そのものを否定し、自分はそんな家庭だけは持ちたくないと考えてきたのです。そしてそんな家庭を作った最大の原因は、父親にあると考えてきたのです。Y先生は、自分は父親から父親らしいことを一度もしてもらったことがないといいます。仕事はしていたものの、家にお金を入れることもままならず、かといって離婚に応じることもなく、暮らしていたそうです。「あいつは、のたれ死んだ方がいい」これが、かれの父親像でした。そして去年、

彼の家族は離散します。母親が娘と一緒に家を出たのをきっかけに、Y先生は大学のそばに部屋を借りて、ひとり暮らしを始めました。学費、生活費、すべての費用を彼は一切自分で賄いながら学生生活を送っているのです。

そんなY先生の育ってきた過程を振り返った時、そこに彼の周りの世界を遮断して自分の世界に没頭していくライフスタイルが浮かび上がってきます。見たくないものを見ないように彼は生きてきたのかもしれません。

しかし、アウラに来て私との出会いの中で、彼は自分がいかにまわりの世界が見えていないかを突き付けられることになりました。いい仕事をするためには、目の前のことに集中しながらも、周りの状況を的確に判断して、そのまわりの状況と自分の目の前のこととの関係性を常に考えないといけないことを、彼は私から要求されていくのです。そんな中、彼は、自分の生育過程と、今、目の前に突きつけられている自分自身の課題との関連性に少しずつ気づいていくのです。そして、私という他者、他者のまなざしを受け入れることで、他者性の大切さを実感し、少しずつ周りの世界に開かれていっているのかもしれません。

話が伝わらない

アウラの森では、多様な子どもたちがいて、多様な学びが展開されています。つまり、ここでは均質性よりも多様性が尊重されているわけです。しかし、その多様性を、バラバラに存在させては混乱が生じます。森の磁場が壊れるのです。だからその多様性を担保しながら、ある一定の調和をどう構成するのかが要求されるのです。そのための基本的なスキルとして必要なこと、それが相手とコミュニケーションモードを同調させる「チューニング」であると私は考えています。これができないとなかなか話が伝わらないという状況になってしまうのです。

大学１回生になるK君は、将来、公務員になりたいと言います。大学で来年から「公務員試験対策講座」を受講し、その対策にあてるんだと嬉しそうに話していました。彼は、アウラの卒業生で、現在、教務補助として後輩たちの指導に当たってもらっています。K君は、国公立大学受験を目指していたのですが、第一志望の受験に失敗し、滑り止めとして受験した現在の私立大学に合格したのです。

「公務員試験の出題領域は、センターより簡単なので、たぶん楽勝」

K君は、今時の大学生かもしれません。ただ私には、どうも納得できないことがあります。それは大学に入ってからも、受験勉強と同じモードでK君が学習しようとしていることです。K君は、大学の前期、後期テストにしても、高校の定期テストを受験する時のような感覚で臨んでいるそうです。そして、今回は公務員試験対策。大学も学外から講師を招き、公務員受験のための専門講座を開講し、その受講生は数千人規模になるそうです。私は、そんなK君に話を持ちかけました。

「Kは、公務員になって何をしたいと思ってるの？」

「それは、わかりません。何でもいいんです」

「じゃどうして、公務員を目指すの？」

「それはやっぱり、安定性じゃないですか。

あと、受験勉強もやりやすそうなので…」

いつから大学生が、こんな風になってきたんだろう。私はK君の話を聞けば聞くほど複雑な思いに駆り立てられました。

「今の学生は、とにかくまじめ。一昔前に比べると、断然出席率がいい。だけども、授業中の発言も少ないし、大変おとなしい」

こんな話を私は大学で、よく耳にします。

「公務員は、とにかく組織が大きい。なかなか自分が考えていることを実現するのが難しい世界かもしれない。僕は今、府の二つのプロジェクトにかかわっているけれど、そのうちの一つは、どんどん革新的にことが進んでいく。でも一方は、なかなかことが前に進んでいかない。両方のプロジェクトとも、大変面白いものなんだけで、その違いは、そこに関わる人なんや。進んでいる方のプロジェクトには、それを引っ張る人間がいる。いろんな抵抗に会っても、それを突破できる人物。彼の存在がとにかく大きい。ただ彼は、府の職員としてはとにかく異端児なんだと思う。実は、キミの大学の先輩でもあるんだけど…」

「そうなんですか…」

ここまで話して、私はKが「じゃあ、ぜひ紹介してください」と言ってくるかな、と思ったのですが、彼のリアクションは、「そうなんですか」の一言。それで終わりです。私だったら、何が何でも紹介してほしいと思うのに、彼はそんな反応をしめさない。

「一回、連れてくるわ。ここで話をしてもらう。府庁はいったいどんな世界で、どんな人間関係がそこにあるのか？また、大学の間にどんな準備をしておけばいいのか、どんな能力が求められるのか？そんな話をぜひ聞いたらいいと思うよ」

「はい、わかりました」

Kは、返事をするのですが、私は何か伝わった感じがしませんでした。彼にとっては、この府の職員の話よりも、どうすれば公務員試験に合格できるのかという受験ノウハウの方が重要なのかもしれません。どうしてそうなのでしょうか？就職は、学校に入学するのとは大きく違います。入ることが目的ではなく、通常定年まで30数年をそこで過ごすわけですから、入ってからが重要に決まっていると思うのです。でもK君にとっては、入ることがすべて、試験に合格することがすべて、そんな気がするのです。いや、すべてではないのかもしれませんが、入ることに優先順位があることは確かなように思いました。

では、なぜ話が伝わらなかったのでしょう？〈話が伝わらない〉ということは、両者の間に共有されるものが少ない、もしくは、ないということです。もちろん私もKも日本人ですから、日本語というコトバは共有しています。つまり、私の話す意味を、彼はコトバとして理解はできているはずです。でも、話が伝わらない。それは、私と彼とのパースペクティブに違いがある。私は、〈就職〉ということを〈仕事の選択〉もしくは〈自己実現の機会〉として捉えていたのに対して、Kは〈受験〉として捉えていたのかもしれません。パースペクティブの違いは、フレームの違いを構成し、同じコトバを共有しても異なったフレームの上の意味として認識されるのです。

では、どうすればいいのでしょう？ポイントは、Kとの共通のフレームをいかに構成するかということではないか。そこができない

と、いつまでたっても話が伝わらない。これは何もKだけのことではない。生徒たちに対しても同じことが言えるのかもしれません。「話が伝わらない」と感じた時、「最近の大学生は…」と相手を否定することは、簡単かもしれない。あるいは「私はもう年だ…」と自分のせいにすることもまた簡単なことです。そうではなく互いに共有できる新しいフレームをいかに構成するか、このことをまず考えないといけないのかもしれません。

複数の層が交差する空間

黒沢映画の中に芥川龍之介の『藪の中』という小説を題材にした『羅生門』という作品があります。この映画の中である殺人が起こるのですが、その事件をめぐって三人の登場人物の回想が紹介されていきます。ところが、その回想はどれももっともらしく三人三様なのです。つまり同じ事実、同じ場面をそれぞれが違ったように解釈して、それぞれのストーリーを展開してしまうわけです。しかもこの 3 つの回想さえも、実は映画の最初に登場した人物の回想の上に乗せられているのです。このように、この『羅生門』という映画では、回想がいくつもの層をなしており、そのそれぞれの階層が同時に進行していくといった高度な技法が用いられているのです。そして後に、このような現実の持つ階層性は「羅生門的現実」と呼ばれるようになったのです。

そしてこの羅生門的現実の持つ階層性は、アウラの森の日常の中にも現れます。このこともまた、教師であると同時に学習者でもあるという役割の二重性によるものなのかもしれません。

H先生は、まだ研修期間中の新前先生です。そんな彼が帰りの車の中で私にこんなことを話してくれました。

「まだ、うまく生徒たちに伝えられてない気がするんです。自分の説明力に歯がゆさがあって…」

H先生は、自分の表現力の無さを振り返りながら話していました。ただ私から見れば、彼の説明における課題は、その表現力というよりは、その構造にあるように思えました。説明がモノローグなのです。自分ですべて説明して、「わかるか？」と尋ねているのです。これではなかなか、相手の反応がうかがえないので、伝わっているのかどうか不安になるのも無理はありません。そこで、私は機会があれば、一度私の説明の仕方を、彼にも見てもらいたいと考えていたのです。そしてたまたま、中学 3 年生の生徒に私が説明する機会がおとずれました。

「2 割は、小数でいくら？」

「0.2」

「じゃあ、2 割引きは？」

「……」

「そしたら、1000 円のものを 2 割引きで買ったら、いくらだと思う？」

「800 円かな」

「そう、正解。それは、1000 円の割合でいったらいくらだと思う？」

「0.8」

「いいぞ、いい感じ。じゃあ 3 割引きだったら？」

「0.7」

「ＯＫ、頭の中でどんな計算やってるの？」

「1-0.3」

「完璧や。そしたら a 割を分数で？」

「a/10」

「ＯＫ、じゃ、a 割引を式で？」

「1-a/10」
「すごいやん」
「わかってきたかも…」

私は、生徒に説明しながら、H先生にも指導のポイントを説明しました。私の指導は、生徒との対話の中で組み立てられることが多いように思います。生徒の返答があって初めて成立する説明なのです。だから、最初から説明の道筋があるわけではありません。生徒の反応によってその道筋は絶えず書き換えられていくのです。私は彼らの反応をいつも見ながら、説明を組み立てているのです。

私は、目の前の生徒と対話を重ねながら、その指導の意味と構造についてH先生と別の文脈で対話を重ねます。そしてこの2つの対話を進行させながら、教室全体に目を配り、気になる生徒に声をかけていきます。さらに、目の前の生徒を指導しながら、全体の場に意識を向けておくことが、アウラの教育では、非常に大切なものになることをH先生に再び伝えるのです。まさに、そこは、複数の層が交差する空間なのです。

2. 森の知

「知」とは何か？

これはとても大きなテーマで、私なんかに定義できるようなものではありません。ただ「学び」ということにこだわり続けてきた私自身にとって、この「知とは何か」というテーマに対する思いが幾度となく更新されてきたことは事実です。だからここでは、そんな私の「知」に対する思いを少し紹介することで、それがアウラの森の実践にどう溶け込んでいるのかを感じていただければと思います。

〈文脈構築能力〉とは

「文脈」＝context、これは私が大事にしているキーワードの一つです。

文脈は目に見えません。本の中にも書かれていないし、相手の話すコトバの中にもありません。この文脈というものは、情報の受け取り手である学習者自身が構築するものなのです。だから、文脈の前提には、能動性が必要となるわけです。主体的な学びが成立しないと、文脈の構築ができないのです。

その日私は、スタッフの一人であるK先生と話し合っていました。K先生は、私立の中学、高校で20年以上指導してきたキャリアを持っており、しかも英語の問題集も執筆されている実力派です。K先生は自分の担当するゼミにおいて、英語の口頭練習を通した単語やセンテンスの習得に取り組んでいます。しかし、私には、そんなK先生のアプローチに対して次のような根本的な問題提起がありました。

英語の習得には、もちろんデータが必要になる。その意味では、英単語や構文を生徒たちは、ある程度の量は手に入れる必要がある。けれども、それがある程度の量以上に手に入れられたとして、果たして自動的にそのデータを自由自在に組み合わせたり、変換したりさせながら文章を読んだり書いたりできるのだろうか？

このことは、英語の基礎データを手に入れること自体を否定するものではありません。データは、英語を使いこなす上で必要不可欠

なものですから、たくさん持っているに越したことはないでしょう。しかし、この分断化されたデータだけをいくら集めてみても、全体を形成することができないのでないかと思うのです。ロボットのパーツをいくらそろえてみても、そのパーツをどのように動かしていくのかというシステムがなければ、ロボットは決して動きません。それと同じことが、英語の習得においても言えると思うのです。

それでもK先生は、今までの指導経験から過去にそのような学習方法で英語をすっかり自分のものにした生徒がいたことを熱く語ります。それは事実なのでしょう。しかし、そういった生徒は、英語学習以前に〈文脈構築能力〉が高かったと考えられるように思うのです。

では〈文脈構築能力〉とは何なのでしょう？

そもそも〈文脈〉とは、コトバによって表現されたものではありません。情報の受け取り手である学習者が、コトバを媒介にして取り込んだ本来バラバラの状態の情報にある種の関係性を構築して、そこに意味を見出したものです。したがって〈文脈構築能力〉とは、「情報と情報との間に関係性を構築する能力」といえると思います。そしてこの能力は、その学習者が生活を通してどれだけの試行錯誤をおこなってきたかという経験量によって支えられているのです。

今、教育の領域で〈学力低下〉の問題がさかんに議論されています。この議論の背景には、子どもたちの学習時間の低下により習得された〈知識量〉そのものが低下しているという事実と〈考える力〉そのもの（応用力）が低下している事実が存在します。〈文脈構築能力〉の低下は、いうまでもなく〈考える力〉の低下と直接結びついているのです。

アウラに英語の能力が極めて高いMという高2の生徒がいます。Mは、高校に行かずにアウラで学ぶ生徒ですが、彼女の英語の偏差値は80を超えています。彼女は、生まれつき身体にハンディーキャップを抱えており、物心ついた頃からそのことと向きあってきました。小1で『五体不満足』を読み、小2で『手術と身体』、『病院で死ぬこと』などの文庫本を読んでいたといいます。もちろん小学校低学年ですから読めない漢字もたくさんあったはずですが、彼女の自分の身体に対する葛藤が、〈読む〉ということを可能にしたのだと思います。彼女は、答えの出ない問いに対して、様々な書物を読むことでその答えを模索していたのだと思います。そして彼女のこうした幼い頃からの経験が、研ぎ澄まされた〈文脈構築能力〉につながっていったことは言うまでもありません。

ところが、一方で現代に生きる多くの子どもたちの生活を考えてみると、彼らの生活は出来合いの消費財で埋め尽くされています。一昔前までは、私たちは限られた消費財で生活することを強いられていました。消費財の機能には自ずと限界があり、私たちはそれをいかに応用して使うかを模索しました。〈モノ〉がないからできないのではなく、その〈モノ〉をいかに工夫するかを考えたものです。そしてこのような活動が、私たちのいたるところに存在していたのです。まさに生活そのものが〈試行錯誤〉の連続体であったのです。私たちは、このような生活文化を通して、〈文脈構築能力〉を磨いてきたのであり、この部分が近年急速に失われていると考えられるのです。

K 先生との話の中で、先生の実践としての英語の口頭練習とアウラで日常的に繰り返される自律学習との関係性がその話題にあがりました。生徒自身が自分で読んで、自分で考え、自分で答えあわせをする。この当たり前の流れが、もしかすると今の子どもたちの生活にとっては、とても新鮮なことなのかもしれません。答えを導くまでの過程を面倒なことと捉え、すぐに結果を求める。また、すぐに結果を出せることが唯一の価値であるとする機能主義的な学習観の中に見落とされてきたもの、それは試行錯誤の過程の中でつむがれていく〈文脈構築能力〉であり、その喪失が〈学力低下〉との因果をもたらしていることに今の教育が抱える大きなパラドックスがあるのかもしれません。

〈応用力〉って何？

「この子、応用力がないんです。どうすればいいのでしょうか？」
こんな相談が、保護者の方々から寄せられることがあります。

そもそも〈応用力〉って何なのでしょうか？
これは、大変難しい問いだと思うのです。なぜなら、〈応用力〉というコトバが、あいまいさを含んだ実に幅広い概念であるからです。しかし無謀な試みかもしれませんが、私なりに少し考えているところを述べてみたいと思います。

生徒たちの数学を見ていると、解法を知らないと全く問題に手をつけられない生徒と、解法を知らなくとも何とか問題に挑戦して答えを導くことのできる生徒がいることがわかります。解法を知らなくても問題に挑んでいくことのできる生徒は、例えば、変数にいくつかの数字を当てはめて、他の変数の変化を観察して、問題に与えられた数式の性質を読み取ろうとします。ここで重要なキーワードになるのは〈変化〉と〈性質〉です。つまり応用力のある生徒は、答えを出す前に、数式の性質を値の変化から読み取ることをしようとするのです。

数式の性質というのは、数式に直接表現されているものではありません。つまり値とは違ったより上位に位置する次元の概念です。この概念がうまく見いだせると、見当がつくようになります。「こうなるんじゃないかな」という仮説が立てられるようになるのです。数学においては、この見当が立つかどうかは極めて重要なことになります。そして仮説を立てるためには、繰り返しになりますが、上位の概念が必要になるということです。

先の例の生徒は、数式の性質を見つけるために、変数にいくつかの数値を代入して、その変化を観察していることを述べました。変化を見るためには、一つの値では不可能です。必ず二つ以上の値が必要となります。二つの値があれば〈動き〉が見えてくるからです。そしてその動きをもとに仮説を立て、さらにもう一つの値を増やしていき、その仮説を検討する。こんなことを繰り返しおこなうことで、数式の性質が見えてくるのです。このことは、言い換えれば抽象化された一つの数式の次元を増やしていき、立体的な世界をイメージすることだといえると思います。

しかし、よく考えればこれは実に当たり前のことで、もともと数式というものは、多様な現実の世界におけるモノの数や量のやりと

りを抽象化していく過程の中で作り出されたものであり、数式と現実の世界は本来つながりを持ったものです。だから数式の持つ抽象度を下げ、具体化していく過程において、立体感が表現されてくるのは当然であり、応用力のある生徒は、この抽象と具体との世界を比較的自由に行き来させることができるのです。

数学だけではなくすべての学問領域は、私たちの現実の生活世界とつながっています。それは決して切り離すことのできないものですが、学問領域が専門化するにつれ、このつながりが見えなくなってしまいます。特に研究領域においては、先行研究に上塗りするような形で新しい研究がどんどん誕生しますから、なおさら生活世界との距離が大きくなってしまいます。20 世紀の後半からそれぞれの学問領域は、この傾向を真摯に反省点として認識し、研究領域を学際的に捉えなおそうとしているのです。現在の大学においては、この動きは極めてダイナミックなものになりつつあります。

しかし、今の子どもたちの学習の世界においては、このような動きはほとんど見られません。子どもたちは、いまだに分断化された情報をオウムのように暗記したり、単純な繰り返しによって一定の情報を習得したりするにとどまっているように思います。だから、〈知らないからできない〉ということから逃れられなくなってしまうのです。

〈応用力〉は、手持ちのパターンの数によって決まるものではないように思います。〈応用力〉とは、〈知らなくてもできる力〉であり、〈思考を立体化させる力〉であり、〈抽象的な知識と現実の生活世界をつなぐ力〉であると、私は考えています。

〈学力低下〉をどう考えるか

〈学力低下〉が叫ばれるようになって、もうどれくらいなるのでしょうか？この間、様々な教育改革が実施されてきましたが、この問題が根本的に改善されてきた兆しは残念ながら見られません。では、そもそも〈学力〉とは、何なのでしょう？どのような能力を指しているのでしょう？社会の変化に影響されない固定的な能力なのでしょうか？あらためて考えてみると、いくつもの疑問が浮かんできます。

2006年に国際機関であるOECDが実施した学習到達度調査、PISA（Program for International Students Assessment）では、「思考プロセスの習得、概念の理解、及び様々な状況でそれらを生かす力を重視する」ことが調査概要に明記されているように、〈学力〉を単に〈知識の量〉と等価に見るのではないことがわかります。ここでは、考えを組み立て、それを概念化し、さらにそれを状況に応じて使っていくといった一連の流れを〈学力〉とみなしているのです。実は、ここ20年間の社会の変化を受け、国際的な〈学力観〉は大きな変容を遂げてきたのです。以下にその変化の概要を見ていくことにしましょう。

1990年代に入って、私たちの社会は本格的な情報化時代に入りました。個人の生活の中にコンピュータや携帯の情報端末が入り込み、私たちはクリックひとつで世界の多くの情報を手に入れることができるようになりました。個人が多くの情報を簡単に手に入れられるようになったことで、私たちは大きな利便性を手に入れることになったのですが、そのこと

と同時に私たちは様々な社会連帯を失うことになったのです。かつて、情報は人間関係を媒介として獲得されていくものでした。ある情報を手に入れるためには、そのことに詳しい人との関係が不可欠であったのです。ところが、個人が莫大な情報と直結した時代においては、人間関係は無視できるわけです。こうして個人の情報化は、地域の連帯や家族の連帯さえ希薄化させる構造をもたらしました。まさに私たちは動かずに、情報だけを手に入れられる状況を獲得したのです。

このように、個人が情報を所有していることが前提となる社会においては、その情報をどう選択したり、どう組み合わせたり、どう加工していくかが問われます。つまり情報量が問題なのではなく、その質が問題となっていくわけです。そしてより質の高い情報を得るためには、様々な角度でその情報を検討していくことが前提となり、そこには複数の視点が必要となります。さらに複数の視点は、自分の視点そのものを別の視点でとらえなおす省察的な態度に支えられており、この省察的な態度は、他者との関係性に育てられていくのです。以上を整理すると、情報の質が問われる社会においては、他者との関係の中から生じる複数の視点がとても重要になってくると言えるのです。ここに情報化社会が構造的に抱える大きなパラドックスがあります。つまり、情報化は個人と情報そのものを直結させ、社会的連帯を希薄化させる一方で情報の質が問われる状況を生み出し、その質を高めるためには様々な他者との関係による複数の視点が必要になるのです。

さらに本格的な情報化時代の到来は、社会の産業構造をも大きく変えていきました。80年代までの私たちの社会は、主に工業生産主導型の産業構造が社会を牽引していましたが、それが知識経済、あるいは消費型経済に移行するにしたがって、サービス提供主導型の産業構造へと変化していったのです。このような社会においては、求められる人材の能力も、指示されたことを忠実に実行できるだけでは不十分なものとなり、より創造的な能力が求められるようになっていったのです。そしてそれに伴って、〈学力観〉そのものも画一的な答えを効率的に記憶するといったものから、吟味された情報から自分で概念を作り上げ、それを状況に応じていかに活用できるかが求められるようになっていったのです。

では、このような社会変化に伴った〈学力観〉の変容に教育現場はどのような対応をしてきたのでしょう？このことについては、過去の教育改革が示すように、ほとんど手が打たれていないように思います。その理由は、この〈学力観〉の変容は、教育現場のあり方、あるいは指導目標や指導方法そのものを大きく揺るがすだけの構造的な変革を要求するものであるからです。

〈知識〉と〈情報〉のちがい

「教師とはいったい何をする人なのだろうか？」こんな素朴な疑問を、私はいまだに持ち続けています。一般的に教師は、教えることをその仕事としています。では、いったい何を教えるのでしょうか？通常は〈知識〉です。でも〈知識〉って、いったい何なのでしょう？

本来私たち人間は、既に有る文化の世界の中に誕生します。そして身近な文化に触れながら、しかもそれを他者と共有する中で、人間として発達していきます。この過程におい

ては、私たちは、単に環境や文化の影響を受取るだけでなく、能動的にそれらを選択しています。私たちは、常に周囲の環境に対して働きかけることによって、〈自分〉と〈対象物〉との間に、ある〈関係性〉を成立させ、自分の〈行動〉と〈対象物〉に意味を与えているのです。つまり、様々な〈関係性〉によって作り出される網目の上に、独自の〈意味世界〉を作り上げていくのであり、その〈意味世界〉のことを〈知識〉と呼んでいます。従って、〈知識〉の獲得には、自分と他者、あるいは対象物との〈出会い〉と〈対話〉が不可欠であり、そのインタラクションの中で私たちは、様々なことを〈知識〉として学ぶのです。

ところが、多くの子どもたちは、「A と聞かれればB と答える」、つまり A＝B 式に対応する問いと答えの関係、これを〈知識〉として捉えています。それは〈出会い〉と〈対話〉を伴わない〈知識〉、活字化された〈情報〉にしか過ぎません。そこには〈意味〉と〈関係性〉の喪失があり、単なる記号と化した〈情報〉が、ただ羅列された状況があるだけです。子どもたちの〈知識〉が、もはや単なる〈情報〉と成り下がってしまっているならば、教師は〈知識〉ではなく〈情報〉の伝達者ということになります。いかに大量の情報を効率よく子どもたちに伝えられるか、これはまさに〈教師〉というものが、一つのメディアになっていることの証なのかもしれません。

すぐに答えの出ない〈問い〉

私はすぐに答えの出せない問いを考えることが、小さいころから好きだったように思います。すぐに答えが出せないからこそ、何度も何度もその答えを更新できる。あるいはいろんな角度から検討できるからこそ、そこに考えることの面白さがあるように感じていました。そして、きっとそんな知のモデルが、アウラの森の知の土壌を作り出しているように思うのです。

「Ｔのことなんだけど、Ｙ君が指導していて彼女は〈伸びた〉って感じを持った？」

「…、Ｔは本当によくやってくれたんですが、正直、あんまり伸びてないように思います」

「なぜ伸びなかったんだろう。僕から見てもＹ君は数学について高い能力を持っているし、Ｔの学習へのモーティベーションも高かった、にもかかわらず〈伸びなかった〉のはどうしてなんだろう？」

「実は、僕もそのことを今までもずっと考えながら指導してきたんです。いろんな教材を調べたり、有名な予備校講師のシラバスを確認したりしたんですけど、特に僕の指導の流れに問題は見つからなかったんです。生徒との関係も良好だったし、特にＴなんか、よく慕ってくれてたんです。でも、伸びなかった。僕にもわからないんです」

Ｙ先生は、中学の時に数学がまったくと言っていいほどできない子どもでした。それが高校に入学してから一変します。少し家庭内で複雑な事情を抱えていたこともあり、きちんと勉強して難関大学に入学することを目標にかかげ、自学自習で数学の力を磨いてきたという経験を持っています。私は、彼を講師に採用する時、彼のそんな経験に魅力を感じていたのです。だからＹ先生は、数学ができない生徒の状況はよく理解できるのです。

「Ｔは、主体的に数学の考えを組み立てていたんだろうか？あるいは、Ｙ君から指示さ

れたことをただ処理していただけなのではないだろうか？僕が思うのには、数学ができるようになるためには、自分で数式の処理をしながらも、その処理が全体の中でどんな位置にあり、何を意味するのかを常にモニタリングしなければいけないと思う。つまり、目の前のことを処理をする思考と、その処理をモニタリングする思考の両方が同時に必要になってくる。だから、ひょっとするとＴは、そのモニタリングの思考、メタレベルの思考が育ってなかったのかもしれない。どうだろうか？」

「確かに、そうかもしれません。Ｔは僕の出す課題を、ただ処理していただけかも知れません。今まで何度か僕は塾長の数学の質問に答えてきたことがあるじゃないですか、塾長は高校数学の公式をほとんど知らないのに、どんどん問題を解いていかれる。図を使ったり、グラフを描いたり、見当をたてて数字を当てはめてみて、そこから仮説を立て、次の数字をいれて検証する、だいたいそんな方法で問題を解かれてきたと思うんです。そんなやり方をする生徒なんて誰もいないんです。あらゆる情報から可能性を見つけ、それを組み合わせて仮説を立て、同時に検証する。そしてその仮説が行き詰まると、その行き詰まり方からも情報を吸い上げて、さらなる仮説を組み立てていく。塾長は、そんな感じの思考が恐ろしく強いんだと思うんです。まさにＴには、その力が育っていなかったんだと思います」

「じゃ、どうすれば育つんだろう？」

「うーん…、僕は今まで問題を多くこなしていくことで、そういう能力が身に着くと思ってたんですが…、でもＴは身に付かなかった…」

「たとえば、ある対象物に何かをどんどん与え続けると、その量に応じて定量的な変化がみられる。でもこの実験をし続けていくと、ある段階で急速に変化が大きくなるポイントがあるように思うんや。少し比喩的な表現だけれど、その変化が大きくなるポイントでは、対象物の内部の構造がある段階を境に変わったり、別のファクターが働き、変化そのもののあり方が変わっていく。こんなことが数学の学習においても起こるんじゃないかな。つまり、数学の力を伸ばすには、問題を与え続けるだけでは不十分であるということ、何か別のファクターがいる。それが何かだよなあ…」

「なるほど…、そうかもしれません。でも、それって何なのでしょう？どうすればそれが育っていくんでしょう？」

すぐに答えの出ない問いがはじまりました。アウラではよく生じるやりとりです。決して私が答えを持っているのではありません。私も一緒に考えていくのです。

「塾長は、どうしてそんな多面的な思考ができるようになったんですか？それって、昔からそうだったんですか？」

Ｙ先生の質問に私は考え込んでしまいました。そういわれれば、子どもの頃からそうだったのかもしれない。とにかく小さいころから、仮説を立てて考えることは好きだったように思います。特に答えが出ないことが好きでした。それと誰かとその問題を共有して考えることが好きでした。それは、誰かと問題を共有することで、自分とは違った考え方を手に入れることができるから、そのことによって新たな仮説を作り出せるからだったように思います。高校生の時、ある数学の教師にこう言われたことがあります。

「おまえは、いつも考えすぎるから数学ができないんや。公式を覚えてそれに当てはめる。考える暇があるんなら、問題のパターンを覚えろ」と…。

「確かに僕は、子どもの頃から〈考える〉ということそのものが好きだった。考えるということは、主体的でなければ成り立たない。試行錯誤しながら、いや、言い方を変えれば〈考える〉ということは、〈仮説を立ててそれを検証する〉という連続的な作業じゃないかなあ。仮説は、自分の持っている既有知識と問題から提供される未知の情報との関係性を見つけ出すことで構成されるから、それは教師によって与えられるものじゃない、自分でその関係性を作り出さないといけないんだ。難解な数学の問題を解くには、そんな思考が必要じゃないだろうか？処理能力だけでは、決して歯が立たないように思うんだ」

「なるほど、そう思います。でも、どうすればそれが生徒にできるようになるんでしょう？」

「Y君自身は、どうしてできるようになったんだと思う？僕の話を理解できるんだから、Y君の中にも同質の経験があると思うんだ。どうだろう？」

「うーん…、僕はやはりたくさんの問題をやったからかなあ。でも僕の場合、教えてくれる先生がいなかった。だから自分でその勉強をやったんです。だから当然、そこには思考錯誤の過程があり、自分で検証しながらやってきたんだと思うんです」

「そう、その主体的な経験を生徒にもしてもらわないといけない。自分で仮説を立て同時にそれを検証する。知識を入れるだけ、あるいは処理の量だけでは不十分なんだ。自分で考えを組み立てられないと…」

「少し考えてみます」

「僕も、考えてみる。どうすれば、彼らが自分で仮説を立てながら自分の思考を作り出すことができるかを」

こうして、私とY先生との話は終わりました。数学という教科は、自分であることに取り組みながら、一方でその取り組みそのものを振り返るといったような、再帰的な思考のトレーニングとしては、最適な教科だと思います。日本の難関国公立大学が、文系であっても２次試験で数学を要求してくるのは、きっとそのことが関係しているのだと思います。より、多面的で立体的な思考のできる学習者を、アウラの教育が育てられるかどうか。私たちの挑戦は、まだまだ続いていくのです。

（きたむらしんや　2012/2/25 脱稿）

『幼稚園の現場から』

Ⅷ・どうする保護者会？

原町幼稚園（静岡県沼津市）　園長　鶴谷主一

◆ＰＴＡ（parent・teacher・association）

朝日新聞１月15日と22日の２週連載で「どうするＰＴＡ」というテーマで記事が掲載されました。

反響も大きかったようで、２月にはその「反響編」が掲載されていました。

内容をまとめると･･･

時代の変化とともに、共働き世帯も増えＰＴＡへの参加率が悪くなってきた。本来「任意加入」が原則なのに、加入することが暗黙の了解でずっと続いてきて、その歪みも生じ始めている。たとえば、役員の選出が難航したり、ＰＴＡ活動に参加しない人を陰で非難したり、形骸化した活動に目的意識があいまいになっていたり、会費の未払いがあったりといった問題です。

いよいよそれを見過ごせなくなり、まずは「任意加入」を周知していこうという動き、同時に任意加入でも入会してもらえる「組織の見直し」が、各地の小中学校で少しずつ始まったという話です。

反響編では、「現状ではいいと思っていないが、変えるのは難しい」という声がある一方で、「それでも変えていきたい」「こうした（変革の）動きが広がってほしい」といった声も多数寄せられたそうです。

年度が変わる時期の頭の痛い問題。幼稚園でも例外ではないことが多いようです。

◆さて、幼稚園では

ＰＴＡは、親と教師が組織します。この形態を採用している幼稚園は主に公立に多いのではないでしょうか。私立幼稚園は「保護者会」「父母の会」等の名称を使う園が多く、教員はこの組織運営に関わることは多くなく、園長など管理職が入って、園独自に運営していくことが多いように思います。

以下、「保護者会」と言いますが、活動内容は大まかに次のようなことがあげられます。

お手伝いのお父さんに手伝ってもらってもちつき！

①行事のお手伝い

運動会の種目の出し入れから発表会の衣装作り、卒園式の謝恩会など

②行事以外の教育活動のおてつだい

図書の貸出しや、園内の掃除など

③保護者会主催の行事

バザーなど主催行事を園と連携して行うなど

④組織の運営

保護者会議の開催、会費の管理、保護者対象の研修会や親睦会の計画運営、規約の設定など

⑤対外的なＰＴＡ活動

幼稚園協会などの保護者代表として会議等に出席、交通安全や消防など地域の組織への参加など

加えて、会長や委員長など役がつくと、次の悩みがついてくることが多いようです。

⑥園とのパイプ役や運営上のトラブル

役員以外の保護者から上がってきた、園に対する苦情や疑問を受けて（言える場合は）園に具申する。これを言えずに板挟みになって悩む方も多いようです。

保護者会内での采配や、計画がうまくいかなかった時のトラブルや苦情があがってくることや、いろいろな面で決定をしていかなくてはいけないことも、重圧だという声を聞くことが多いです。

行事の挨拶をさせられるのが苦手だと言う方も意外といます。

ザッとあげただけでも、役員を引き受けると悩ましい問題があるのに、幼稚園が前例踏襲を良しとして保護者会に依存していることも多く、次のような「いきすぎだなあ～」と思われるような実話を耳にしたこともあります。

▼会長を引き受けたために園に出る回数が多く、仕事を辞めざるを得なかった。

▼会長は、子どもが卒園しても翌年は次年度役員のアドバイザーとして、役員活動に参加する。

▼卒園式の謝恩会では、余興の段取りまで親がやる。

▼発表会の裏方や、準備、片付けを全て保護者会が受け持つ。

よくこれで続いているなあ、と思うような保護者会運営をしている幼稚園も結構あるのに、園長の間では**「役員がなかなか決まらいんだ、頭が痛いよ・・・」**という声もよく聞きます。

役員のお母さんに蒸したもち米を見せてもらってます＿

保護者会自体を廃止した。という園も最近増えてきました。役員選出や保護者会との調整の煩わしさが無くなり、スッキリしたという話です。親サイドも子どもを園に預けて教育してくれれば世話無しでいい、と割り切った考え方です。

逆に保護者会が活発に活動し、サークル活動も活発という園もあります。私立幼稚園は、園長・理事長の考え如何で方針が決まってくるので、保護者会も多種多様なのでしょう。

◆原町幼稚園の保護者会改革

さて、前置きが長くなりましたが、

私どもの取り組みについてご紹介します。

原町幼稚園では、10年前の2002年、私が園長になったのをきっかけに保護者会も改革を始めました。それから現在まで役員選出の苦労はありません。しかし、昨年度は保護者会にもちょっとした亀裂が生じて見直しを行いました。その経緯をお知らせすることで、幼稚園と保護者会との関係を考える材料にして頂けたら良いな、と思います。

◆まずは、園長の考えをストレートに伝えました。

※昨年2011年１月、次年度の役員選出前に発行した園便りから引用

「新しい保護者会」を考えましょう

時代は移り変わってきています。「保護者会を廃止したら運営もラクだよ」という幼稚園‥保育園もじわじわと増えてきました。保護者会を廃止したら入園児が増えたというケースも聞きました。確かに保護者会は面倒な面もあるでしょう。しかし、「孤育て」という言葉も生まれてしまった日本。人と人とのつながりが希薄になってきている現代、保護者会という親の居場所まで消し去ることに幼稚園としての社会的責任は？というところまで思い巡らしてきました。

昔の話ですが、原町幼稚園の保護者会は「母の会」という名称で活動をしておりました。「交通安全母の会」という対外的なＰＴＡ活動から、卒園式の謝恩会の企画運営まで、幅広く仕事内容も多かったと記憶しています。

毎年役員のなり手がなく、皆がくじを引く様子を見て、私は「**役員はボランティア活動、嫌々やって頂くようなら無くて結構、くじ引きで役員を決めるのはやめて**」。という意味の発言をいたしました。皆が負担に思うようなら、行事の規模を職員でできる範囲にすれば良いし、大きい行事はその都度お手伝いを募っても賄えるだろうという見通しがあったからです。

しかし当時の保護者の皆さんは私の意見に同調することなく、名称を「原町幼稚園保護者会」と改めて役員活動を存続させてくれました。「**幼稚園に役員活動は必要だ**」という意思表示でした。それ以来、保護者会の役員はくじ引きをすることなく、毎年自主的に気持ちよく引き受けて頂けていることを、心より感謝しています。そして思い直しています。『**やはり今の幼稚園活動を維持していくためには、保護者の皆さんの力は必要です！**』

園の行事を運営する上ではもちろんのこと、保護者同士のコミュニケーション、保護者と先生のパイプ役として役員さんは重要な役割を果たしてくれていることを実感しているからです。

図書委員さんやバザー委員さん、スポットでお手伝い頂いている方など、それぞれの立場で支えて下さっている方もたくさんいらっしゃいます。「**できるところはやりますよ」というお互い様感覚**で引き受けて頂いていることにも、本当に感謝しています。

今年も、新しい役員さんを選出する時期が来ました。新しい役員活動が、合理的に意欲的に楽しく行えるように、園との連携を強化し、新しい時代にマッチした保護者会活動の見直しをしようと考えました。

<u>まずは、現状を把握するところからスタートします。</u>

〇以前と状況が変わったこと、役員さんが困っていたことは、主に次のようなことです。

・役員の中にも仕事（育児、介護）を持っている方が増え、打合せの時間を作るのが難しくなった。

・活動時も、全員が出席できないときがあり、少人数で仕事を回すのに苦労した。

・役員の仕事内容が明確になっていないので、何をしていいのか、とまどった。

・活動の目的がいまいちはっきりせず、何のための仕事なのかわかって仕事をしていきたい。

〇今までの役員さん方から聞いた「役員やって良かった～」という声です。

・友だち付き合いができて、小学校に行ってからも仲の良いつき合いができて心強いです。

・子どもたちの活動、笑顔を身近で見られた、サポートできた。（餅つきなどは子どもと一緒に行えた）

・行事をやりとげた達成感を味わえた。

・幼稚園の教育活動のことがよくわかり、先生と話す機会も増えた。

〇ささやかな特典について。（隠していた訳ではないんですが、キチンと公表してこなかったこと）

・役員活動の場合は、預かり保育は無料でお預かりになります。

・年長役員は音楽会のお手伝いをしつつ、最前列で観ることができます。

・年長役員は卒園式で役員席（最前列）で参加することができます。

・ボードゲームの貸し出しは図書委員と役員に限定で行います。

・一年間続けて頂いた役員さんには、園からささやかなお礼を差し上げます。

特典が役員に立候補する動機になるとは考えていません。これと引き換えにするほどラクな仕事ではないし、だいいち気持ちが続かないと思います。私たち教員もそうですが、勤務状況と待遇を単に天秤にかけてみたらとてもつり合いがとれているようには見えない。でも、子どもたちが育っていく姿をみたり、子どもたちとふれあうこと自体が大きな喜びや達成感につながり、ラクではないけど後から喜びが来ることがわかっているから意欲的に仕事を続けていけるのです。今まで役員を引き受けて下さった皆さんも同じ思いだと思います。

なので「特典」は子どもたちのために、一年間役員という責任を背負って一生懸命頑張って下さる役員さんへの、ほんとにささやかなお礼の気持ちなのです。

〇次に、保護者会役員の活動の内容をお知らせします。

時期	主な活動＆サポート	内容と活動の意味
１学期	顔合わせのお茶会企画運営 研修会のおてつだい 納涼祭り模擬店おてつだい	クラスの皆さんが仲良く１年間過ごすためのコミュニケーション。 園主催のゲームあそびの研修会のお手伝い。（ゲームに詳しくなれるメリットがあります）子どもたちのお楽しみを模擬店で盛り上げます！
２学期	レクや研修の企画運営 運動会の種目係と片付け はらっこバザール 音楽会サポート もちつきおてつだい	ボーリング大会、エアロビ教室などを企画しました。 運動会当日がスムーズに行えるように、また道具などが大切に毎年キレイに片付けられることで長持ちし、必要な時に使えるようになります。 バザールでは子どもたちのお楽しみを模擬店でバックアップ。 音楽会では年少組はリハーサル付き添い、年中組はドア、年長組は当日の園児席係。 餅つきはタイヘンだけど楽しい行事、子どもたちの様子も見られます。

３学期	お茶会の企画運営 アルバムづくり	子どもの成長をお互いに喜び、１年の思い出などを語りあう場を作ります。先生への感謝の気持ちを形にするアルバム作り。先生にとっては一生の宝物になります。
その他	保護者会総会と保護者会 対外的活動	園と連携して、年３回の保護者会の運営を行ったり、受付のお手伝いをします。市や県の幼稚園協会団体の会合に出席できる場合出席します。

○ひとつ提案します

「役員」はちょっと堅苦しいという意見もあり、もっと親しみやすい名前に変えようということで、いくつか案を出しますので皆さんの投票で決めましょう。ついでに保護者会へのご意見等をお寄せ頂けますでしょうか。名称の変更は、名前を変えたから何かが変わるのではなく、名前を変えて私たちの頭を柔軟にして「新しいやり方を生み出していきましょうよ」という意思表示です。

（以上、園便りからの引用です）

年長さんは一人でもだいじょうぶ！

◆そして、次年度の役員も無事決まり、保護者会は次のように変化しました。

※役員選出後に発行した園便りから引用

新しい保護者会☆役員さんは「はらっこマミー」

○はらっこマミーの役割について再確認！

原町幼稚園保護者会規約

第４条（目的）　本会は幼稚園と保護者とが常に連絡しあい、原町幼稚園に通う子どもたちのために協力して教育の振興と保護者間の交流をはかることを目的とする。

第５条（事業）　本会は第四条の目的達成のために次の事業を行う。

一、園の諸行事の援助及び参加。

二、保護者の研修、交流会及び保護者会活動の報告。

三、施設整備、拡充のための援助、及び教材の援助。

四、その他、本会の目的達成に必要となる事業。

ちょっと固い保護者会規約の文章を言い換えると・・・

●子どもたちにより良い経験をさせるために、園と協力し、教員をサポートし、保護者同士の交流や研修、そして余力があれば施設や教材のための援助もしましょう！･･･ということです。

○「**保護者会**」とは原町幼稚園に在籍する保護者全員のことを指します。

○来年度から役員を「**はらっこマミー**」と呼ぶことにします。お父さんは、はらっこダディー？

○**図書委員**や**バザー委員**、**手芸部**など保護者同士のサークル活動をして下さるグループは変更なし。

○運動会や園外保育など、その都度行事のお手伝いに手を上げて下さる方も募集します。

まずは、これでやってみましょう！手芸部のように趣味を生かした新規グループの誕生も歓迎です！

（事前に園長・主任にご相談を！）

さて、肝心の具体案については、何人かの方から頂いたご意見を元に次のように考えていますが、

詳細や軌道修正も今後の活動を進めつつやっていきます。

①組織構成をはっきりさせ、指示伝達をハッキリと全員に。

②園の依頼により行う活動、自主的に行う活動を明確にし、最終決定は園長、主任が行う。

③はらっこマミーの打合せは、メンバー構成に合わせる。（たとえば午後２時～４時）

④活動内容については、はらっこマミーメンバーで随時検討し、より良く変化させていく。

毎年、園から「これだけはやって頂きたい」というお願いがありますので、恒例で行う活動は固定でありますが、「こうしなければならない！」というものではなく、その年に集まったマミーさんの考え方や子育てやお仕事の状況に合わせて、無理なく「その年のやり方」を考えて頂いても良いと思います。園の活動もその意見を聞きながら修正していくことも可能です。あくまでも「**子どもたちにとって意味のある活動をしていく」ことが目的です。**

（以上、園便りからの引用です）

年長さんは自分の食べるお餅を調理します。

砂糖醤油っておいしいね！

◆まとめ

キーワードは、

『活動ありき、ではなく人ありき』です。

園と保護者の付き合いは、人と人との付き合いです、だから保護者会の規約を守ったり、前年通りということにこだわらず、集まった人たちのやりやすい、でも園のやってほしいことも伝えていくというスタンスで臨むのが良いのではないかと考えています。

餅つきが終わって、ホッと一息

原町幼稚園の「はらっこママ一」の皆さん！

こうするのが慣例だから、決まりだから、という理由で「任意加入の団体」の人々は動きたくありません。

幼稚園の保護者は**「子どものために何かしたい！」**という思いを持っています。その気持ちが活動によって達成出来るように保護者会を運営していくことが肝要ですし、そのためには、園長もしくはある程度の決定権を持った職員が一緒に活動し、会の運営をコントロールしていくことが必要だと考えています。

保護者会を園の単なるお手伝い組織と考えずに、より良い活動をするためのパートナーとして常に声を聞くことにより、世間と乖離しがちな私たちの感覚を修正したり、園の教育方針を、活動のたびに保護者に伝えることにより、園の教育活動への理解も深まり園を支えてくれる貴重なサポーターになると思います。

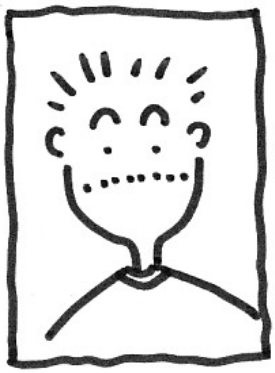
「面倒な保護者会なんて廃止だ！」なんていう園が今後増えませんように！

学校法人松濤学園　原町幼稚園

園長　鶴谷主一

幼稚園歴28年（内園長歴9年）

http://www.haramachi-ki.jp



ツルヤシュイチ

福祉系対人援助職養成の現場から⑧

西川　友理

前回にも書きましたが、私は社会福祉士の養成に関わっています。

社会福祉士の養成カリキュラムでは、相談援助実習といって、定められた施設や機関で規定の時間数を実習することが義務付けられており、この実習の前後には、相談援助実習指導という授業を行います。

まず実習前の相談援助実習指導で、実習先の選定、実習先についての事前学習や心構えの指導など実習に向かう準備を行います。

実習先は学生の希望を考慮して、各々の意向に沿った施設や機関に協力をお願いすることとなります。『実習時間は180時間、そのうち120時間を１ヶ所で実習すること』という規定はありますが、多くの学生は 180 時間全てを１ヶ所の施設・機関で実習します。

相談援助実習が始まる約１ヶ月前、各施設・機関において実習前オリエンテーションが行われます。これは実習先に学生が伺い、実習指導担当者と顔合わせをし、実習に入るまでにやっておくべきことの指示を受ける、事前打ち合わせです。

実習が始まると、学生は実習先職員の勤務時間や働き方に準じて動きます。養成校の指導教員は、実習中の学生指導のため、何度か実習先に伺います。

そして実習後の相談援助実習指導で、体験した様々な出来事について消化するのです。

社会福祉協議会での相談援助実習

㋐さんは、A市社会福祉協議会（以下A社協）での実習を希望しました。

「社協って、いまいち何やってる所かわからへんのですよね。だからちゃんと知りたくて。」

実習前オリエンテーションでは、社協の役割や地域福祉のあり方について勉強してくるようにと言われたのだそうです。また、A市のパンフレットを沢山いただいて来ていました。これを参考に

Ａ市の文化や行政のあり方、歴史等地域特性の把握をするようにと指示があったとのことです。

実習が始まって一週間が経った頃、実習指導に行きました。
「色々知れて面白いです！まるで何かのツアーに参加しているみたい！」
㋐さんは満面の笑顔です。
実習記録を見ると、確かに変化に富んだ実習プログラムのようです。社協内で実施している高齢者のふれあい喫茶のスタッフとして活動させていただいた次の日には、子育てサークルのサポートで様々な親子と話をし、週末には地域で開催される福祉まつりの運営スタッフの１人として動いていたようでした。
日常生活自立支援事業という判断能力が低下している人の生活サポートをする事業では、利用者のお宅に訪問した様子。この事業に関わる専門職の連携会議にも出席させていただいたのだそうです。
とにかく、毎日新しい場所で新しい仕事に出会っています。
「社協がやってる活動はね、地域全体の福祉の向上のためにあるの。せやから、サービスの対象はこのＡ市に住んでいる全ての人。あらゆる人が幸せになるように、あらゆる形でアプローチするんです。」と、社協職員は㋐さんに言います。
実習の最終的なまとめとして、“Ａ社協で実施可能な企画を考え、職員にプレゼンテーションすること”という課題が出されました。
㋐さんは事前に調べていたＡ市の地域特性から、独居高齢者の多さや休耕田の多さに着目し、「ああでもない、こうでもない」と悩みながら“市民農園によるふれあい事業”の企画書を仕上げました。
「こんな事業があったら、地域の高齢者の方の生きがいになるんとちがうかな。農業やってはった人も多いし。収穫した野菜でみんなで料理もして…絶対楽しいわ、これ！」
いざ発表。内容は面白がっていただけましたが、同時に沢山の厳しい指摘を受けたのだそうです。
「土地を無償で提供してくださる方って言うけど、そんな人どうやって探す？」
「うちの社協の、どの部門が担当するとええと思う？」
「高齢者の体調管理はどうする？」
「春、秋はええけどねぇ、暑い時と寒い時は、お家から出るの、嫌がらはるで。どうしたらええと思う？」
連携や関係調整を仕事とする社会福祉士の、大事な部分を教えてもらったようでした。

実習後、㋐さんに尋ねてみました。
「それで結局、社協って何やっているところか解った？」
「なんとなく、色々やるとこやねんなって解ったような気がします。役所のどの部署もやらへんことを、半官半民の社協が担当するって感じかな。だから何でも知ってやなあかんし、どこにでも繋がれるようにしといたほうがいい。社会福祉って何でもアリですね。社会福祉士は『何でも屋さん』なんやなぁ。」

児童養護施設での相談援助実習

「子どもってめっちゃかわいいやないですか！」という㋑君。将来子どもに関わる仕事がしたいからと、児童養護施設での実習を希望しました。

実習前オリエンテーションでは、施設職員から開口一番、

「子どもと外で元気に遊べるようにしてきてね！」と言われたようです。

それから児童福祉法や児童虐待防止法といった法制度、被虐待児や施設入所児の現状とその特性について調べる事。また、実習中にやってもらうからと、炊事や裁縫、洗濯等、ある程度の家事は出来るようにしてきてほしい、といった指示を受けて来ました。

そして最後に、申し訳なさそうに言われたとのことです。

「それから、うちでは実習の学生に子どものケース記録は開示してないから。そのつもりで来てね。」

ケース記録とは、利用者についての個人情報が記録されている書類のことです。

いよいよ実習が始まりました。

起床の声掛け、体調把握、朝食の準備、いってらっしゃい！と、慌しく子ども達を見送った後は、掃除や洗濯といった環境整備。

昼食をとって、ほっと一息ついた頃に、低年齢児から順に帰ってくる子ども達。

宿題の添削が終わると、運動場で一緒に走り回って遊び、夕食後には一緒にテレビを見て、寝る前には本を読み聞かせる。小さな子ども達が寝た後は、中高生と居間でゆっくり話をする職員の横で、洗濯物をたたむ。

生活上のさまざまな仕事を次から次へとこなしつつ、ただひたすら子どもの言動や職員のあり方を観察し、それをもとに考察し、子どもに働きかけてみる、という日々を過ごしたようでした。

当初、子どもはかわいいと言っていた㋑君でしたが、実習指導に行くと、実際には子どもの言動に振り回されていました。試し行動をする幼児、注意を聞かない小学生、大喧嘩をする男の子、突然過酷な過去を語りはじめる女の子。

その中でも㋑君は特に乱暴な男の子が気になり、とある職員に聞いてみたらしいのです。

「どうしてあの子は落ち着かないんでしょうか。ひどい虐待を受けてきたんでしょうか。あの子はどうして、ここで生活しないといけなくなったんですか。」

「あの子はちょっと…そうね、今までだいぶ色々あったんよ。実習生の㋑君には話されへんけど…。」

その職員は少し困った顔をして言葉を濁され、㋑君はそれ以上聞くのは諦めました。

「ふーん、そうか。色々って何やろう。まあプライバシーの問題もあるし、ケース記録も見せへんって言ってたし。たかが実習生に、教えてもらえへんのは当然かな。」

少し不満を感じた㋑君でしたが、その不満はすぐに紛れた様子で、何よりその時その場にいる目の前の子どもの対応に手一杯で、とてもそんなことをゆっくりと考える余裕がないのが実状でした。

子ども達との日常の出来事に一喜一憂しているうちに終了した実習、といった感じでした。

「㋑君、実習はどうやった？」

「はい、大事なのは、全力でぶつかることなんやなあと思いました。社会福祉は信頼関係なんですね。社会福祉士は援助技術も大事かもしれへんけど、まずは人間性が大事。頭が良いだけやったら、社会福祉士にはなられへん！」

就労継続支援ｂ型事業所での相談援助実習

社会人経験のある㋒さんは、就労継続支援ｂ型の事業所での実習を希望しました。

「以前の職場で、下半身まひの同僚がいたんですよ。彼、障害があっても自立して生活していました。ええ子でね、一緒に仕事していて楽しかったんです。障害があっても一般企業で働いて、自立生活ができるんですね。私、これからの福祉には就労支援っていう考え方が、とっても大事やと思うんです。」と熱く語ります。では就労移行支援事業所で実習したほうが㋒さんの知りたいことに合致するのでは、と提案したのですが、

「就労移行って一般就労を目指せそうな人、就労継続って就労移行が難しい人が利用している事業なんでしょ？より自立が難しい人の所のほうがやりがいあります。そんな人たちが社会でどうやって生きていくのか、ということを考えたいんです！」

そこで当初の希望通り、就労継続支援ｂ型の事業所で実習することになりました。

実習前オリエンテーションでは、障害者自立支援法等の法制度を勉強し、実習先の利用者の障害特性について予習をしてくること、と指示されたそうです。また、「当事者やその家族の体験談を読んでくるといいよ」と、先方に教えていただいた本を、熱心に読んでいました。

実習が始まって数日後、㋒さんの実習指導に行きました。面接室に私と㋒さんの２人きりになったとたん、㋒さんはいきなり声を潜めて言いました。

「先生…がっかりです。」

「…ど、どうかされましたか。」

「年金もらって、色んな手当もらって、利用者さんら、世間のお荷物になっていても平気やないですか。中には『生活保護もらうために、ここに通ってるねん』って平気で言う人もいるし…。みんな、もっとちゃんと自立することを真剣に考えないと…。」

「ふぅん。そうか…。あの一…㋒さんは、この施設が何のためにあると思う？利用者さんは、何のためにここに来てはるんやろか？どう思いますか？」

「…自立のため、と思ってたんやけど…わからないです…何のためなんかなぁ…？」

この問いかけが、そのまま㋒さんの実習テーマになりました。

㋒さんは毎日、利用者の活動である内職作業のサポートに入っています。一言も喋らず、黙々と自分の作業をこなす人がいるかと思えば、しょっちゅう寝転がって休んでいる人もいる。感情のコントロールが難しく、トラブルを起こしてば

かりの人もいる。その中に、自らの生い立ちについて、沢山お話をする利用者がいたとのことです。

「ここに来て皆に会うのが楽しみやねん。今は身寄りもおらんし、家で一人でおったら気楽やけど寂しいわな。」

毎日実習時間後に、職員と議論します。

「せっかく稼いだお金を、アニメグッズなんかに使う利用者がいるらしいじゃないですか。なんで生活必需品とかを買わさへんのですか。」と憤慨した㋒さん。

それを聞いた職員が言いました。

「あなたにとって、そのアニメグッズはしょうもないものかもしれんけど、あの利用者さんにとってみれば、大事な生活必需品なんとちがうやろか。」

そのような日々を過ごす中で、一度だけ、専門職のあつまる事例検討会に同席する機会がありました。たった 1 人のケースに対して、10 人ほどの人が集まって話をしている。皆、現実を見据えながらも「その人やその家族はどうしたいのか」という利用者のニーズに、最も重きを置いている現状を、見せていただけたようでした。

実習の最終日、㋒さんに尋ねました。

「それで、答えは出ましたか？」

「はい。ここは、利用者にとって“居場所”なんですね。ここがなかったら、家に閉じこもっているだけの人もいると思う。まずはその人が人として生きていくための支援が大事なんですね。本人や家族が生活に満足してたら、周りがどういう社会状況やろうと、それでええもんなんやな。社会福祉士はとにかく、本人さんが満足できるように配慮する、満足してはるんやったら何も波風立たんように配慮する、っていう仕事なんやなぁ。」

地域包括支援センターでの相談援助実習

「いずれ僕の親も介護が必要になるでしょうし、今のうちにしっかり介護と家族のことを知っておきたい。」

㋓君は高齢者の地域生活支援に興味を持ち、地域包括支援センターの実習を希望しました。

そして実習前オリエンテーション。

「君は、自転車に乗れるかな。」職員がまず言った言葉がこれだったそうです。地域包括支援センターの活動は、フットワークが命。自転車に乗って地域を走り回るのです。

㋓君はオリエンテーションでの指示どおり、実習が始まる前に、介護保険や地域包括支援センターの役割、高齢者の心身の特徴などについて勉強しました。また、高齢者とその家族についての体験談の本をいくつも読みました。

実習中は様々な人のお宅に訪問し、また、地域の高齢者とその家族をささえる専門職連携の現場にも、日常的に参加させていただけた様子。連携先の特別養護老人ホームやデイサービスなどにもお邪魔させていただき、連携先の職場、仕事内容も把握することが出来たようでした。

実習後半には、一人の利用者について支援計画を立てるという課題が出されました。

「若い人の育成のために、協力してもらえませんか。」
と、職員がある利用者に声をかけると、その方は、
「ええよ。…わし、そういう協力するのもう３人目やで。職員さん、わしのことあてにしてるやろ！」
と笑って答えてくださったそうです。
㊦君は、まず情報収集から始めました。
「過去の病気の事とか、経済的な事なんか、聞きづらいなぁ…。」
ご本人とその家族に、どのように問いかけたらいいのか、悩んだと言っていました。
なんとか収集した情報を元に、支援計画を立てたのだそうです。㊦君は社会福祉小六法と援助技術の教科書を常に携行し、迷った時、解らない時にはそれらを開き、職員のアドバイスを受けながら、支援計画を練り上げ、実習先が設定して下さった支援計画発表会の場で、緊張しながらも自分の支援計画を発表したと、満足そうに教えてくれました。

実習最終日、㊦君は非常にさっぱりとした顔でした。
「㊦君、実習どうやった？」
「めっちゃ勉強になりましたよ。学校の援助技術の授業でやったこと全部やらせていただいて、ソーシャルワークの具体的なやり方がわかった感じ。社会福祉士は相談援助業務を計画的にきちんと実施する人ですね。」

実習後の振り返り授業にて

実習後の相談援助実習指導の授業では、自らの体験を消化するために、体験した実習内容を説明し、その体験を通じて得た思いを語り合ってもらいます。
他者の話を聞いた学生は「あれ？実習のやり方が全然違うやん！」と驚きます。
「うちはケース記録なんて見せてもらえなかったよ。」
「俺、地域での活動なんかほとんどしなかった。」
「私んとこは、ご家族さんと接触する機会なんかなかったもん。」
「僕、そんなに特定の利用者とべったり接することなんかなかったわ。」
そして、
「他の人たちが言うてること、頭ではわかるけど、自分の習ったこととちょっと違うかも。」という意見をもらすことがあります。
皆、社会福祉士になる為の実習、相談援助実習をやってきたはずなのですが、その内容も印象に残った事も、行く場所によってこんなにも違います。にもかかわらず、得られる単位は同じ『相談援助実習』です。
「色々あって面白いね。それぞれ、とても大事なことを得てきているよね。だけど少しずつ偏っているんだよね。皆で体験を共有して、考えを深めましょう。」と、それぞれの体験の消化をグループの中で行い、その後の学習でフォローに努めます。
フォローしつつも、何かひっかかるものがあります。
これほど実習内容に違いがあるのに、同じように“相談援助実習をしてきた”と言ってよいのでしょうか。

国から求められている相談援助実習カリキュラム

2009 年、相談援助実習カリキュラムの明確な定義がなされました。これによると、実習中に含められる事項として、以下の８つが定められています。

①利用者やその関係者、施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的なコミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成

②利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成

③利用者やその関係者（家族・親族・友人等）との援助関係の形成

④利用者やその関係者（家族・親族・友人等）への権利擁護及び支援（エンパワメントを含む。）とその評価

⑤多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際

⑥社会福祉士としての職業倫理、施設・事業者・機関・団体等の職員の就業などに関する規定への理解と組織の一員としての役割と責任への理解

⑦施設・事業者・機関・団体等の経営やサービスの管理運営の実際

⑧当該実習先が地域社会の中の施設・事業者・機関・団体等であることへの理解と具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワークキング、社会資源の活用・調整・開発に関する理解

これらは実習先において実施されるべき事柄として、内容もかなり具体的に定められています。

それなのになぜ、実習先施設・機関の違いで、実習内容にばらつきが出るのでしょうか。

これには 2 つの理由が考えられると思います。

まず１つ目の理由として、施設・機関の役割の違いが考えられます。

相談援助実習先として認められている所は、高齢者分野、障害者分野、児童分野、地域分野、低所得分野、医療分野など、多岐に渡ります。分野が違えば、利用者のニーズや社会から求められる役割が変わります。また、同じ分野なら大体同じことをしているかといえば、それも違います。例えば児童分野なら利用者が生活している児童養護施設などの入所型の事業と、利用者が家から通って利用する児童デイサービスなどの通所型の事業、都道府県の機関である児童相談所では、日々の仕事内容は全く異なります。

また、どの実習先でも国が指定している実習カリキュラムに関する仕事を行ってはいるのですが、その事業が社会的役割として担っている仕事や、実際に職員が時間と労力を割く仕事についての実習がどうしても多くなり、そうではない仕事についてはなかなか学生に勉強させることが難しい様子です。結果的に、実習内容に偏りが生まれ、実習カリキュラムには課せられているのに、実際はほとんど学習できないものが発生することがあります。

もう１つの理由として、個人情報の取扱いの違いがあります。

相談援助実習では、ソーシャルワークの勉強をします。ソーシャルワークには「状況の中の人」という言葉があります。“その人”は“そういう人”なのではなく、生理的、心理的、社会状況的に“そのような状況になっている人”と考えるのです。よって、その人の人生の来し方行く末、その時の社会的な関係性について情報を集め、利用者本人とともに精査した上で、支援計画を立て、それに基づいて支援を展開します。

つまりソーシャルワークは、その人自身とその家族や社会関係について、様々な情報を把握しないと出来ないのです。

障害者分野や高齢者分野の施設では、学生にケース記録を読ませて下さる所が多いのですが、児童分野などではケース記録を読ませて下さる所はほとんどありません。個人情報保護の考え方が施設によってまちまちだからという理由だけでは、分野による傾向の違いは説明出来ません。

では何が違うのでしょうか。

これについては、実習先施設・機関の事業形態を見れば、わかるのではないかと考えます。

措置から契約へ、「契約と措置」

2000 年前後の社会福祉基礎構造改革により、“措置から契約へ”というスローガンのもと、多くの社会福祉事業の利用方法が措置制度から契約制度に移行しました。福祉が慈恵的な施しではなく、いわばサービス提供という契約上の取り引きとして扱われるようになりました。“福祉サービス”と言う言葉が法律上に登場したのは 1990 年ですが、2000 年以降、介護保険事業や障害者自立支援法に基づく事業が始まったことにより、本格的に契約上のサービスとして福祉の事業が取扱われてきました。

ところが、一部の社会福祉事業には、措置制度がそのまま残りました。これらの事業が、実習時ケース記録を読ませていただけない事業とほぼ合致します。

“契約”とは「私法上、相対する二人以上の合意によって成立する法律行為」と辞書(大辞林　三省堂)にはあります。つまり契約の支援においては、サービス提供者は利用者の合意がなければ支援を開始できません。利用者もサービス提供側が合意しなければ支援を受けられません。双方同等の意志決定権を持ちます。

介護保険上の福祉サービスを、契約に基づいて提供している高齢者施設等では、利用者本人やその家族に「実習生にあなたの個人情報のこれを教えていいですか、書類を見せてもいいですか」と合意をとった上で、その方の個人情報を学生に見せてくださるところが多いです。

ある特別養護老人ホームでは、利用者が入居する際、「施設内で後進育成として行われる実習や研修のために、自分の個人情報を活用することに同意する」という契約書の提出をお願いしているそうです。この契約書は提出しなければ入居できないのではなく、提出した人については協力をお願いしてもよいという判断材料として活用されています。つま

り、福祉サービスの利用手続きが、施設と利用者が直接契約を交わす事によって行われているため、個人情報の取扱いについてもこれと同じく、本人や家族に判断を求める事になっています。

“措置”とは「社会福祉において、要援助者のために法上の施策を具体化する行政行為、およびその施策の総称」と辞書にはあります。さらに“行政行為”については「行政が国民に対して働きかける行為のうちでも、合意に基づくことなく一方的に、具体的な場合において国民の権利義務に直接的・観念的影響を与える行為」となっています。つまり法的位置づけとしては、本人の意志は関係なく、行政の一方的な指示に従うこと、となっているのです。ただし実務上、措置される側の人達の意志が全く無視されるということはありませんが、制度の構造上、支援の一連の流れは行政行為として行われます。

措置による福祉サービス利用、例えば児童自立支援施設に入所している子ども等は、都道府県が施設に措置を委託し、入所して来ています。つまり、本人やその家族と施設との契約ではなく、行政庁から施設への措置委託になっているのです。措置対象となっている人は、法的には自ら望んでその事業を利用しているわけではありませんので、個人情報の取扱いについては本人達の不利益にならないよう、慎重にならざるを得ません。利用者が実習中の学生に生育歴などを自らの意志で話すことについては問題ないでしょう、が、ケース記録という公文書を施設側が開示するということは法的な制限を受けます。

特に未成年は法的に契約能力がありませんので、公文書であるケース記録をどう扱うかについては法定代理人（この場合施設長）の同意が必要です。つまり、施設長の決定がなければ、ケース記録の開示などの扱いは決められません。しかし、施設長が措置の委託を受ける際に、実習生に対し情報管理をどうするかという規定もありません。また、規定がないから、誰がどの時点で判断を下すのかも不明瞭です。

ただ最近では、措置による事業での実習でも「ケースを知らないと、ソーシャルワークの勉強は出来ないんだから、見てもいいよ。ただし、守秘義務は絶対に守ること！」と実習生に伝え、もちろん守秘義務に関する誓約書を提出させた上で、措置解除後５年以上経過したケース記録を見せてくださることもあります。

これはケース記録の法定保存年限が５年となっている、つまり５年経ったものは破棄してもよいという決まりがありますので、それを援用させて考えたものだと思われます。

逆に「万が一情報が漏洩した時の事を考えると、実習生には決してケース記録を見せられない。よって新しいカリキュラムが求めているような実習の指導は出来ない。教育を保障できないのだから、無責任に実習生を受け入れられない。」と、実習生を一切受け入れないことを決めている施設・機関も、少しですが存在します。

見せてくださるのも、見せてくださらないのも、その施設・機関の実習担当職

員が「専門職としてどうあるべきか」を考えた結果です。[注1)]

実習内容のばらつきへの対応策

「施設・機関の役割の違い」と、「個人情報の取扱いの違い」という理由から、「契約と措置」を手がかりに、実習内容のばらつきへの現実的な対策を考えてみます。

相談援助実習で学ぶソーシャルワークには、“本人の自由意志による自己決定を尊重”するという原則があります。

契約による支援は本人や家族が「利用したい」という意志を持ったことから始まります。契約による支援の場合、極端に言えば公共の福祉に反しない限り、どのような支援も行えます。援助者としての倫理から軸足を移さなければ、あらゆる発想で“本人の自由意志による自己決定を尊重”した支援が出来るのです。

一方、措置による支援は行政が「そうしなさい」という意志を表明して始まります。措置という行政行為は、その対象者を守りもすれば、制限もします。措置の支援は、本人の自由意志に一定の制限を付与することになるのです。出来うる限りの“本人の自由意志による自己決定の尊重”をしつつも、措置状況に配慮し、時には本人の決定を矯める事も必要になります。

つまり相談援助技術について言えば、契約には制限が少なく、措置には、制限が厳格に存在し、これを守らなければならないのです。

現在、社会福祉の現場には、契約の事業と措置の事業の両方が存在しています。だとすれば、社会福祉士の現場での働き方を知るためには、少なくとも契約の支援方法と措置の支援方法の両方を学ぶ必要があると言えないでしょうか。

よって相談援助実習は、契約事業１ヶ所、措置事業１ヶ所の合計２ヶ所で、どちらか一方を 120 時間、もう一方を 60 時間で実施する。これにより国の示すカリキュラムをきちんと守りつつ、実習先施設・機関もあまり無理をせず実習生を受け入れることが出来るようになるのではないかと思うのです。

ただし、多くの学生が 180 時間分を１ヶ所で実習する現状から、全ての学生が 2 ヶ所で実習を行うようにするとなると、学生にも実習先にも、養成校にも負担が増えることが考えられますが、これについてはまた、別の機会に考えたいと思います。

よい相談援助実習とは

ある児童養護施設の職員は、

「相談援助実習に来た学生には、ソーシャルワークの勉強をさせないといけない、ソーシャルワークを理解出来ていないと実習できたと言えないということは、解っているんです。解っているんだけど、やはりどうしても実習生には生育歴を教えてあげられない。そうするとなんだかね…子どもとの接し方がよくて、礼儀正しくて、元気にコミュニケーションとれる実習生なら、児童養護施設としては、もう実習合格！と思っちゃうんですよね。それじゃまずい、こちらの指導

の怠慢だとはわかっているんだけどね…。」
とおっしゃっていました。

私が出会う措置事業の実習担当者の多くは、国から求められているカリキュラムと、現場の実情との間で、試行錯誤をなさっています。ソーシャルワークの勉強に来たのだから、利用者の背景についても勉強させるべき。でも、措置されてきた人々の情報を安易に開示するわけにはいかない。じゃあ、措置事業における相談援助実習って、何をどのように行うべきなのだろう…。

実習指導教員である私も、どのような実習プログラムがいいのか、実習先の担当者と共に考え、ディスカッションしているところです。実習先にも学生にも、できれば養成校にも大きな負担なく、また学生が最も勉強出来て、国の求める実習カリキュラムを満たすためにはどうすればよいか。「契約事業と措置事業を１ヶ所ずつ、計２ヶ所に実習に行く」というのは、その１つの答えになるではないかと考えています。

今後も現場の実習指導者とともに、学生にも現場にも有益な、よい相談援助実習の方法を考え、実践していきたいと考えています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

注１）たとえ普段ケース記録を学生に開示して下さる実習先でも、その学生があまりに準備不足で、実習先が「利用者の個人情報を開示すると漏洩してしまうんじゃないだろうか。」と不安を感じた時には、見せて下さらない時があります。逆に普段ケース記録を開示してくださらない実習先でも、見込みがあると判断した学生に対しては、ケース記録を開示していただける時もあります。今回は構造的なお話をしているので、この様な学生の実習態度のあり方についてのお話は割愛します。

※冒頭に挙げた４つの実習について、例えば社協であればどの社協でもＡ社協のような実習をするかといえばそうではありません。ここには学生が体験してきた各分野での実習のいくつかをアレンジし、一例を示しています。

我流子育て支援論

（8）

～ 思春期後半・大人への過渡期 ～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸 由里子

義務教育を終えた子どもたちは、殆どが高校に進学している。その理由を聞くと多くが、「高校くらいは出ていないと就職が無いから」とか「みんなも行くし取りあえず」という。高校を出て〇〇大学に進学し、××を勉強したいからという、将来への展望をしっかり持った子は少ない。しかも、高校をどのように選んだかを聞くと「学力に相応しいから」、「親や教師に勧められた」が圧倒的で、その次が「どうしても行きたいと思った学校だったから」となっているようだ。女子の場合は「制服が可愛いから」という理由も加わる。

高校のスクールカウンセラーをしていると、学校によって違いがあると感じる。レベルの高い高校では、保護者もインテリで社会的にも認められているため、子どもに、「親と同程度あるいはそれ以上にならなくてはならない」という無言の（時にはあからさまな）プレッシャーをかけているケースに度々出会う。しかも本人自身、勉強をすることの必要性を強く感じているのに、学力がついていかないと悲劇になる。一方、レベルの低い学校では、「高校は卒業できればよい」程度に考えていて、大学や専門学校に行ければ尚良いと思っている子が一部いるものの、既に大学で行けるところは限られ、保護者の経済状況によっては、それも断念せざるを得ない子も多い。

また、それぞれの家庭の事情というのも当然あるし、それは、高校のレベルの高低に必ずしも関係はない。

高校から更に大学や専門学校に進む子や、早々に親になって行く子と、この頃から人生が大きく分かれていく。そこには家庭、家族の問題や影響が絡んでいる。１０代で妊娠出産した母親の子は、やはり１０代で妊娠出産することも多い。

ここで、思春期後半によく見られる問題を述べてみよう。

まずは、保護者の夫婦関係の問題である。

長くなりつつある思春期の最中に、父母の関係性が悪くなり、浮気の問題や離婚の問題、再婚の問題などが見られる。家庭基盤がしっかりと安定しない中で、思春期の心の揺らぎを抱えた子どもたちが不安定になるのは当たり前の結果であろう。しかも様々な形でそれらの問題に巻き込まれるのである。

母子家庭で、母親に彼氏ができ、その上ヒステリックに子どもに当たる事例があった。母一人子一人の中で、娘は家事のやり方が悪い、帰りが遅いとなじられ、思春期の娘の気持ちを全く理解せず、まるで子どものような振る舞いを続ける母親。可愛らしい母親に比べ、娘の容貌は普通。実父は既に再婚して家庭を築いているため、実父に頼るわけにもいかない。しかも大学で家から出たいと訴えても、受け入れてもらえない。勉強をする気が無くなり、成績はどん底まで落ちて行った。母親と口をききたくないため、部屋に閉じこもるが、そこに母親がまた入り込んできて本人の気持ちをかき乱した。「死にたい」と何度も訴え、カウンセリングでフォローしていた。良かったことは、彼女には同じような境遇の友人がいて、二人で支え合えたことだ。高校の間に、娘の方がどんどん大人になって、母親を「しょうがない人」と受け入れて行ったが、3 年間、決して平和な日々ではなかった。

母子家庭、母親に男、母子関係の悪化の三拍子がそろっているケースのなんと多い事か。母親は自分の娘に対し、極めて威圧的になり、コントロールしようとする。それは、思春期の親子関係ではよく見られる現象ではあるが、コントロールしようとすればするほど、関係は悪化する。悪化した結果として、引きこもり系は不登校に、飛び出し系は非行になっていく。

ちょっとここで話がずれるが、最近の傾向として、全般的に非行系が減っているように思う。それだけのエネルギーが無いのである。

少年院に入っている子どもたちの数は、激減である。10 年前の約半分。人口減よりもずっと大きな変化である。少年院に入るような問題を起こした方が良いと言っているわけではないが、思春期に大人に対し反抗的な態度を取り、汚くずるいと思う大人の仲間入りをすることへの抵抗感から必要以上に強く反発するのは、当たり前の行動であろう。しかし、思春期の反抗的態度が殆ど見られない子供によく出会うようになった。そういう子どもたちが良く言う言葉に「面倒くさいから」というのがある。あれもこれも面倒くさいのである。母親に反抗したら、うるさく言われて返って面倒だから何も言わない、先生に反抗したら問題になるから何も言わない、というように、黙って過ごして行こうとする子が多くなっているのだ。一見良い子ではあるが、小さい

頃から家族の目に曝され過ぎた結果ではないかと感じる。

話を元に戻すが、最近の高校生・大学生を見ていると、全般的に女子の方が元気で、男子は大人しい雰囲気が強い。草食系男子と肉食系女子というイメージである。男子はとても優しく、女性的になりつつあるようにみえる。一方女子は益々しっかりして、積極的で、リーダーシップをとっている。

相談場面でも、リストカッターや拒食の男子生徒が増えた。女生徒からの相談で「彼氏と別れたいが、『別れよう』と言うと『手首切って死んでやる！』と言われ、別れられない。」と言う話も聞かれるようになった。ちょっと前なら女子のセリフだろう。「狩る」ことが無くなり、平和な現代では命の危険にさらされることもなく、闘争意欲は低下している。学力偏重や寄らば大樹の考え方が薄れ、競争意識も減った現代では、男性に強さやたくましさは余り求められないのかもしれない。女性的で優しい男性が良しとされ、男性が体毛を気にし、化粧をするようになっているのだから性の逆転ともいえる現象があっても何の不思議もない。これからまた転換期があって、強くたくましい男性が良しとされる時期が来ると良いのだが、性の差異、性の特徴が段々あやふやになっている。

また、思春期の子供たちの人間関係はと言えば、とても希薄で、表面的な場合が多く、人格のぶつかり合いを避けている。自分の人格を形成する上で、他人の人格と接していくことはとても大事である。「自分の顔を知るのは他人の顔を通してである」と言うサルトルの言葉のように、他人を通して自分を知るためにも、自分の素を出すべきだが、傷つくことを恐れる子どもたちは、素をひたすら隠す。そんなことでは人格は成長しない。

自分の素の思いや考えをぶつけることを恐れ、ひたすら「良い人」を演じる。思春期の人間関係は子どもたちが思っているほど取り返しのつかないものではなく、いくらでもやり直しがきくのだということを理解していない。他人に対する気遣いばかりにエネルギーを消耗し、全体的にエネルギーが低く、「若さ」のエネルギーが感じられないのである。先ほど述べたこととも繋がる。

さて、思春期の終了とは何か。それは大人になると言う事であろう。経済的にも精神的にも自立し、社会で適応的に行動し、仲間を作り、家庭を持つなどが可能となることであろう。成人式の意味はかつては大人になると言う事であったと思う。しかし、２０歳を向かえる前も後も、何の変化もなく、お酒を堂々と飲めるようになった事以外は、相変わらず、いつまでも子どもっぽく、社会常識や社会性と言った、「大人として自立すること」に向けての思春期の課題を中々クリアーしない。それには、以前に述べたように、人生が長くなって慌てて大人になる必要が無くなったことも影響しているだろう。結果として、思春期の期間がどんどん長くなり、３０歳を過ぎても思春期の問題をクリアーしていないケースに

多く出会う。そういう人が父親、母親になると子育てに様々な問題が起こる。支援者としては、こうしたケースに頭を悩ませることになる。だからこそ、思春期の子どもたちへの自立や人間関係、親になることについての教育に力を入れて行かねばならないと思うのである。

子ども側の問題だけではなく、保護者の問題も大きい。

大学の入学式に保護者が沢山参加するため、学生の数が多い大学では大きな会場を用意しなければならなくなった。もちろん卒業式も同様である。さらに社会人になっても、会社の入社式に両親が来たり、病欠の連絡を母親がするなど珍しくもなくなった。ちょっとしたいじめ（意地悪）が職場で起これば、母親が上司に直接文句を言いに来る事さえある。

中学期で述べたように「思春期は大きな生簀で放し飼い」と筆者はよく保護者に伝えているが、生簀が小さ過ぎる保護者が多い。反対に、全く囲いが無い保護者もいて、こちらは無法地帯と化す。これも困る。

生簀の囲いは基本的に、他人に迷惑をかけたり、法を犯したり、他人を傷つけたりと言う事だろう。子ども自身が失敗して痛い目を見ても、放っておく勇気が親には必要なのである。しかしその勇気がない。子離れできず、いつまでも小さな囲いの中に閉じ込めようとしている。

何時まで過保護に子ども扱いをしていくのか？そうやって子ども扱いをすればするほど、大人になる過程は阻害される。もし、子どもに力があれば、反抗して「うるさい！」と怒鳴ってみたり、サッサと家を出ていくこともできるが、そういう力もない。小さいころから親に気を使って、親を悲しませたくない、心配掛けたくないと言いながら、問題を抱えても解決することもなく、ただひたすら我慢したり、無かったことにしてきた子にそんな力があるわけもない。

昨年、引きこもり対策と言うことで、３９歳までの対応をする部署を役所に置くようにと言う通達が出たようだが、引きこもり青年の相談でも子どもたちの力の無さ、思春期の長期化、保護者の過保護の問題を感じている。保護者が引きこもらせているのではと思う事例に出会うことも増えた。

例えば、３０代の男性。大学卒業後就職したものの、数年で辞め、違う仕事についても長続きせず、結局もう１０年近く自宅でぶらぶらしている。友人関係もどんどん消滅して、最近はコンビニに出かける程度とのことだった。家では家事を手伝うでもない。保護者に追い出す気持ちはあるかと尋ねると、「やっぱり追い出さないとだめですか？」と返された。追い出すも追い出さないも、筆者側が決めるようなことではないが、自立させたいと思うなら追い出す覚悟も必要ではないかと伝えた。

それから半年たって、再び相談にいらした保護者から、「アパートを借りて家を

出す覚悟を決めた」との話がきかれ、その決断を支持したが、すぐ後の言葉が、「それにしても、当分は生活費を援助してあげないとだめですよね。」であった。「いくら援助するおつもりですか？」と聞いたら「１０万円くらいは・・。」とのこと。それだけあったら、何もしなくても生活できるだろう。引きこもる場所が変わるだけである。保護者にそう伝えて、「せめて半分にしましょう。」と提案したが、その後どうなったか。しかも帰り際に一言「今年の正月はお年玉をあげませんでした。」と胸を張る勢いでおっしゃった。まだまだ前途多難と思ったのを覚えている。

また、発達障害を持った引きこもり青年の就労についての相談も多いが、こちらも多難である。高等養護等を卒業した子どもは、就労支援がしっかり出来ているし、福祉制度に乗っているので比較的安心だが、普通に高校や大学を卒業しながら、発達障害故に職場不適応を起こして働けなくなったり、鬱になっている青年の支援は大変である。面談が出来れば発達障害がありそうか、鬱の症状がありそうか分るし、保護者が正確に様子を伝えてくれれば見当もつく。しかし、発達障害の診断や鬱の診断のために、精神科受診に繋ぐのに一苦労。そこをクリアーしてからも、障害を受容し、抱えての就労に進めるのに更に一苦労。そして、ジョブコーチを付けてもらい、適当な職場に就労させても、また人間関係でトラブルを起こすので、そこでも又苦労がある。成人であれば、障害者年金を申請したいかどうか、更に支給してもらえるかどうかも検討していかねばならない。

発達障害を持つ青年たちは、彼氏彼女を作りたいと思いながらも、対人面の弱さから中々積極的に関われないか、積極的すぎてストーカーまがいになり嫌われるなど、上手く行かず悩んでいる。そんな彼らや人間関係が苦手な人たちが入り込むのが、ネットの世界である。出会い系のサイトに登録し、やり取りするうちに結婚するケースも多くなった。女性の場合は、寂しさから異性との交流に執着し、妊娠してしまうケースにも出会う。しかし、メールでのやり取りは必ずしも事実だけ述べているわけではなく、ちょっと付き合って、良くお互い知りもしないうちに、妊娠し、結婚に至っているケースでは、離婚になる事も多い。

こうして出会い系で知り合う青年たちを見ていると、親子関係にも問題を抱えていて、自己肯定感が低く、人格形成も不十分で、思春期が終わっていないケースも多い。そんな状態で親になっても上手くいかない事は想像に難くない。もちろん皆が皆と言うわけではない。

以前にも述べたように、基本的には人間は動物なので、子を産み育てる能力を遺伝子の中に持っている筈で、妊娠出産を通じて親になっていき、更に子育てをしながら親育ちをして行くものである。それは、子を第一に考え、自己犠牲的に子育てをして行くことで育っていくものと思う。しかし、極めて自己中心的で、自分を第一に考える親が多く、自己犠牲が我慢できず、子どもを育てる事をスト

レスに感じ、虐待を生むことまである。

頻繁な授乳が嫌だ、おむつを替えるのが気持ち悪い、吐かれるとどうして良いか分らない、泣かれるとパニックになる、夜泣きがうるさくてイライラする、寝てくれない、食べてくれない、要求がうざい、「何で」ばかり繰り返されて煩い、出来もしない癖にやりたがるのが腹が立つ、etc.

こんな訴えはすべて、子育てでは当たり前のことや、心身の発達に伴って起こってくることなので、親がドンと構えて対応したり、発達上当然のことと受け入れていれば、自然に成長し変化していく。しかし、それが出来ない親が多いために、子育て支援はどんどんきめ細かく、親切になり、その分親は我慢すること、気長に待つこと、何とかなると思えることなどを学ぶ、「親育ち」の機会を失っているのではないか。

ネットを活用して、子育てのノウハウを学ぼうとしている若い親も多いが、ネットに書いてあることが全て我が子に当てはまるか、或いはネットに書かれている親に自分が当てはまるかなどの検討もなく、情報だけを鵜呑みにして、父親に「ネットで皆言っている」とか「ネットに書いてあった」と言い張り、喧嘩になる夫婦もいる。「皆って誰？何人？と突っ込みたくなる」とある父親が嘆いていた。子育ての悩みを先ずは父母が共有し、一緒に悩み、解決を考えることが、家族としての第一歩だと思うが、そこから躓いている事も多い。そこには父母両方の成長度が関係していると思う。親として十分育っていない者が、子どものために我慢したり、頑張ったりできるはずもない。

思春期を終えないうちに父母になり、子育てを始めることで、周りの支援者は不安を抱く。そんな周りの不安をよそに、乱暴な子育てでも何とか育てている父母もあれば、ネグレクトになっていく父母もある。その見極めは、医師、助産師、看護師、保健師などの勘に頼るところが大きい。

我々支援者はこうした父母をいち早く見極め、必要な支援をしながら、父母を育てて行かねばならない。しかしながら、それには膨大なエネルギーが必要になる。しかも、何のプログラムもない中、やり過ぎない、程々のところで支えて行かなければ自立はあり得ない。

支援者として、依存を生まないように気を付けながら、しかも子どもの安全と健全な育ちを第一に考えねばならないのである。それは時には大きなジレンマを抱えながらの支援となる。子どもを親から引き離せばよいと言う事にもならないし、子育てをその親に任せておけば、子どもに様々な心理的影響を与え、今後の育ちに問題を生じると分かっていても、目を瞑らねばならない事もあるのだ。

今まで、子どもの育ちに添って、子育て支援について論じてきたが、こうして思春期、そして、親になる世代まで見てくると、最近の子育て支援は、至れり尽くせりだと感じる。しかもお金の有る無

しが、受けられる支援に差を生んでいる。今のような不況の時代に、持つものと持たざる者の差が大きくなるのは仕方がないとしても、子育て支援としては、出来るだけ差が無いようにしたい。そのためには、お金を親にばらまくのではなく、無料の支援を増やす方に使えばよいのである。だからと言って何でも支援すればよいと言う事ではない。必要な支援を程よく準備しておくと言う事である。もちろん、利用者の査定はしっかりしなければならない。

最近のマスコミを見ていると、子育ては「楽しいもの」「幸せなこと」、子どもは「この上なく愛しく可愛いもの」という幻想を、若い世代に与えすぎなのではと思う。それは少子高齢化の施策として、政府が国民に植え付けた幻想なのではと思ってしまうのは筆者の思い過ごしか？その幻想故に、現実の大変さにぶつかり、「こんな筈では・・・。」と幻滅し、自信を無くし、子育て支援を必要とする親を増殖しているのではと思う。子どもは泣くし、わめくし、汚すし、何度言っても同じことを繰り返すし、反抗するし、面倒くさいし、手がかかるもので、子育ては大変なのだと、何故事実を伝えないのか。子どもを産ませるための罠にはまらず、冷静に、子を持つことを検討し、準備してから産めば良いのである。そして、子育ての醍醐味は、子離れの寂しさもあるが、最終的に一人の人間を大人として自立させたときに感じる達成感であると伝えればよい。

また、性の衝動を抑える事も出来ず、子を持つ準備のないまま、親になってしまうことは、親子双方にとって不幸なことだ。人間には理性があり、自分をコントロールする力がある筈ではなかったか。子を持つことについて、もっと慎重に、よく考えて行動するよう思春期から教育して行かねばならないと思うのである。

子育てについても理想を押し付け過ぎてはいないか、気を付けなければと思う。今より少し良くなれば良しとされるならともかく、ちょっと良くなればもっと上を要求される。完璧な親などどこにも存在しないのに、完璧を意識してしまう母親たち。１００点満点志向の教育を受けてきた影響が、母親のゆとりの無さの原因になっていないか。また、支援者にも１００％が要求されれば、支援者のストレス、疲弊も生半可なものではなくなる。親の能力、経済力、環境を考慮して、必要最低限の子育てがどの程度かという線引きを、しっかりしていく必要があるだろう。上を見れば、欲を出せば、支援にきりがなくなる。

何事も「適当、程々、好い加減」。以前も述べたように、これは筆者のモットーである。子育ても子育て支援も、「適当、程々、好い加減」でやっていけば、きっと良い子育てと子育て環境になっていくのだろうと思う。「過ぎたるは及ばざるが如し」今こそこの言葉を子育て中の保護者と子育て支援者に贈りたい。

次回は虐待について書いてみようと思う。

連載 8

片 道 切 符

荒木 晃子

「ひとつだけ、どうしてもあなたに教えてほしいことがある」

前回、少し時間をおいて面会したＢ子さんは、面接が終わる間際、あらたまった口調で言った。彼女からの質問は初めてだ。

「もし、いま不妊に悩みはじめたら、どこに相談すればいいの？」

最後にそう結んだ問いかけに、私は即答することができなかった。

個の事情と公の利益

「あれから、ずっと考えてたの、昔の自分のことを。ああ、私にもあったんだなって。不妊治療だけではない解決法が。って、今頃気づいても遅いけどね」

シンポジウムの後、久しぶりに会うＢ子さんは、いつもの調子で口火を切った。先日、「家族の創成と再統合シンポジウム」の会場を後に言葉少なに肩を並べて歩いた、あの疲れ切った彼女の面影はない。ひとしきりシンポジウムの感想を述べる中で、「（前略）**あの会場の壇上にいた人たちも、ずっと以前から、私たちの選択肢の先にいて、私たちを待ってくれていたということ。そして、その頃の私は“そのこと”を知らなかったんだということ」**

その後に続くことばのかわりに、大粒の涙から彼女のおもいが伝わる。かつて自分が選ばなかった選択肢があったこと。もし、その道を選んでいれば、そこに自分を待っていた援助者たちがいたのだということ。そして、そのことを自分は知らなかったんだということ。いま、それを知った喜びと、かつて知らなかったことへ悔しさなのか、それとも、もう引き返すことができない悲しみからか、いずれにしろ涙の理由を聞く必要は無いと感じ、私は待った。

一呼吸おいたのち、多少は気持ちが鎮まったのか、冷静さをよそおうかのように整然とした面持ちで再び語りはじめる。

「一般常識としてなら、不妊治療以外の選択肢があることを知ってはいても、自分では子どもが産めない、不妊だから、といった個人的な事情は、養子を迎える理由にはならないと思っていた」

こう語ったＢ子さんのことばには一理あ

る、そう感じた。もし、「個人的な事情に公共の利益は伴わない」という考え方が私たちの生活に浸透しているならば、B 子さんの考え方は間違ってはいないだろう。「実子ではない子どもの親になる」ことが、「子どもの福祉のためでなければならない」とすれば、「不妊で悩んでいる」という理由だけでは、実子以外の子どもの親になることはかなわない、となる。

つまり、不妊に悩み、児童相談所、もしくは地方自治体（各市町村や保健センター等）に設けられた不妊相談窓口に在籍する相談員に相談する際には、「実子にこだわらず、児の福祉のために、子どもを育てることを検討する」という前提なくしては、不妊問題解決の相談はできないと考えざるを得ないのだ。では、不妊という個人的な事情はあるが、家庭を必要とする子どもを養育したい、場合はどうだろう。「子どもを迎える動機は不妊」だけれども、迎えた子供の幸せを願い、子どもが安心して暮らせる養育者となりたい、という相談は児の福祉の考えにそぐうものではないだろうか。その場合、不妊の悩みは、自己の責任において、それ以前に整理されていなければならない問題として扱われるだろう。やはり、児の福祉を守るシステムに、不妊当事者の悩みに対応する機能はない。

「シンポジウムで、里親養親制度は子どもの為にある、と説明しておられたように、子どもの福祉を前提とした社会制度には当てはまらない、と感じていたのかもしれない。（中略）不妊だから、といった理由で自分を受け入れてくれるところは生殖医療施設だけ、そう思い込んでいたし、当時は実際にそうだった」

当時、不妊のことを誰にも相談できず、不妊に関する情報さえも知りえなかった B 子さんが、そう考えるのも無理はない。確かに、自分に起きた問題への対処として、“常識として知っていること”が、実際に“自分の解決策となる”とは、限らない。**「制度があることは知っていたけど、それが自分の選択肢の一つだとは思わなかった」**とは、まさにこのことをいうのであろう。

不妊は不合理

女性が子どもを持つことを意識した際に、まず「パートナーの子どもを、自分で産みたい」という発想が自然という前提で考えると、「実子以外の子どもを育てる」という発想への転換は、容易ではないはずだ。当然、「自分の子どもを産む願望」から、「実子以外の子どもを育てる親になる」思考への移行は、スキーマの転換と同様に、個人が単独で容易に成し遂げられる変遷ではないだろう。さらに、彼女は**「それに、どこにも不妊の悩みを相談するところがなかったの。もちろん、医療施設にもね」**とも語っている。つまり、不妊問題に対する援助者を持たなかったのだ。

「もし、いま不妊に悩み始めたら、まず、どこに相談すればいいのかしら？」

最後に、訴えるように向けた彼女からの問いかけは、かつて、彼女が誰にもたずねることができなかった質問でもあったのだ。彼女が生殖医療施設にたどり着いた際も、不妊を治療する対応はできても、“その悩み”は相談できなかったということになる。

医療施設では、受診する患者に対して、必要だと診断された医学的処置を拒むことは、異本的にあり得ない。しかし、その場

合も、挙児希望の患者に対する医学的処理なのであって、決して不妊の悩みを相談できるわけではないことは知っておいたほうがよいだろう。大半の医療者は、不妊治療する患者を診る（看る）のであって悩みを相談する人たちではないからだ。

最近の傾向として、生殖看護の専門性を持つ「生殖看護認定看護師による不妊相談」を実施する施設がある中で、治療内容のみならず、その他不妊にまつわる様々な相談に対応しようとする医療の試みが増えつつある。日々通院する不妊症患者のケアとキュアを担う看護職者たちは、その必要性を以前より周知していたことも理由の一つであろう。同時に、それは当事者のニーズと一致するものでもあった。しかし実際には、不妊治療中の当事者は妊娠を目的に通院することが大半で、自ら妊娠すること以外の不妊問題解決策を医療現場で相談することは稀有であった。社会には、生殖医療現場以外に不妊の悩みを相談する社会機能は稀有であること、そのうえ、医療現場には治療しても妊娠できない当事者が実在するという状況下で、医療者たちは「当事者家族の問題」として、その対応に苦悩してきた実際がある。この現状は、過去に開催された生殖医療者の各種学会でも報告され、大きな課題となっていた。その対極に、子どもの福祉現場では、不妊当事者カップルへの対応に苦慮する援助者たちの問題が発生していたのだ。

もちろん、不妊に悩むすべてのカップルが生殖医療を受診するわけではない。人によっては、その前に、有名な子授け寺へ子授け祈願に出向くカップルや、気分転換に日常を離れて夫婦旅行に出かけるカップルもあるだろう。なにもせず、ただ自然に運命をゆだねるカップルも存在する。当事者にさまざまな考え方がある中で、そのカップルなりに何らかの行動を起こすとき、実際に生殖医療施設を選ぶカップルが多いことは既成の事実だ。

特に、「パートナーの子どもを自分で産みたい」という自然の摂理にかなった動機は、不妊に悩む多くの女性たちのベクトルを生殖医療施設へ向ける。そこでは、自然に妊娠できない、という前提での不妊治療がスタートするのであるから、その時点でこころに葛藤が生じることは避けられない。このような状況への対応策として、近年、生殖医療施設の中には、生殖医療の専門性を持つ心理士が在籍し、定期的に心理カウンセリングを実施する施設も増えつつある。

前回、B子さんの問いかけに、「不妊に悩み（自分で子どもを産むという前提で）相談に訪れるところ」として、まず、最初に生殖医療施設を思い浮かべ、当事者からの相談を担う生殖医療心理士から、質問への回答書を受け取ったのだった。

はたして、最初に生殖医療施設を訪れた場合、「不妊に悩んでいることを相談」できる環境がどの施設にも用意されているのだろうか。前回、その点を質問項目に入れ送った生殖医療心理士からの回答書には、**「（前略）治療を終結したカップルがその後の人生設計を再構築し、治療以外の選択肢への移行を余儀なくされることを意味するのではないでしょうか。このことを、これまで生殖医療現場の心理士として、ときに不合理に感じることもありました」**とある。不妊現象の解決に、生殖医療は万能ではなく、また、当事者援助を担う医療現場の心

理士も、ときに不合理に感じることがあるというのだ。不合理とは“合理性がない意”であるが、何が合理的ではないのだろうか。後日、質問に回答を寄せた心理士に直接面会し、対談する機会を得た。

心理士はかく語りき

「お送りした書面で、わたしが不合理と申しましたのは、当院のことだけではなく、治療した結果、子どもを授かることができなかったすべての患者さまに対して、わたしが日頃感じていることなのです」

おそらく同世代だろうか、落ち着いた雰囲気の女性心理士は、簡単な自己紹介の後、さっそく本題に入った。

「世間では、結婚年齢も徐々に上がっているといわれますが、確かに、最近では、初診の際、すでに 40 歳を超えた女性もおられまして、俗に言う高齢出産の域に入った方は、最初から妊娠率もそう高くはありません。そこから治療を始められるのですから、当然のように結果がついてこない方が多数おられます。ご存じとは思いますが、不妊治療には、妊娠に必要な条件が揃っていれば、たとえ年齢が高くても、絶対妊娠できない、つまり、妊娠率ゼロ%とはいえないのです。対して、いくら年齢が若くても、妊娠率が100%とはいえないのも事実です。この、私たちが高齢と呼んでいる 30 歳代後半以上の患者さまが、最後の望みをかけて長期間に及ぶ治療をいよいよ終結される場合、その終結する決心をつけることにもかなり苦しい思いをされるケースに頻繁に出会います。実際に、年齢も 40 歳を超え、40 代後半以上の方が多いかもしれません・・その中に、時折、養子をもらうことを考えてみる、といって医療現場を離れる方がおられるのです。以前、そういって治療と同時に面接も終了したひとりの女性がおられました。ところが、後日、そうですね、数カ月もたった頃でしょうか、その方から再び面接の予約が入りました。お送りした書面にも書きましたが、治療を終えた方がカウンセリングにだけお見えになるのは、決して珍しいことではないのですよ。気持ちの整理に時間がかかる方や、これからのことを考えたい方など、理由は様々です。また、治療中、カウンセリングを有効に使いながら無事出産を迎えられた方の中には、生まれた赤ちゃんを連れて、あいさつ代わりに面接に来られる方もおられるのです。治療中は気持ちが沈み、問いには涙を流しつつ、辛い思いをされながら頑張った結果、授かったお子さんですから、会って欲しいのかもしれませんね。ええ、来室した方は皆さん同じことをおっしゃいますよ。『この児をみて欲しかった』と。私としては、その子の誕生までには、及ばずながら多少は力になれたのかもしれない、そう思うことにしています。しかし、あくまでも、結果は、ご夫婦の努力で出されたのですけれど。医療現場で働く者たちは、ご夫婦が妊娠を目指して頑張っておられるのを支援することしかできませんからね。でも、やはりうれしいですよ、そんな面接は。どなたも、治療中の表情とは全く別人のようで、これまでに見たこともないような喜びにあふれたお顔で、赤ちゃんをしっかり抱いて来室されます。じつに、カウンセラー冥利に尽きる瞬間ですね」

なんとも、うれしい話を、実にうれしそうに話すものだ。先ほどまでの、心理士と

しての客観的な意見を語る時とは違う、まるで、娘が孫を連れて里帰りする話をはずかしそうに、でも少し自慢げに語る母親のようにもみえる。

「話は戻りますが、その方も、てっきり養子縁組がうまく進んでいるのかと思っておりましたところ、実際にお話をうかがって驚きました」強い口調で話を切り替えた、その表情は険しかった。

いきどおる

「ご存知ですか？実子以外の子どもを育てるには、厳しい条件や煩雑な手続きをクリアしないといけないことを」

大まかには理解していた。先日の家族シンポジウムでも、その手続き、特に、夫婦の年齢制限について経験者のパネリストの方が熱心に語っておられた記憶がある。その話を伝える。

「やはりそうでしたか・・実は、その方も『子どもがほしい一心で、一生懸命不妊治療を頑張ってもできなかったことを、勇気を出して話したのに、門前払いに近い形で、けんもほろろに追い返されてしまった』と、泣きながらおっしゃっていました。『もう二度と行きたくない』とも・・返す言葉が見つかりませんでしたね、あの時ばかりは」

いったい、何があったのだろう。養子を迎えることを前提に、その専門家に相談するために訪れた場で、どんなやり取りが交わされたのだろう。怒りと共に疑念がわき起こる。そんな私の心中を察してか、彼女は話の先を急いだ。

「その面接の際も、とても感情的になられまして、激しい口調で、泣きじゃくりながらお話しされていました。確かに、通院中の面接でも、治療をいつ辞めるか、この先、どうやって生きていけばいいのか、自分はこのまま一生不妊症という病気を背負って生きていかなければならないのか、など、次々に容易に答えを出せない悩みをぶつけてくるタイプの方でした。その方の詳しい状況をお話しするわけにはまいりませんが、普段は、知的で教養の高い温和な方なのですよ。でも、不妊治療では、この方のように、たび重なる治療の失敗を繰り返すうち、徐々に自信をなくし、本来の自分を見失っていくかのように変化される方も多いのです。その都度カウンセリングを受け、やっと気を取り直して、次の周期に期待をかけることを何度も繰り返すと、最後には、もう次に期待を持てないほど気分が落ち込んで、軽い鬱状態に入る方も珍しくはありません。治療周期は、女性の月経ごとにやってくるわけですから『毎月』が周期、そう考えると、毎月のように気持ちのアップダウンを繰り返すことになりますよね？これが治療中の患者さんの日常です。特に、高齢の女性は、日を追うごとに卵子の状態も、子宮やホルモンの状況も加齢と共に良くない方に変化します。だから、高齢女性の不妊治療は、よく、『時間との戦い』といわれることさえあるのです。その方も、いったんカウンセリングも終結されたわけですが、決して、本来の自分自身を取り戻し、治療終結後の生活やその後のことを冷静に計画的に考察できる状態ではなかったかもしれませんね。治療をやめると決心されてからは、急いで次の準備、この方の場合は、養子を迎えることだったのですが、その準備に取り組んでおられたのだと思います。やはり、治療が終わっても、時間との戦いが

続いていたんでしょうか。そう考えると、養子の相談をしたところでも、おそらく冷静に話ができなかったのかもしれません。『相談員に話す前から涙が止まらなかった』と言っておられましたから」

不妊心理の特徴の一つに、「感情のコントロールがむずかしい」とある。おそらくその女性は、自身の感情をコントロールしにくい状態のまま、養子を迎える準備を始めたに違いない。先日のシンポジウムでも話題となったが、彼らを迎える児童福祉現場の専門者たちは、“不妊当事者が面談に来る”ことを知り、その対応に困った経験はあるものの、不妊当事者への対応をどうするか、を特に意識しているわけではない、ということが過去の調査でも明らかになっている。その中で、（社）家庭養護促進協会理事 岩崎氏の報告にもあるように、最近協会を訪れたカップルの約 9 割に不妊治療の経験がある、という貴重なデータに目を見張る結果となったのだ。この協会では、少なくとも、不妊を経験したカップルという前提で研修制度を設けているという。では、全国に 20 以上あるといわれる、子どもを斡旋したり、里親・養親縁組を支援する施設や団体、そして、行政の児童福祉現場では、どういった対応がなされてきたのだろう。さらに大きな課題を抱える手ごたえを感じた。

「今日お話しさせていただいた大半は、これまでにわたしが出会った、不妊に悩み治療しながらカウンセリングを受けていただいた方々のお話しです。実際は、医療現場でカウンセリングを受ける方はそう多くはありません。さらに、不妊治療の施設以外では、不妊の相談ができるところはほとんどないらしいのです。これも需要と供給の関係故のことでしょうから、きっと、不妊の悩みを他人に話すこと自体に抵抗をお持ちの方が多いのでしょうね。身近な友人にも内緒で通院しておられる方も多いですから。かといって、ご夫婦以外のご家族がよき相談相手かといえば、決してそうとは限らないのも事実。家族が絡んで、問題がより複雑になるケースも、現にありますからね。わたしは、生殖医療施設にいる心理士だからといって、生殖医療技術にだけ詳しくても、患者さまのお役にたてるとは限らない、ずっと、そう思ってきました。おそらく、そのおもいをお伝えしたくて不合理ということばを使ったのかもしれません」

最後に自身で話をまとめ、女性心理士との対談は終了した。

禁じ手

不妊治療を選択すれば医療現場の心理士が、「治療する当事者カップル」の援助者となる。また、養子を迎えることを検討する際には、児童福祉現場の専門者が、「子どもを育てる親になるため」の援助者となる。確かに、それぞれの選択肢の先に援助者がいることには違いない。しかしながら、医療現場には、「養親になるための支援」はなく、児童福祉現場には、「不妊に悩む当事者への対処」はない。当事者たちは、自分で考え、自らいずれかの選択を決断しなければならないのだ。しかも、治療終結までに必要な時間は、妊娠が成立する以外には、自分でその終結時期を決断しなければならず、晩婚化が進む中では、年齢を意識した“時間との戦い”はやむをえないのだろう。医学的には、妊娠率ゼロ%はあり得ないのだから。なにびとたりとも、時間を巻き戻

すことはできない。また、時間の経過と共に歩いた人生の岐路を、引き返すことはできない。そのことを、身をもって経験したB 子さんに、意を決してたずねたいことがある。彼女に聴くことしかすべをもたない私が、いま、彼女に“それ”を聴くことを恐れている自分でもあることが分かる。聴き手が話し手に、聴きたいことへの回答を求めるときは、十分な配慮と、五感を使い全身で聴くかのような感性と注意深さが必要だ。今回だけは、満身創痍で臨まなければ、そう思った。

わたしには、聴かなければならない重要な質問がある。B 子さんとの面接が始まって以来、ずっと、それを聴くタイミングを見計らってきた。彼女が傷つくことなく、彼女が話せる内容を、話せるだけでいい、いつか聴かせてほしいと願っていたことでもある。本来は、あってはならない、“聴き手にとって重要な質問をする”ということ。しかし、いまは“その時”なのだと確信した。

＜筆者のトピックス＞

2012年2月17日付神戸新聞朝刊で連載中の特集「その手を握りしめて『第２部 親子になるために』⑥医療と福祉をつなぐ～幸せな縁結び目指して～」に、前号で紹介した立命館シンポジウムが掲載された。

（ http://www.kobe-np.co.jp/rentoku/kurashi/201202sonote/06.shtml ）

これまでも、毎日新聞くらしナビ連載中の「こうのとり追って」他、各新聞社による不妊、不育症、生殖医療などの特集を頻繁に目にする機会があった。また、里親・養親家庭や、社会的擁護下で暮らす子どもたちに焦点を当てた記事(特に、東日本大震災以降は急増した)も、以前より筆者の注目するところであった。しかし、いつも、それらは別々に特集が組まれ、「不妊」と「子どもの福祉」が過去に交差する機会は無かった。

今回、先のシンポジウムに参加し、後日筆者も取材を受けた神戸新聞社の女性記者や、メールでコンタクトしてこられた朝日新聞 GLOBE 記者に、筆者は同質のおもいを感じうれしかった。

（ http://globe.asahi.com/feature/2012012600010.html ）

「親になりたい不妊当事者と家庭を必要とする子どもたち、相互を結ぶシステムを。そして、いろんな家族がそれぞれの幸せを喜びあえる社会をつくりたい」彼らに出会い、長い間抱き続けたその願いは、決して筆者だけのものではなかったことを知った。

医療者であってもなくても、自分で産んだ子を育てることができた・できなかった人たちにも、その出会いをよろこび、懸命に家族になろうとする者たちのよき支援者であって欲しい。それを願う社会になって欲しい・・筆者のおもいは尽きない。

対人援助学＆心理学の縦横無尽(5)

複線径路・等至性モデル、世界を駆ける

サトウタツヤ＠立命館大学文学部心理学専攻

この頃、ありがたいことに、外国の研究者から「ぜひ来て講演してほしい」という依頼がくるようになった。ここで私がジンバルドーなら「健康上の理由からファーストクラスでしか移動しない！チケットを用意せよ！」などと言えるのだが（実話）、つまり招聘者がファーストクラスチケットを用意せざるを得なくなったりするのだが、私の身の上といえば実際には「予定していた予算の１／３しか獲得できなかったので、自腹で来てほしい」などというトホホな話になっている。それでも、きっかけ、チャンスをもらえるのは本当にありがたいことで、2012 年にはイタリア、ブラジルで講演のようなことをしてきた。いずれも文化心理学およびその方法論としての複線径路・等至性モデルに関する話や法と心理に関する話を学生・院生にしてほしいという依頼である。ぶっちゃけ、ブラジル（の一部）では、日本より複線径路・等至性モデルに関する研究が盛んだったりしている。

複線径路・等至性モデルとは、システム論に基づく質的研究法の一種であり、等至点に対する径路の多様性を認めようとするものである。研究者が調べたい、考えたい、と思う現象を等至点として設定し、そのことを経験した人（たち）に対してナラティブ調査などを行う。そしてその人（たち）が経験した径路を描くのである。ただし、その時にその人（たち）が経験しえなかった径路についても描くことを特徴とする。

2012年1月　イタリア

2012年1月末はイタリア。レッチェ大学のセルジオ（Salvatore 教授）とサレント大学のピナ（うーん、名字は何だったのか・・・）が呼んでくれた。いずれも南イタリアで、レッチェは長靴のカカトのあたり、サレルノは足のスネのあたりである。日本の中部地方が南北に連なる電車が無いように、イタリアは東西をつなぐ電車がなく、バスで移動ということになる。

さて、レッチェ大学ではマスターコースの文化心理学に関する大講義の一コマで講演を行った。私のつたない英語では何も伝わらない恐れがあり、セルジオがイタリア語に訳して説明してくれている。授業が終わると記念写真を撮ろうといってくれる学生さんもいて、和やかに記念写真。ピースをしているのはイタリアの習慣ではなく、「日本人は口をあけずにピースサインをするのが笑顔なのだ」という話をしたため、それを喜んで実践してくれているのである。

この話はエモティコンの比較の文脈で出てくる。日本の顔文字は(^_^)ということだが西洋というか（東洋以外というか）では:-)のようなものが使用されている。単に縦横の違いなのではなく、笑顔を目で表すか、口で表すかの違いがある。そして、日本では、写真を撮るときには歯を見せずにピースサインをする、という話をすると興味を持ってくれるのである。

レッチェ大学ではこの他、大学院生たちとも小さなセミナーをもった。さらについでながらセルジオは奥さんが単身赴任中だとのことで、息子さんのお迎えをしている。その様子がこの写真である。

そして、サレルノに移動である。朝5時発のバスで5時間揺られて到着する。サレルノ大学は古くから医学が盛んであり、健康のための指南書であるサレルノ養生訓というもので知られている。ピナ（左）とルカ（中央）が院生セミナーでの講演を依頼してくれたのである。昼食

は白魚。実は、サレルノで5年間くらい使ったラップトップコンピュータの液晶が壊れるという悲劇に見舞われたのだが、ルカは親切にも研究室で余っているモニターを貸してくれた。それによってホテルでも仕事ができたのである。今思えば(今、これはサンパウロで書いているのだが)、この時に壊れてくれてよかった。ホスピタリティに感謝である。そして右の写真はピナのダンナである。日本につれてきたら映画俳優くらいできるのではないかというイイオトコでした。

サレルノでも、文化心理学と複線径路・等至性モデルについての小さなセミナーをもった。また、ピナが法廷外紛争解決の実践活動をしていることもあり、法と心理に関するプロジェクトについての相談もしてきた。

2012年2月末～3月　ブラジル

イタリアから戻ってきて卒論の口頭試問や大学院入試やその他もろもろを片付け、2月末にブラジルへ。

バイア州のサルバトーレで行われる「第二回、国際文化心理学セミナー」への招待をうけ、大げさにいえばゲスト・コメンテーターとして参加を招聘されたのである。アナ・セシリア（アナ・セシリアまで名前。ファミリーネームは何だったのか？？）が率いるブラジルにおける母性を巡る文化心理学的研究の発表会を兼ねたセミナーである。研究が全部で１０くらいあったのであるが、驚くべきことにその全てに複線径路・等至性モデルが使われていたのである。複線径路・等至性モデルは自分で言うのも何だが、面白いとは思う。しかし、何もそんなに皆で使わなくてもいいのではないか、とさえ思えたのであった。

さて、この文化心理学に関するセミナーは、クラーク大学のヤーン・ヴァルシナー（写真中央）を中心にした国際的ネットワークがブラジルに移動した観があった。それは大げさであるにしても、タニア（スイス)、ナンディッタ（インド)、日本（私)、アメリカ（ヤーン＆ケニー）から関連する心理学者を招聘してセミナーを開催するアナ・セシリアの構想力には見習うべき点が多くある。

セミナーはサルバトーレに近い景勝地で行われた。風光明媚なところであり、何もこういうところでやらなくても、とも思うが、そういうやり方

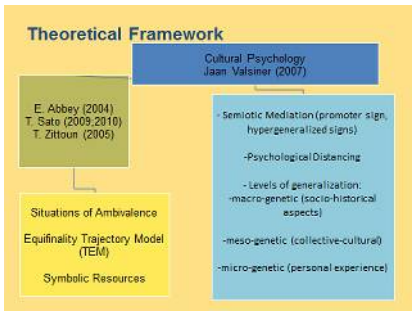
も文化のあり方であるから、その雰囲気を楽しむことにした。部屋のまどから椰子の木が見え、その向こうに海が見える（大西洋）。

さて今回のシンポジウムを開催したアナ・セシリアは向かって右、左側は同じくブラジルのリビアである。心理学に限ったことなのかもしれないが、とにかく女性教員が多いという印象をもった。院生も多くは女性であった。

今回プレゼンされた研究は、現代ブラジルにおける「母性を巡る移行(transition)と不定さ（uncertainty)」を巡って行われたと総括できる。詳細に述べることは不可能なので、テーマを紹介しておきたい。

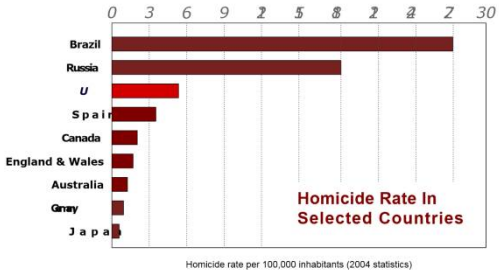
青年期における人生展望の消失、近代化の過程において従来的出産を選ぶという経験、繰り返される流産、HIV に感染しつつ子どもを持つこと、国を越えて（移民）子どもを持つこと、移民として子どもを教育すること、子どもを殺害されること、子どもを持たないこと、女であることを問うこと。

いわゆる「フツーの結婚 and/or フツーな出産」を巡る様々な思いや適応、という研究は今回の発表ではむしろ少数派であり、その周辺の様々な困難に焦点を当てられた研究が多かった。



こうした事情は、アナ・セシリアが公衆衛生に関心を持っていることとも関係しているが、それにしても、母性を巡る様々な困難が取り上げられている。右の図はある発表者のものだが、方法論としての TEM が理論的枠組みの中に位置づけられて、用いられている。これらの研究はケースに対するインタビューであり、複線径路・等至性モデルを用いて、その径路（トラジェクトリー）の描写を試みていたのである。

研究内容自体にいろいろ驚かされたこともあった。子どもを殺された母親の研究では、子ども 7 人のうち 3 人が殺害された母親がいたとのことである。



びっくりして調べてみたところ以下のようなデータがあった。2004 年における各国の殺人率の比較である。ブラジルでは 10 万人あたり約 27 名が殺人の被害にあっている。日本は約 1 名。両国の人口は 1 億人強というくくり方をすればほぼ同じであるから、この差には驚くばかりである。

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Homicide_rate_by_country.svg

今回のシンポジウムは午前 3 時間、3 時間休憩、午後 3 時間、というスケ

ジュールで３日間行われた。楽しい中に苦しさあり、というか、英語が必ずしも堪能ではない私にとって、個々の発表を聞いてコメントをするというのが大きな負担だったのも事実である。真剣に取り組んでいるからこそ、休み時間が待ち遠しい。この雰囲気、何かに似ているなぁと思ったら、高校の時のフェンシング部の時の合宿であった。時計の掛かっていない体育館で差し込む光の位置を頼りに、時間経過を計っていたことを思い出す。その時の監督が、「どんなに寝れなくても、夜は横になって休んでいろ」という指示を出していた。これは聞くべき金言である。「疲れているのに寝れない」のではなく、「疲れているから寝れない」のである。横になって休んでいることで疲れがとれ、寝れるようになるのである。二日酔いの時の方が早く目が覚めたり、海外にいる時の方が寝れなかったりするのも同様の理由である。疲れているときこそ、肉体を休める必要がある。それはともかく、三日間の濃密な時間はゆるやかに過ぎていき、最終日は海外からのゲストたちがまとめをする時間であった。英語を母語として操っている人はいいが、こちらはそうはいかない。夜のエクスカーションを断り、最終日の発表構想を練っていた。英語だけで勝負しても他のゲストより劣るに決まっているので、一計を案じた。会場にあったピアノを使うことにしたのである。心理学の重要概念に「ゲシュタルト」というものがある。これは日本語に訳すと（形態＋全体）÷２のような概念であり定訳はないのだが、19 世紀の哲学者・エーレンフェルスは、楽曲には個別の音が単純に足し合わされたものではないし、一方で、転調してもその質が変わらないとうことを強調し、その楽曲のもつ「その曲らしさ」の本質を「ゲシュタルト質」と表現したのである。つまり、音符の一つ一つを拾い上げても楽曲の質を味わうことはできないし、あるいは全ての音符を同時に弾いても楽曲の質を味わうことはできない、ということである。音を音符として表し、そこに表現された構成を時間にそって弾くことによって、楽曲のゲシュタルト質を表現することができるのである。「さいた、さいた、チューリップの花が・・」という歌は、ドレミ・ドレミ・ソミレドレミレ・と表すことができるのであるが、これらの音の中から任意に拾い上げて音を出していっても、この歌にはならない。また、一度に全ての音を出しても分からない。人生の質（Quality of Life）を考えるときに、音符を勝手に拾い上げたり、時間を無視して一度に全ての音を鳴らしているということは、無いだろうか？そういうこ

とを実演つきで話したのである。思ったよりもウケて良かった。写真は、アンジェラにバイアの有名な歌、Asa Branca（白い翼）という歌の弾き方を習っているところである。相当久しぶりにピアノを弾いたので小指の筋肉が衰えていることがはっきり分かった。

最後に記念写真をとってお開き。しかし、この写真を撮るまでも大変だった。写真を撮ろうとしないし、列になろうとしないし。とはいえ、この写真が未来から見たときに歴史の１ページに成れば良いと思う。

合宿研究会の翌日は、UFBA（バイア連邦大学）で法と心理学のディスカッションと講演。アナ・セシリアがセッティングしてくれた。

お互いに合宿が終わって疲れているところであるが、良い機会を与えてもらった。午前のディスカッションでは、法と心理学史の必要性や、心理学的なジャスティス概念について議論した。午後の講演では日本における法と心理学の展開を話した。法と心理学を担当している教員（正確には「法と犯罪の心理学」）が参加してくれて、議論も盛り上がった。

ブラジルでも日本食は人気があるということで、この日の昼食は日本食レストランにつれていってもらった。そこで寿司を頼もうとしたのだが、メニューに「New Sushi」と「Traditional Sushi」が別々にあった。こういうときはモチロン現地化した寿司を食べるのが王道である。そこで、New Sushi を頼んだところ、このようなものが出てきた。フレンチ化した寿司といったところだろうか。まあ悪くない、と思っていくつか食べてみたのだが、どうも変だと思うことがある。気になって、寿司を割ってみたところ、案の定、シャリが無かった。思えば、アナ・セシリアが頼んだ「サーモン・テマキ」なるものも、どう見てもシャリがなさそうであった。「大トロ握り一貫、シャリ抜きで！」「それって刺身じゃん」というような話を地でいくようなものである。

いよいよサンパウロに移動である。バイアからサンパウロは空路で 2 時

間強。人口２０００万人の大都会である。サンパウロ連邦大学では、リビアがいろいろと骨を折ってくれた。彼女の指導する大学院生が、私が書いた論文を読んだ上で議論に参加してくれたのには感激した。複線径路・等至性モデルの基本となる文化心理学の考え方、とりわけ記号の機能に関する説明と複線径路・等至性モデルの手順について解説を行った。論文だけでは説明しきれないことも多く、こうした機会に身近なやりとりができるのは楽しいことである。毎回強調することであるが、研究をするときに、TEM を使ってもいいが TEM に使われてはいけない、ということがある。ある種の方法論（M-GTA など）は、方法に従うことが良いことである、という気持ちで勉強している人がいるような気がしてならない。大事なのは、研究テーマであり、対象者の生き方に敬意を払うことである。研究（者）が方法論に従うのではなく、方法論が研究（者）に従うべきなのである。

さて、サンパウロ大学での講演の直後、その午後にはいわゆる「先住民」もと呼ばれる Guarani 族の保留地（リザベーション）を訪れる機会を得た。デニーロがその民族風習の研究をしていることもあり、同行することができたのである。サンパウロから南に 50ｋｍくらいのところに、Guarani 族の保留地がある。昔ながら、というか、民族継承的な、というか、表現は難しいが、暮らしを過度に近代化することなく、暮らしのあり方（Way of Life）を維持しようとする人々である。

現地に行ってみると、祝福の儀式、なるものが行われていた。宗教的リーダー（キリスト教なら Priest）が、交易を行う相手（いわゆる普通のブラジル人だったりこの部族を保護することを担っている人）を祝福する瞬間に立ち会うことができた。写真を撮ることはできなかったのだが、日々食料を運んでくる人は、頭をなでられ神の祝福を得ていたのである。ここでの神は、土着的な神とキリスト教の神とが融合した感じのものである（シンクレティズム）。生活必需品などの物資を運んできた人は、対価を受け取るのではなく、神から祝福を受ける。ここには、物々交換でもないし、金銭による売買でもない、一種独特の交換（エクスチェンジ）の仕組みがある。我々の一行は総勢 7 名で出かけたのだが、祝福の儀式に出席させてもらうという形をとった。そして、生活必需品も捧げさせてもらった（この写真の向かって右端がサンパウロ大学で心理

学と人類学を教えているデニーロである)。面白いことに、一度二度来ただけの人は神から祝福されない。宗教的リーダーに拝謁して言葉をかけてもらえるだけである。私もつたないポルトガル語で「Eu vin du　Japon（日本から来ました)」のようなことを喋ったところ、「おぉ、よしよし良く来た」とばかりに目の前で柏手を打たれた。

普通では経験できない文化的ツアーであった。以上の内容は、帰りのタクシーの中でリビアが英語で説明してくれたものであり、正確ではないことも多々あると思われるが、諒とされたい。

ついでながら、ブラジルの心理学がどのようなものなのか、を折に触れて聞いてみたところ、サンパウロ大学の心理学インスティテュートは、実験、臨床、発達・教育、社会・産業、神経科学という 5 つの部門に分かれており、それぞれに 30 名ほどの教員が所属しているとのことである。そして、その 150 名の教員に対して、学部生（5 学年）は合計６００名ほど、大学院生も同じく 5 学年で合計６００名ほどの定員だそうである。単純に計算すれば S/T 比が８：１である。連邦政府が運営しているとはいえ、すごいことである。心理学部に 150 人の心理学者がいるのである。さらにブラジルの心理学で驚いたのは、ミシェル・フーコーの考えが広く受け入れられていることである。日本の心理学者でフーコーを知っている、とか、何らかの影響を受けたという人がいったいどれくらい存在するだろうか。ほとんどいないだろう。ところが、ここブラジルでは、「職業としての心理学」５０周年を記念してフーコー著作集の翻訳が、心理学者によってなされるとのことなのである。フーコーに限らず哲学的思想や認識論が重んじられている一方で、先住民の土着的（インディジーニアス）な考えにも関心が払われている。臨床心理も神経科学もしっかりと組み込まれている。ブラジルの心理学は結構オモシロい、というのが私の結論である。北米型の心理学をモデルにするだけではなく、社会包摂的なブラジルの心理学をモデルにすることも、日本の心理学の選択肢としてあり得るのではないか、と思える。北米の心理学をモデルにするのもいい加減止めて目を世界に広げるべきであろう。ブラジルという国自体が発展中ということもあり、今後も目が離せないという印象をもった。是非また訪れてみたい。

ブラジルで気に入ったものは何かといえば、ブラジルだけではないが、ココナツ。その場で実を割って飲むのは私たちからすれば非日常的でおいしい。その他、各地の宿泊地での食事の様子をいくつか紹介するので、その雰囲気を感じ取ってもらえれば幸い

である。

最後に、食事に関しては、徹底した個人主義が根本にあるようで、食事は単品注文よりもバイキングを好むことが多く、個人支払いである。配膳後他者待ち行動などはモチロンなく、バイキングでとってきた順に食事を開始する、という感じであった。皆でわいわいとするような時でも（日本でいうところのコンパをするときでも)、注文は個別だし、支払いも個別であった。ウェイターが無線クレジット支払機を持って一人ずつ支払ってもらうのである。日本では、混雑時の個別支払いはお断り、という表示があったりするが、これもまさに日本的な文化的マナーなのだなぁと痛感した次第である。

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

7. コミュニケーションと絆の深まり

尾上　明代

このマガジンでは、A 児童養護施設で継続的に行ったドラマセラピー治療の事例を連載してきた。ドラマセラピーには多くの手法があるが、ここでは、いくつかのドラマゲームや即興劇手法を使って実施した、小さな「怪獣たち」（イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君）とのプロセスを詳しく提示している。

前号では、子どもたち、特にアンズの性的な言動が収束したのと反比例するかのように、アンズが積極的に創って演じたハッピーエンドのドラマについて解説した。今号では、ドラマを通して創ったラポールが、ドラマ以外の場面で深まった（特にリンゴとアンズとの）できごとと、彼女たちの変化を記述する。

＊　　＊　　＊

第１３回

浩二さんの辞職

助手の浩二さん（A施設の職員）が、施設を近々辞めることになった。今後は、ドラマセラピーのセッションのときだけ施設に来てくれるが、それ以外は、施設からいなくなる。そのことを最近子どもたちに伝えたと聞いたので、今日は、彼らはさぞ落胆していることと思う。子どもたちが大好きな職員だからだ。

セラピールームに、リンゴとイチゴが先に現れたので、二人の背中を撫でながら、彼女らの気持ちを理解していることを伝えた。リンゴからは、どうってことないという雰囲気が伝わってきた。もちろん、悲しくなかったのではなく、特定の大人たちに、継続的に変わらぬケアを求めることに、すでにあきらめがつく状態になっていたのだと思う。そもそも、ずっと辞めないで自分たちをケアしてくれる職員がいるなどという期待をしていなかったのだろう。

イチゴは、「別にぃーー」と言い、ことばとは正反対のとても悲しそうな顔をした。泣きたいのを堪えていたようだった。いつもふざけて笑ったり、ドラマで怒ったり、５人の中で一番表現力が豊かなイチゴではあるが、悲しい気持ちを素直に出したことは、あまりなかった。浩二さんがイチゴに辞めることを伝えたとき、彼女はすごく怒って泣いたと、あとで彼から聞いた。このイチゴの反応は自然である。浩二さんに、心をひらき頼っていた分だけ悲しみも大きかったのだろう。

アンズの欠席

前回は、アンズにとって非常に深い意味をもつドラマができて、セラピーのプロセスが大きく進展したが、そのようなセッションの後は、ゆっくり時間をかけて消化していく必要があるからか、そのクライエントの欠席が発生することがある。アンズも今日はお休みだった。しかし休みの理由が、彼女自身の理由ではなく、外的な理由（彼女の実家の家族の都合）だったのが、アンズの変化と符丁が合っているようで興味深い。

実は、この日のセッションの終わりに、リンゴと２人でゆっくり話すことになったのだが（これについては後述する）、いつも一緒にくっついているアンズがいなかったからこそできたことだと思う。このような「偶然」が期せずして変化を促し、またその変化を積極的に進めていくこともプロセスの一部である。

消えていく境界

この日も、パントマイム・ゲームを楽しんだあと、お約束の「床屋」のドラマを繰り返し、次にいつもの「動物園」ドラマに突入した。

しかし今日は、今までと違った興味深い変化が見られた。これまで何度となく行なっていた「動物園」ドラマでは、動物たち（子どもたち）は、しっかり檻を作ってその中で餌をもらって食べたり、交尾したり、眠ったりして生活している状態が演じられ、やがて飼育係（浩二さんと私）の目を盗んで脱走を図る、というパターンだった。檻から逃げる行為によって、彼らは、捕まえてほしい（ケアしてほしい、心配してほしい）という気持ちを表現してきたのだ。同時にこのことは、彼らが「檻の中」と「外界」の境界をしっかりと分けて認識していることも示していた。

ところが今日は、その境界線が曖昧になってきている。例えばイチゴが「ここはサファリよ」と言い出し、動物たちは、初めからその辺をうろうろしている。檻と外界のボーダーがない方向に向かっていたのだ。

他者に邪魔されない自分（たち）の居場所をしっかりと作りたい欲求や、逃げた自分（たち）を捕まえてケアしてほしい欲求も低くなってきたと思われる。ケアしてくれるセラピストや馴染みの職員への信頼が高まり、脱走して心配させる必要度が低くなったということであろうか。

また、今までは「動物園」ドラマの最後に、必ずグランドピアノの下に５人が入り、自分たちの共同の檻（＝お城）のようなものを作って、眠る場面があった。安全地帯と言わんばかりに柵をめぐらして、私と浩二さんは入れないことになっていた。しかし今日は、それもしなかったのだ。アンズがいなかったことも、もちろん理由の一つと思われるが、時間をかけてプロセスが深まったことで、グループの凝集性も高まり、わざわざピアノの下に集まらなくても、仲間意識を感じられるようになったこともあるのだろう。

リンゴとの「友情」

さて、ドラマ後に、部屋の明かりを消して想像する時間になると、スギオとマツオは、２人でふざけながら勝手に遊び始めた。イチゴは浩二さんにべったり甘えている。

離れた椅子に１人で座っていたリンゴは、突然、私の着ている服を指さして、何か質問した。私がそれに答えると、今度は「明代さん、結婚してる？」と聞く。このようなプライベートな質問を普通の（真面目で落ち着いた）話し方で私に話しかけてきたのは、初めてだ。

トラウマを持つ子どもが（もちろん大人もだが)、きちんと自分のトラウマの体験、あるいはその背景のことを語ることはとても難しい。何も話してくれない、話しても本当のことを言わない、そもそも覚えていない、などの回避的防衛や、解離状態が普通である。さらには、幼すぎて起きたことや自分の気持ちを言語化できない・意識化できない、またセラピストを信頼しないという状況もある。だからこそ、言語的表現ではなく、シンボリック、メタフォリックに、内面に抑圧された問題を直接表現できる芸術療法、とりわけドラマを使うことは有効なのである。もちろん、セラピーの目的は、起きたできごとを正確に知ることではない。(それが目的であれば、司法面接的なアプローチが必要だ。）しかし一方で、トラウマに関する話をセラピストにきちんと順序立てて言えるようになること自体は、非常に重要な段階だ。自分の辛い過去を思い出し、それを言語化し、そして誰かに伝えるという段階にくることで、そのことを統御する感覚を得ることができる。治療プロセスが進展して感情の開示と信頼の醸成が進んでくると―つまり、ドラマセラピーが「架空の」ドラマの世界においてクライエントの回復への道程に良い効果をもたらすと、次の段階として「現実の」開示が行われるようになる。「現実の開示」そのものが治療プロセスであり、また、それによってセラピストは、現実生活上の介入やサポートをドラマ外でも行えるようになる。

クライエントの子どもが、セラピストを信頼して、自分から話し始めることは、治療初期の段階で治療者側が話を聞き出そうとする行為とは、まったく意味が異なる。前者は、深化した治療同盟のもと、しっかりとした関係性が基盤になっている。さらには、信頼できるようになったことだけが重要なのでなく、(信頼だけが必要なのであれば、もっと短い期間でも、構築可能だ。）ここまでの即興ドラマ活動の中で、表現すること、心をひらくこと、言語化する能力などを身につけてきたということがポイントである。だから、ここでの会話は、いろいろな意味で治療プロセスと現実生活がクロスする重要場面なのだ。

子どもたちは、皆ひどく傷ついた経験を重ねているので、非常に注意深く５人を平等に扱うようにしていた私は、皆がいるところで、１人だけとゆっくり話すようなことは、したことがなかった。しかしこの時は、他のメンバーが２人ずつになっていたという状況が許してくれたので、私はリンゴと、それぞれ離れた椅子に座ったまま、少し大きな声で会話をした。リンゴが、私の家族や生活について質問してきたので、それらに答えた。私は、幸運が突然天から降ってきたと思い、心の中で「今だ」とばかりにチャンスの女神の前髪をひっつかんだ。

「ねえ、そっちに行っていい？」「うん。」すんなりと受け入れてくれた彼女のところ

まで椅子をまたいで行き、一緒に並んで座った。そして真面目に、普通に、落ち着いて、しんみりと、きちんと話ができたのだ。彼女は、自分の家族の状況や自分の気持ちを詳しく私に話した。情報としては施設側から聞いていた話と同じなので、すべて本当のことを話してくれたことがわかる。しかし、彼女が親に対してどんな気持ちを感じているのかは、初めてよくわかった。

そしてリンゴは、私の家族や、家族との関係について、矢継ぎ早に真剣に質問し、私の答えに一生懸命に耳を傾けていた。私は当然、治療意図のもと、内容を選びつつも本当のことを話した。しかし内容よりも、このような行為自体の意味が大きかった。まるで自己開示し合った後、友だち同士の仲が深まったような感覚と似ていた。

私たちの話し合いのせいで、いつもの「想像の時間」よりずっと長く時間をとってしまった。でも、ここは外せなかった。誰かが「もう長いよ。」と言ったので、リンゴとの話を切り上げ、部屋の電気をつける。

その直後のおやつの時間に、リンゴはニコっとして、私の足をちょこんと触る。私もニコッとして同じように、リンゴの同じ足を同じようにちょこんと触る。二人にしかわからない「友情」の確認行為だった。

おやつが終わって、それぞれの子どもが施設内の自分の棟に帰るとき、リンゴが、私の車に乗りたいというリクエストを言い出した。（リンゴは前にも一度、一人で車に乗せてと言ってきたことがあり、ギアチェンジのレバーを１回、往復させてほしいというので、ＯＫしたことがあった。）

そこで、（歩けば１分の道のりなのだが）皆を私の車に乗せ、歩くスピードで運転して送り届ける。たったこれだけのことだが、子どもたちは大満足の様子で、幸せそうに帰って行った。きっと良く眠れたことだろう。

このセッション以来、リンゴが機嫌悪くぐずったり、おなかが痛い・お菓子が気に入らないなどの理由で泣いたりしたときは、関係を築いてあったので、きちんと話し合うことができた。また彼女は、夜中に起きて施設の家具などをめちゃめちゃにしてしまうこともあった。施設職員には当然怒られたようだが、リンゴが私に、その理由やイライラする気持ちについて話してくれたので、私から職員に話をすることもできた。簡単に改善されない状況が原因なので、リンゴのイライラを取り除くのは難しいが、少なくとも「ドラマセラピーのときは、イライラしない。楽しいから」と言うリンゴに、私のできる枠組の中で、できるだけ良い時間をあげたいと改めて思った。

第１４回

これまででベストのセッション

セッション開始前に、私が事務室で職員と話していたら、子どもたちが迎えに来た。初めてのことだ。

浩二さんは少しだけ遅れて、このドラマセラピーのために施設にやってきた。子どもたちは、久しぶりに浩二さんに会って嬉しそうだった。そのようなことも影響してか、今日は全体的に皆が素直で、セッションは非常にうまく行った。以下の三つの約束を皆で言うことも良くできた。

約束

1．他の人が演じているときは静かにし、みんなで一緒にやるときは、協力し合う。
2. 身体で実際にアタックしない。（やるときは、「ふり」だけ）
3. 楽しもう！　スッキリ良い気分になろう！

連載第二回でも書いたように、毎回、始まる前にこの約束を全員で一緒に言って確認しているのだが、子どもたちは、いつも文末を反対に変えて言っている。私が大きな声で文末を強調しながら「協力し・合・う！」というときに「協力し・な・い！」、また「アタックし・な・い！」を「アタックす・る！」というふうに。もちろん彼らは約束内容を良く理解しているのだが、そのように反対に言うこと自体が「お約束」になっていて、楽しんでいた。しかし、今日はちゃんと原文通りに唱和したのだ。

また、セッション初めのダンスは、いつもバラバラ、めちゃくちゃなのに、皆がちゃんと私の真似をして、「踊り」になっていたのも驚きだった。今までダンスを拒否していたスギオも踊り、彼の動きも初めてダンスと呼べるものになった！

さて、いつもはこの部屋にない長い机が何台か、今日はたまたま置いてあったので、子どもたちは、それを舞台として使い、次々に自発的にチュッチュ（セラピーの見守り役としていつもピアノの上に置いているオウムの人形）のパペットショーを始めた。良質な遊び心、創造性、即興性が発揮されている。私は黙ってニコニコとそれを見守る。ストーリーの流れは特になく、ころころ変わって行くが、ショー自体を楽しんでいる感じだ。自由にはじけて陽気な気分が前面に出て伝わってきた。

それがすぐに（１０分くらいで）収まると、「大家族のドラマをする！」とアンズたちが言い出す。いつものように、浩二さんと私が両親だ。それぞれの部屋、トイレ、風呂などを椅子と長い机で作る。まず、家作りそのものを楽しみ、時間とエネルギーを費やす。

それぞれが、「私はこういう子ね」などと設定を言ったり、自室で好きなことをしているが、ごはんのときは、この大家族はまとまる。真ん中に置いてあるダイニングテーブル（長い机）に集まり、母親の私が朝食の玉子料理を作る。ほんの少しの対応の違いにも彼らは敏感なので、平等に子どもたちを扱うことに気を配る。まったく同じことを５回――１人ずつまったく同じように玉子の焼き方を聞き、作り、出し方も同じにする。

そのドラマ後、机を組み合わせて戦車を作り、そこに乗る遊びをする。子どもたちは非常に喜んだ。ちょっと危険だし、行儀が悪いし、いけないことかもしれないが、今日はこのくらいのことを許してあげても良いと感じた。そこで、机の強度や床などをチェックし、浩二さんとも相談して、大丈夫という判断をした。子どもたちは、暴れたり私たちを困らせるようなことは、もちろん一切しなかった。そして子どもたちがこの上なく楽しんでいる気分を同じように体感するため、私自身も戦車に乗った！

最後はそのまま、その戦車テーブルを囲んでセッション終了時に決まって歌うことになっている歌を、皆がまとまって一生懸命に歌う。男の子たちも楽しんで積極的に歌ったのは、初めてだった。

今日は、たまたま置いてあった長い机がいろいろな道具に変わり、セッションの進行を手伝った。もちろん机とは別に、プロセス全体もとても良い運びで、よくある１人ずつバラバラで、ただワーワー言っているような場面は全くなく、皆が一致して本当に楽しい時を過ごすことができた。そのような意味で、今までででベストのセッションだった。

アンズの成長と絆の深まり

最後の歌は、いつも皆で１回歌うだけであるが、今日は歌い終わるとすぐ、アンズが私に「もう一回歌って」と言った。他の子どもたちには、そのリクエストは聞こえていなかったが、私はすぐに皆を見ながらもう一度歌い始めた。すると途中で、アンズは誰かと話し出した。他の子どもたちも、お菓子を食べたり、大声でふざけて遊んだりしている。そんな中で、一生懸命に１人で歌っているのは、ちょっと変な状況である。リクエストした本人も友だちとおしゃべりしているので、「聞いてないのかな」と思いながらも、気にせず同じように歌い続けていると、誰かが「何で明代さん、歌ってるの？」とアンズに聞いた。するとアンズは少し誇らしい感じで「私が頼んだから」と答えたので、私は非常に嬉しく感じた。ちゃんと聞いていたのだ。満足した幸せそうな笑顔だった。期待を裏切らないで、そして自分が聞いてないような態度をしていても、私が歌い続けてくれていることが、嬉しかったようだ。文字通り、「ＢＧＭ」として私のケアを彼女が感じとっている気がした。まるで、見えないところで当たり前に信頼関係で繋がっている親子のように。

この日のセッションからしばらくして、私はアンズのある変化に気づくことになる。それは、彼女の笑い方がケタケタロボットではなくなってきたことだった。この連載で何度か以前に書いたが、どんなときも均一のロボットのようなケタケタという音だったので、彼女の「人間的な」笑い声を聞きたいとずっと願っていたのである。もともとの声色の「くせ」は残っているものの、より「普通」の笑い声になっていると感じた。

これと同期して、生活面でも彼女は成長を示した。施設に新しく入ってきた発達障碍の子どもと毎朝一緒に登校してくれるようになったそうだ。そのおかげで、施設職員が送っていく必要がなくなり、忙しい朝に大変助かっているという報告を聞いた。さらには小学校の教師に、「このごろアンズちゃんは、クラスの皆を引っ張って行ってくれている」と誉められたという。前号で記述したアンズの自作自演のドラマ（離婚した母親が戻ってくるドラマ）から、大きな変化が起き始めていたようだ。

Ａ 施設でドラマセラピーを始めて約１０ヶ月。いくつもの変化が一度にゆっくり全員を動かしている、その大きな波を感じる。

次号に続く。（次回は最終回の予定です。）

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討　その８

家族造形法の面白さについて語る

対談相手：興津 真理子（同志社大学心理学部）

早樫 一男

早樫：興津さんは「家族援助を目指す人のための研修会（ふるかわ家族カウンセリング研究所主催）」に長年参加されています。家族造形法と出会った頃、どのような印象でしたか？

興津：家族造形法と出会って 10 年になります。最初の頃は何やらわからぬまま，「人形＝役」になっていたように思いますが，自分とはかけ離れた「役」を引き受けても，その場で感情（しかも思いがけない気持ちの場合もあります）が湧き上がる面白さや，自由に事例や家族のことを考えることができることの面白さ，いろいろな現場での事例に出会える面白さに惹きつけられ，ここまで続けて参加してきました。

早樫：この間、感じてきた面白さについて，詳しく聴かせてください。

興津：家族造形法が他の多くの技法と異なるところは，そこに感情を伴う主観的体験が生じるというところであり，この特徴に私自身は強く惹きつけられていると思います。今でも思い出すのは，とある老舗の祖母役をやった時に，問題は IP である小学生の孫の不登校だったと思いますが，造形が出来上がった時に，湧き上がった思いは「この家は安泰や，息子も孫もちょっと頼りないところもあるけど，この家は自分が守ってきたようにこれからも続いていく」という安心感でした。造形前には思いもよらなかった気持ちでした。こうした「感情を伴う主観的体験」を，造形を作った後に彫刻家（制作者）がインタビューしていき，先ほどのような「気持ち」や「感じ」をそれぞれの役をとった人が語ります。不思議なことにここで語られる言葉は，実際に本人が話していたことと一致することも少なくありません。これは自分が事例を出してみるとよくわかります。

早樫：家族造形法を使った事例検討の場で

は、役を引きうけた人からのフィードバックの言葉が、実際にそのケースの面接の中で語られた言葉とまったく重なっているという経験をよくしますよね。事例提出者もとても驚きます。

興津：このような感情の生起をめぐって，実は人間の感情というものが想像以上にプリミティブというか，個人差を超えた単純な生起プロセスをベースに，個人差を含む社会的な要素に彩られて出来上がっているのではないかというのが，最近考えていることです。感情がこういう性質のものだから，家族造形法という技法が技法として成立しうるのではないかということなのですが，これは心理学でもあまり研究がおこなわれていないことのように思います。たとえば，社会心理学の領域に「パーソナルスペース」という概念があります。これ以上近づきすぎると気づまりという距離が各自にあり，それは，近づいてくる人の性別や関係性などにより変化するというものです。家族造形法でやっているのは，これとちょうど逆のことで，相手を配置し，その位置での「気づまりさ」を述べさせているようなものです。相手との心理的距離を物理的に配置し，その距離によって生じる感情を記述するが，これだけでも人には何らかの感情や思いが生じるのが興味深いところです。不自然な姿勢をとった時の苦痛，置かれた手から感じる暖かさから感じる安心感，指を差されているということから感じる戸惑いあるいは不快感こういったものが組み合わさって造形はできあがっていますが，人が日常的に感じている感情も，特別なスクリプト以上に，対人関係のなかでの心的距離感や物理的な側面に置き換え可能な要素で案外単純に引き起こされている部分があり，だからこそ造形で語られる体験が実際のその人のものと類似してくるのではないかと考えています。今後実験的に検証してみたいと考えているのはこのあたりのプロセスです。

早樫：事例検討に長年参加されている中で、家族造形法を通した体験や事例検討のもたらす意味などについては、どのように考えておられますか？

興津：家族造形にこうした主観的体験を促す特徴があることによって何が得られるのでしょうか。とくに事例検討で家族造形を用いることの意味から考えると「多方面への肩入れ」を可能にするというメリットがあると思います。わかりやすく感情表現をしている人や注目を集めやすい人だけでなく，援助者が肩入れしにくかったり，家族の中でどのように感じているのかを推し量りにくかったりする家族成員の気持ちにも同じ重みで目が向けられるということは重要な特徴だろうと思います。例えば，ある月の造形研修会で，父親から娘への性的虐待ケースの造形が行われま

した。被害者である娘の感情にはもっとも目が向きやすいと思いますが，加害者である父親は憎むべき存在，母親は娘をサポートすべき存在という枠組みでしか通常は見られないのではないかと思います。しかし，研修会で造形を置いてみたことによって，このようなケースで離婚を選択しない母親の心情に目を向けることになりました。夫の裏切りによる傷つき，女性としての傷つき，娘を守りたいと思いながらも娘によって自分が傷ついた面もあるということに対する複雑な心情，それらを思えば，母親が全面的なサポーターとして娘を援護するということの難しさと，母親が母親として娘を守れるようにするためにもまた，周囲からのサポートが必要であろうことを考えさせてくれたと思います。IP を援助するにも，家族を援助する必要性があり，そのためにも援助者が家族全員に肩入れすることが大切なのではないかと感じました。

早樫：家族造形法を使った事例検討は、いつも、「Here　and　Now」の面白さがあると感じています。その面白さに、やみつきになっているというか…。主観的な体験以外には、どのような特徴や面白さを感じておられますか？

興津：ここまで家族造形法が感情を伴う主観的体験を引き出す技法であるということに関して述べてきましたが，家族造形法の技法としての面白さは他に，包括性とでもいいましょうか，二者関係を超えた家族の様相が端的に表される点にもありますし，また，実験的であるという点にも特徴があります。実験的というのは，「もし…したら」を試してみることができるということで，「誰かにセラピストがついたら他の家族がどのように思うだろうか」とか，「子どもが生まれる前はどのような家族だったのだろうか」とか，「将来この家族成員が巣立ったら，家族はどのようになるだろうかという可能性について，検討する手立てとなりうるということを指しています。また，基本的な事ですが非言語的であること，情報が多少欠けていてもできる技法であるという点も造形法のメリットだと思います。

早樫：一方で、短所というか、難しさや困難さ、あるいは課題や限界というのもあると思います。どのようなものでも、万能ではありません。

興津：第一にどのようなものかを伝えるのが難しい技法であるという点です。とにかく体験的であるが故に，その良さ，面白さを伝えるのが難しいということには常に頭を抱えてきました。伝え手の課題でもあり，私などは講義などでも，最近ようやく関心を持ってもらえるような伝え方ができるようになってきたのかな？というところです。一方，受け手の方も

自分がケース対応で困難を感じたことがなければ，家族造形法による検討の持つ意味もまた理解しにくいと思います。だから，これまで興味持った学生を研修会に参加させてもらいましたが，一度体験して終わりになる場合が多かったのだろうと思います。体験してみて面白かったとは言いますが,「これは使える！ぜひ続けてやってみたい！」とか,「これについて研究をしてみたい！」とはなりにくいようです。この点は，使えると思う人がやればいいことなので,短所というほどでもありませんが，今後，事例を家族造形法で検討する前後での事例提出者の家族イメージや見立ての変化や，介入についてのイメージの広がりなどについての検討や，継続的に参加している人が，どのようなメリットを感じているのかを検討することによって，家族造形法による事例検討の良さをもっと引き出していけたら,「興味」が「使えるかも」という気持ちに発展する手助けになるのではないかと思います。だから，後者について，この早樫先生の連載で他の方がどのように話されるのかにもとても興味があります。第二の短所は数人の人手が必要であるという点です。数人でやることによるメリットも多いのですが,こと実施という点に関しては，技法を使ってみようということのハードルを上げているところはあると思います。しかし，これらはいずれも決定的な困難かといわれるとそうでもないなとも思います。映像教材の製作などでも伝え方はクリアできると思いますし，面白さや有用性がうまく伝われば，人は集まるだろうと思います。少しでも多くの人に家族造形法の魅力が伝わればと思います。

早樫：家族造形法の面白さをどのように伝えていくか、さらには、家族造形法を継続して使えるツールとしてどのように伝えていったらよいかは、大きな課題だと思っています。最近は、定期・不定期の研修会だけではなく、ある福祉施設の事例検討会でも定期的に活用しています。多忙な現場においては、準備に時間をかけなくてもよいところも大きな利点です。それにも関わらず、さまざまな意見が出されたり、自由に語ることで、チームワークの向上にもつながっているのではないかと感じています。結果として、職員の感性に磨きをかけるといった作用も果たしています。家族造形法に関する興津さんの取り組みに期待しています。どうもありがとうございました。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑧ネットワーク

村本 邦子

先日、神戸で、臨床心理士会の「定例職能研修会」というのがあり、私設心理相談部門の「他機関連携～その実際」というセッションの話題提供を頼まれた。この種の研修会に自主的に参加することはまずないが、誘われたらできるだけ参加するようにしている。そうでもないと、一生、参加しそうにないような気もするし、何事もご縁だと思うからだ。そして、そんなふうにネットワークはできてきたのだと思う。もしかすると意外に思われるかもしれないが、私はある特定のことにはとても能動的であるが、多くのことに関してはきわめて受動的である。「旅は道連れ」というタイトルには、そんなニュアンスが込められている。

話題を準備するにあたり、企画者である信田さよ子さん（原宿カウンセリングセンター）から、「私設心理相談の実践においては、緊急の介入やリファーの必要性が生じることは珍しくありません。そのような場合、開業臨床心理士は社会的リソースを常に持っている必要があるでしょう。医療機関から福祉事務所、さらに弁護士や保健師、女性センターの被害者支援員などは欠かすことのできない連携先です。本分科会では虐待・DV や性暴力といった緊急性の高い場合に、開業臨床心理士として必要な手順や優先順位の決定、クライエントへの対応のノウハウといったものまで踏み込んでみたいと思っています。モデル事例など

を挙げながら参加者のみなさまと意見交換しながら進められたらと希望します」という企画案をもらった。

あらためて女性ライフサイクル研究所の連携について考えてみた。私設心理相談の実践において（今回、初めて知ったが、「開業」という表現にはクレイムがつきやすいため、政治的理由から「私設心理相談」という表現を使用するのだそうだ)、緊急の介入やリファーの必要性が生じることは珍しくないと言えるだろうか？うちに関して言えば、必ずしもそうではない。確かに、ごく一部、緊急の介入やリファーが必要になる事例はあるが、多くの場合において、開業（それでも無視する私･･･）のカウンセリングサービスはそれだけで完結している。というより、基本的に、そのようなケースしか開業カウンセリングの枠に入ってこない。

女性や子どもの被害を社会が否認していた時代、困難を抱える多くの女性たちの引き受け先はなかったし、開業カウンセリングの枠内で支援することなど不可能だったから、それ以外のこともやるしかなかった。時代が変わり、専門機関による役割分担が可能になったからこそ、研究所を法人化し、開業カウンセリングの枠で彼女たちと関わるようになったのだ。この枠に入ることのできない困難を抱える層が多くあることを承知していたからこそ、市民サービスとしてのNPOを同時に立ち上げ、支援者支援の枠組みを拡大した。できるだけ多くの女性たちがアクセスしやすい支援機関の質向上が重要だと考えたからだ。

というわけで、少なくともうちの研究所に関して言えば、カウンセリングはかなり独立した形で存在している。連携ということを考えるならば、福祉現場や学校現場での方がはるかにそれは日常的であると思う。開業の形では、個々人との契約性が強いため、いわゆる治療契約はより厳格である。もちろんクライエントの利益が最優先されることに違いはないが、たとえば福祉現場や学校現場においては、契約の主体（いわゆるステークホルダー）は一様ではない。もちろん、連携がないのかと言えば、そういうわけではなく、必要に応じて、医療機関や弁護士、公的サービスなどの情報提供を行うが、基本的には情報提供に留め、より積極的に相手先と直接コンタクトを取るようなことは稀である。例外としては、たとえば、クライエントが何らかの被害者の場合、繰り返し被害体験を語る負担を避けるために、本人の同意を得たうえで連携先とやりとりをするようなことはあるし、裁判がらみのケースでは弁護士と直接やり取りをすることはある。

では女性ライフサイクル研究所における連携はどうなっているのか。個

別のケースを通じてというより、カウンセリングの前提にすでに機関としてのネットワークがある。研究所の事業は、「回復支援（いわゆる治療）」「予防啓発」「研究」の三本柱から成る。「回復支援」としては、研究所内における個人カウンセリングを中心に、カップルカウンセリング、家族療法、グループカウンセリングがあるが、その他、地域の複数の相談機関へスタッフ派遣を行っている。公式に研究所として契約を結んでスタッフを派遣しているものもあれば、スタッフが個人で契約しているものもあるが、いずれにしても、スタッフが働いている先は直接的な連携機関となり得る。たとえば、女性センターや市町村における女性相談、病院、児童相談所、学校・幼稚園、シェルター、母子寮などなど。

また、「予防啓発」の事業として行っている市民や専門家を対象にした講演や研修への講師派遣は、関西エリアを中心に全国で年間四百件を超える。行政では多くの事業がその場限りのイベントとして終わりがちで、ネットワーク構築にまで至らないことが多い、それでも、研究所の講師派遣事業のうち一割は、五年、十年と毎年、継続的な講師派遣を行い、依頼機関と安定した協力関係を維持している。担当者の交替は頻繁に起こるが、たとえ担当者が替っても、機関同士の信頼関係を維持してこれたのは、一貫して質の高いサービスを提供してきたからに他ならないと自負している。加えて、自治体や専門機関の委員の派遣なども行ってきた。

これらすべてが研究所のネットワークであるが、一番の連携はスタッフ同士に見られる。たとえば、自分のケースに関わって、何か情報が欲しい時、スタッフに呼びかければ、瞬く間に情報が集まってくる。それぞれのスタッフが持っているネットワークは、そのまま研究所の共有財産であるという関係性があるのだ。当たり前のことではあるが、援助者が互いにサポーティブな関係性を持つことができなければ、ネットワークを構築することなどできるはずもない。アウトリーチとも言える予防啓発の講演から研究所内のグループやカウンセリングにクライエントがつながってくるケースは少なくないが、これも、スタッフ間の信頼があるからだろう。何年も前に講演会でもらったという研究所のパンフレットを大事にとってあったご近所さんから勧められて相談に来たという人もいれば、緊急度の高い状況を抱えた方が、講演終了後に講師に話しかけ、思い切って相談に来たという人もいる。

また、自分たちの仕事を通じて、様々な社会資源を知っているので、直接的な連携を取らなくても、情報提供をすることができる。たとえば、厚生労働省のやっているファミリーサポート事業には、あちこちの自治体でその養成事業に関わっているため、地域の情報を含めた情報提供をすること

ができる。もっと言えば、スタッフたちは関西のあちこちの住民でもあるから、市民目線からの情報も加えられる。自分たちでやっているNPOのプロジェクトも重要なリソースである。たとえば、離婚がらみのケースにおいて、「Viプロジェクト」（子どものための面会交流サポートプロジェクト）のサービスへとつなぐこともできる。私も立命館で教えるようになって十年以上経つが、教え子たちとのネットワークも広がった。研究所のスタッフたちがあちこちに講師として招かれていくと、その先にたまたま立命館の修了生がいたという話が頻繁に聞こえてくる。それだけたくさんの修了生たちが対人援助の現場で活躍してくれているということなのだろう。ロースクールとの協働でやってきた「司法臨床」の受講生が弁護士となって、今や女性支援の最先端で活躍してくれているというような状況もある。何より、うちのスタッフ4名は立命館の修了生である。

このように、カウンセリングの個別ケースについて、直接、動いてどこかと連携することは少なくても、いざとなったらさまざまな情報提供が可能であるというところに最大の安心感があるだろう。ネットワークは、本当のところ、私たち自身が安心して相談活動を行えるためにあると言えるかもしれない。「最初の1年」で紹介した季刊のニュースレターは、「FLCネットワーク」と名付けられた活動のなかに位置づけられていた。はっきりと記憶していないが、設立当初からネットワークということを意識していたことになる。そして、このアイディアは、10年前に立ち上げたNPO法人「FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク」に引き継がれた。NPOは、次のような挨拶で始められた。

> *十数年、女性や子どもの問題に取り組むなかで、私自身が到達した結論は、暴力は、基本的信頼感、安全感を損ない、人々のつながりを破壊し、希望を奪うものだということです。暴力は孤立感と絶望を生み、孤立感と絶望は、また暴力を生むでしょう。暴力に抵抗するには、私たちが希望をもって、同じ世界を共有するものとして手をつないでいかなければなりません。安心やつながりの感覚を強化し、コミュニティをエンパワーすることが大切なのだと思います。*

私たち一人ひとりが自分の属するコミュニティに安心とつながりを感じられる関係を築き、同心円を広げていくこと、そんな同心円が仲間との関係において幾重にも重なり合っていくこと、そんなイメージを持っていた。

あらためて振り返れば、この二十年で、いつのまにか、そんなことが実現できてきたのだなあと思う。

最後に、どのようにしてそんなネットワークを作ってきたのかについて触れておきたい。シンプルに、目の前にある人との関係を大切にし、なんでも長く続けていくこと。はっきり言って、私は、交換した名刺や年賀状の数を誇るような考えが好きではない。学会の懇親会のような場面で、たまたま意気投合して関係を結ぶというような経験もないわけではないが、それよりも、たとえばひとつのケースにじっくり関わるなかで、ネットワークができていくことの方が多い。研究所の初期、ケースを通じて、一緒に仕事をしてきた弁護士さんたちとの関係は、今なお信頼できるネットワークとして存在している。まずは顔の見える関係である。その延長線上に、機関としての関係がある。

たまたま、吉川悟さんが『システム論からみた援助組織の協働』（金剛出版）という本のなかで「組織のメタ・アセスメント」という表現を使っているのを見つけた。臨床家にはクライエント個人のアセスメントと同時に、既存のさまざまな職種、機関の特性をアセスメントし、クライエントの治療に結び付ける「即時的な援助組織」構築の専門性・技量が求められているというのだ。少し角度は違っているが、私自身は、教育の場で、「場のアセスメント」という表現を使ってきた。自分とクライエントの出会いの場はどのような特徴を持つ場なのか、クライエントが生活しているのは、どのような場なのか。「場のアセスメント」とは、文脈を読む力のことを指す。

関連機関の情報がどれだけたくさんあっても、それぞれが点でしかなければ、ネットワークを形成しない。点と点が結ばれ線になり、線と線とが結ばれ面をなし、拡がりを与えられるなかで網状になっていく。そのようなネットのなかに自らを位置づけること、そんな視点が必要なのだ。開業カウンセリングにおける他機関連携は、他機関との直接的なやり取りというよりもむしろ、クライエントがより生きやすい生活上のネットワークを構築していけるような視点を持ち、方向づけをしていくこと、そのためには、時に、援助者である自分たちの持っているネットワークをクライエントの生活場面に重ね合わせてみることが有用かもしれない。今回の研修セッションを引き受けたことで、新たな出会いがあっただけでなく、数々の懐かしい再会があった。長く続けることの醍醐味はこんなところにもあるのだろう。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第７話

水野　ス ウ

私にはできない

週いちオープンハウスの「紅茶の時間」が20年たった頃に書いた本、『きもちは、言葉をさがしている』の中で、私はそれまで一度もふれたことのなかった水野の家のある物語を、はじめて文章にした。

私とは母親の違う年の離れた兄が、私が中学生の時に自死したこと。その半年前に母は亡くなっていたので、兄の死後は、父と義姉と私、というふしぎな三角形の家族がいきなりはじまったこと。40年という長い年月をへた後でようようやっと、その姉と私が、兄や、その後の家族について、はじめて語りあえた日のこと。その日からたったの半年で、姉が逝ってしまったこと。その姉の、生きてきた道のり、父や私たち母子にしてくれた数えきれないほど多くのこと……。

本を読んでくださった方の何人かから、「よくあそこまで書いたね」とか、「あんなふうに自分を出してしまうの、怖くなかったですか」と言われたけれど、私自身は、生まれ育った水野の家で残っているのがもう自分だけ、となった時点で、いつかはこれは書き残しておかなきゃいけない物語、とこころに決めていたことだったので、そこに格別の迷いはなかったと思う。

にもかかわらず、ある人からふと投げかけられた、「私だったらできないわ」という、否定的なニュアンス含みの言葉がちくりと胸に痛かったのもまた、本当のことだ。

言われた言葉を、私は台所で野菜をきざみながら、道を歩きながら、車を運転しながら、反芻しいしい考え続けた。そうしたらちょうど1週間たって、頭のすみっこに、ピカ！　とあかりがついた。そうか、これって実はとっても大事なキーワードだったんだ。

自分ならできない、しない、自分にはできない。誰かがそう思うことを、する人がいる。したい、と思う人がいる。思うからその人はそれができる、特別なこととしてではなく、むしろ自然に、ときには必然で。

ここで言う「できる」「できない」は、できるからえらいとか、できないからだめ、といった能力評価の言葉では、むろんなくて。

ある人にはこわくてできない、したくもないこと ── 自分を出して家族の物語を書くこと ── が、だけど私にとっては、あの時の必然で、自然なことで。そうやって書く作業を通して、それまではよく見えていなかった水野の家のもやがかった部分が突破口を見つけ、まるで霧が外に押し出されるように、あきらかになっていったことが、いっぱいあった。

すっごいひとだったんだなあ、と義理の姉をもう一度認め直し、前よりももっと、その姉に感謝してる私がいた。気づいたら、私の背中の荷物はずいぶんと軽くなっていて、おかげで私はいっそう自分の身の丈に近づけた気がしたのだ。

ってことはつまり、あの時あのようなかたちで書くことが、やっぱり私にとっては必然だったんだ。だからそうできた。できたというより、自分のすることを、した。うん、ただそれだけのこと。それ以上でも以下でもなく、ただ、それだけ。

そうなんです。その意味でどのひとも、私にはできない人生を生きている、と思う。すぐに思い浮かぶ自分の身近な誰かれを考えても、私にはできない、まねしようとしたってできない、そういう人生ばかりだ。

飽きっぽい私ならたちまち投げ出してしまう、根気のいる友禅の下絵をもう何十年と描いている人。こつこつ丁寧に暮らしの器づくりだけをずっと仕事にしてきた、職人のようなご夫婦。ひとすじ縄ではいかないこみいった問題を抱えた家族の中で、どうにか自分を保ちつつ必死に生きている人。厳しい病を親友にして暮らしてる人。たやすく言葉になんかできない痛みや苦しみをくぐり抜けてきてる人。

そんな人が、私の前に立っている。私と出逢う。時には涙で、時には笑顔で。それってあらためて考えると、すごいことだ。

成果とか、評価とか、損得とか、目に見えるものでは決して計れない、一人ひとりの生き方。その中には、傍目にとても大変そうでも、その人にしたらごく当たり前のことだったり、そうするしかなかったり、楽じゃなくてしんどいけど必然だったり、他の人には見つけられないよろこびがそこにあったり、ということがあるのかもしれない。

そんなふうに「あなた」にできて「私」にはできない、ってことがたくさんたくさんあって、そして、「私」にできて「あなた」にはできない、ってこともきっとそれと同じだけあって。その矢印は双方向。どちらがより大きいかすごいか、なんて比べることはできない。

それがおそらく、自分を生きる、ということなんだろう。「私」にはできないことをしている、その人を認める、ということなんだろう、と思う。

できない、というギフト

人生の途中でこころの病気を体験した人たちの、働く場であると同時に居場所でもある、東京調布のレストラン、クッキングハウス。おいしい玄米ランチに加えて、メンタルヘルスのことも楽しく勉強できるこの場所は、ある時はコミュニケーションの学びの場に、ある時はコンサート会場に、またある時は絵画教室やミニ講演会の場にもなるという、街なかの不思議なレストランだ。

10 数年前から、私は東京に行くたび、クッキングハウスに寄せてもらうようになった。ランチの後の、午後や夜のコミュニケーションの勉強会にも参加するうち、いつごろからか、お話の出前注文まで逆にいただくようになった。

はじめての出前にうかがった時、私は、「私にはできない」の話を、そのトークの中に織り込みながら語った。どのメンバーさんもまさしく、私にはまねのできない人生を生きぬいてきて、今、仲間とともにここにいる、いてくれるのだ、と思ったから。

話し終わるなり何人ものメンバーさんが、今の話の「私にはできない」のところが特によかった、と私のところに言いにきてくれて、それがすごく

うれしかった。相手のいいとこを見つけたら、具体的に、シンンプルに、きもちを添えてすぐに伝える。クッキングハウスのコミュニケーションの練習でとりわけ大切にしてるこのことを、メンバーさんたちが実際、私にしてくれたということがまた、なおいっそう。

鳥取に住む古川奈都子さんは、ご自分の経験を『心を病むってどういうこと?』（ぶどう社）という本にされている。その奈都子さんが、クッキングハウスで私の話を聴いた若いメンバーさんと一緒に、ある年の春、わが家を訪ねてくれた。

私の身近で、こころの病気に関心ある人たちに声かけしたこじんまり紅茶の時間で、奈都子さんは彼女なりの角度から、「できない」ということの意味を、こんなふうにお話してくださった。

> ―――私は、統合失調症という病気を持っていることで、他の多くの人と同じようなペースや量でははたらけないんです。でも、人と同じにはたらく努力をするよりも、むしろその少ない能力こそ、神さまからの贈りもの、たまもの、と思って、そっちを最大限にいかそうと努力することのほうが、自分にできる大事な仕事なんじゃないか。つまり、「できない」っていうことが、ひとつの“あたわり”でもある、というふうに私は感じているのです。

他の人と同じようには「できない」、そのことが自分へのギフトでもあるのだ、と言う奈都子さんの言葉に、はっとする。彼女もまちがいなく、私にはできない、ほかの人にもできない、ユニークでオリジナルな人生を生きている一人だ。

「私にはできない」という一つのキーワードから派生したいくつかのストーリーを、お話の出前先の、大津の「紅茶の時間」で語った時のこと。

聴いていた一人の方が、「うちの娘は、やりたくないことをやらない、というか、したくないことは“できない”という能力に、とってもすぐれているようで……」と、どことなく楽しげな口調で話してくれたものだから、その場にいたみんなで大爆笑になった。

そうなんだねぇ、それもその子のちからのうち。自分の望まないことはどうしてもできないというその子が、世の大多数とは違う、自分なりの道を行こうとしてること、未踏の道を歩くしかないこと。そういう子どもの歩き方を、このお母さんが世間のものさしをあてずに、等身大で認めようとしている、そのことも伝わってきてうれしくなった。

「できない」能力は、あたわり、だったり、身の丈、だったり、がんばりすぎない、または、あるがまま、だったり。おそらくいろんな言葉に訳すことができそうだ。そうやって考えていくと、はなから、能力の大きさだけを比べることの無意味さにも、うんと気づかされる。

大きな組織の中で、業績や数字をあげてどんどん登って行く、そういう自分が好きな人もいれば、そんなはたらき方がどうにも向いてない人だって、大勢いる。私の場合はまちがいなく、後の方だ。でもそれをね、なるほど! 私には「そうできないという能力」があったんだなあ、って、私自身、とらえなおすきっかけをもらって、いまさらのように自分の来し方を、そうそう、あなたはそれでよかったんだよ、とあらためて言ってあげたくもなった。

家族の物語をあんなふうに描くことは、私じゃない、他の人には「できない」こと。そこからはじまった一連の「できない」考は、いろんな人の体験や思考をくぐり抜けるうち、スタート地点とは違う視点や意味あいの、「できない」へと発展していった。一人旅ではきっとここまでたどりつけなかったね、仲間たちと発見しあいながらの気づきの連鎖に、私はいつも教えられる。

聴かれる、ということ

紅茶の時間を続ける中での必要に迫られて、「きく」ことの勉強をはじめなきゃ、と思った15、6年前ころの私は、「聞く」と「聴く」の違いすらまだわかってなかったし、聴くことにどれだけ大きな意味やちからがあるかもまったく知らなかったと思う。

それまで、「話す」に比べると、控えめで受け身だなあ、と思っていた「聴く」という行為が、実は聴かれる側の、自身を映しだす鏡を育てていくことで、それと同時に、聴く側の鏡を、知らず知らず育てていってくれることでもあったんだ、と私は少しずつだけど気づいていった。

自分の感じていることって、自分のきもちなのになかなかわかってない。そんなことが、ほんとはとても多い気がする。

自分の話が、さえぎられず、横取りも先取りも、簡単にくくられもせず、指導や助言されたりもせずに、ただ、まっすぐに聴かれること、受けとめられること。そういった静かな受け皿があることでようやっと、きもちは言葉をさがしだせる。きもちと言葉とが、出逢っていける。

そうやって話すことは、こころの詰まりやしばりから、ほんの少しとき放たれることでもあるんだ。きもちと言葉、互いのそういった関係を、はやらない紅茶の時間の中で、私は何度も何度も見せてもらってきたなあ、と思う。

そんなふうに聴くことの大事さ、頭でわかる気がしてても、実際に聴く場面になるとやっぱりむずかしい。とりわけ、重たい話、つらい話を聴く時ほど、何か言わずにおれなくなる。沈黙が気まずくて、ついつい、はげましやなぐさめの言葉を言いたくなる。

時には、後ろ向きでいる相手のきもちをなんとか前向きにさせようと、意図的に働きかけさえしてしまう。「そんなこと言わないで元気出して」とか、「たまには外に出てみたら？　きっと気分もはれるよ」。

でもそれ、もしかすると、相手のためというより、黙って聴いてるのがしんどくて、自分が楽になりたくて、思わず何か言ってしまってることのほうが多いかもしれない。聴かれている側はおそらく、そんな言葉は望んでいないのだろうに。

かつての私もつい何か言ってしまってた。近頃は、まだもう少しは静かな耳のまま、聴いていられるかな。かける言葉は何も思い浮かばず、ただ、その人のきもちに寄り添おう、そばにいよう、と想いながら、そこにいる。

私の中での、静かな受け皿、のイメージはおそらくこんな感じだろうか。透明なガラスのボウルに水をはり、その人が吐きだす言葉を、そのまま受けとめる水面になる。出された言葉がその水面に映って、その人が話しながら自分のきもちに気づいていけるような、そんな聴き方を、いつもいつもはむずかしいけどできるだけしたい、って願っている。

また、こうも思う。誰かにまっすぐに聴かれる、という経験は、その人にとって、自分の存在が大切にされていると感じられることなんじゃないかと。その人の悲しみや痛みに、何も言えず何もできないけど、こちらがそんなふうに聴いている間だけでも、あなたというひとは大切な存在です、ってことが伝わったらうれしいなあ。

「今、自分がこんなきもちでいる、ということをわかってくれてる人がいる、と知ることで、きもちが少し楽になる。少し救われます」

ある人がふっと言ってくれたこの言葉は、「聴かれる」ということの意味を一つ、解きあかしてくれるヒントなのかもしれない。

聴くこと、からの贈りもの

その一方で、私にとって誰かを聴くということは、その人がこれまで生きてた人生の、ほんの一部分をわけてもらうこと。その人の、悲しかったり、うれしかったり、しんどかったり、しあわせだったり、不思議すぎたり、まるで奇跡だったり……した日々や年月や瞬間を、おすそわけいただくこと。

私のではない人生の一場面を、この人はそのように越えたのか、その年月をそんな想いしながらくぐりぬけてきたのか、その出来事にそんなふうに立ち向かったのか。私だったらとてもそのようにはできなかったろうな、越えられなかっただろうな。すごいなあ。美しいなあ。

ひとは決してそう強くもないけど、だからといってちっぽけなだけでも、弱いだけでもないんだ。

先に、聴くことは、聴く側の鏡をも育てること、と書いたけど、いろいろな人のものがたりを長年に渡って聴き続けてきたことは、さまざまな感情を私のなかに呼び起こし、そして私の想像力を育てた。

私は私を一回こっきりしか生きられないけど、たまたま、出逢いのスクランブル交差点みたいな紅茶の時間という場にずっといて、たくさんの人を聴き、一人ひとりから生きるエッセンスをわけてもらい、それを長年くり返してきたことで、私の人生の幅は前よりか、ちょっこしふくらんだような、自分を映し出す鏡が多面体になっていったような、そんな気がするのです。

若いころ、自己中の見本みたいだった私。一人よがりで、本当に狭いものさしでしか人を見てなかった。ものごとを深く考えることもあまりせず、地にまったく足がついてなくて、関心事は自分のごくごく身のまわりのことだけ。社会にも地球にも、まるで目が向かない私だったなあ。

他者を聴くことは、時として、さまざまな角度の鏡に映し出される、かつてのそんな私と遭遇することでもあった（うひゃ！と恥ずかしかった）。

だけど何より、私にとっての一番の大きな変化は、私の中の、兄に対する想いが、タマネギの薄皮をむくように徐々に変化していったことだ。

若くして突然自分から逝った兄のこと、なんでそんなことしたのよ、と何度も胸のうちで問いはしたけど、そのきもちに想いを馳せようとは、長い年月、私はしてこなかった。むしろ、蓋をしてきてた。

たくさんのきもち ── しんどかったり、追いつめられたり、もう生きてなんかいたくない、いっそ、とまで思ってしまう、いろんな人のいろんなきもちを聴き続けてきて、ある日ふいに、はっとした。

お兄ちゃん、あのころ、いったいどんなきもちだったんだろう？　お兄ちゃんの話を聴いてくれる人って、ちゃんといたんだろうか？

それが、兄のきもちに近づきたい、少しでも理解したい、と思いはじめたとっかかりだった。そこからはじまった謎解きが、堂々巡りを何度もくり返したあげくにようやく、そうだ、もうやめよう、なんで？　なんで死んだの？　って問うふりをして、亡くなった兄を心の中で責め続けること、原因を追求すること、もう終わりにしよう、って思えるところまでたどり着けた。

ああ、たどり着けた、と感じた時、すごくすごくほっとした。私をそんなきもちにさせてくれたのは、間違いなく、たくさんの人が聴かせてくれた言葉であり、わけてくれた人生の pieces だった。それってまさに、「聴く」ということからの贈りものだ。

その贈りもののおかげで、私はそれまで持ち上げる勇気のなかった重し石をはずし、蓋をあけて、兄の死についてはじめて、本当のきもちで義姉と語りあおう、と決心できたのだった。

夫をあそこまで追いつめてしまったのは自分なんだ、と姉が自分自身を責め続けて生きてること、私は知っていながらこわくて一度も話題にできずにいたけど、あの時はもう、不思議なくらい、こわくなかった。大切なのは、これまで気づかずにいた、ほんとうの気持ちを姉に伝えることだ、とはっきり思えていたから。

私はもう兄を責めていないこと、姉に対しても、もちろんかけらほども責めるきもちのないこと、むしろ、そんな重荷を長いこと一人で背負ってきた姉に、自分で自分をどうかもう赦してあげてほしい、と思ってること。

そして、私を中学３年の時からずっと育ててくれたことも、姉が、私の娘を本当の孫として愛してくれてることも、いくつありがとうを言っても足りないくらい感謝してること。

それまで言ってきたことも言えないできたことも丸ごと、まるでこころのたな卸しするみたいに、その時、姉に伝えられた。

兄が亡くなってから、実に40年たってはじめてかわせた、姉との魂の会話。涙とありがとうがごちゃまぜになったあの時間もまた確かな、聴くことの贈りもののつづき、だったのだと思う。

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド　大野　睦

第七章　ウミガメのこと

■何故ウミガメの話？

実は第一章でも述べているのだが、私が屋久島に移住した一番の理由がウミガメにある。幼少期より地元大阪よりいちばん近いウミガメ産卵地である和歌山県千里浜で毎夏ウミガメ観察をしており、学生時代に参加した日本ウミガメ会議、そして屋久島での生態調査ボランティアで学んだことが屋久島で暮らしたいと思う気持ちを募らせた。ここではウミガメから見る今を私なりの視点でお伝え出来ればと考える。

■日本のウミガメ

日本人にとって一番馴染みのあるウミガメはアカウミガメであろう。何故なら日本本土に上陸するウミガメはアカウミガメだからである。他に沖縄、小笠原にて上陸産卵が確認されるアオウミガメ、そして八重山諸島ではタイマイの上陸産卵が確認できる。この３種類が日本で上陸産卵するウミガメである。

日本で有名なアカウミガメ産卵地としては和歌山県千里浜、四国にはＮＨＫ連ドラの舞台となった徳島県大浜海岸がある。しかしながらどの地域のウミガメ産卵地としての環境は悪くなる一方で、かつ上陸産卵数の減少が止まらない地域も珍しくない。
また、古くよりべっ甲細工の材料として使用されてきたタイマイの甲羅も日本人にとって馴染みのあるウミガメと言えるであろう。

■絶滅危惧種としての位置づけ

日本に上陸産卵する３種のうち、アカウミガメとアオウミガメは絶滅危惧ＩＢ類(EN)に分類され、ジャイアントパンダやシロナガスクジラと同じであり、タイマイは絶滅危惧ＩＡ類 (CR)に分類され、こちらはシーラカンスやオランウータンと同じである。ウミガメが絶滅危惧種であるということは今も多くのウミガメの生息の確認されている地域においても非常に認識が薄いところが多いというのも現状である。

■世界のウミガメ

世界に生息するウミガメは８種（説によっては７種）に分類され、そのうち５種が絶滅危惧種である。また、日本の領海に生息するウミガメは上陸産卵にやってくる３種のほか３種類おり、全部で６種類。また、数年前には日本でこれまで産卵が確認されたことのないオサガメの産卵が奄美大島で確認されたこともあり、その生態についてはまだまだ解明されていないところの方が多く、このまま絶滅してしまうと尚更未知の生物となる可能性がある。

■屋久島のウミガメ

屋久島は日本最大の、そして北大西洋最大のアカウミガメの産卵地であり、日本のアオウミガメの産卵地の北限地でもある。これまで、屋久島で確認されているアカウミガメの産卵回数は日本で確認されている産卵頭数の約３０％と言ってきたが、ここ数年でまた更に屋久島の占める割合は高くなりつつある。屋久島で見られるウミガメが増えたのか、それとも他地域で見られるウミガメが減ったのか、どちらも大きな要因ではある。しかしながらウミガメの上陸頭

数だけを見えみると増えてきているとみられる部分もあるのだが、上陸しても産卵できない要因も多く、産卵率は年々低下しており、様々な環境の悪化は否めない。

、

また、２０１１年は屋久島でも台風の被害を受け、１０数万個のウミガメの卵が流出している。

台風は自然災害だからと言い切れるほど人はその環境に手をつけずに暮らしてはいない。我々人間の環境は凄まじいスピードで、かつ目まぐるしく変わる今。その環境の変化は海や森など、取り巻く自然環境に影響を与えている。このままウミガメが絶滅する日を迎えるのだろうか。私は仮に自分が生きているうちにそのことが避けられないとわかっても、今自分が出来ることが何か問い続け行動し、そして伝えてゆくことを諦めず、今年もまたウミガメに会いに浜へと向かうのであろう。

参考資料

日本ウミガメ協議会

http://www.umigame.org/

屋久島うみがめ館

http://www.umigame-kan.org/

お寺の社会性

― 生臭坊主のつぶやき ―

竹中尚文

1. 親の死に目

先日、週刊誌で「親の死に目に会いたい」と言う特集を読んだ。仕事を投げ出して、親の死に目に会えるかと言うことであった。たとえ仕事をしていなくても親の死に目に会える保証はない。「死に目」だけが大切なら、医者になればいい。医者はたくさんの死に目に会っている。

この雑誌の特集の制作者は、昨年 3 月 11 日に突然に亡くなった人や、その遺された人のことは意識になかったようだ。あの日、愛する人を失った人に「死に目」を問えるだろうか。「死に目」を問うことに意味があるのだろうか。その週刊誌には「死に目」ではなく、「死」を語って欲しかった。今こそ、「死」を語るべきである。

「死」を語ることは「生」を語ることでもある。誰もがいつかは死んでゆく。死ぬべき人生を生きるのであるが、死が人生の目的ではない。死をプラニングすることもできない。死については時も状況も予定することはできない。自死について問われることがあるが、私は「死にたい人生」を送った人に出会ったことがない。

死を語ることは生を語ることである。「死を迎えるまでの生」と「死を迎えてからの生」である。

2. 葬式坊主とニセ坊主

前号まで、私は葬式の話ばかり書いた。葬儀で終始するのであれば「死に目」を語る週刊誌と大差はない。

私にとって葬儀と七日参りは

一連のことである。葬儀と七日参りは「まんじゅう」の「かわ」と「あんこ」のようなものだと思っている。葬儀が「かわ」で、七日参りが「あんこ」のようなものである。

最近、お葬式だけに来る坊さんがいるそうだ。時には葬儀料金に坊さんの御布施も含まれて、セット料金として提示されている話も聞く。葬儀屋さんに組み込まれた坊さんである。「かわ」だけの「まんじゅう」を食わされているような話だ。葬儀屋さんに「これが普通ですよ」と言われて納得してしまう消費者意識も愚かしい。

ニセ坊主に金を払うようなものだと思って、ふと考えた。ニセ坊主が葬式をして御布施を受け取ったら、詐欺になるのだろうか。法律家である友人に尋ねた。御布施というものが、本物の僧侶に支払われるものであれば、詐欺になる可能性があるそうだ。ニセ坊主では期待されたものを提供できないと言うことである。そうすると、本物の僧侶とは何であるのか。その宗派の教義も知らないし、気にもならない人にとって、宗派の正式な僧侶であるかないかが詐欺罪の正否を分けるとは思えないと言う。

最近のマスメディアで宗教的知識や意識の裏付けのない表現が気になる。冒頭の雑誌特集にもそれを感じた。ところが、友人の言葉で気付いた。教義も知らないのは坊さんにもいるではないか。先日も知人が「母の七日参りに、仏壇の中の道具やお供えの位置が違っているだの、これを用意しなさいだの、いい加減にして欲しい。それより仏さんの話をして欲しい。七日参りでそれを聞きたいのに」と云っていた。

3. 死ぬまでの生

七日参りは「死ぬまでの生」と「死んでからの生」を問う時だと私は思っている。

かつて遠方に住む友人のお父さんが亡くなったとき、「自分は無宗教だから、お葬式をしないつもりだ」と私に電話をしてきた。

わざわざ坊主の私にこのような電話をくれるのは、そのことに多少のためらいがあったのかもしれない。私はそのためらいが、お父さんへの愛情によるものだと思った。お父さんのことを大切に思う人たちが週に一度集まってみてはどうかと提案した。いろんな思い出話などが出て、とってもいい集まりになったそうだ。最後には坊さんを呼んだそうだ。七日参りである。

そんなに簡単に、途中から七日参りを引き受けてくれる坊さんはいるのか、と思われるかもしれない。私なら喜んで行くし、身の回りを見渡してみても、引き受けそうな坊さんは多いと思う。

数年前のことである。あるお宅の七日参りにお参りをしていた。そのお宅の隣のおじさんが、ほとんど毎回にお参りしてくれた。そのおじさんは、「私はここのお父さんにはずいぶんと世話になりました。私が高校生の頃、反抗期だったのか、よく親子げんかをしました。家を飛び出したら、ここのお父さんがこっそりと朝まで家に居るように言ってくれました。私が非行に走らなかったのはここのお父さんのおかげです」と言って手を合わせた。

また、ある娘さんは「私が、今あるのは、このオヤジのおかげです」と言って涙を流した。その一連の七日参りで、私は父娘のこれまでの話しを聞いた。

死ぬまでの人生を聞くこと、語ることはとても大切な事である。私は、そこに七日参りがあるのだと思っている。

4. 死んでからの生

「ごめんね」と言う言葉を聞くことがある。亡くなった人に向けられての言葉である。声にならず「ごめんね」と言っている人も多い。

本当に愛している人が亡くなったのだ。「ごめんね。(あなたが死んでしまったのに私が生きていて)」と言っているように思う。謝罪の言葉ではないが、愛する人の死も自分の生も肯定したくな

い。

愛する人の死を表現することばを紹介する。

我が子亡くした親なれば
死んでも死なせはしないと
ただ一人嗚咽す　※

(川添泰信師)

「死んでも死なせはしない」と言う表現である。現実は死んでいるのであるが、死んだから「はい、そうですか」とはいかない。だから「死んでも生きている」のである。

仏として生きているのである。こんな表現をすると、また坊主は煙に巻くと言われる。こんな表現が必要のない人には言わせておけばいい。

先日、41 歳で亡くなった方の七日参りをした。その前の週と同じように、お経をあげてから振り返って法話を始めた。小学校 5 年生の娘さんが、右手にお経の本を持って左手に念珠を握りしめて、食い入るような眼差しで正面を見つめていた。その目からは涙が流れていた。彼女は話しを聞き終わるまで視線を伏せることはなかった。

どうして仏さまはいるのか？あなたのためにいるのだ。

「ごめんね」が「ありがとう」になる。

※『宗教部報　りゅうこく』第 82 号（2008 年龍谷大学）

こころ日記

「　ぼちぼち　」

(4)リスカのＡ子

脇野　千恵

小学校からの情報で､「境界性人格障害」という病名であがってきたＡ子。

４月、早速保健の先生から、彼女の小学校での記録や、病名についての説明などが書かれた分厚いファイルが送られてきました。

中学校入学後も、寡黙な生徒でした。小学校では専ら保健室登校だったようで、なかなか教室には入れなかったということでした。

やがて教室から飛び出し、あちこち逃げ回るようになりました。逃げる場所は階段下や、トイレ。そこで手首を切る行為が始まりました。小学校時代からやっていたようですが、血を見ることに慣れていない他の小学校から来た子どもたちは、大騒ぎ。教師ももちろん、そのようなことに慣れているはずもありません。常にカッターをもっているので、それを取り上げるのに一苦労。毎日翻弄されていました。

彼女から取り上げたカッターは、１年で５０本ほどにもなったでしょうか。取り上げても、取り上げても出てくるカッターに頭がおかしくなりそうでした。

Ａ子のリストカットは、時には深く切ったりするので、救急車を呼んだこともありました。関わろうとすると、暴言を吐き、会話が成立しませんでした。なかなか信頼関係が持てないことに、教師たちはいつもイライラし、なぜそのようなことをするのか理解できませんでした。

１年の担任とは気持ちの行き違いがあり、学校でのリストカットがひどくなる一方でした。血を出して暴れる彼女への対応が議論され、生徒指導の方針が出されました。

「リストカットした時は、すぐに親を呼び、迎えに来てもらう！」
というものです。
　朝登校しても、1 時間もしないうちに父親に連れ戻されるＡ子に、となりのクラスの担任である私は、せっかく来たのに…、何とか学校にいさせてやれないものかと思ったものです。

　やがて、Ａ子は学校へ来なくなりました。不登校になっていったのです。学校としての建前は、Ａ子に登校してほしい。しかし本音の部分では、厄介者でした。
　とんでもない子を引き受けたと嘆く担任に、納得がいかない思いが募っていきました。

　２年次のクラス編成では、いつものごとく、問題のある生徒を誰が担任をするのかといったことが話し合われました。話し合いというか、押し付け合い？といったところでしょう。なんとなく私が担任をしてやらなくてはという思いがあったので、1 年間、リストカットの彼女と付き合ってみることにしました。

　「境界性人格障害」という病名は、いつつけられたのでしょうか。小学校での奇異な行動に困った担任が、病院への診断をと勧めたのでしょうか。
　診断の結果、様々な薬を処方され、中学校入学当初も、実にたくさんの薬を服用していました。薬を飲むとおとなしくなるというのが、教師の見立てでしたので、薬の副作用などの心配など及びもしませんでした。
　しかし、彼女は少なからず薬によって心も侵されていったのではないかと、思っています。

　元担任から、「先生、これ！」と言って手渡された例の分厚いファイル。境界性なんとかかんとか？とにかく専門用語がたくさん並んでいて、とても読む気にはなりませんでした。担任をするからには、熟読しておかなければならないのでしょうが、引出しの奥深くに押しやったきり、目に触れることはありませんでした。

　2 年生になったＡ子は、新しいクラスが珍しかったのか、学校に登校し始めました。しかし、リストカットが止んだわけではありません。相変わらず、階段下に隠れては、手首を切る毎日でした。保健の先生もどうしたものかと悩みを共有してくれました。

　そんな状況を放っておくわけにはいかず、生徒指導の色々な意見もあり、スクールカウンセラーにかかることになりました。リストカットは思春期によくありがちな行為と理解しているので、私自身はそんなに驚きません。関心を持ってほしいというアピールととらえれば、関わり方は難しくないと考えていました。

　スクールカウンセラーとの面談の日、Ａ子は若い女性心理士の前で手首

を切ってしましました。何せ専門家との面談なので、すっかり安心して託したのですが、ダメでした。若いＳＣは、面談中にリストカットとは何事か！と立腹し、それが原因かどうかわかりませんが、その後ＳＣが学校へ来ることはありませんでした。おまけに、そんな危険な学校には居られないので辞めますと、ＳＣの母親から電話が入りました。そのことの方がショックでした。

一方職員室では、とんでもないことをしでかしたものだと、教師たちがまた騒ぎ立てました。

Ａ子の家族

彼女の家族は４人家族。スーパーの店長をする父と、パートをいくつか掛け持ちで働く母、小学校に通う妹でした。

家族の情報は１年の担任からはほとんどなく、２年生になって初めて分かったことがいっぱいありました。

父親は九州出身。母親は四国出身。遠く離れた地方出身の二人が出会ったのは、集団就職でした。ある大手繊維工場で出会った二人は結婚し、2 人の女の子が誕生しました。

父親はまじめに働き、結婚後しばらくは何も言うことがない生活だったようです。

もともと父親自身は親との折り合いが悪く、実家とは絶縁状態にありました。家庭の中では寡黙で、卑屈な態度で母親に接するといった感じでした。母親も口下手で、人とのコミュニケーションも実に不器用でした。

父親と母親の仲は徐々に距離ができ、いつのまにか家庭内別居という状況に陥っていきました。不仲になった原因はよくわかりませんが、経済的なことが大きかったように聞いています。

母親は「離婚」を希望していましたが、自立できないために我慢するしかありませんでした。

そんな両親を見ながら育ったＡ子は、何をしても（手首を切っても）父母から関心を持って接してもらうことはありませんでした。

２年生になって

やがてＡ子は、リストカットの他に、喫煙、ピアス、睡眠薬、万引きといった問題を抱えていきました。

教師は、大変な子を担任すると、
「あの子さえ、このクラスにいなければ…」
と思うことがあります。それは明らかに排除の考えです。クラス経営の難しいところですが、担任がそのような考えをもつと、子どもも同じように排除をしていくものです。

何とか教室での彼女の居場所の確保をと色々考えました。

Ａ子が学校へ来た日は、できそうな仕事を見つけ、友だちと一緒に活動さ

せました。たとえリストカットしても、家には電話をせず、きちんと気持ちを聞き対応しました。教師への信頼度が非常に低かったので、暴言しか返ってこない言葉に苦労しました。

２学期、父親に迎えに来てもらうことが少なくなり、学校にいる時間が少しずつ長くなっていきました。しかし、相変わらず口が悪く、友人から理解されないところがたくさんあり、よくもめることもありました。「もう帰る！」と言って飛び出すＡ子を、何度追いかけたことか。

一方で、体育大会や文化祭などに参加することで、クラスに溶け込むＡ子の姿がありました。学校に来ることの意味はおおきなあと思いました。

おとなになったＡ子

今Ａ子は、障がい者として「療育手帳」を持ち、作業所で働いています。

中学を卒業後、高校へ進学しました。その喜びもつかの間、すぐに退学してしまい、深夜徘徊、シンナー、援助交際、万引きの常習。パトカーにも何度もお世話になったそうです。

一体どんな十代であったのか、音信不通だった時期があり、わかりませんが、本当に命が危なかった時が何回もあったことは確かです。

年に数回、彼女は我が家に遊びに来ます。もう大人なので、堂々と煙草を吸いながら言います。

「中２が一番楽しかったなあ」と。

リストカットは、なかなかやまらないと言っています。家では相変わらず父と母は、家庭内別居状態。妹は引きこもっています。最近父親が失業したので、家の経済をとても気にしています。

「うちの年金がなかったら生活できひんのやでぇ」

と偉そうにつぶやくＡ子。

今は２０代後半。

「若いころは、子どもがほしいと思っていたけど、今は自分に子どもができたら、育てられへんやろなあ…」

「うち、長生きできんかもしれない」

将来の夢も、やりたいこともないというＡ子。頑張ってとは言えません。今は住む家があり、何とか暮らしていますが、やがて父母は先立ちます。そのあと、Ａ子姉妹はどんな暮らしをしていくのでしょうか。想像すれば心配はつきません。

私のような人間でもいいから、彼女と繋がっておきたいと思っています。

まだまだ目がはなせないＡ子です。

（中学校教員　脇野千恵）

第６回　これからの男性援助を考える

男性相談とセクシュアリティ

坊隆史　松本健輔

男性援助の実践者２名による本連載は、男性援助に関する内容という以外は一切の縛りはなく、交互に自由気ままに書き綴られて６回目を迎えることになった。前回は松本がセックスレスについて論じた。自身の援助実践から性とパートナーシップに関するリアルな問題提起がなされていたように感じる。そんな前回に刺激を受け、今回は男性相談（男性の、男性における、男性のための相談窓口）の現場からみえてくる男性の性、とくにセクシュアリティについて考えることにする。

1、男性相談と性

「『おちんちんが小さい』と言われるのだけれども、本当に小さいのでしょうか？」

これは本連載第１回で登場した相談例である。こうした主訴の相談は男性相談員が男性の悩みに応じる男性相談の現場では比較的多い。また性器に関するダイレクトな性の相談だけでなく、男性性に悩む男性からの「性」に関する相談も多い。詳細は後の説明でおわかりになるだろうが、ジェンダーおよびセクシュアリティの問題は、男性―女性、正常―異常、適応―逸脱などの二項軸では簡単に表現できない。言葉で表現できない「あいだ」で揺れている人も多く、明確な答えもない。それゆえ自分の性のあり方を模索することを援助することが「性」の援助につながる。

社会的な性を意味するジェンダー（Gender）に関する問題は、これまでジェンダー論にて男性役割葛藤、ワークライフバランスなどをキーワードとして取り上げられてきた。男性相談の場においても、ジェンダーに関する相談は生きにくさやキャリアなど従来のカウンセリングモードを応用させることで耳を傾けることができる内容が多い。

ところが同じ性であってもセクシュアリティになると事情が変わってくる。セクシュアリティ(Sexuality) とは、「人々があるモノ・コトを性的と感じている事態そのもの」を指している語である。生物学的な性別、性自認、性的指向、性的嗜好、生殖などの様々な概念が含まれている。つまり「その人の性のありようをトータルに指す言葉（メンズセンター、2000）」である。

男性性に関する相談場面では、こうしたセクシュアリティの視点が欠かせない。例えば、男性の役割葛藤に物心ついた時より同性に性的関心が向いていることをカミングアウトできないでいる男性、性愛の方向が社会的に逸脱していることを自覚してはいるものの修正することができずに悩んでいる男性たちが実際にいる。このような男性たちが抱えている主訴に耳を傾けるには、男性のもつセクシュアリティにセンシティブにならなければ傾聴できない。ところが、性に関する話題そのものが、現代の日本ではタブーである傾向はまだまだ根強い。だからこそ、相談の主訴となっているのであり、恐る恐る勇気を出して相談をしているのである。男性援助に携わる援助者はこうした現実とセクシュアリティを理解しておくことが必要であろう。

2、セクシュアリティに関する用語の整理

そもそも、セクシュアリティに関する言葉をどれほどご存知だろうか？ 知っているようで知らない言葉も多いのではないだろうか。性に関する話題を主訴とした男性相談および男性援助を考察する上で、セクシュアリティに関する用語をある程度知っておくことはクライアントを理解するための助けとなる。ところが非常に多様で筆者自身も困惑することがあった。今でも混乱することがある。ここで筆者自身が用語を整理するため、そして読者にも性に関する用語の多様性と基礎知識を知ってもらうためにちょっとしたクイズを用意した。知識の整理の意味合いも兼ねてお付き合い頂ければ幸いである。解釈は他にもあるが、「男の子の性の本」（メンズセンター、2000）の表現を中心に引用している。解説は唯一のものでないことはご了承頂きたい。

セクシュアリティ用語の整理クイズ

言葉とその意味を一致させてください

1、アセクシュアル

2、インターセックス

3、クィア

4、トランスジェンダー

5、トランスセクシュアル

6、トランスベスタイト

7、バイセクシュアル

8、ヘテロセクシュアル

A　こころと身体の性に違和感をもち、性別を変更したり、変更したいと感じている人

B　異性を恋愛や性愛の対象とする性的指向を持つ人

C　解剖学的に男女両方の特徴を併せもつ人。また、身体の性別が典型的な男女のどちらかではない状態で生まれた人

D　性的欲求をあまり感じない人

E　こころと身体の性別に何らかの違和感、つまり性別違和感をもっている人

F　セクシュアルマイノリティが 自分たち自身を指す肯定的な語

G　性指向が異性・同性のいずれにも向く人

1	2	3	4	5	6	7	8

いかがであっただろうか。日頃セクシュアリティに関心をもっておられる方にとっては簡単だったかもしれないが、さほど意識してこなかった方は初めて目にする言葉もあったのではないだろうか。以下、簡単ではあるが正答と補足の解説をしていきたい。

１、アセクシュアル（asexual）

正答は「Ｄ」である。アセクシュアルとは性的関心を持たない人のことを指す。性的関心をもたないと一言でいっても指向は多様である。

２、インターセックス（intersex：ＩＳ）

正答は「Ｃ」である。解剖学的に男女両方の特徴を併せもつ人、あるいは身体の性別が典型的な男女のどちらかではない状態で生まれた人のことを指す。半陰陽、ふたなりともいう。後に紹介するトランスセクシュアルとは別のセクシュアリティである。

男性または女性のいずれかで育てられ、第二次性徴を迎える思春期でインターセックスだと判明するケースが多い。その際、ジェンダーアイデンティティの変更や決定を求められ、本人は大きな苦悩に直面する。周囲の大人は驚き、彼らの主観で性の決定を求めることがあるが、本人にとっては一生を左右する大きな決断となる。こうしたクェスチョニング（questioning：性の決定に迷っている人）に対して保護者や医師などの意見を参考にすることがあるが、あくまで参考であり、本人の自己決定が最重要である。男性相談はセクシュアリティに関係した相談も多く、こうした悩みに対しても適切な知識を有し、真摯に傾聴していく姿勢が求められる。

３、クィア（queer）

正答は「Ｆ」である。セクシュアルマイノリティが自分自身を肯定的に表現する語のことである。もともとは相手を中傷する言葉として用いられたが、自身が誇りをもって用いるようになった。中にはセクシュアルマイノリティのコミュニティ全体を包括し結束を高めるという意味で自ら名乗ることを好む人もいる（Huegel,2003）。

筆者自身も男性のための電話相談において「私、クィアなのですが…」という相談を受けたことがある。初めに相談を受けた当時、意味を知らなかった筆者は、クライアントに対して意味を尋ね、現在の日本でも当事者同士では頻繁

に用いられていることを教わった。クライアントから「(セクシュアルマイノリティに対して）なかなか理解がないのが辛い。でもこうして興味をもって聴いてくれただけでもありがたい」と言ってもらえたことが印象深い事例であった。

４、トランスジェンダー（transgender：ＴＧ）

正答は「Ｅ」である。こころと身体の性別に何らかの性別違和感をもつ人のことをトランスジェンダーという。自分の性自認や性表現が異なっている人の総称で、(あらゆる段階の）トランスセクシュアル、トランスベスタイト、インターセックスなど、多様な状態の人が含まれる (Huegel,2003)。性的指向は様々で異性愛（ストレート）もいれば同性愛の人もいる。

５、トランスセクシュアル（transsexual：ＴＳ）

正答は「Ａ」である。こころと身体の性別に何らかの性別違和感をもち、それを解消するためにホルモン治療や性転換手術をして性別を変更する人、あるいはしたいと望んでいる人をいう。当事者にとっては性別を変更という言い方は誤りで、本当の性を取り戻すことである。トランスセクシュアルの人は全てトランスジェンダーであるが、トランスジェンダーの人は全てがトランスセクシュアルとは限らない。

６、トランスベスタイト（transvestite：ＴＶ）

正答は「Ｈ」である。こころと身体の性は一致しているが、外見やファッションを異性のものにしたい人たちのことである。クロス・ドレッサーともいう。メンズセンター（2000）は、女装をする男性のトランスベスタイトの多くは、異性愛者であると述べているが、筆者の実感もそうである。トランスベスタイトであることをカミングアウトしている知人もがいるが、その知人は異性と結婚をしているし、パートナーに対して性的な関心もあるという。

統計こそないものの、潜在的なトランスベスタイトはずいぶん多いように見受けられる。筆者が受ける相談ではインターセックスやトランスセクシュアルよりも頻度が多い。大概はトランスベスタイトという概念を知らないことが多く、逸脱した性癖であると思い、「私は変態なのでしょうか？」と相談してくる。その際、トランスベスタイトという言葉を紹介すると、「自分はおかしくなかったんだ」と安心して自分のセクシュアリティを受け入れられることが多い。さらに適応的な男性当事者になると、オフィシャルな場面では男性の服装をして

いるが、下着やハンカチに関しては女性用を使用するといったように、人目につきにくい部分で異性の服装を維持することでメンタル面でのバランスを保っている人もいる。

７、バイセクシュアル（bisexual）

正答は「Ｇ」である。性指向が異性、同性いずれにも向く人、あるいは相手の性別にこだわらない人のことである。両性愛者ともいう。バイセクシュアルに対して、同性を恋愛や性愛の対象とする性的指向を持つ人のことをホモセクシュアル（homosexual）という。

筆者はバイセクシュアルの当事者から相談を受けることもあるが、異性に対しても感情的、性的な関心をもつことができるため、普通に婚姻生活を送っていることも多い。ただし、異性より同性への興味が強い場合、異性のパートナーに対する罪悪感をもってしまったり、より興味が惹きつけられる同性パートナーへの欲求について相談してくることもある。

８、ヘテロセクシュアル（heterosexual）

正答は「Ｂ」である。異性に対して性的指向をもつ人である。多くの人はヘテロセクシュアルである。セクシュアルマイノリティとはヘテロセクシュアル以外の総称と理解して頂ければよい。また性同一性障害などのように自分と他者の間で同性の捉え方が異なる場合、身体的に同性であっても異性とみなすことが多い。

補足として、クイズには含めなかったがセクシャルマイノリティの表現の変遷についても紹介しておきたい。かつてセクシュアリティについては、異性愛すなわちゲイ（gay）とレズビアン（lesbian）のみが考慮され「Ｇ＆Ｌ」と呼ばれてきた。次第にバイセクシャルのＢが加わり、ＧＬＢまたはＬＧＢと呼ばれるようになった。さらにはトランスジェンダー（Ｔ）とクエスチョニング（Ｑ）が加わりＬＧＢＴＱと呼ばれるようになってきている（Huegel,2003）。アメリカにおいてはＬＧＢＴＱという表現が相当浸透しているだけでなく、日本でもセクシュアリティに関する書籍では少しずつ用いられてきつつあるようである。

さらにジェンダーに関する基本的な用語を次頁に記しておく。ジェンダーについては、知識や理解が普及してきているように思うがまだまだ誤解も多いように思われる。理解の補足にしてほしい。

ジェンダー・プレゼンテーション（体や外見によって表現される性別）
ジェンダー・ロール（社会的な性別役割）
ジェンダー・アイデンティティ（性別の自認）

3、男性相談と性

筆者は「男性相談」と銘打った相談で男性たちから様々な相談を受けている。その方法は大きく面接相談、電話相談と二種類である。性の相談に関していえば、ジェンダー、セクシュアリティともに匿名性の高い電話相談からの相談が際立って多い。性を語るには抵抗があるし勇気がいるからである。

表 性的嗜好のスケール（Kinsey,1948）

0	完全な異性愛者
1	主に異性愛、まれに同性愛
2	主に異性愛、ときどき同性愛
3	異性愛と同性愛が同等
4	主に同性愛、ときどき異性愛
5	主に同性愛、まれに異性愛
6	完全な同性愛者

性、とくにセクシュアリティを語ることは難しい。例えば単にヘテロセクシュアル、ホモセクシュアルといっても単純に二分できるものではない。右の表をご覧頂きたい。セクシュアリティに関する古典のキンゼイ・レポートからの引用であるが、異性愛、同性愛間は一連続線上のスペクトラムとしてまとめられている。私たちは異性愛、同性愛といえば白/黒の二分法でまとめてしまう傾向がある。さらにはマイノリティ（同性愛）を例外的なものとして逸脱しているものとみなしてしまう傾向すらある。しかし、実際は連続しているスペクトラムとして理解しておく方が望ましい。

とくに男性相談の援助場面では性を扱うことが多くなるのでなおさらである。例えば同性愛で自分が異常なのではと悩んでいる男性から相談があった場合、援助者がセクシュアリティの多様さや複雑さを理解しておけば、「好きになった人は全員男性ですか？」とか「今回好きになってしまった人がたまたま男性なだけですか？　もしそうであれば他の人にもあることである。そのためおかしいことではないですよ」と伝えることができる。冒頭でも述べたように男性―女性、正常―異常、適応―逸脱の二項軸ではなく、“あいだ”を取り扱うことができるように心がけるは、ジェンダーやセクシュアリティといった男性性の相談援助を行っていく上で重要であろう。

ここまで男性相談と性について述べるための準備段階として、整理を目的としてセクシュアリティに関する語句の一部を概観してきた。これだけで男性相談における性、とくに男性セクシュアリティについては大きなテーマであることがおわかり頂けたのではないだろうか。１回で述べてしまうのはもったいない壮大かつ深いテーマであるため、今回はここまでにしておこうと思う。実際の相談場面からみえてくる男性がこころに抱えるテーマについては次回まで温めておくことにする。しばしお待ち頂きたい。

（文責：坊 隆史）

文献

メンズセンター（編著） 2000 男の子の性の本－さまざまなセクシュアリティー 解放出版社

上田勢子（訳） 2011 LGBTQ ってなに？－セクシュアリティ・マイノリティのためのハンドブック－ 明石書店 (Kelly Huegel 2003 GLBTQ：The Survival Guide for Queer & Questioning Teens Free Sprit Publishing)

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（４）

中村周平

今回は、事故後搬送された病院での半年間の入院生活について触れていきたいと思います。手術によって怪我自体(骨折)は治っていく中で、当初は障害も徐々に無くなっていくのではという期待を持っていました。しかし、その期待は時間の経過と共に葛藤へと変わっていきます。また、両親は障害を負った息子と「２４時間向き合う」生活がスタートすることに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=H とする。

3　入院生活前期

1）　「障害」の認識と葛藤

「首の骨が折れたら死ぬか、良くても障害が残る」、そのことを知らないわけではありませんでしたが、当時は自分の状態とつなげて理解することはできませんでした。「なんでこんなことになってしまったのか」それがわからないまま、ベッドに寝かされたままの日々が続きました。しかし、まったく動かない体も徐々に治っていくものと考えていました。

I:「何日か後の病室になるわけや。それで、これはやばいことになったとかあるいは体が麻痺しているみたいな。それは事故の瞬間に理解しているわけ？」

S:「そうですね、麻痺って言う言葉かどうかは分からないですけど、動かない…」

I:「大変なことになったということがその場で分かっていた？」

S:「分かってる。(中略)最初は目が覚めたら集中治療室で、自分の正面に友達の寄せ書きがおいてあって。たまたま事故の一週間後が誕生日だったんですよ。誕生日おめでとうっていう色紙と、元気になってくださいっていうお見舞いみたいな感じの色紙が置いてあって。それ読んだときに、また、首を鍛えて頑張ってくださいとか、僕もそれを読んで違和感がなかった。最初は手の骨や足の骨が折れた感じで一時的に体が動かへんけど、治るんちゃうかなみたいな、でもこんな怖い思いをするのも嫌やし、ちょっと骨がくっつくまで時間かかるかもしれんから、もしかしたら現役は退かなあかん、マネージャーみたいなことをしなあかんのかなって。そんなに深い意味はなくて､Aチームとして頑張っていけへんと思うし、もしやるんやったら、ずっと B チームでやるんやったら、もっと別の形で。なんかしょうもないことばっかり考えてましたね」

I:「ある程度は回復すると。元の状態として現役の選手になれへんかも分からないけどマネージャーぐらいやったらやれるんちゃうかと。というふうな認識やった？そんなんがだんだん変わっていくわけ？だから最初は治ると思ってた？」

S:「最初は自分にもうちょっと勇気があればラグビーできるかな、ぐらいの気持ちでした」

「せっかく新チームがスタートして、自分たちの代がやっと来た。ホンマにこれからだっていうのに」。自分の障害やこれからのことより、ラグビーができない悔しさを感じていたことを覚えています。

ただ、時間が経つにつれ、これがただの怪我ではないのでは、という不安に襲われていくようになります。5 年間のラグビー生活で鍛えた体は見る間に骨と皮だけになり、お尻は尾てい骨が飛び出ているように見えるほど痩せ細っていきました。また、自律神経も傷つけてしまったことで、それまで頭で考えなくても体がやってくれていた機能にまで、障害があらわれるようになりました。

I:「それが、だんだん現実が分かってくるみたいな過程があるわけや？」

S:「僕自身いつか治るんちゃうかな？というところから、時間が経つにつれて、体はどんどん細くなっていくのに、体は全く動かへんし。首の骨がくっついてから、車いすに座る訓練とか始まったんですけど…初めはベットに座る練習やったんかな？座ったら血圧が下がるんですね。がくんと。ベットをちょっと起こしただけでも血圧下がって気を失ってしまったりもあって。首を痛めたときに自律神経も痛めてしまって。自分が頭で考えんでも、体がやってくれる神経で血圧の安定も自律神経がやってくれてるらしいんですね。だから立ったり座ったり寝たりしたときに立ちくらみとかあるじゃないですか。そういうのを自律神経の過反射ではないですけど、体が勝手にやってくれてることで座ったときから立ったときぐっと血が下に下がるのを止めてくれるのが自律神経の役割、それを傷めてるから、寝てる状態から座った状態になっても血圧を止めてくれないので、でーんと下がってもぼてっと気を失ってしまうということがあったり…」

I:「最初は座れへんでしょ？自分の座位を保持するだけのあれがないんで。今はもう座れんの？」

S:「座れないです。車椅子じゃないと。最初は車いすもストレッチャーだったんですけど、足伸ばして、

半ベットみたいなあれで、最初 10 分かな？病棟のナースステーションまで行って帰ってくるっていうのが 1 ヶ月くらい」

I:「そこら辺でぼつぼつ、まずいぞと？」

S:「これは変やと思いましたね。普通のケガじゃないんじゃないか？って。もしかしたら障害が残ってしまう。でもここまできついもんやという認識はまだなかったですね。(中略)ちょっとずつ回復するんちゃうか？と。車いすになっても下半身麻痺でも上半身動く人いるじゃないですか、脊髄の場所の関係で。なにかしらもっと動いていくんじゃないのかと思っていました」

I:「手ぐらいはもどるかな？」

S:「まだ走れはせんけど、歩けるぐらいにはなるんかと、それがどんどんこう目標位置が下がってきましたよね。走る、歩く、立つ、もしかしたらこれってどうなるんやろみたいな」

良くなるどころか痩せ衰えていく私の体と機能。「明日になればどこかに反応が」「たとえ走れなくても歩けるようには」と思うことで不安を紛らわしていました。

そして、事故直後は精神的な部分で追いつめられていましたが、私と両親にとって、むしろ集中治療室を出てからこそが、本当に大変な時期の始まりでした。一般病棟に戻った初日の夜、病院から夜間の付き添いは断られてしまったために夜 8 時には母親が帰らなければなりませんでした。

S:「集中治療室に 17 日間いて、その後一般病棟にでていくやんか。降りてきたその日は、一般病棟に（付き添いが）つけないということで、帰ってしまったのがあったんやけど、(中略)病院が 24 時間看護といいながら、なかなかつかへん現状があるのもそうやったんけど、精神的に僕が、ひとりになることに耐えられなかったのちゃうかな？ナースコールも押せなかったけど」

H:「すごい不安やったと思う。一般病棟に行った時、そしたら帰るわって言ったら舌打ちするやん。で、どうしたって言ったら、ほんとになんでもないことで呼び返すや」

S:「顔かいてとか」

H:「多分そういうことやったと思う。ほな行くわなってなっていうねんけど、ドアの所まで行くと、チッチッって舌がなるんやわ。最後に『一人がいやなんか』っていうと、『うん』って。『せやけど、付き添いがあかんって言われてるしな』って。一応それで『うん』っていうねんけど、またチッチッってなるんやわ。泣きながら廊下走って行ったの覚えてる。ナースの詰所で、『すごい不安がってるので、今晩頻繁に見てやってください』って。一階まで行ったけど、そこで動けないようになって、涙が出て、涙が出て。その日に帰って、やっぱりこれはあかんわって。私らが、もたへんかった、不安で。次の日から付き添いを申し出たら書類一枚で」

S:「大変じゃなかった？家から東福寺まで小一時間かかるやんか？」

H:「誰もいない時に、何か起きているんじゃないかっていう不安よりは、そばにいるほうが、親もきっと安心してたんやと思うわ」

何一つできない体で一人になることに大きな不安を感じていた私と、その不安を少しでも和らげたいという両親。そして、翌日から両親が交互に病室に泊まりこむ生活になった。

S:「その間、病院にいてもらいながら、片方は家で、家事やこれからのことをやってくれてたと思うんやけど…でも病院でほとんど起きてくれてたから、もしかしたら寝るために家に帰ってたんかな？」

H:「もちろん、家で仮眠をとって、その日の晩ご飯とかをして、途中からは、お弁当箱に入れて持ってくようになったよね、周平が病院のご飯食べられへんようになって」

S:「暖かい弁当箱に入れてくれて、うどんとか食べてた気がするわ」

H:「時々父が、あなたの大好きな、コンビニお弁当を持ってきてくれたりとか」

S:「事故の翌日から、仕事をふたりとも休まなあかんようになったよね？」

H:「迷ってる暇も躊躇している暇もなかった。とりあえず、すぐ職場に電話いれて『ごめんなさい、明日

から介護休とります』って」

事故の翌日からすでに介護休暇を申請、民間企業では数カ月が限界ですが、公務員であったことが幸いし長期の休暇が認められたことは、不幸中の幸いでした。

2） 学校側に対する期待

事故が起きた原因は全く分かっていませんでしたし、知りたいと思う時間も気持ちもありませんでした。「僕はこれからどうなる。ずっと病院？いつ帰れるの？体はどうなったの？」。どれだけ考えても答えが出ない問題ばかり頭に浮び、心の整理をするだけで精一杯の毎日でした。ただ、心のどこかで「あれだけ大きな事故やったんやし、誰かがしっかりやってくれているだろう」と、期待している自分がいた事も確かでした。

S:「最初親は病院に付きっきりで、僕も自分の体がどうなったか分からない状態で。事故のことは分からんっていう気持ちと、どっかでちゃんとやってくれてるやろっていうか、こんな大きな事故が起きたんやから当然なんで起きたんかは分かってくれてるやろうし、あんだけ部員の多いチームなのでまた同じことが起きひんようにとかは考えてくれてるやろうと、どっかにそんな安心感みたいなものが当時あったような気がしますね」

I:「入院してる時に？」

S:「自分と同じように運ばれてくるメンバーがいるんじゃないかっていうことがすごく怖かったので。でも、そういう話無かったし、何かしら話し合いがあったんやろうと」

所属していたラグビー部は 70 人近い部員を抱えており、日々ハードな練習を繰り返していました。「自分に事故が起きたということは、今後も誰かが同じような事故に遭うかもわからない。そんなことは絶対無いようにしてくれるだろう」。誰かに責任を追求したいのではなく、「誰一人自身と同じ目に遭って欲しくない」というラグビー部の指導陣や学校側への私の思いでした。

そして、両親が学校側へ求めたのは、事故に対する責任追及ではなく、今回の事故を教訓として活かし「同じような事故を二度と起こしてほしくない」ということでした。事実、学校側の対応は決して万全なものとは言えませんでした。

S:「父、母が面会に来てくれて家を行ったりきたりしてるときに、学校の人とは結構頻繁に連絡とったりしてたの？」

H:「その間はね、監督結構来てたし、その面会時間にあわせても来てくれてたし、逆に、学校のこともあるから『毎日じゃなくていいよ、他の生徒さんのことあるし』っていうぐらい。『僕が来たいんで来てるんですから』って来てはったなぁ。監督がこれないときは部長が来てたりとか、コーチが来たりとか必ず誰かが来てはった。そのなかで　学校のなかで起きた事故やんか、いくら故意にではなくても、監督陣を責める気持ちは全くなかったし。ただ、周平が怪我するだいぶ前に交通事故の賠償のニュースがあって、『もし生きてたらもらえるはずやったお金』人間の命ってこんなんして計算されるねんなって、むなしいなって話を周平としてた時もあったし。周平の命をお金で換算して欲しいとは思わないけど、こんな事故ってまた学校で起きる可能性があるもんやから、今後の学校の対応の仕方を見せてもらいますって言うことを監督に伝えた。校長に『お金のことはいいですから、バリアフリーのことを望んでおられるのですね』って。で『裏の階段に手すりをつけようと思ってるんですよ』って言われたときに、あぁ何もわかってない周平に起きたことを。そやし、まずは周平の体に何が起きたかをちゃんと理解してくれって。そのためには、そういう人が入ってる、リハビリ専門病院とかそういうとこも見てもらえたらいいのでっていう話をしたら、大原記念病院と兵庫の県リハを見に行かはって。『すごく素晴らしいところで、みんな希望を持って生活している』という感じの情報が入ってきて。そんなこと伝えてほしいんじゃないと。どういう状況になってその人達がリハビリをうけなあかんのかと、周平の負った障害をちゃんと理解してもらうために、見に行って欲しいっていったのに、なんかこう、親は激怒したりとい

う場面があったりとか、事故に対する受け止めがとってもチグハグやったっていうのが最初からあったよね」

学校管理職との連絡の不備や、「息子の障害」についての思いの違いに、事故直後の両親は理解に苦しんでいました。

しかし、両親は学校側と対立することはありませんでした。この事故で「争う」ということは何も生まないということをわかっていたようです。そして、何より両親は監督と同じく、日々多くの子どもらの命を預かる教員でした。

S:「それが気にならへんぐらい、いろんなことがいっぱいいっぱいやったというか」

H:「そうやね、もう事故の当初から監督陣というよりは、学校の首脳陣というか、校長とかっていう人の受け止め方が…周平を搬送するために救急車が入ってきたことも知らへんかったみたいで。そいうところの学校の危機管理体制というか、同じような職種にいるからありえへんことやよね、学校に救急車がきたことを管理職が知らないなんて。でも、それどころじゃなかった。集中治療室にいたときにいろんなことがあったんやけど、その間に肺炎起こして気管切開せなあかんかったりとかね。(中略)きつい薬が使われていて、意識が朦朧としていて。何日目やったか、友達のお父さんが、来てくれたときも周平の状態が今までになく悪かったというか、とりあえず声が出えへんねんけど、体を起こしてくれって言うのをしきりに訴えて、「僕はこんなことしてたらあかんねや」って。『前へ前へ』って言うんや『前に進まんと僕はだめになってしまう』って。なんか朦朧とした意識の中でそういうことを言ってるのを見て、友達のお父さんが激怒しはった。その時に『自分が想像したのと、周平の状態がぜんぜん違う、こんな体にされて、なんで黙ってるんや』って。その時に私らは『ラグビーで言えば、スクラムのあっちとこっち別れてではなくて、同じ側でスクラムを組んで周平のこれからを支援してもらうことをとったんや。敵対する関係ではなくて』という話を。『学校の先生やねぇ、甘いね』って話をされた。その事故の当初、父とはそんな話をしてたね」

S:「僕は知らんかったけど、学校とチグハグは最初からあったけど、対立するような関係ではなくて、というかなってほしくなくて、一緒にいってほしいという」

H:「争うことは望まへんかった。争うことで何かは前進するというのは思ってなかったこととか、部活動の指導というのはプライベートの部分もそこに注いで頑張ってくれてはる人たちというのも、身近にたくさん見てきてたから。一概にそこで起きた事故やからそれを責めるっていうところからスタートしなかった。ほんまに泣き崩れるコーチ陣に『先生らのせいじゃない』って親が言ってた」

自分たちの周りにも、監督と同じように、私生活を犠牲にして熱心に部活動に打ち込む同僚を何人も目にしてきた両親。学校で、しかも部活動中に起きた事故について、誰かに責任を追求することは決して望まないということを感じていまた。「同じ側でスクラムを組んでいて欲しい」、それが両親の一番の思いでした。

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第３回

―福祉の概念・言葉の解釈について③

「自立を支援する-2-」

三野 宏治

はじめに

今回も「自立を支援する」ことについて述べる。前回は障害者の自立についてその概念形成を述べ、自己決定をすることで自立とする「自己決定」的自立について知的障害者の事例を挙げ、自己決定を支援することの困難さについて論をすすめた[1)]。論考に当たって、「ＩＬ運動を契機に「自己決定的自立」が「身辺自立」や「経済的自立」につづく第三の自立として提唱されたことにふれ、ＩＬ運動自体は特に「自立」を目的とはしなかったことを紹介した。そして「自立」も目標とすることは「自立」の概念を規定し、その規定から外れる人を生み出すことをＩＬ運動の当事者たちは知っていたからだ」という立岩の主張を援用した。その上で、知的障害者のある行為が「社会の規範」や「一般的なやり方」とは違い社会とコンフリクトを起こした事例を紹介し、支援者の行為について分析を試みた。知的障害のある人「問題行為」[2)]はその人の「決定」に基づいて行われており「決定」の具現化である。では、その行為をもって「自己決定」的自立がなされているのかと問われると、多くの場合「なされていない」ことになる。「自己決定」はしているが「正しく」なされていないとされる場合が多い。それでは正しい「自己決定」とはなにか。「自己決定」の正しさを規定することは困難だろう、また規定することで自己の「決定」ではなくなる場合がある。しかし、障害者福祉のフレームでは「自己決定」を支援することが仕事

として位置づけられているようだ。「自己決定」を支援する仕事には本人の「問題行為」によって表現された「自己決定」をそのまま認めるのではなく福祉が提供できる選択肢、つまり「社会のルール」に抵触しない「決定」を選ばせるという内容が含まれる。もちろん全てを本人の思うと通りにしておくわけにもいかぬがある程度は本人の思い通りにさせておくという方法も考えられる。しかし、どのような行為までが良いという判断は難しいし、仮にその行為が「自傷行為」や「他害行為」に及んだ場合積極的によいとはいえない。どこまでその人のやり方を「自己決定」として認めるのかは難しい問題である[3)]。しかしこの問題は知的障害者の支援場面に限ったことではない。特に精神障害者の支援現場では疾病によって「自傷行為」や「他害行為」のおそれがある場合、適切な医療を提供する名目でその人の「自己決定」が積極的に剥奪されることがある。本稿ではその人の「自己決定」が剥奪される場合、つまり行動制限や非自発的入院に関して当事者の考えを紹介する。次に行動制限や非自発的入院のように明確に「自己決定」が剥奪される場合と違い、当事者や支援者が気づきにくい「自己決定」的自立の危うさについて述べる。

精神医療の「自己決定」剥奪について

精神障害者の支援現場、特に精神医療の現場では疾病によって「自傷行為」や「他害行為」のおそれがある場合、適切な医療を提供する名目でその人の「自己決定」が積極的に剥奪されることがある。具体的には本人の同意がない入院形態である医療保護入院や措置入院、入院中の行動制限がこれに当たる。精神保健福祉法の規定では医療保護入院とは自傷他害のおそれはないが、患者本人の同意が得られない場合に、指定医の診察の結果、医療及び保護のため入院が必要と認められた患者について、保護者の同意により行われる入院形態のことであり、入院させなければ自傷他害のおそれのある患者に対して知事の権限で行われるものが措置入院である[4)]。本人は「入院の必要はない」と主張したとしても保護者や医師が「入院は必要である」と判断すれば入院治療が開始される。また、精神科病院は入院患者の行動制限を行うことが「医療または保護に欠くことのできない程度においてのみ」可能である。[5)]

これらの「自己決定」の剥奪について全国「精神病」者集団の山本眞理（長野英子）は「障害者権利条約にふさわしい精神障害者施策および全障害者施策を」という論考のなかで次のように述べている。

> 私たち精神障害者は、いやだといっても強制的に精神科病院に入院させられたり、あるいは強制的に注射されたりする。精神科病院内の鍵のかかった病棟に閉じ込められたり、独房に隔離されたりする。
>
> これは、精神医療保健福祉法という法律と心神喪失者等医療観察法という法律に基づいている。
>
> こうした法律は世界各国に存在している。そうしたなかで条約は精神障害者に対するこうした法律の廃絶を求めている。
>
> こうした法律のある根拠はなんだろうか?
>
> 一つは、精神障害者はその障害により他者を傷つけたり迷惑行為をしたりするので、そうした精神障害者から社会を守らなければならない、

という社会防衛の根拠。

いま一つは、精神障害者はその精神疾患により、自らの利益を判断できなかったり、必要な医療を自ら求めなかったりする場合がある、だから本人が拒否しても本人の利益のために何らかの強制的処置が必要という根拠である。これは、本人に治療の同意をする能力がない場合があるという前提で、本人の利益をだれかが代理として判断するという根拠である。

こうした二つの根拠を障害者権利条約は根底から否定した。(山本　2010)

山本は障害者権利条約の 12 条について「知的障害者や精神障害者があらかじめ法的能力がないと決め付けられ、本人ではなくて、周囲のものが本人に代わって本人の利益と判断する医療や処遇を押し付けてはならないことを定めている」と述べ、障害者を専門職やサービス提供者による福祉や障害者施策の対象者ではなく権利主体として位置づけることの必要性を訴えている。もちろん、山本のこの主張は非同意入院や入院中の行動制限などに向けられたものでもある。

では次に精神科医療における入院形態別の患者数について述べる。2007 年 6 月末の時点で措置入院患者数は 1849 人で入院患者全体に占める割合は 0.6%、医療保護入院患者は 12868 人で 38.6%、任意入院の患者は 190435 人で 60.2%その他の入院形態 1957 人 0.6%となっている [6]。ただ、これらの入院形態は入院中に変わる可能性がある。例えば入院時には医療保護入院であったがその後任意入院に入院形態が変わるものも少なからずいる。また、精神保健福祉法 第 36 条は行動制限に関する規定だが、行動制限を行う際に入院形態を特定する記載はない。つまり入院することに同意した結果の任意入院であったとしても入院中の行動制限はありえる。本来、任意入院ならば外出等は自由であるはずだが、任意入院患者の 46.5%が閉鎖病棟にいるということも報告されている [7]。閉鎖病棟とは出入り口が施錠され自由に病棟の外に出ることが出来ない病棟であり、棟の外に出る場合や面会などで人にあう場合などは病院のスタッフに開錠してもらう必要があるなど、患者の行動は著しく制限される。

このように本人が拒否をしても入院させられる仕組みがあり、仮に自発的に入院したとしても行動の制限はありえる。非自発的入院や行動制限などが許される根拠としては、先に紹介した山本の「本人の利益のために何らかの強制的処置が必要」というものであろう。病状の悪化等によって正しく「自己決定」が出来ない状態であるから、一旦医療の専門家などが本人の「自己決定」の代行をする。そして病状の回復の後に「自己決定」の権利を本人に返すということであるが、山本は「そもそも自己決定権を取り上げられたり返されたりする」こと自体問題があるという。山本の主張は次に述べる問題からもわかる。

まず、治療後に「自己決定」権を返すというが、それが正しくになされていない場合があるという点だ。山本は強制治療や入院中の行動制限によってよって傷つき、精神科医療に対して恐怖と不審をもち続けるものが多いと述べている。(2001　長野) どのような出来事があって恐怖や不審を抱くようになったのだろうか。筆者が 2009 年に行った当事者への聞き取り調査 [8]では措置

入院の経験のある人の次のような語りを聞くことが出来た。

> 措置入院となり 5 年間入院したが、入院中や退院後の今でも措置入院とされた理由や 5 年もの長期間措置入院が続いたことの説明を受けていない。入院中にはベッドに縛り付けられたり、保護室に入れられたことが何度もあった。そのことの理由も聞いていない。

何故、自分が強制的に入院をさせられ続けたのか。何故、入院中に身体拘束や保護室に隔離されるなどの行動制限を行われたのかについて納得のいく説明が無かったという。本人にとっては突然「自己決定」権が取り上げられ、ある日説明なしに、あるいは治療が終了したという理由で、それが返還されたという。では、仮に剥奪された「自己決定」権が正しく本人に返還されればよいのだろうか。山本は限定的であっても「自己決定」権は剥奪されたり代行されたりしてはならぬと主張する。山本の言葉を引く。

> 障害者のうち例外的にでも法的能力がない人がいるとされれば、障害者全員が法的能力を疑われ、積極的に法的能力があることを証明する責任を負わされてしまう。(山本　2010)

山本はホームヘルパーの契約に際して事業所に「精神障害者です」と言った際に役所のワーカーに法的能力（契約できる能力）があるのか確認された体験を語った上で、「自己決定権を取り上げられたり返されたりすること自体問題である」という主張の理由としている。

精神障害者であるというだけで正しく「自己決定」出来ないと判断される。したがって精神障害者であること自体を「自己決定」出来る／出来ないという判断の基準にしてはならない。だから、いかなる場合でも「自己決定」権は自らが所有し続けるという主張である。

支援関係における信頼の重要性とは

前章では精神医療において「自己決定」権が積極的に剥奪される場合があることを述べた。その人の「決定」が認められない場合、「自己決定」的な自立もありえない。では、その当事者が「自己決定」権を維持できる状態であるなら、「自己決定」的自立の支援は可能だろうか。次に、支援を行う際に必要な当事者との信頼関係について述べる。

支援を行う際に信頼関係は大切だとされる。ただ、筆者は信頼関係がその人の「自己決定」に支援者の意向を反映させてしまう機能があると考えている。次に精神保健福祉士として相談業務を行った筆者の経験から「自己決定」を支援する際の支援者と当事者の関係性がいかなるものかを述べる。

筆者は 1995 年から 15 年ほど精神障害者共同作業所や地域活動支援センターなどで精神保健福祉士として仕事をした。作業所の精神保健福祉士は相談業務だけではなく、利用者が行う作業を中心とした様々な活動に利用者とともに参加する。また、作業の準備や業者とのやり取り、経理などの運営に必要な事務と関係機関と連絡会議への参加など、その仕事は多岐にわたる。地域活動支援センターについても同様であり、作

業所や地域活動支援センターでの仕事の多くは、筆者が経験したものと共通しているのではないだろうか。

他方、精神障害者以外の障害者を利用対象とした作業所ではあまりみられない仕事として相談業務があげられる。作業所では利用者と作業や食事の時間を共に過ごす。作業の段取りややり方、作業所利用のルールなどを相談して決める。また、昨夜のテレビや最近見た映画のことなどの話をする。そしてこれらの日常的な会話や観察から、彼らの生活上のアドバイスをする。以上のことは精神障害以外の人を対象とした作業所でも見られるだろう。しかし、精神障害者共同作業所の支援者には利用者の作業所での日常生活を知った上で、相談（個人面談）を行うことが仕事として位置づけられていた。個人面談では個人の経済状況や生育歴、病歴や受診の状況などを聞くことは少なくない。そしてその利用者の状況について福祉事務所や保健所、医療機関との連絡も行う。ただ、個人面談で話されることはさまざまであり、一概に困ったことを相談するというだけにはとどまらない。

筆者が受けた相談の中には、個人面談という手法を採用すべきか否か判然としないものも少なからずあった。以下に例を示して述べる。

もともと作業場などで話され当事者同士の会話の中で解決していった事柄が、利用者の求めによって個室での精神保健福祉士との個人面談になるケースは多くみられた。具体的な相談内容として「夕食のメニューは何にしましょうか？」というものや「風呂の掃除をしたくないのですがどうしましょうか。」「何となく不安だ」「彼が嫌いだから作業所を辞めさせてくれ。そうしないと具合が悪くなる。辞めさせてくれ」等がある。「風呂の掃除をしたくないのですがどうしましょうか？」という相談を受けた際、筆者は利用者の訴えの背後にある問題を探そうと努力をした。ただ、よくわからない。また、「気が向くときにしたらどうですか」「やりやすい方法を一緒に考えませんか？」などと相談業務の体裁を整える様に解決策を提案することもおこなった。しかし、この種の相談は個人面談という形を取る必要はなく、相談相手も精神保健福祉士や職員である必要はないだろう。精神保健福祉士であっても「何となく不安である」という相談も内容については話を聞く程度のことしか出来ない。また、個人面談をおこなったから「何となく不安」という問題は解決しないだろう。次に本来は利用所自身で決めることを職員に決定してもらいたいという「夕食のメニューが決められないから何を食べたらいいか言ってくれ」という相談内容についてである。この相談には、昨日食べた物を尋ね、野菜不足を指摘し、冷蔵庫の中身を確認してメニューを提案する。彼が嫌いだから作業所を辞めさせてくれ。そうしないと具合が悪くなる」といった人間関係に関するものも同様であり、その人の何処が嫌いか何をされたかを聞き良いところを説き作業所のあり方を話すことをおこなった。しかし、これらの相談は相談室では解決することはまず無い。それ以前に相談ではないように思える[9]。

ただ、精神保健福祉士はこの種の相談をうける。そしてこれらの相談内容をそのまま主訴として捉えて良いのかと考える。その相談の裏にある問題を探そうとする。「風

呂掃除がしたくない。どうしよう」という困りごとを解決するには、作業中などに様々な人に聞くほうが役に立つように思える。しかし、利用者はそうせずに専門家である私にアドバイスを求めている。だから専門家の姿勢として「風呂掃除がしたくない。どうしよう」という相談を入り口にその人の生活状況や言葉の裏にある問題を見つけようと考える。この姿勢は精神保健福祉士に限ったことではなく、対人支援の専門家といわれるものには少なからず見られる態度である。では、相談ごとの裏にある問題を探そうとするとき、専門家の助けになるものは何か。専門家の仕事にとって有益なのは日々の生活を共にし、彼らの相談室以外での様子や会話を知ることであろう。

専門家として必要なことは援助関係の外にいるとき、つまり同じ人間として接する際のさまざまな面を見ることであるとされる。このような行動／規範は多くの対人援助職者から聞かれることで、筆者が行った調査でも語られたことだ。その人の生活を理解したうえで、発言の裏にある問題をつかみ解決することが専門家の仕事であるという。このように丁寧な対応を積み重ねることで利用者の信頼を勝ち取り、より多くの事柄を話してもらおうとする。その積み重ねによって築いた信頼関係は援助において重要であると支援者は考える。次の事例は、先に紹介したインタビュー調査において筆者がある精神保健福祉士から聞いたものである。

> メンバーの 2 人がいがみ合い言い争う。一旦は別の部屋に別れるなどして距離を取るがいつ殴り合いになってもおかしくない場合、私なら一方のメンバーへ「タバコでも吸わないか」話しかけます。たばこを吸いながら昨日のテレビの話や趣味の話に興じる。これはメンバーの怒りを和らげることが目的ではありません。たばこを吸いながら一時的であっても、そのメンバーと良好な関係を急速に強く築くことを目的としています。そしていざ殴り合い寸前のところで、煙草をともにしたメンバーに向かって「私からお願いします。堪えてはくれないか。」と言うのです。そして両者を分かち時間をつくって、つくった時間で煙草の彼には自分が、一方のメンバーは別のスタッフに対応させて話を聞いたり調整したりするのです。

筆者にも同じような対応した経験がある。そして事例と同じ専門家の姿勢は福祉現場では少なくないだろう。事例に挙げた精神保健福祉士の行動が可能になるには、当事者たちとの一定の信頼関係が必要になる。その信頼関係を作った要因は、前述したような作業場や休憩室などでの時間の共有や日常的な相談に応じた専門家としての態度であろう。しかしこの専門家と当事者の信頼関係は「自己決定」を支援するという文脈では問題を生じさせる要因ともなる。

信頼関係が作られる場とは

精神保健福祉士が相談援助や当事者と作業をする場所はどこであろうか。多くの場合精神保健福祉士が所属している施設・機関である。その施設・機関は精神保健福祉士にとって職場である。他方、当事者にとっての施設・機関は利用する場であり相談をする場である。換言すれば精神保健福祉士は仕事をするためにその施設・機関にお

り、当事者は精神保健福祉士の仕事を求める。この場所の意味の違いは専門家と当事者の立ち位置の違いのでもある。

専門家の仕事とその仕事を求める利用者の関係について、精神科医の小澤勲は次のように述べる。

> 私も自分の家にしばらく患者さんを泊めたりしていたのですけれどもね。……でも、やっぱり関西人風に露骨に言うと、われわれは彼らとつきあうことでお金を儲けているし、生計を立てている。彼らはお金を払っている。距離を自分がとるかとらないかというよりも、現実にはすでにそういう関係がありますよね。だから、社会的な関係を無視して「一緒だ」という気にはぼくはあまりなれない。逆にいうと、その社会的な関係を自覚する言葉でしかないと思いますよね、距離っていうのはね。（小澤　2006）

小澤が述べるように専門家と当事者には社会的な関係がある。関係を作る前提として当事者が支払う金がある。その金を受け取るために専門家は自らの仕事をおこなう。まずこのような社会的関係がある。そして社会的関係をもって発揮される専門性とそれが発揮される場所は専門家の職場であり、換言すれば「専門家の土俵」である。さらに、精神保健福祉士は当事者と協働作業を行う場合、複数の当事者と同時に信頼関係を結ぶことが可能である。精神保健福祉士にとってその信頼関係は作業を共にして自然と出来上がったという性質のものではなく、「信頼関係を結ぶ」という明確な目標設定のもと行われた結果である場合が多い。このようにして築かれていく信頼関係は当事者にとっては機関・施設を利用するに際に安心できる材料であろう。この精神保健福祉士が当事者と作った関係は支援関係を強める。換言すると「専門家の土俵」における精神保健福祉士の援助姿勢を強化する機能がある。では「専門家の土俵」における精神保健福祉士の援助姿勢が強化されると何が起こるのか。一つは「専門家の土俵」において当事者同士が自由に物事を進めていくことが難しくなっていくということである。「専門家の土俵」に上がり精神保健福祉士との信頼関係を強固にするなら、その関係性の下で精神保健福祉士の意向に沿った形の判断をする当事者が出現することは想像に難くない。精神保健福祉士の意向に沿った形の判断をするというのは専門家に諂うことではない。「自己決定」を支援する必要がある当事者ならこの特徴は顕著に現れるだろう。専門家が考える良いこと・正しいことを学んでいく。その正しさを学び実行に移すことでさらに深い信頼関係がうまれ、当事者はさらなる安心を得ることが出来る。また支援の中には訪問を主としたものもありえるが、物理的な「場」が当事者宅等に移っても支援の「社会的関係」は変わらず、専門家（精神保健福祉士）の援助を行うという視点も変わらない。この当事者宅等に出向いて行われる面接のことをソーシャルワークのテキストは「居宅訪問面接」と表現しその利点を次のように解説している「居宅訪問面接はクライエントと直接接するよい機会となる。さらに、居宅訪問面接では、クライエントとその環境について十分に観察し、クライエントの生活全般についての情報を具体的に得ることが可能である」（社会福祉士養成講座編集委員会 編　2010）。この記述からわかるように

訪問し面接を行う専門家には支援を行うためという目的がある。このように支援が行われる場所が機関・施設でない場合でも「専門家の土俵」は存在しうる。支援を行うという目的がある限り専門家は「専門家の土俵」から出ることは無い。

「自己決定」的自立の支援と信頼関係

専門家が「専門家の土俵」から出ない／出られないのは専門家が制度や報酬体験に従って仕事を行っているということであり、当然のことである。しかし、その制度やサービスを利用する当事者にとっては不合理な場合もある。山本は「地域生活を守るために～どうなる！？介護保険と支援費制度～」（全国自立生活センター協議会公開シンポ）で精神障害者ホームヘルプサービスについて次のように述べている。

> 私は、1990 年に外で売っている本を書いたときに、最後のほうに、私たちは、病人ですから、できないことはしてもらう、そっと周囲からお手伝いしてくださいという書き方をして、私たちにも介助が必要ですということを言いました。そして私たち病者集団の仲間もそういうことを主張してきました。
>
> ところが、精神障害者ホームヘルパー制度というものができたのですが、これは全然介助ではないんです。要するに教育訓練、そしてもうひとつは監視、ちゃんと薬を飲んでいるか、ちゃんとお医者さんに通っているかという監視のためにいらっしゃる、という制度なんです。
>
> ともかく私は、非常に素直に、ああよかった、やっとこれで私たちが長年いっていた精神障害者にも介助がいるんだという認識をお上ももってくれたのか、いい時代になった。これはやっぱり JIL とかほかの介助をたたかって勝ちとってきた他障害のおかげもあるんだろうと素直に思ったのですが、ところが、実際受けてみるとまったくそうではない。

山本が述べるように精神障害者ホームヘルプサービスは訓練の要素が強い。それは障害者自立支援法の位置づけからもわかる。精神障害者ホームヘルプサービスは障害者自立支援法において訓練等給付事業のなかに位置づけられている。山本の言う「介護」のような精神障害者ホームヘルプサービスが障害者自立支援法では規定されていないのかというとそうではない。実際にヘルパーが単独で家事支援を行うものもある。しかし、障害の重い人にしか適応されないという。精神障害者の場合、障害程度区分を調査する際、障害程度が低く出る傾向があるという。そのため「介護」的なホームヘルプサービスを利用することが出来ず、訓練的な位置づけのホームヘルプサービスが適応されてしまう。この障害者自立支援法で規定された仕事内容に沿って、ホームヘルパーは「身辺自立」のための訓練を行う。当事者がいくら「介護」を求めていても障害程度区分を基にした判断、つまり制度が訓練によって「身辺自立」が可能であると認定した限り、当事者がホームヘルパーによる「身辺自立」の訓練を求めていなくても、ホームヘルプサービスを利用すると訓練的な要素が付与されてしまう。本人の「したい／したくない」という希望や決定よりも制度が判断した「出来る／出来ない」が優先される。これも特に珍しいことではないが、山本のホームヘルプサービスについ

ての経験と精神障害者ホームヘルプサービスの実際から次のことが言えるだろう。

まず、福祉のフレームで語られる「自己決定」の行使は制度や法律の範囲内で成立するという限定がつく。そしてその限定は「自立」概念の限定であり、当事者の事情というよりは支援すべき対象と方法を確定させるために「自立」概念を決定したという性質だとも考えられる。そして支援によって可能になる「自己決定」的自立は制度や法律によって規定されているといえる。そして規定された「自己決定」的自立は専門家との信頼関係によって、当初の本人の考えから「(専門家からみて) 良いもの」に変わる可能性もある。

筆者が 2009－10 年に行った調査において、ある精神保健福祉士は「利用者とのミーティングではできるだけ話さないようにしている。それは自分が意見を述べるとそれが決定となってしまうかもしれないし、今までの議論が覆る恐れもある。話す時間を与えることが支援者の役割だと思っていた」と語った。この発言を筆者は「その方法の良し悪しを別とすれば、専門家の発言力や権力性を十分に理解しているともいえそうだ」と論文で評した。(三野　2010a) 筆者の考えはこの論文を書いた頃と変わっていない。精神保健福祉士にとって所属する機関や施設は精神保健福祉士の土俵であることは述べた。もちろん施設・機関にも「利用者の居場所」は存在する。それは休憩室であり談話室であり作業場である。ただ、その休憩室や談話室、作業場にも精神保健福祉士はおり、利用者が精神保健福祉士の存在を意識し専門家として行動を共にすると「利用者の居場所」は「専門家の土俵」となりえる。「出来るだけ発言を控えている」といった精神保健福祉士は、場所の意味が変わってしまうことを感じ取り前述の発言に至ったのだろう。

しかし、当事者の「決定」に少なからず影響を与え「当事者の居場所」が「専門家の土俵」に変質してしまうからといって、専門家は何もしないわけにはいかない。例えば、当事者の「決定」が専門家からみて明らかに不利益をもたらす恐れ（端的に言うと自傷他害行為）があるとする。その場合、専門家は「そうですか」と言えるか。あるいは、不利益や加害的な行為があったとして「それでも良い」と当事者が言った場合どうするのか。制度上、それらの場合に専門家は強制的な介入を行う。それらの場合、支援と本人の「自己決定」権の剥奪を考えるに当たってジレンマを感じる専門家は多いだろう。

他方、「専門家の土俵」で構築された信頼関係を基にして、「(専門家からみて) 良いもの」になるべく議論を重ねた結果、「わかった、(精神保健福祉士である) あなたの意見を受け入れる」と当事者が決めたとしたらそれは「自己決定」的自立を支援したことになるのだろうか。このような関係にジレンマを感じる専門家はいるだろうか。

まとめ

前回に引きつづき「自立を支援する」ことについて述べた。「自立」の概念の変遷に関しては前回述べたとおりであるが、それぞれの「自立」にはそれを可能にするための支援やリハビリテーションが存在している。論考したように制度や法律、専門性と

いった福祉的フレームによって規定された「自立」があり、「自立」を達成するために「専門家の土俵」においての支援が行われる。自立生活運動が「自己決定」的自立を目指したわけではないという立岩の指摘は、この「自立」と「支援」の関係からも理解できる。精神障害者の「自立」を考えるとき、これらの福祉的フレームによって規定された「自立」の意味を考える必要がある。そして精神保健・医療、福祉において当事者は行動制限や強制的医療を経験する。「出来る／出来ない」を軸として規定された「自立」が積極的に「自己決定」権を剥奪することがあることを考慮する必要がある。他方、「自己決定」的自立が推奨され支援される場合がある。その際、信頼関係を構築することが専門家にとっては専門性を十分に発揮できる前提となり当事者にとっては安心感を得ることが出来る。この二つの事象は「専門家の土俵」でなされている点で同質である。そのことを専門家が自覚しているか否かは重要だ。

多くの専門家は「自己決定」は大切なものであるという認識をもつ。同様に精神保健福祉士も精神医療・福祉のフレームで当事者を主体とし「自己決定」的自立を促すようとする。また、当事者も精神医療・福祉のフレームでの支援やケアに慣れている。つまり「専門家の土俵」に上がり信頼関係を結ぶことに疑問を持つことは少ない。「自己決定」を支援することは専門家の仕事であろう。ただ、専門家の支援行為には強権が発揮される場合がありそれは程度の差こそあれ常に発動される可能性がある。行動制限や強制的な医療といった経験をもつ当事者は少なくない。「自己決定」を支援する前提となる信頼関係は大切だが、信頼関係を構築する意味を如何に捉え支援行為の性質をどのように考えるのかは重要だ。「自立」を支援することは不可能であるとまでは言えないが非常に困難な問題であることは確かだろう。

2009年の障害学会のシンポジウムで「精神病」者集団の当事者の方が「支援者の仕事は当事者の言うことについて全てイエスと言い、当事者の言う通りやる人で無ければ信用できない」という旨の発言を聞いた。当時、筆者はこの方の発言の意図するところがわからなかった。本稿を執筆するまでに当事者の経験や考えを聞く／読む機会をもった。そして少ないなりに論考を重ねた。そして本稿に至った。障害学会での発言や紹介した山本眞理の「障害者権利条約」を起点とした論考の意味がおぼろげながら理解できた。同時に「自己決定」の尊重や「当事者主体」などの実現が、現在の精神保健・医療福祉というフレームで規定された考え方ではとても困難であることもわかる。必要なものは当事者の考えに耳を傾けるといった「専門家の土俵」からの視点ではない。支援者の主観で当事者を捉えるのではなく、当事者が主体的に主張することであり当事者という土俵からみた専門家の姿勢であり福祉のフレームの分析であろう。この問題は簡単なものではないが、筆者の今後の仕事の重要なテーマであり大きな仕事である。

注

1) 三野宏治　2011　「それでも「遍照金剛言う」ことにします――第2回　福祉の概念・言葉の解釈について②「自立を支

援する-1-」」『対人援助学マガジン』（注１ＵＲＬ）

2) 本人はそのつもりがないのだが本人以外の人が問題視するということ。この本人と他人の認識のずれと本人が障害者であることに注目した。

3) そのメカニズムについては三野　2012a で述べた。

4) 医療保護入院は精神保健福祉法　第 33 条に措置入院は同法第 29 条にそれぞれ規定されている。

5) 精神保健福祉法　第 36 条に規定。同法では制限を行う場合、①通信・面会の制限、②隔離、③身体拘束、④任意入院患者の開放処遇の制限を定めている。

6) 読売新聞大阪本社　2011　『大辞典　これでわかる！医療の仕組み』　中央公論新社より引用。

7) 注 6 に同じ

8) 平成 21 年度財団法人大同生命厚生大同生命地域事業団「福祉研究助成」による調査。2009 年 6 月―2010 年 9 月に大阪府交野市にある社会福祉法人心生会地域活動支援センターみのりにてインタビュー調査を行った。

9) 詳細は三野宏治　2011a で述べた。

文献

三野　宏治　2006「精神障害者小規模作業所における作業の意味分析」　立命館大学大学院応用人間科学研究科　修士論文

――――　2011a　「精神障害当事者と支援者との障害者施設における対等性についての研究―当事者と専門家へのグループインタビューをもとに―」『立命館大学人間科学研究』第 22 号　pp7-18,立命館大学人間科学研究所

――――　2011b　「クラブハウスモデルの労働とは何か」『生存学』 vol.3 pp174-184,生活書院

――――　2012　「対人支援関係における専門家の権力性に関する考察」『対人援助学研究』　対人援助学会

長野英子　2001　「保安処分攻撃のなかの「移送制度」新設」　『季刊　福祉労働』91 pp32-39

小澤勲　編　2006　『ケアってなんだろう』医学書院

社会福祉士養成講座編集委員会　編　2010　『新・社会福祉士養成講座 7　相談援助の理論と方法Ⅰ』　中央法規出版

立岩　真也　2008　「自立支援」『応用倫理学事典』丸善　http://www.arsvi.com/ts2000/2007046.htm　（2011 年 11 月 1 日アクセス）

寺本　晃久　岡部　耕典　末永　弘　岩橋　誠治　2008　『良い支援？――知的障害／自閉の人たちの自立生活と支援』　生活書院

山本眞理　2010　「障害者権利条約にふさわしい精神障害者政策および全障害者施策を」　『部落開放』625 号　pp52-61

読売新聞大阪本社　2011　『大辞典　これでわかる！医療の仕組み』　中央公論新社

全国自立生活センター協議会　「公開シンポジウム　地域生活を守るために～どうなる！？介護保険と支援費制度～」　http://www.j-il.jp/jil.files/siryou/kouennroku/soukaisympo.htm

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い
～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～
（３）

山本菜穂子

さあ、平成１９年４月。「青い森のほほえみプロデュース事業」と名付けたこの『ほほえみによる地域づくり』の取組が始動しました。

それは壮大な「仲間づくり」の始まりだったのだと、今ならはっきりとわかります。

でも、当時は、「県民に『ほほえみプロデューサー』になってもらう」ということが、いったい何をすることなのかしっかりとはイメージできていませんでした。講習会を開催し、参加してくれた人に講師になってもらって次の講習会を運営していく、そんな「仕事」になるだろうという表面的なことしか。

事業を形にしていくときに、事業担当者がイメージしたとおりのものをつくれたらそれは大成功で、結局事業担当者がイメージできた以上のものなどは出来上がるはずもないことは、それまでの３年にわたる健康福祉政策課での経験でわかっていたことでした。その意味で言えば、この取組が大きく発展する可能性なんて本当に低かったと思うのです。（高柳先生がしっかりイメージを持っていてくださったということはとても大きいのでしょうね。でも、実は後々先生から、「最初、ほほえみプロデューサーを２万人養成することを目標にしましょう、とあなたに言ったものの、きっと無理よね～、どうなっていくものかしらと思っていたのよ。」と話されたことがあります。ま、当然、私よりはずっとしっかり見えていたものの、それでも誰も何が起こるのかわからなかったと言っても過言でないかな～）

＜仲間づくりの基本姿勢＞

そんな暗中模索の私に役立ったのは、こんな基本姿勢だったのではないかと思っています。

私には、児童相談所に勤め始めた頃（もう２０年以上前になるのか‥）、当時の先輩から言われた忘れられない言葉があります。それは、「誰のために何をするのか」「目的と方法は合っているのか」「ことばと行動や態度は矛盾していないか」それは、当時、心理判定員（現在の児童心理司）として働いていた私への言葉です。新米の心理判定員として私は、子どもに知能検査や性格検査などの心理検査を行い、そのデータや児童福祉司

が調査してくれた子どもの生育歴や環境状況などから、その子が問題とされている行動が何から来るのか、そして、今後どのように改善していける可能性があるのか、そのために何をしたらいいのか等々を分析し、心理判定意見書にまとめ上げる仕事をしていました。心理判定意見書を書く私は、そのころいつもとても緊張していました。こんなことを書いて間違っていないだろうか、先輩はこれをみてどう思うだろうか。自信もなく、他人の目や自分への評価がとても気になっていました。その時に言われたことばです。「あなたは何をしようとしているのか？子どものことを知ろうとしているのか、それとも判定意見書を上手にまとめようとしているのか？誰のためにそれをするのか？完璧を求めているの？誰のために？失敗しないようにと一生懸命なの？どうして？ここに来る子ども達も保護者も、きっとどこかで失敗したと感じた人たちでしょう。あなたが、そんなに失敗を恐れていて、一体あなたは彼らに何を伝えたいの？」

失敗したと思ったら、別な方法を試してみればいい。またそれもうまくいかなかったら、また別な方法を探せばいい。大丈夫、きっとやり直しがきく。

そう伝えたいというあなた自身はそのことを信じていないの？人はその人が言ったことばでなく、その人がどんな行動を見せるかで、ことば以上に想いを感じていくものだよ。そのとき、私はそう教わったと思っています。

そのことは、この事業にも当てはまりました。

私は「ほほえみ」でつながる地域をつくりたい。であれば、まず、自分の身近な仲間は、自分と「ほほえみ」でつながっていることができなければ。それが実践できたら、自分にも「ほほえみの地域づくり」の実現がもっと信じられるようになるだろう。そしてその行動と実践自体が、周囲にも「ほほえみの地域づくり」の実現を信じてもらうことになるだろうということ。ことばよりも、そのことが大きな力を持つことになるだろうということ。

そして、もっと言えば、その「ほほえみの地域づくり」で私がしたいのは、県民を守ることであって、（例えば事業を成功させるために）県民を利用することではない、ということ。うまく伝えられている気がしないのですが、この感覚の微妙な違いが常に意識されていることはとても大切だったと思っているのです。

＜初年度の事業スケジュール＞

さて、約束された事業期間は２ヶ年。（それは後に県民の後押しによって３年目、４年目を迎えることになるのですが）その間に全く初めてのことを組み立てて実施し、何らかの結果を生み出し、そして、可能であればそれまでに作った仕組みなり方法なりをその後も定着できる形にせよ、ということなのです。そのため

の２年という月日を皆さんは長いと感じるでしょうか、短いと感じるでしょうか。

実はこれはとてもとても短いと私は思っています。

連載の初回で書いたように、私は本庁勤務の初めの３年間を健康福祉政策課企画政策グループで過ごしました。当時私が手がけたのは、「虐待・ＤＶ等家族援助マニュアル」の作成でした。なにそれ？なのですが、「児童虐待」「ＤＶ」「高齢者虐待」何れも家庭内で強いものから弱いものへの不適切な関わりという同じメカニズムで生じているのではないか、であれば、もし「児童虐待」でこの家族に関わったら、「高齢者虐待」の有無にも目を配りましょう、「ＤＶ」の有無にもアンテナを張りましょう、そして「家族」を支援する視点でそれぞれの問題に専門的に関わる機関と連携しましょうというマニュアルです。ね、これもわかりにくいでしょ。これもね、まず、この考え方をそれぞれの関係機関に理解してもらって、一堂に検討の席に着いてもらうことからたいへんで。それぞれの拠ってたつ法律の理解からはじめ、立場の違い、できることとできないことを挙げながら、どの部分で、どういう方法なら連携が可能なのか整理して・・・何とかつくりあげたものの、２ヶ年ではそこまでが限界で。結局、周知に十分な時間をかけられず、定着まではあと一歩足りなかったと思うのです。

その時の経験から、今回は走り始めたら途中で立ち止まっている時間はない、ということだけは感覚的に理解していました。

私には、納得しないと次に進めなくなる悪い癖があり、でも今回幸いなのは、そんな私だけでなく、高柳先生が全体スケジュールの要を担ってくれていることでした。お忙しい先生のスケジュールは必然的に先に押さえる必要があり、年間の講習会のスケジュールはその段階で決まり。あとは、その日程にちゃんと開催にこぎ着けられるように、逆算して講習会への参加者募集の手続きを行い、並行して県民への事業広報を頻繁に行いながら、機運の醸成を図っていけばいいのです。ハハハ、言うのは簡単。。でも。。

平成１９年度の養成計画は、

７月２３日（月）～２７日（金）の４泊５日「コア笑いプロデューサー養成講習会」

７月２６日（木）　一般県民向けの講演会「ほほえみと笑いの集い」

＊「コア」の講習会中に一般県民５００名を募集する高柳先生の講演会を開催する。コアにとってはデビュー戦。ここで、そこまで３日間の講習成果を披露しながら人前に出る。今後、講師として前に立つ人材になってもらうための練習の一環。

養成された「コア」を各地区の笑いプロデューサー講習会のスタッフとして巻き込みながら（「コア」がスタッフ参加するための旅費等は予算化しておらず。手弁当参加。だから、

依頼でなく、文字どおり“巻き込んだ”という表現と感じています。）以下の５地域で「笑いプロデューサー講習会」を実施

８月８日（水）～１０日（金）の３日間「弘前地区笑いプロデューサー講習会」

８月１７日（金）～１９日（日）の３日間「青森地区笑いプロデューサー講習会」

８月２７日（月）～２９日（水）の３日間「八戸地区笑いプロデューサー講習会」

９月１４日（金）　「ほほえみプロデューサーモデル講習会」

＊「笑い」の養成講習はまだ２箇所を残していたが、「笑い」の養成が終了次第、次は３層目の「ほほえみ」の養成に入る必要がある。「ほほえみ」の講習会はそれまでの「コア」や「笑い」の講習会とは違い、１時間という設定。まだ誰も経験したことがない。まずは高柳先生に見せてもらって１時間講習を理解しておかなければ。そのための講習会。その後の「ほほえみ」講習会は高柳先生がやってくれるのではなく、「コア」と「笑い」とで講師をしなければならないのだから。つい先日まで、人前で「講師」となることなど想定もしていなかったであろう仲間だけで。

９月２１日（金）～２３日（日）の３日間「下北地区笑いプロデューサー講習会」

１０月１５日（月）～１７日（水）の３日間「上北地区笑いプロデューサー講習会」

１１月～「ほほえみプロデューサー講習会」始動！

＊結果として、この年度内に６４回、２，１９４人を養成することになる講習会がここからスタートした。

講習会の講師となるために、もう少し知識・技術の定着や、「コア」と「笑い」を仲間にするための一手間が必要と判断し、県内５地区で「活動実践レッスン」を開催した。

１１月１７日（土）「弘前地区活動実践レッスン」

１１月２３日（金・祝日）「八戸地区活動実践レッスン」

１２月１日（土）「下北地区活動実践レッスン」

１２月８日（土）「上北地区活動実践レッスン」

１２月１５日（土）「青森地区活動実践レッスン」

＜ほほえみ隊の連携＞

あ～ここまでスケジュールを並べてみただけで疲れてきました。今更ながら、当時、よくこれだけのスケジュールを乗り切ってきたものだと思えてきます。

スケジュールを見てわかるとおり、参加してくれる人たちが便利なようにという考え方で、講習会の曜日はウィークデーだけでなく土日や祝日も設定しました。もちろん、この間、私たち事業担当者は出張ばかりしているわけです。講習会に必要なパソコンやプロジェクター、資料一式、お茶セット♪など、大荷物を抱えて、

まるでキャラバン隊。誰が言い出したか、私たちは「ほほえみ隊」でした。

よく、内に対してと外に対してと態度の違う人っていますよね。そういう人の外向けのことばをあなたは信じられますか。そう、私たちの仲間づくりは「コア」から始まったわけではなかったんです。それは、この「ほほえみ隊」から始まっていたんです。当時はその重要性にそれほど気付いてはいなかったけれど。

さて、そのほほえみ隊はどうやって「仲間」になってきたのでしょうか。

考えてみれば、第２回で書いたように「笑顔のほとんどないリーダー」を迎えたときに、「この人を笑顔にできるかどうか、それが事業成功のバロメーターだね」と苦し紛れに出たあの一言は、とても的を射たもので、あれが事業の成否を決めたという気もしてきます。あの人事がなければ、身内である職員の笑顔のことなどこんなに意識しなかったのではないかと思えます。あの時あんなにショックだった人事は、実はこんなに素敵な仕掛けだったのですね。さあ、これはほほえみの７か条の第３条と第４条。「たいへん」「でも、こう考えてみよう」そのものです。たいへんだと思えることの見え方が変わると、そのことの持っているプラスの側面が見えてくる、それが笑顔につながるきっかけを連れてくる。

それともう一つ仲間づくりに役立ったこと。実は、私はとても寂しがり屋です。（何を急に書いているのかと言われそう）誰かの役に立ちたいし、そのためならすごくすごく頑張れるけど、労ってもらうことや誉めてもらうことが必要なんです。というか、その方がより頑張れる人間なんです。そして、とても不完全な人間です。苦手なことがたくさんあります。でもこの二点は、別に私に限ったことでなく、あなたも、あなたも、程度の差こそあれ、そうではないですか。とにかく私は自分のことをそういう人だと思っていて、でもだからこそ、仲間が必要で、仲間をつくる能力のある人間なのではないかと思えます。

私は、「こうしたい」「こうあるべきだ」というビジョンは持つことができます。そしてそのために「何をしたいか」ということのアイデアも少しは出せます。でも、そのための事務作業の手順を考え、計画的に取り進めることはとても苦手です。必要な資料や報告書などをわかりやすくファイリングしていくことなどもとても不得手です。あ、それから結構八方美人なので、はっきりと断るということもとてもとても苦手分野です。

すごーく勝手な言い方をすると、できないからその分野が得意な人への感謝もできるし、素直に尊敬も感じます。あの、また横道にそれますが、機関連携が大切って言われて久しいですが、うまくいかなかった経験をお持ちじゃないですか。相手には“できないこと”をそれとは気付

かず無理に求めて決裂する連携会議を何度経験してきたことか。連携する時ってお互いに“相手は何ができないか、何が苦手分野か”をちゃんと知っていることがとても大事だと私は思っています。自分のできないことをやれる機関には感謝できるでしょ。相手のできないことを自分が補えるかどうかを考えればいいのでしょ。そうやって作った連携は、いがみ合わずに協力できる気持ちの良い連携として継続するのだと思います。ほほえみ隊は、本当にまるで神様が集めてくれたかのように補いあえる関係がつくれていったと感じています。本当にそれは幸いでした。もし私たちが仲違いしていたら、そんなことですり減っていたら、あのスケジュールはこなせる中身ではなかったでしょうから。

複数の講習会の募集を同時進行しなければならない状況にあって、事務作業の計画的な推進は、Ｓさんと Ｏさんが事前事前にテキパキと。契約書の作成などはＫリーダーとＯさんが本領発揮。記録用の写真撮影やファイリングはＳさんが完璧に。そして県事業としての方向性を誤らないように羅針盤の役目もしながら様々な外圧に「ダメ」を出して守ってくれるのはＫリーダーがきっちりと。

時に周囲から､「山本さんばかりが目立つところを担って、ＳさんやＯさんは気の毒」みたいな心ないことばが伝わってくることだってなかった訳じゃないです。でも本当に私たちはお互いに感謝しあえる仲間でした。お互いにしょっちゅう「ありがとう。」「これはすごい。」「いてくれて助かった。」等々と本気で口にしていました。本当にそう思ったから。これはほほえみの７か条の第１条と第２条の実践でした。労いあい、相手の良いところを口に出して伝え、そうして、私たちはしょっちゅう笑い合っていました。

＜そしてコア養成講習会へ＞

まだできたての４人のほほえみ隊は、まず、初回の養成講習会の準備に取りかかっていました。

人財養成の仕組みに則り､「ほほえみの７か条」を学び伝えられる力を持つ人を養成する。まずは「コア笑いプロデューサー」と名付けた、この事業の中核となって講習活動をひっぱってくれる人材の募集から入りました。

そのころ私の頭には、まだ、この取組の中心を担う仲間達がどんな人たちになるのか、わかっていませんでした。市町村職員、教職員、保健師、児童相談所の職員、それから・・・・。とにかく、そんな職業集団をぼんやりと思い描いていたと思います。でも、そういう職業の皆さんは基本的に常に忙しいのです。その人達を、圧力をかけるかのようにして動員して集めることは、どこか違うと強く思っていました。それこそ先程の「県民を守るのか、事業の成功のために県民を利用するのか

の違い」の感覚です。強制された感覚で集まった人たちと、想いを同じくして仲間になることは難しいのではないかと感じていました。本当に本気でほほえみの地域づくりをしたいと、高柳先生も私たちも思っていましたから。規定の人数が集まればそれでいいなどとはこれっぽっちも思っていませんでした。

一体誰とこの地域づくりを進めるのか、はっきりとイメージできないまま、募集は、県内毎戸配付の県の広報紙を中心に行いました。「笑いやほほえみの効果について一緒に勉強してくれる人、そして、それを他の県民に伝える講師になってくれる人を募集します」と。「資格は問わない」「興味を持った県民はどなたでも応募可能」「ただし、事前に高柳先生指定の書籍を読み、感想とこの取組に寄せる思いをつづったレポートを提出すること」それが、応募の条件です。

このレポートについても、当初高柳先生からその提案があったとき、私は「え～そこまでするの？」と正直思いました。でも、これによって、ただ面白半分の応募はシャットアウトすることができましたし、何よりも、この、“聞いただけでは何をすることになるのか理解が難しい取組”について、参加者がどう理解して応募したのかを確認することができたのです。

そうです、「看護師をしていたときから笑顔が患者さんを癒すことに気がついていたから勉強したい。」と書いてきてくれた方もありましたし、中には、「お笑いの勉強をしていて、一つでも多くのギャグを学びたいし、笑わせられる技術を学びたい。」と書いてくれた方もありました。そのレポートで合否をつけると広報していましたが、実際には、このレポートで参加をお断りした方はありません。そうではなく、高柳先生の指示により、私たちほほえみ隊が講習前日までにそれら全てに目を通し、レポートの要点を箇条書きにして共有し、それぞれの方の応募の動機を把握し、この講習中に感じるだろう違和感を先に察知し、フォローするために使われました。そういったところの高柳先生の心配りは本当に丁寧で、「人を大事にするということはこういうことか」と、とてもとても参考になりました。

さあ、そして「コア笑いプロデューサー養成講習会」には結局３４名が集まってくれました。この取組の趣旨を理解してくれるだろうか、賛同してくれるだろうか、高柳先生の指導をどう感じるだろうか、その後の講師も引き受けてくれるだろうか、そして仲間になれるだろうか。

実は、４泊５日の講習には私自身も「コア笑いプロデューサー」になるために、参加していました。講習では、「ほほえみの７か条」を一つ一つ理解するためのプログラムをこなしていきます。高柳先生はサプライズが大好き（深く学ぶための手法として）で、参加者には極秘に進めら

れる講習内容や準備物品など、私にも知らせられないものもあり、それらの準備は全てＳさんとＯさんにお任せです。

私の役割は自分自身も講習を体験しながら､参加者の様子に気を配り、落ち込んでいないか、不満を吐き出せずにいるんじゃないか、何を理解しきれていないのか、と。そう、当時､「コア」の彼ら彼女らは、私が考案した事業の参加者であり、私が守らなければならない存在だと感じていました。この４泊５日で何が起きるか、とにかく初めての経験です。プログラムの中には、これまでの自分の人生を振り返る内容もあり、その中で、様々なマイナスの経験が蘇る可能性も感じていました。私は、この４泊５日の講習に参加してくれた皆さんに、良い変化が起きることを大いに期待していましたが、同時に、マイナスの変化を生じさせたままお帰りいただくというわけにはいかないと、強く思っていました。私がつくりたいのは､「ほほえみに満ちた地域」。それは、ここに参加してくれた一人一人がつくるものであり実践してもらうもの。先生は、この講習で人生を変えるほどの変革を求めている。このような活動にリーダー的存在として踏み込んでもらうためには、確かにそんな変革が必要なのだろうと思える。だから、私は、先生のプログラムをバックアップする。でも同時に、マイナスの気持ちを引きずらずに終われるよう、参加者を守るためにも動こうと。それが先生をサポートすることにつながる、私のやるべきことだと、日が経つに連れてそんなことを考えるようになっていました。

＜仲間は仲間を呼ぶ、らしい＞

そして、ほほえみ隊はというと、最初の「コア」の講習会が終わるまでは、Ｋリーダーを除く３人で動いていて、まだ高柳先生との関係も慣れておらず､講習会自体も初体験で、何もかも手探り状態でストレスも高く、４泊５日の隔離状態で事業を推進していると、世の中から隔絶されて取り残されていくような気分になっていました。多分、忙しくて疲労もたまっていたからでしょう。私だけでなく、３人とも、一触即発の危機感を感じていたと思います。ここで何か相手に文句を言い出したら、取り返しがつかないことになると。そんなときに、アクシデントも起きるのですよね。録音用の機材が動かないとか電池が足りないとか些細な。でも、そんな状態であっても、私たちはお互いを気遣う気持ちを持ち続けることができました。お互いに、責めずに前に進む、労いと感謝を伝え続ける、ということを継続していました。これはたまたまできたというだけではありません。これは努力です。そして、ここの最も困難だと思われる初回の４泊５日を３人で乗り切れたことの達成感と相互への信頼感の心地よさが、この事業を進めていく原動力になりました。私の中では､「この感覚を､『コア』とも『笑

い』とも作っていけばいいんだ」という実感を持つことになりました。

他の仕事でこの４泊５日に参加できなかったＫリーダーは、きっと内心つまらなかったのでないかと思っています。だからせめても労をねぎらおうと（？）その後２年間に渡って、彼が節目節目に計画してくれたインフォーマルな会合（飲み会とも言う）は、結構私たちの凝集性を高めるのに効果的でした。私も飲み会は好きですが、結構生真面目ですので、そういうインフォーマルな方法で一緒に発散しながら次のエネルギーを蓄えるというような設定はなかなか自分からは主導できなかったと思います。でも、これがなかったら、ただ忙しい生真面目な集団は破たんを来していた様な気もします。そう、この事業の効果を実感できるまで１年近くは、私たちを支えたものの一つは、滅多に人を誉めそうもない（イメージですよ、本当は違うのですよ）Ｋリーダーからの労いのことばと労いのインフォーマルミーティングだったことはまんざら嘘じゃないと感じています。蒲生氏郷みたい？・・・

そして、実は、それから先もず～っと私たちとこの事業を支えた大きな力となったのは、こんな「コア」や「笑い」の感想でした。

「県職員のスタッフの皆さんが、和気藹々とこの取組を進めているのを見ていると、自分も仲間になりたいと思いました。」「県職員にも、こんなにざっくばらんで温かい人たちもいるんですね。」ね、最高の誉め言葉でしょ。（でもちょっと最初のイメージが悪すぎる？県職員ってそんなに？）

講習会の内容はもちろんですし、事業目的への賛同ももちろんですが、そこにプラスして、私たち事業担当者が、まず、信頼し合う姿勢を見せ続けることができていたから、それが心地よさそうに映っていたから、私たちが想いを込めて推進しようとしているこの取組も信頼してくれたのだろうと思っています。そして、仲間になりたいと言ってくれて、共に歩いてみてもいいかなと。「コア笑いプロデューサー養成講習会」が終了し、とにもかくにもそんな第一歩を踏み出すことができたようでした。そして３４名の仲間が誕生しました。その仲間のことは次回にでも改めて。最近では、もう私が守るべき相手ではなく、私を守ってくれる頼もしい人々です。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第2回

象の背中

１．男たちのジェンダー依存

大学の頃だ。飲み会で、他の大学生たちと話した時に、結婚の話になった。その時、京大３回生のある男子学生がこういうのだ。

「ぼくは、結婚したら奥さんには働いてほしくないんや。給料が安くても、安い中でやりくりして欲しい。『俺が食わせてやっているんだ』っいう気持ちを持っていたいからね」

立命大の５回生は、大学を出たら、故郷の北陸に帰って、お父さんの仕事を継ぐことになっていて、「俺は、大和撫子が好きだからね。だから働いて欲しくないし、俺が稼ぐから、テニスいったり、料理したりして、過ごして欲しい」

ぼくは、話を聞きながら、「男って、健気だなあ」と感心してしまった。ぼくは当時からジェンダーに囚われていたので、男が女子供を扶養しなくてはならないという考えには反発していた。しかし、彼らの前で、そのことを口にすることはできない。「俺は、やっぱり男じゃないんだなあ。オカマなんだ」と思って、悩んだものだ。時は、華の８０年代。今みたいな就職難でもないし、皆、楽天的だったということもあるのだろうが、ぼくはそういう考えには絶対になれなかった。というか、そういう考えができる男に憧れながら、同時にそういう考えに激しく抵抗するアンヴィバレンスを抱え込んでいたのだ。

結局、ぼくは、その抵抗をずっと持ちこしてしまい、結婚どころか、ほとんど女っ気のない、かといってゲイになるわけでもない、性的不能者のような人生を歩んできた。

社会はその間に変わって行った。バブルがはじけ、不況が長引いて、先行き不透明な世

の中になり、女性が仕事をしなければ、やっていかれない家庭が今では大半だろう。とはいうものの、今でも男たちの男性ジェンダー依存（男らしさを演じる自分に依存すること）は終わってはいない。

ぼくが社会運動で出会ったある３０代の女性は、若くして結婚して、子供が２人。夫さんは仕事を真面目に頑張っているのだが、それでも生活は苦しい。「じゃあ、私が働くから」と彼女がいうと、「俺は女には働かせたくないんだ」と言われるのだそうだ。「でも、頑張ってはるからね」と彼女ももうそれ以上夫を咎めないらしい。

また、同じところで知り合ったある４０前の女性は離婚経験あり。女手一つで子供を２人育てている。別れるまでは大変だったらしい。「私がどれだけ、彼の身体をゆすぶって、彼の心を聞き出そうとしても無駄なのよ。女を殴ったり、荒っぽく扱ったりしちゃいけないんだと思ってはるから、私がどれだけ酷いことをしても、反応してくれないし……」と彼女は訴えていた。彼女は殴ってくれるくらいの男のほうがよかったのだろうか。

もう一人、５０くらいのフェミニスト女性とも会ったのだが、彼女は多少の内職はしているもののほとんど専業主婦。夜は原則として外出禁止だと言っていた。旦那は学校の先生なのだが、家に帰ったときくらいは、良い奥さんでいて欲しいらしい。３人子供がいるのだが、もう皆、大学生くらいの年になっているみたいだし、夜出歩いても問題はないようにも思うのだけど……。やはり、女は家にいるものと思っているのか。「男は大変だからね」と彼女は、フェミニストでありながら、そういう夫を受け入れている。

男たちのジェンダー依存。皆、つらいくせに、「俺は男だから」と虚勢をはって、頑張っている。女子供を養ってやっている。女に暴力は振るわない。ぼくには、こういう考えは理解できない。女性が働いてくれるんだったら、生活は楽になる。夜、家にいるから、良い奥さんというものでもないだろう。むしろ、家に帰ってからまで、うるさく言われたんじゃ、自分の時間は全然なくなってしまう。逆 DV されても、女は殴るべきじゃないと思っているなんて、マゾなのかよー。俺だったら、女から殴られたりしたら、その時点で別れるけど…。

ある男性が、「幸せは、女と子供のためのものなのだ」と言っていたけど、本当にそうだなあ。昔、「酒と涙と男と女」という歌がはやったけど、ぼくはあの歌には虫唾が走る。明らかに女よりも惨めなのに、虚勢を張ろうとする男の歌だ。そして、この男は、虚勢をはるのがイコール男だと思っている。

ぼくは、こういう考えは大嫌いだけど、その一方でこういう男になっておけば幸せだっただろうなあと思う。逆説的だけど、女子供が幸せならば、男はどうでもいいんだと虚勢をはることが男の幸せなのかもしれないのだ。ぼくは、生まれてこのかた虚勢を張ったことはほとんどない。そして、ぼくは、決して、幸せではなかった。

２．男のためのメルヘン

『象の背中』（井坂聡監督・２００７）はそれほど評価の高かった映画ではない。ぼくが、これを見たのは、ご贔屓の役所広司の主演だ

からだった。彼の主演作はほとんど見ている。特別美男子でもないけど、なんとも人間味があって、俺もこんな男になりたいなあと思う。この映画でも、風呂に入る場面やベッドシーンで、役所の裸の場面があるのだが、決してシェイプアップされた美しい身体というのではなく、普通のおじさんの身体だ。そこが彼の魅力だ。

ぼくは渡辺淳一の世界が苦手だが、役所が主演した『失楽園』だけはよかった。先日亡くなった森田芳光の演出のおかげでもあるのだけど、渡辺の作品が苦手な人にも見れる映画になっていた。『失楽園』は言ってみれば、中年男性の性愛のメルヘンである。ぼくの知り合いの女性は、渡辺淳一の作品のヒロインは男がつくりだしたお人形だという。あんな女、現実にはいない。男の都合でつくられた女たちなのだ。でも、仕事に疲れた中年男がひと時のカタルシスを味わうには、それはそれでいいのだろう。映画は娯楽なのだから……。

『象の背中』も中年男性のメルヘンである。『失楽園』のようなエロティックな話は苦手なタイプの中年男性向けメルヘンとでも言うべきか。こんな作り話があるのかと思うくらい綺麗事だけど、ぼくは、役所に感情移入して、楽しい気持ちで映画を見ていた。映画は、役所が演じる主人公・藤山幸弘（これも平凡な名前だね―、笑）が、肺がんで、余命半年と宣告されるところから始まる。

彼は、不動産会社の部長で、妻・美和子（今井美樹）と、息子（塩谷瞬）と娘（南沢奈央）の４人家族。東京の閑静な郊外の一戸建てで暮らしている。注目して欲しいのは、会社と一戸建ての家の外観が、見上げるようなショットでとられていることだ。東京の大きな会社、坂を登ったところにある一戸建てのお家。この人は社会的勝ち組であり、エリートコースを歩んできた男性であることが示唆される。

この後、映画は、彼が残された半年の間に、これまでの自分の人生で意味のあった人たちに会っておこうと、初恋の女性やら、高校の時の友達やら、１人ずつ会いにいくエピソードが積み重ねられていく。

「俺だったら、誰に会うだろうなあ」と映画を見ながら思った。ぼくは、過去の人で、あまり会いたいと思う人はいない。いや、どっちみち死ぬんだったら、会って、殴ってやりたいと思う人は何人もいる。だけど、昔好きだった女性や友達ということになると、何年かたてば忘れてしまう。どれだけ好きだった人でも、自分とは関係ない人になってしまう。人間は薄情だし、愛よりも憎しみのほうを覚えているものなのではないか。

しかし、そう思うのは、ぼくが不幸な出会いにばかり満ちた少年時代を送ったからで、普通の男性にとっては、少年時代は甘酸っぱいは幸せな思い出なのかもしれない。羨ましいなあ。

（１）中学の時の初恋

最初に、幸弘は、中学の時に淡い恋の告白をした女性（手塚聡美）にもう一度会いに行く。戸惑いながらも、彼に優しく接してくれる彼女。

この場面だけでも、ぼくは何やら胸が痛いような、嫉妬の思いにとらわれる。ぼくは、中学の頃、女の子たちから激しい苛めにあっ

た。ぼくが不登校になったのは、前号でも書いたとおり、先生たちとの確執のせいもあるのだが、ぼくの自尊感情をつぶしていったのは、クラスメートの女の子たちだった。ぼくは今で言えば発達障害のような子で、女の子たちから「気持ち悪い」と言われ続けた。どういうわけか、ぼくは男の子からいじめられたという記憶はほとんどない。もっぱらぼくを嫌っていたのは女子だった。「気持ち悪い」と言われても、自分ではどこがどう気持ち悪いのかわからない。ぼくが女性全般に憎しみを抱くようになったのは、男子からは「気持ち悪い」なんて言われたこともないのに、女子からは執拗に「気持ち悪い」と言われ続けたからである。女は冷酷だ。女子から「気持ち悪い」なんて言われることが、そして白眼視されることが、男の自尊心をどれだけ傷つけるのか。中学生にもなれば、それくらいのことはわかりそうなものなのに……。

これを訴えると、たいていの女性は、「それは一部の女性でしょう」と反論するのだが、ぼくを苛めたのは一人や二人ではない。複数だ。ぼくが男よりも女のほうが性質が悪いと思うのは、女性の場合だと、誰か一人から嫌われると、他の女性にまでその思いが伝染して行って、共同妄想になっていくからである。女たちの団結は怖いのだ。

だけど、おそらく幸弘はそういう経験もないのだろう。

（2）高校時代は野球部

幸弘は、高校の時は野球部で、この映画ではかつての野球部仲間で、今は酒屋のおじさんとなっている同級生（高橋克美）とキャッチボールしながら話をする場面が、カメラを引いて、両者を画面に収めながらかなりの長回しで描かれる。幸弘のほうがレギュラーで有能なメンバーだったことも台詞で語られる。

この場面なんかは、ぼくはもう羨ましくて、心がはちきれそうになってくる。「俺も、こんなふうに友達とキャッチボールを、一度でいいからやってみたかったなあ」という切ない思いがこみ上げてくるのである。

ぼくは運動神経ゼロで、キャッチボールなんて未だにできない。ぼくはつくづくスポーツが人並みにできるように生まれついていたら、こんな人生を歩むことはなかったと毎日のように思っている。高校くらいまではスポーツができるやつのほうが何かにつけて得だ。子供時代に男のヒエラルキーをつくるのは、主としてスポーツ能力である。

社会に出てしまえば、スポーツ能力は関係ないかもしれないが、ぼくは中学まで、そのことで苦しんで、結果、高校に行かれなくなってしまった。スポーツができなかったゆえに、社会に出る以前に挫折してしまっているのだ。スポーツが得意だった人には、スポーツができない男がいかにハンデを背負わされるかはわからない。男は、スポーツで男の世界を学んでいく。チームプレイや友情、上下関係やホモエロス。それは社会のホモソーシャリズムに相通じていて、スポーツの経験のある奴は、男同士の関係を自然な形で学んでいるので、男社会のなかを渡って行きやすい。また自分の男としてのアイデンティティも、スポーツをする中で生まれていく。

ぼくは子供の頃、スポーツの塾があればなあと思ったものだった。国語や算数だったら

苦手ならば、塾でどうにかある程度はカバーできるだろう。だけど、スポーツは、塾もないし、参考書もない、できない子に手とり足とり教えてくれる人なんて誰もいない。学校の体育教師は、ただ威圧的に怒鳴って、できない子の自尊心を傷つけるだけだ。だからこそ、できる子とできない子の差がどんどん開いて行って、ぼくのような男の子集団の落ちこぼれを生み出してしまうのだ。

でも、幸弘はおそらくスポーツも得意だったのだろう。

（3）息子と男同士の会話

幸弘の家族は、妻と子供が２人。しかも、子供は、息子と娘が一人ずつ。本当にバランスのとれた絵にかいたような家庭だ。

幸弘が最初に自分のがんを打ち明けるのは息子である。「お母さんたちには言わないでくれ。お前には話しておく。男同士だからな」というセリフが出てくる。男同士ねー。ぼくも父と息子の男同士の絆には憧れるけど、現実には、フロイトのエディプス・コンプレックスを引き合いに出すまでもなく、父親と息子は上手くいかないというケースのほうが多くて、ぼくも、２０歳くらいの頃までは、父に反発していて、ほとんど口もきいていない。こういう心のつながり合った父子になれるなんて、羨ましいなあ。

娘も、お父さんに対して、従順で素直。彼女は、父の様子がちょっと変だということに感づいて、「何かあったの？」と聞き出そうとするのだが、幸弘ははぐらかして、教えようとしない。

妻や娘、すなわち女には自分の悩みを打ち明けない。男同士だけで処理しよう。こういうのってカッコイイと思うけど、ぼくは、引きこもりだったから、つい最近まで、母ぐらいしか話を聞いてくれる人はいなかった。いい年をして、マザコンみたいだけど、仕方がなかったのだ。

幸弘は本当に幸せな人だ。

（4）敬語で話す妻・ため口で話す愛人

また妻の美和子が、幸弘に対して、敬語を使うのもすごいと思う。「……だったんですね。」「私、あなたがいなかったら、どうすることもできません」等など。今時、こんな女が本当にいるのかねー。また、この２人は寝る時も、狭いシングルベッドで２人で寝ているのだが、ぼくが結婚するとしたら、妻とは別々のベッドで寝たいと思う。だって、寝る時まで一緒じゃ息詰まっちゃうし……。身体も動かせない。喧嘩しているときなんかだと、こんな状態じゃつらいだろうなあと思う。

さらに幸弘には愛人がいる。彼女は敬語ではなく、ため口で話すのだが、それでも、今時の女性としては、女性的な礼儀正しい話し方だ。彼女は彼に安らぎをあたえ、なおかつ何も要求しない天使のような愛人だ。

普通だったら、「あんた、愛人とは別れてください！」「早くに奥さんと離婚して！！」と妻と愛人が喧嘩しても可笑しくはないのだけど、この映画の場合は、奥さんも愛人も、彼のことを理解していて、お互い愛人や妻の存在を知っていながら、そのことを追求しようとしない。あくまでも幸弘の立場と感情を尊重したうえでつきあっている。

愛人と妻がホスピスで対面する場面、「ミネラル・ウォーター切らしているから、買ってくるわ」と妻は席をはずす。その後、海を見つめながら、佇んでいる彼女の後姿が写される。彼女は夫の愛人が来ているのに、見ないふりをして、自らの愛を保とうとするのである。こういう女性はしばしば存在する。嘘をついてでも、愛人のことはないことにしてしまうのである。

（4）泣いて馬謖（ばしょく）を斬る

仕事の関係者とはどうか。彼は仕事で、立場上仕方がなかったとはいえ、他の小さな会社の男・高木（笹野高史）に非情なことをしている。彼とたまたま会い、２人で食事をして語り合った後、「許してくれ」と路上で土下座して謝る幸弘。本当に男は悲しいなあ。自分の保身のためには時として、罪のない人を切り捨てざるを得ないときがくるのだ。ここで幸弘は路上で何度も蹴りつけられる。しかし、ここでも、高木は幸弘のつらさも理解したうえで、でも自分にとっては幸弘は悪い男であったがゆえに蹴るわけで、これは報復と言うよりも、贖罪の蹴りなのである。男の世界では、しばしば、「泣いて馬謖（ばしょく）を蹴る」ことをせざるを得ないときがでてくるのである。同じ男だから、そのことも高木は理解している。

会社の上司や同僚も、２人で食事をしたり、彼の希望をとおしたり、実際の管理職の世界はもっと汚いんじゃないかと思うけど、情の部分を失っていない。しばしばサラリーマンは企業戦士と言われるが、企業に勤めるサラリーマンの男同士って、戦友愛のようなもので結ばれていて、そこはかとない男同士の優しさやホモエロスが漂ってくるのである。

（5）父への反抗

幸弘は、次男だが、父に反抗して、１２年間実家に帰っていない。父の命日にもずっと顔を出さず、代わりに妻の美和子が、幸弘には内緒で命日にいっていたということが、兄（岸辺一徳）との会話の中で語られる。ここも長回しで、スイカを食べながらベンチに並んで話している２人をたっぷりと見つめていく。キャッチボールの時と同じ演出だが、違っているのは、先のキャッチボールでは、男２人が（当然のことながら）向かい合っているのに対し、ここでは２人が同じ方向を向いて、時々、チラリチラリとお互いのほうを見るという演出になっていることである。これは２人が愛し合ってはいるのだけども、ちょっと気まずい関係であることを示す演出である。

ここで交わされる会話で、幸弘が、外に愛人をつくっていた父に反発していたことが明るみにでるのだが、そういう幸弘自身も父に似て、愛人をつくってしまっているのである。心理学的に言えば、親と同じ脚本を生きているとでもいうべきだろうか。

愛人をつくって、親に反発しているなんて、男の身勝手だなあと思う人もいるだろうか。いや、そんなことはない。男の場合は、ちょっとぐらい不良のほうが、魅力的なものだ。最近になって小谷野敦が『「昔はワルだった」と自慢するバカ』という本を出した。まだ読んでいないのだが、このタイトルだけで、小谷野さんが言わんとすることはなんとなくわ

かる。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができないうえに、気が小さかったため、悪ガキではなかった。しかし、悪ガキになれるやつが羨ましかった。そういうやつのほうが、先生からは怒られるが、男としての魅力はあるからだ。全然、ワルな要素のない真面目一徹なんて魅力がない。もちろん、極度のワルはそれはそれで困るが、適度に愛人と遊んで、適度な不正もして、適度に親に反抗して、しかし、家族の前ではいい夫、いい父親を貫いている幸弘はむしろ何も影のない男よりも、好いたらしい男である。

「俺、本当は怖いんだ」と兄の前で泣く幸弘。この人、考えてみると、女性たちの前では泣かないし、自分のつらい気持ちを打ち明けるのは、息子、兄、ホスピスの他の男性患者など、もっぱら男である。これまた綺麗事というか、現実には女性のほうが気持ちを受け止めてくれるので、女性相手のほうが愚痴を言いやすいようにも思うのだが、図柄から言った場合は、男の前でつらい気持ちを吐露する男のほうがかっこよく見える。女には甘えていない、余計な心配をさせていない。そういう男気を感じさせるからである。

（6）煙草

幸弘は、喫煙者だ。いくつかの場面で、煙草を吸う人物であることが示唆される。彼の病気は肺がんだが、肺がんは煙草が原因になることが多いことは知られていることである。煙草は、ストレスがたまるから吸うわけで、男の人生を全うするには相当のストレスに耐えなくてはならない。耐えられないやつはリストラ、あるいは出世コースからはずれることになり、一方、耐えられても、幸弘のようにガンになって、早死にするという結果にもなる。

男の人生は本当に痛い！のである。

末期、ホスピスのベッドに寝ている幸弘の脇の床に、妻、娘、息子の３人が布団をひいて、川のように眠っているショットは、なんとなく面白いショットだ。幸弘だけが縦（画面の上から下）に眠っていて、他の３人が、その隣に、横（画面の右から左）のポーズで眠っている。

幸弘は、住宅会社の上役でもあるし、この映画のテーマは「家族」ということなのだろう。美しい海をバックに家族に囲まれた幸弘の最後の姿が描かれる。結局、男は家族へと戻って、至福の死を迎えるのである。

４．悲劇は男の証明なり

まあ、本当に歯が浮くような綺麗事の物語。しかし、この映画のよさはそこなのである。

佐藤忠男さん曰く、「映画は自惚れ鏡」だ。悲惨な現実は世の中にたくさんあるのだから、映画見ているくらいは、夢物語にひたりたい。

おそらく、サラリーマンの多くは、この映画ほど綺麗事ではないにしても、本質的にはこれと近い人生を歩んでいる。そうでなかったら、男なんていう理不尽な役割はまっとうすることはできない。今の世の中、男が仕事に生きがいを見出すことは難しいだろう。それに稼ぐのが男の使命だと頑張って稼いでも、妻や子供に吸い取られる。部屋は子供に撮ら

れるから、家にいても居場所はない。離婚なんてことになれば、子供は普通は女性のほうにつくわけで、まして日本では子供と定期的に会うことも保障されていないため、男は仕送りだけさせられて、会わせてももらえないということになる。ぼくの知り合いの男性などは、「俺は、ＡＴＭか！」と怒っている。

幸弘は病死だが、他にも過労死、自殺、いずれも男のほうが女よりもはるかに危険率は高いはずだ。おそらく原因は仕事であるケースが多いのだろうが、しかし、男はどうしても男であること（社会中心であること）を捨てることができないのである。これは生物学的な議論になるが、ぼくのこれまでの経験から言うと、男は女に比べて、二つのことを同時にやっていくことができない。したがって、偉大なことを成し遂げるのも大抵は男だが、とんでもないことをしてしまうのも大抵は男である。男は一つのところにエネルギーが集中してしまうため、いったんエネルギーのチャンネルを仕事に合わせてしまい、それに熱中してしまうと、他のことが見えなくなっていくのだ。また今の世の中は、男性は女性よりも生きる選択肢が少ないということも問題にしておかなくてはならないだろう。

おそらく、この映画を見た男性観客たちは、綺麗事だとはわかっていながらも、ひと時の快感に酔うのだろう。男は痛いけど、痛みに苦しんで、そして戦死するのが男の運命なのかもしれない。これだけ綺麗に描いてもらえば、死ぬのも悪くないことのように思えてくるからである。

ぼくはというと、快感によいながらも、ぼく自身が、これとはあまりにも違った人生を歩んでしまったため、取り返しのつかない思いがあふれてきて、つらくなった。普通の人だったら、皆、若い頃から、ある程度、この映画に近い幻想を抱くのだろう。だけど、女子に苛められ、不登校になり、スポーツができなくて、男の仲間に入れなかったぼくは、普通の男子たちができることをできないがために普通の男の人生に早くから反発を抱くようになってしまった。ぼくは、大学に入ってから、失われたときを求め続けて生きてきたように思う。これからは普通になろうと思って生きてきた。しかし、ぼくは少年時代に失ったものが大き過ぎた。いくら頑張っても亀の歩みで、なかなか他の人に追いつくことができないのである。

そのため、結婚もせず、仕事も非常勤なため、自由はもっている。しかし、これで本当に幸せなのかな？と考える時がたびたびである。

結論として思うことは、男の人生は、やはり、痛い！ということ。普通のコースをたどっても痛い！し、ぼくみたいなはみ出し者も、それはそれで痛い！痛い！のが男のアイデンティティなのだろう。

本当に男は痛い！！！

援助職のリカバリー

《1》

～どうして援助職を選んだの？～

袴田　洋子

援助職にもいろいろ

「リカバリー」という言葉を最近、意識するようになりました。野中猛先生の著書「図説　リカバリー　−医療保健福祉のキーワード」には「それぞれの自己実現や生き方を、主体的に追求するプロセスのこと。支援の目標」と書かれています。

この言葉を目にした時、自分の中にとても大きな「しっくり感」がありました。ああ、自分は援助職をしながら、クライアントの痛みを聴きながら、実践を通して自分自身がリカバリーしているのかな、と思ったからです。そしてそこには、嬉しい感情も混ざっていました。どうして嬉しいのか？　それは、私自身が恐ろしいほどのダメダメ援助職だったからです（もちろん今でも修行中）。

今回、このダメダメさを公式？に言語化し、私のような援助職がいることを知っていただければ、これから援助職を目指す方、あるいは目指したいけど、どうやら大変な仕事らしいので、こんな自分では勤まらないのではないかと不安を抱いている方や学生の方には、勇気を持って援助職の道にその一歩を踏み出していただけると確信いたします（冗談ではありません）。

「援助職」の道への入り方は、多様に存在します。医療や福祉、教育などの専門教育を受けての新卒での就職や、あるいは一般企業等に勤めた後に、援助職を志しての再就職、あるいは志したわけではないけれど、偶然社内で配置されたら、予想外にやりがいを感じて改めて専門的に学んでみようと思った、あるいは少し時給がいいし、「資格」も取って子育ても一段落したからパートで始めてみた…などなど、本当に色々です。

手に職を持つ、のウラの理由

私の「ダメダメ援助職」の始まりは、看護師でした。看護師になるには、前述でいう看護の専門校を卒業しなければいけないので、当然、進学先自体を「看護学校」と定めることになります。

高校２年の３学期。高３の授業を選択すること、つまりは大まかな進路、理系か文系かを考える時期でした。当時 17 歳の私の考えは「仕事をするとしたら、利益とか売り上げとか、お金のこと（そういう事を考えるのは「欲」であり、あまり良い事では

ないっぽいというなんとなくの無意識）を考えるような仕事ではなく、人の役に立つ仕事がいい。女医さんか？　いや、自分には医者になる頭はない。じゃ、看護婦だ。きまりー」という論理で、高３の選択科目を「生物」にして、看護婦になるための準備に着手したのですが、実はもうひとつ、看護婦を選ぶ大きな理由がありました。それは「手に職を持たないと、自分は生きていけない」というものでした。

私には、小学校、中学校と仲良くしていた二人の友達、いわゆる幼なじみがいて、A子とは高校も同じでした。私たち 3 人は昭和 42 年生まれ、当時でも女子の四年制大卒の就職率というのはあまりよくなく、氷河期と言われていました。そして、当時の自分はこんな考えでした。世の中、結局は学歴社会。大卒でないと給料に差がつく。そんな差別を受けるのは絶対に嫌。でも英文科とか文系の大学に行ったところで自分は就職できるのか？（当時はあまり「社会福祉」という分野が今ほどメジャーではなかったように思います。）この不安が自分には、とても大きくのしかかりました。そして、幼なじみの A 子と B 子。A 子の父親は、慶応卒の〇〇商社の重役、B 子の父親は、東大卒の〇〇製鉄の重役。彼女達は、「父親のコネを使って就職なんて絶対に嫌」と今は言っているけれど、選択肢として持っている。文系の四大に進学しても父親のコネで彼女たちはきっと就職できる（実際にした）。でもうちの父親は工務店に勤める大工職人。私には就職できるコネがない。小中高と同じように生活してきたのに。何も変わらないと思っていたのに（不公平だ）。だから、自分は手に職を持つしかない。

自分ではどうしようもできない事柄に、世の中の不平等さを呪って、怒りとあきらめの感情を織り交ぜながら選んだ進路が「看護婦」なのでした。

大卒ナースでなくちゃイヤ

そうして、まずは「看護婦」を選んだわけですが、その看護婦になる、なり方。私の場合は高卒後の看護婦ということで、正看護婦になるパターンになりますが、それには、3 年制の専門学校、3 年制の短大、4 年制の大学、と 3 通りあり、当時は看護婦の世界でももれなく「学歴社会」になっていました（今は違うかもですが）。私が勤務した大学病院では初任給で大卒とその他では１万円の差がありました。

当然、その当時の自分は、「同じ看護婦の仕事をするのに、同じ国家試験に合格しているのに、卒業した学校が違うだけで差別されるのは我慢できない」という怒りの論理で、何とか看護大学に行きたいと考えました。しかし、そうそう、自分の学力と希望が思い通りに絡まるわけではありません。専門学校と、看護短大と、4 年生の看護大学を受験したのですが、短大は惜しくも補欠合格、専門学校は合格、残るは大学の合格発表を待つ事態となりました。

ここでまたひとつの「選択」がありました。大学の合格発表の前に、専門学校の入学金を払い込まねばならなかったのです。私はほとんど迷うことなく、「（専門学校の入学金を）払わなくていいから」と母親に告げました。大学に落ちたら浪人になる場面なのに、です。

大学に入って「看護理論をしっかり学びたい」などと考えているわけでもなく、あ

くまでも、学歴というハシゴの上にいたいという思いで、専門学校卒のナースとしての自分は受け入れられませんでした。

幸い、新設の看護大学に合格することができて浪人にはならずに済んだのですが、こうやって当時の「選択」を文字に書き起こしてみると、「ハシゴの上にいられる自分」という基準で選択し,生きてきたんだなぁとしみじみ思います。それは、言い換えれば、「物事をすべて勝ち負けでとらえている生き方・価値観」ということです。

身に付いた生きる術

あの人と比べて○○だから、自分がマシだろうとか、あれと比べたら、○○だから自分が優れているだろう、といった具合に、無意識のうちに自分の中で、色々なカテゴリーの「ハシゴ」が出現します。出現するまでならいいかもしれません。というか、誰の心の中にも、このハシゴは出現するかもしれません。自分と比べて、美人かそうでないか、優秀かそうでないか、収入は、学歴は、スタイルは、資格は、キャリアは・・・と、世の中は数多くのハシゴであふれていますが、そのすべてのハシゴの上にいることなどできるハズないのに、相手と瞬時に自分の立ち位置を比べる生き方は、幸せではないだろうと思います。何より、周りからどう評価されるのか、自分の中の基準ではなく、世の中にある基準だけを軸にして生きているということは、自分が自分の人生の主役になっていないということだと思います。

でも、そんな勝ち負けや、他者評価にすがって生きてきた、それが私の生きる術であり、身に付いてしまったものでした。この「生きる術」がどうやって身に付いてしまったのか、その理由（不健全さ）がわかるのは、援助職を始めてから 10 年以上、後のこととなります。

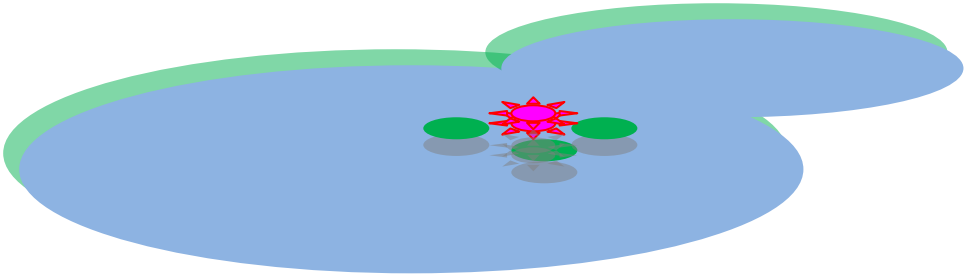
運良く？看護大学に入った私は、いよいよ自身の不健全さを持て余し、人間関係で失敗を繰り返していきますが（今ももがいてあがいていますが)、こうやって、自分の身に起きた出来事を振り返り、自身で意味付けすることは、援助職に必要とされる自己理解ということなのだろうと思っています。そして、この自己理解の作業は、援助理論の教科書にあるいわゆる「他者理解」につながっていくと思います。それは、「自分もこうだったから、こうしたらいいよね」というものではなく、「失敗をした時の、上手くいかなかった時のあのみじめさ、悔しさ、怒り、悲しさ。そんな事があるとそう感じるもんだよね」という、クライアントへの共感につながるのだろうと思います。

なので、過去のダメダメさは、全く無駄にはならない、と思うわけなのです（自己満足でしょうか）(笑)。というより、そう思わなければやっていられないほど、ダメダメ援助職だったのです。この原稿を書いていると、過去のクライアントたちへの懺悔の気持ちがじわじわと広がってきて、ああ、やはり振り返りは大切なのだなぁとも思います。

次回は、大学生と看護師時代のダメダメぶりを振り返ってみたいと思います。

周旋家日記

乾 明紀



私が、このマガジンを発行する対人援助学会に関係したのは、準備会からだったと思う。当時私は、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターの教員で副センター長の目的であった。社会が抱える様々な課題を「アート」と「学生」の力で解決しようというのが、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターであった。社会とは、地域であったり、行政であったり、企業であったり、病院であったり、寺院であったりと様々であり、そこが抱える課題も「まちづくり」から「業績向上」まで様々であった。しかし、共通して言えることは、アートと学生の力で、世の中が必要とする「価値」を生み出していくことであった。

私の仕事は、地域から寺院までに至る様々な社会と学生をつなげ、価値を生み出していくことであった。ある集団や組織は、長年の活動の中で、良くも悪くも「文化」や「ルール」に支配されていく。その文化やルールが世の中との関係において、価値を生み出せなくなったとき、その集団や組織は存続の危機に陥る。その存続の危機に光明を灯すべく、社会と学生をつなげ、新たな発想や仕組み、製品などによって、世の中との新たな関係性を創りだすのが、教員としての私の仕事であった（当然、これ以外にも、学生に「つなげる」や「アートを世の中に活かす」方法を学びとらせるなどの教育者の仕事もあるし、それがどのようなロジックで起きるのかを理論化するという研究者としての仕事もあった）。

「つなげる」という仕事は、孤高の芸術家が自らの思想と手によって作品を創り出す行為とは異なり、他者との関係の中で価値を紡いでいく行為である。いつの頃からか、私は「つなげる」という行為が仕事の中心になっ

ていった。芸術大学の教員へのお誘いがあったのも「つなげる」行為を実践していたからだ。さらに、私自身も「つなげる」仕事を通じて、世の中と心地よく「つな“が”る」ことができている。このマガジンでは、「つなげる」行為について徒然に綴っていきたいと思っている。

さて、この「つなげる」を仕事にしていると「コーディネーター（coordinator）」と呼ばれることがある。手元にある英語の辞書で引いてみると、『同等［対等］にするもの［人］、調整するもの［人］、（企画推進などの）責任者、まとめ役』などの意味があった。ちなみに、平成14年におこなわれた文化庁の調査では、認知度が24位の外来語である（同調査では、23位がコスト、25位がコーディネート、26位がリスク。なお、1位はストレス、2位はボランティア）。9割近い日本人が知り、6割近い日本人が正しく意味を理解しているこのカタカナ語は、日本語になりつつあると言えるが、そんな外来語である「コーディネーター」と呼ばれることが多い私だが、昨年の秋ごろから、友人とカタカナ語を卒業し、「周旋家」を名乗るようになった。よって、このマガジンでは、「周旋家日記」と称し、私の周旋活動について語ろうと思っている。

「周旋」とは、手元の『広辞苑』によると『①たちめぐること。ぐるぐるめぐること。②事をなすために立ちまわること。世話をすること。取持ち。斡旋。③（good offices）国際法上、第三国が外部から紛争当事国の交渉を援助すること』の3つの意味がある。私と友人は、『事をなすために立ちまわること。世話をすること。取持ち。斡旋』のスペシャリストでありたいとの想いから「周旋家」と名乗るようになった。

ちなみに、日本の歴史上において、「周旋家」として期待され、それに最も応えた人物をご存じだろうか。それは、伊藤博文である。吉田松陰から「才劣り学幼き、素直にして華なし」と酷評されることもあった伊藤博文だが、「利介亦進む。中々周旋家になりそうな」との期待どおり、幕末は四面楚歌の長州藩で、明治維新後は内憂外患の新政府において、周旋力を大いに発揮した。私が友人と「周旋家」を名乗ったのは、二流と言われながらも難局を乗り越え、事をなした伊藤公にあやかろうとしたからである。

さて、「周旋家日記」というタイトルの理由を述べるのにここまでかかったが、周旋に関する出来事をひとつは書いておこう。今回は最初の日記なので、私個人が周旋という行為が好きになるきっかけをどうしても書いておきたくなった。

私は、高校2年生になってアルバイ

トを始めた。野球部を怪我で辞め、比較的時間があったので、友達に誘われ、こっそりと始めた。最初はファミリーレストランだったのだが、長期休暇に入り、近所の洋食屋さんでアルバイトをすることになった。カウンターがある割烹のような造りの小さなお店だったが、ハンバーグやオムライスがおいしく、昼時は繁盛していた。私の仕事は、(慣れてからであるが、) フライを揚げ、ランチを盛り付けつつ、大将のオムライスを巻き終わるタイミングで皿を渡しつつ、キャベツや玉ねぎをお客さんの様子を見ながら刻みつつ、注文を聞き、お勘定をいただき、ときに出前を運ぶことであった。

ファミリーレスランのマニュアル中心の環境では萎縮しがちな私であったが、洋食屋さんの環境はとてもあった。忙しくなったら時給を少し上げてくれるのも嬉しかったが、それよりお客さんと大将の反応が嬉しかった。キャベツや玉ねぎを刻みながらお客さんの様子を伺い、「注文か」、「お勘定か」、「おかわりか」、「世間話か」を状況を見ながら判断し、速やかに反応することが楽しかった。２つ以上のことを同時にできている自分もかっこいいと感じていたし、何よりお客さんのニーズにすぐ答えることで、常連さんや大将から可愛がられた。何かをしながらカウンター越しにお客さんの様子を伺っている瞬間は、自己効力感が湧いてくるような心地よさがあった。結局、このアルバイトを私は大学を卒業するまでの６年間続け、卒業の際には弟に引き継いで終えた。

このとき身に付いた他者への想像力や状況判断力、複数の仕事を同時にこなす対応力や速やかに反応するという瞬発力は、人を「つなげる」という周旋に大いに役立っている。これらの力は、すべて洋食屋さんのお客さんや大将の反応によって高められた。これには本当に感謝している。常連さんの中には就職しないかと声をかけてくれる人もいた。才劣り学幼き私が、こうして周旋家になれたのは、当時の温かい反応のお陰である。このマガジンで連載を始めるにあたって、どうしても書いておきたかった。次回からは、就職後の様々な「周旋」について書いていくこととしたい。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

■ 学会ニュースレターの役割(大会告知、例会情報など)も最小限果たしながら、大部分は学会員有志の「対人援助領域における様々な論考と実践報告」を連載してもらって、WEB上で公開しているのが対人援助学マガジンです。

読者は、一部分でも、全体でも、ダウンロードも、プリントアウトも自由に選択して読むことが出来ます。

そこで私は、執筆者だけに一冊ずつ、印刷版を作成してプレゼントしてきました。本編はWEB上のカラー誌面のものですが、印刷製本版は全面カラーというわけにいかずモノクロ。そういう意味では不完全版です。

にも関わらず、今まで印刷版を作ってきたのには理由があります。「文芸首都」、長く刊行されていたと聞く自費出版物です。保高徳蔵が世話人を三十年以上続け、多くの作家を輩出した文芸同人誌です。

学会ニュースレターは文芸の同人誌とは異なります。しかし、学会の持つ閉鎖性や特権性に、私はかねてから違和感があって、「対人援助学マガジン」は社会科学世界の同人誌でありたいと思っています。

ここから様々な場所に向かって、執筆者の発信が出来ればと思っています。ベテランの方達には既にそれぞれいくつものステージをお持ちでしょうが、ここはここらしく関わっていただければと思います。そして、今からの人達にとっては、自由に使える踏切台になれたらと思います。

■ 新連載が又二本、乾さんと袴田さんです。それぞれ、新しい切り口からの参入です。お楽しみ下さい。

■ 本誌連載中のものがまもなく、一冊の本になります。荒木晃子さんの不妊治療現場の問題です。他にも様々なかたちで、いろんな場所に、飛び出してゆく人が輩出することを願っています。

ですが一方で、WEB版という自由性の高い手段(主に、売れなければならないとか、多くの読者を引きつけなければならないとかいう営業的ノルマからフリー)をとっているのですから、マイナーな素材やテーマを取り上げることも大切な役目です。

少数の人しか読まないかもしれないけれども、記録しておく必要があることを残す。ここにもマガジンの役割があると思っています。

是非、まだ触れられていないジャンルからの、対人援助的取り組みの報告をお寄せ下さい。

編集員(チバ アキオ)

対人援助学会の研究会が年 4 回、キャンパスプラザ京都6階の第1会議室(立命館大学の部屋)で行われている。この研究会は対人援助学会発足前から、対人援助学会準備会として、2005 年 5 月からスタートして、先日通算 31 回目を迎えた。研究会にたくさんの方が参加していただくことだけが目的ではないが、先日は多くの方が来てくださった。参加に関しても、学会員、非学会員を問わず、無料で、事前申し込みも不要。学会が学会員のためだけに、何かをもたらすのではなく、社会に学会があり、その学会の社会への貢献をより多くの人に提供しようというのが狙いの一つである。前半は、ゲストスピーカーを迎えお話をいただき、後半は参加者が小グループになり、自己紹介、今日の感想等を話し合う仕組みだ。数回参加していると、たくさんつながりもでき、京都を中心とした援助職のネットワーク作りにも一役かっている。こんな活動を応援したいと思ってくださる人が、学会に入会という形でサポートしようと思っていただけたらという側面も含まれている。

こないだは障害者の福祉事業所でもあるNPO法人Swing 木ノ戸昌幸施設長の活動報告であった。Swingさんは、ただの福祉現場にとどまらない。現行の障害者の福祉制度とは真逆ともいえる長期スパンでの支援、揺れる(Swing)こと、たのしむこと、役に立つことをしたり、しなかったりを公言し、キャッチコピーの力(『オレたちひょうげん族』という表現活動等)、洗練されたデザイン、ツイッター、フェイスブック、ネット販売等の活用などなど…。利用者、援助者が一緒に多くの経験、体験を長く共有することで、専門的な援助関係にとどまらない、人と人との関係の側面を認めてもいる。これまでアカデミック、倫理性というところで、スポイルされてきた福祉の仕事の魅力も再確認できた。人としての営みに必要なユーモア、楽しみ、表現は欠かせない等を考える素敵な会になりました。木ノ戸施設

長ありがとうございます！皆さんも興味がありましたら、この研究会にも足をお運びください。学会ホームページ、学会メーリングリストで毎回ご案内させていただいております。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン（１号～７号各１０００円・全巻統一価格にしました）が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８
ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻8号

第二巻　第四号

２０１２年３月１５日発行

http://humanservices.jp/

第9号は 2012 年 6 月 15 日発刊の予定です。原稿締め切りは 5 月 25 日！

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

イラストは、映画「めまい」について書かれ記事に添えたもの。イラストレーターとして受けていた中日新聞に二年ほども連載した仕事の中の一枚だ。

この作品の監督、アルフレッド・ヒッチコックはご存じの人も多いと思う。私が思春期の頃、TVで「ヒッチコック劇場」なるものがあって、話題になっていた。今、このシリーズがDVDになって同梱されたものが雑誌として発売されている。（宝島社）

根強い人気があるのかもしれないが、どうも私には、業界人に限って高いだけのような気がしてならない。なぜなら、私の知り合いで、ヒッチコック好きはいないからだ。

映画好きは多いし、ミステリー、サスペンス好きも多いが、その人達も、殊更ヒッチコックの名をあげることはない。

私は結構作品を見ているのだが、「この一本！」みたいに挙げたい作品が思いつかない。「鳥」は凄かったなぁとか、「サイコ」は怖かったとか思うけれども、それ以上の気持ちがない。

嫌いなわけではないが、特別にヒッチコック作品への思い入れを語る者が周囲にいないという話だ。

だが、映画業界の人はおしなべてヒッチコックが好きなようだ。彼にまつわる本はたくさん出ていて、映像づくりの話題展開は非常に面白い。やはり、制作側にとって、様々な方法やヒントをくれる作家なのかなと思う。

自作品の一シーンに必ず監督自らが登場することは有名だ。大きなお腹のプロフィールはヒッチコックのロゴのようにも見える。

2012/3/15　団士郎